兵庫県文化財調査報告　第238冊

三　木　市

# 和田神社遺跡

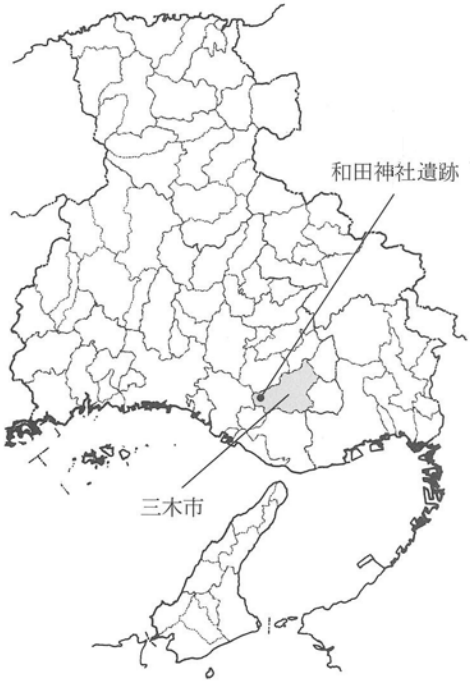
2002年３月

兵庫県教育委員会

和田神社遺跡
―兵庫県文化財調査報告　第238冊―
二〇〇二・三
兵庫県教育委員会

三木市

# 和田神社遺跡




2002年3月

兵庫県教育委員会

遺跡遠景（南東上空から）

遺跡遠景（東上空から）

A地区全景（南上空から）

A地区全景（北上空から）

A地区全景（西から）

墳丘墓（南西から）

ＳＸ１（南東から）

ＳＸ２（南東から）

ＳＸ３（南東から）

ＳＸ４（南東から）

ＳＸ７（東から）

ＳＸ７棺内（北から）

ＳＸ10上面（南東から）

ＳＸ10（南東から）

ＳＸ８（東から）

ＳＸ12（南東から）

ＳＸ２出土高杯内面の赤色顔料

出土土器棺集合写真

B・C地区遠景（南東上空から）

B・C地区遠景（東上空から）

B・C地区全景（南東から）

B・C地区全景（北西から）

# 例　言

1．本書は兵庫県三木市別所町和田字大年山451～453に所在する和田神社（わだじんじゃ）遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査および整理作業は日本道路公団大阪建設局姫路工事事務所の委託を受け、山陽自動車道（三木～姫路間）建設事業に伴って、兵庫県教育委員会が実施した。

3．本発掘調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の吉田　昇、岸本一宏、松岡千寿が担当した。なお、全面調査は平成８年度に実施した。

4．本発掘調査にあたっては、兵庫県教育委員会と大日本土木株式会社神戸支店が工事請負契約を締結して実施した。

5．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が設定した遺跡調査番号は以下の通りである。

確認調査－（第１次）９５０４１１　　（第２次）９５０２９８

全面調査－９６０１０３

6．本書で使用した写真のうち、遺構写真は調査担当者が撮影したものであるが、遺跡の航空写真は株式会社ジェクトに、遺物写真はイーストマン株式会社にそれぞれ委託して撮影したものである。

7．本書の編集は、岡田美穂・友久伸子の補助を得て岸本・松岡が行った。執筆は岸本・松岡が行い、分担については目次に記した。

8．本報告で使用した遺物・写真・図面は、すべて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。

9．報告書作成にあたっては、下記の諸氏に御教示をいただいた。記して謝意を表する。

岸本道昭、角南聡一郎、海邉博史

# 凡　例

1．本書に使用した方位は第Ⅴ系国土座標を基準とし、水準は東京湾平均海水準（Ｔ．Ｐ．）を使用した。また、各遺構図の方位は座標北をさす。

2．遺跡の土層色調名および遺物の色調名は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修）によるものである。

3．遺構の名称は、土器棺墓・不明遺構をＳＸ、掘立柱建物跡をＳＢ、土壙（土坑）をＳＫ、溝状遺構をＳＤと略称している。

4．遺物実測図については、須恵器の断面は黒塗りにし、土師器・土製品・鉄器・石器の断面は白抜きにしている。

5．遺物番号は本文・図版・写真とも同一とし、通し番号としている。遺物には土器・土製品・鉄器・石器・鉄滓の種類があるが、量的に少ないため特に区別はしていない。

# 本　文　目　次

第１章　調査の契機と経過

第１節　発掘調査の契機と経過 …… 1（岸本）

第２節　発掘調査の概要 …… 2（岸本）

第３節　整理作業の経過と概要 …… 4（岸本）

第２章　遺跡周辺の環境と歴史

第１節　地理的環境 …… 5（松岡）

第２節　歴史的環境 …… 7（松岡）

第３章　調査の結果

第１節　Ａ地区の遺構と遺物

１.土器棺墓 …… 9（岸本）

２.その他の出土遺物 …… 19（岸本）

３.小　結 …… 20（岸本）

第２節　Ｂ・Ｃ地区の遺構と遺物

１.調査の概要 …… 21（松岡）

２.Ｃ地区の遺構と遺物 …… 21（松岡）

３.Ｂ地区の遺構と遺物 …… 31（松岡）

第４章　まとめ

第１節　土器棺について …… 35（岸本）

第２節　飛鳥時代の遺構について …… 39（松岡）

# 挿　図　目　次


第１図　周辺の遺跡 …… 8
第２図　墳丘をもつ土器棺墓 …… 37
第３図　和田神社遺跡と大年山遺跡位置図 …… 40


# 表　目　次


第１表　遺構別杯分類一覧表 …… 39


# 図　版　目　次


図版１　調査区位置図
図版２　調査区全体図
図版３　Ａ地区　土器棺（ＳＸ）分布状況
図版４　Ａ地区ＳＸ１実測図
図版５　Ａ地区ＳＸ２・３実測図
図版６　Ａ地区ＳＸ４・５実測図
図版７　Ａ地区ＳＸ６・７実測図
図版８　Ａ地区ＳＸ８・15・16実測図
図版９　Ａ地区ＳＸ９～13墳丘部
図版10　Ａ地区ＳＸ９・10実測図
図版11　Ａ地区ＳＸ11～13実測図
図版12　Ａ地区ＳＸ１出土土器
図版13　Ａ地区ＳＸ２・包含層出土土器
図版14　Ａ地区ＳＸ３出土土器
図版15　Ａ地区ＳＸ４・５出土土器
図版16　Ａ地区ＳＸ６・15出土土器
図版17　Ａ地区ＳＸ７出土土器
図版18　Ａ地区ＳＸ８・９出土土器
図版19　Ａ地区ＳＸ10出土土器
図版20　Ａ地区ＳＸ11・12・13出土土器
図版21　Ｂ・Ｃ地区　全体図
図版22　Ｂ・Ｃ地区　断面図
図版23　Ｃ地区ＳＢ10実測図
図版24　Ｃ地区ＳＢ４実測図
図版25　Ｃ地区ＳＢ５実測図
図版26　Ｃ地区ＳＢ10実測図
図版27　Ｃ地区ＳＸ18実測図
図版28　Ｃ地区ＳＤ14土層断面図
図版29　Ｃ地区ＳＫ63・65・66実測図
図版30　Ｃ地区ＳＢ11実測図
図版31　Ｃ地区ＳＢ12実測図
図版32　Ｃ地区ＳＢ13実測図
図版33　Ｃ地区ＳＢ８実測図
図版34　Ｃ地区ＳＸ19・ＳＤ13・ＳＫ64実測図
図版35　Ｃ地区ＳＢ14実測図
図版36　Ｃ地区ＳＤ16・17土層断面図、ＳＢ７平面図
図版37　Ｃ地区ＳＢ７実測図
図版38　Ｃ地区ＳＢ９実測図
図版39　Ｃ地区ＳＤ18・ＳＫ68・69実測図
図版40　Ｃ地区ＳＫ70実測図、ＳＫ72土層断面図
図版41　Ｂ地区ＳＢ１・ＳＤ８・９・10実測図
図版42　Ｂ地区ＳＢ２・ＳＤ12実測図
図版43　Ｂ地区ＳＢ３・ＳＤ11実測図
図版44　Ｃ地区上段出土遺物（１）
図版45　Ｃ地区上段出土遺物（２）
図版46　Ｃ地区中段出土遺物（１）
図版47　Ｃ地区中段出土遺物（２）・下段出土遺物（１）
図版48　Ｃ地区下段出土遺物（２）
図版49　Ｂ・Ｃ地区下段出土遺物（３）・Ｂ地区出土遺物・中世の遺物

# 巻頭図版目次


巻頭図版１上　遺跡遠景（南東上空から）
１下　遺跡遠景（東上空から）
巻頭図版２上　Ａ地区全景（南上空から）
２下　Ａ地区全景（北上空から）
巻頭図版３上　Ａ地区全景（西から）
３下　Ａ地区墳丘墓（南西から）
巻頭図版４上　Ａ地区ＳＸ１（南東から）
４下　Ａ地区ＳＸ２（南東から）
巻頭図版５上　Ａ地区ＳＸ３（南東から）
５下　Ａ地区ＳＸ４（南東から）
巻頭図版６上　Ａ地区ＳＸ７（東から）
巻頭図版６下　Ａ地区ＳＸ７棺内（北から）
巻頭図版７上　Ａ地区ＳＸ10上面（南東から）
７下　Ａ地区ＳＸ10（南東から）
巻頭図版８上　Ａ地区ＳＸ８（東から）
８下　Ａ地区ＳＸ12（南東から）
巻頭図版９上　Ａ地区ＳＸ２出土高杯内面の赤色顔料
９下　Ａ地区出土土器棺集合写真
巻頭図版10上　Ｂ・Ｃ地区遠景（南東上空から）
10下　Ｂ・Ｃ地区遠景（東上空から）
巻頭図版11上　Ｂ・Ｃ地区全景（南東から）
11下　Ｂ・Ｃ地区全景（北西から）


# 写真図版目次


図版１上　遺跡の位置（○印、昭和22年）
１下　遺跡の位置（○印、平成11年）
図版２　Ａ地区全景（北東上空から）
図版３上　Ａ地区西部遺構全景（南東から）
図版３中　Ａ地区中央部遺構全景（南から）
図版３下　Ａ地区東部遺構全景（南西から）
図版４上　Ａ地区ＳＸ１検出状況（南東から）
図版４中　Ａ地区ＳＸ１棺内（南東から）
図版４下　Ａ地区ＳＸ１墓壙（南東から）
図版５上　Ａ地区ＳＸ２検出状況（南東から）
図版５中　Ａ地区ＳＸ２棺内（南東から）
図版５下　Ａ地区ＳＸ２墓壙（南東から）
図版６上　Ａ地区ＳＸ３検出状況（北西から）
図版６中　Ａ地区ＳＸ３検出状況（南東から）
図版６下　Ａ地区ＳＸ３検出状況（南東横から）
図版７上　Ａ地区ＳＸ３棺内埋土（南東から）
図版７中　Ａ地区ＳＸ３棺内（南西から）
図版７下　Ａ地区ＳＸ３墓壙（北東から）
図版８上　Ａ地区ＳＸ４棺内礫（南東から）
図版８中　Ａ地区ＳＸ４棺内（南東から）
図版８下　Ａ地区ＳＸ４墓壙（南東から）
図版９上　Ａ地区ＳＸ５検出状況（南東から）
図版９中　Ａ地区ＳＸ５棺内（南東から）
図版９下　Ａ地区ＳＸ13（南東から）
図版10上　Ａ地区ＳＸ６棺内土器（南東から）
図版10中　Ａ地区ＳＸ６棺内（北東から）
図版10下　Ａ地区ＳＸ６墓壙（北東から）
図版11上　Ａ地区ＳＸ７棺上面（東から）
図版11中　Ａ地区ＳＸ７棺内（南西から）
図版11下　Ａ地区ＳＸ７墓壙（南西から）
図版12上　Ａ地区ＳＸ８上面（東から）
図版12中　Ａ地区ＳＸ８棺内（東から）
図版12下　Ａ地区ＳＸ８墓壙（南東から）
図版13上　Ａ地区墳丘墓全景（南西から）
図版13中　Ａ地区墳丘墓全景（南西から）
図版13下　Ａ地区墳丘墓全景（西から）
図版14上　Ａ地区ＳＸ９検出状況（北東から）
図版14中　Ａ地区ＳＸ９棺内（北東から）
図版14下　Ａ地区ＳＸ９墓壙（北西から）
図版15上　Ａ地区ＳＸ10検出状況（南東から）
図版15中　Ａ地区ＳＸ10棺内（南東から）
図版15下　Ａ地区ＳＸ10墓壙（南東から）
図版16上　Ａ地区ＳＸ11検出状況（南東から）
図版16中　Ａ地区ＳＸ11棺内（東から）

図版16下　A地区ＳＸ11墓壙(南東から)
図版17上　A地区ＳＸ12検出状況(南東から)
図版17中　A地区ＳＸ12棺内(西から)
図版17下　A地区ＳＸ12墓壙(南東から)
図版18上　A地区ＳＸ15棺内(南から)
図版18中　A地区ＳＸ15墓壙(南から)
図版18下　A地区ＳＸ16棺内(南東から)
図版19①　A地区ＳＸ１土層断面(北西から)
図版19②　A地区ＳＸ３全景(東から)
図版19③　A地区ＳＸ３墓壙内土器(南東から)
図版19④　A地区ＳＸ５墓壙(南東から)
図版19⑤　A地区ＳＸ７土層断面(北西から)
図版19⑥　A地区ＳＸ15検出状況(南東から)
図版19⑦　A地区ＳＸ16棺内(南東から)
図版19⑧　A地区ＳＸ16墓壙(北西から)
図版20　A地区ＳＸ１・２出土土器
図版21　A地区ＳＸ３・４出土土器
図版22上　A地区ＳＸ５出土土器
図版22下　A地区ＳＸ６出土土器
図版23　A地区ＳＸ７出土土器
図版24　A地区ＳＸ８・９出土土器
図版25　A地区ＳＸ10・11出土土器
図版26上　A地区ＳＸ12出土土器
図版26下　A地区ＳＸ12・13出土土器
図版27上　A地区ＳＸ15出土土器
図版27下　A地区確認調査出土土器
図版28　B・C地区全景(上空から)
図版29上　C地区全景(南東から)
図版29中　C地区全景(東から)
図版29下　C地区全景(南から)
図版30上　C地区上段テラスSB５・６全景(東から)
図版30中　C地区上段テラスSB４・５・６全景(東から)
図版30下　C地区SD14　ｄ－ｄ’土層断面(東から)
図版31①　C地区SD14　ｅ－ｅ’土層断面(西から)
図版31②　C地区SD14　ｃ－ｃ’土層断面(西から)
図版31③　C地区SD14　ｂ－ｂ’土層断面(西から)
図版31④　C地区SD14　ａ－ａ’土層断面(東から)
図版31⑤　C地区ＳＢ４出土土器(東から)
図版31⑥　C地区ＳＢ６柱穴２(南から)
図版31⑦　C地区ＳＢ６柱穴３(北から)
図版31⑧　C地区ＳＢ６柱穴４(北から)
図版32上　C地区ＳＸ18(南から)
図版32中　C地区ＳＸ18(西から)
図版32下　C地区ＳＸ18土層断面(西から)
図版33上　C地区ＳＸ19(東から)
図版33中　C地区ＳＫ63(東から)
図版33下左　C地区ＳＸ63土層断面(東から)
図版33下右　C地区ＳＸ63土坑土層断面(北西から)
図版34①　C地区中断ＳＢ11土層断面(西から)
図版34②　C地区中断ＳＢ12・13土層断面(西から)
図版34③　C地区SD13　ｆ－ｆ’土層断面(西から)
図版34④　C地区SK64　ｈ－ｈ’土層断面(西から)
図版34⑤　C地区柱穴68土器出土状況(東から)
図版34⑥　C地区包含層土器出土状況(南西から)
図版35上　C地区下段平坦面全景(東から)
図版35中　C地区下段平坦面全景(西から)
図版35下　C地区下段平坦面全景(南から)
図版36上　B・C地区平坦面全景(東から)
図版36中　B・C地区ＳＢ９(南から)
図版36下　B・C地区ＳＢ14土層断面(東から)
図版37上　C地区ＳＢ９柱穴1土器検出状況(南から)
図版37①　C地区ＳＤ18土器検出状況(南東から)
図版37②　C地区ＳＫ68土器検出状況(南から)
図版37③　C地区ＳＤ16ａ土層断面(西から)
図版37④　C地区ＳＤ17土層断面(西から)
図版38上　B地区西半部全景(東から)
図版38中　B地区東半部全景(東から)
図版38下　B地区ＳＢ１(東から)
図版39上　B地区ＳＢ１(南から)
図版39中　B地区ＳＢ１柱穴１(東から)
図版39下　B地区ＳＤ８土器出土状況(東から)
図版40①　B地区ＳＸ14(北から)
図版40②　B地区ＳＢ１柱穴１土層断面(東から)
図版40③　B地区ＳＢ１柱穴２(南から)
図版40④　B地区ＳＢ１柱穴３土層断面(西から)
図版40⑤　B地区ＳＢ１柱穴４土層断面(西から)
図版40⑥　B地区ＳＤ８土層断面(西から)
図版40⑦　B地区ＳＤ９土層断面(西から)

図版40⑧　Ｂ地区ＳＤ10土層断面(西から)
図版41　Ｃ地区出土遺物
図版42　Ｃ地区出土遺物
図版43　Ｂ・Ｃ地区出土遺物
図版44　Ｂ・Ｃ地区出土遺物
図版45上　Ｂ・Ｃ地区出土遺物
図版45下　Ｂ・Ｃ地区出土遺物
図版46上　Ｂ・Ｃ地区出土遺物
図版46下　Ｂ・Ｃ地区出土遺物
図版47上　Ｂ・Ｃ地区出土遺物
図版47下　Ｂ・Ｃ地区出土遺物

# 第１章　調査の契機と経過

## 第１節　発掘調査の契機と経過

山陽自動車道は大阪府吹田市を起点として山口県山口市まで延びる高速道路であり、中国自動車道とほぼ平行し、その南側の海岸に近い地域を通るが、吹田市から神戸市北部までは中国自動車道と重複しており、神戸市北区の神戸ジャンクションにおいて、中国自動車道と分岐する。この道路は中国自動車道が中国地方の脊梁部分である山間地を通るのに対し、山陽自動車道は平野部あるいは海岸に近い部分を通り、国道２号線の渋滞緩和のために計画されたものである。

兵庫県内においては、昭和57年時点で龍野西インター以西がすでに開通、供用を開始しており、そこから東が課題となっていたが、平成５年に姫路東インターチェンジまでの第６次施工命令区間、次いで平成８年に三木小野インターチェンジから神戸ジャンクションまでの第９次施工命令区間の建設工事が完成した。姫路東から三木小野までの第10次施工命令区間22kmは、兵庫県内の山陽自動車道最後の区間として、平成10年に工事が完了し、大阪から山口に至る山陽自動車道全線が開通した。

さて、山陽自動車道三木～姫路間（10次区間）約20km区間の埋蔵文化財については、計画予定地内の詳細分布調査から実施する必要があった。分布調査は日本道路公団の依頼を受け、兵庫県教育委員会が主体となり、平成元年５月に実施した。

和田神社遺跡については、その際に№２・４・６地点として古代の集落跡の可能性が高い遺跡として周知され、遺跡の確認調査は分布調査から６年後の平成７年度に始まった。調査は６～８月に実施したが、この確認調査も兵庫県教育委員会が調査主体となり、遺跡の範囲を確認することを主眼として、道路延長方向で約250ｍの範囲に８本のトレンチを設定し、掘削を行った（図版１）。その結果、調査対象地の中央部から西部に設定したトレンチでは、遺構・遺物は検出されなかったものの、東部に設定したトレンチで段状遺構とともに多数の遺物が出土し、弥生時代から中世の遺跡が存在すると判断された。しかし、この調査においては遺跡の東側が谷状地形となっていることなどから遺跡の東端や西端はほぼ確定できたものの、北および南端を限定することはできなかった。

そこで、平成７年11～12月に第２確認調査として遺跡の範囲をさらに限定するために確認調査を実施した。調査は、前回調査を行ったトレンチの位置よりも斜面の上側と下側に合計７本のトレンチを設定し、遺跡の有無と範囲についての調査を行った。その結果、東端の２本のトレンチを除いたすべてのトレンチで遺構や遺物が検出された。ここに至って、道路予定地内における和田神社遺跡の範囲を確定することができた。そこで、兵庫県教育委員会は遺跡の取り扱いについて日本道路公団大阪建設局姫路工事事務所と協議を行った結果、全面調査を実施することとなった。

全面調査は平成８年度に実施し、範囲は5,202㎡で、平成８年５月８日から着手し、10月30日に終了した。調査は、表土を機械により掘削した後、人力により遺物包含層の掘削、遺構の検出・掘削を行った。遺構については縮尺1/100で平板測量、1/20で平面実測、写真撮影を行い、記録に努めた。また、航空写真はＡ地区の掘削終了後とＣ地区掘削終了後の２回の撮影を行った。また、調査終了前の10月19日には地元住民を対象として、遺跡の説明会を開催した。

なお、兵庫県内の山陽自動車道（10次区間）建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査は和田神社遺跡が最終調査となった。

## 第２節 発掘調査の概要

１．確認調査（第１図）

和田神社遺跡は通称樫山の南側斜面地形のうち、南東向き斜面部分に位置しており、東隣の大年山遺跡と同様の立地である。大年山遺跡との間には小さな谷が１本存在し、斜面方向が南寄りに変化するだけで、傾斜角度はほぼ同じである。

和田神社遺跡の第１次確認調査では、基本的に斜面等高線と直交方向にトレンチを８本設定し、表土を機械、以下を人力で掘削した。その結果、②・③トレンチで段状遺構と多数の土器が出土した。段状遺構は規模が大きく明確なものである。遺物包含層は厚いところで約50㎝の深さがあり、特に南方の斜面下部が厚くなっており、そこから多量の土器が出土した。出土した遺物には弥生土器・須恵器・土師器があり、弥生時代・古墳時代後期～奈良時代・中世などの遺構が数多く存在しているものと想定された。

第２次確認調査では、第１次確認調査で不足していた斜面の路線内南北両端の位置に７本のトレンチを設定し、遺跡の有無と範囲確定についての調査を行った。調査の結果、トレンチ２では明確な遺構の検出はできなかったが、表土下の土層内には部分的に炭粒の混入が認められ、古墳時代の須恵器片が数点出土した。トレンチ３でも表土下の褐色土層中に部分的に炭を含んでおり、古墳時代の須恵器片数点が出土した。トレンチ４では遺物は全く出土しなかった。トレンチ５は土壙およびピットが検出され、須恵器片数点を採取した。トレンチ６ではテラス状の傾斜の変換点があり、奈良時代の須恵器片が採取された。トレンチ７では土壙１基とピットが検出され、完形の須恵器杯１点と須恵器片数点が採取された。土器の年代は奈良時代と考えられる。トレンチ８からは遺構や遺物は検出されなかった。

以上の結果から、トレンチ４と８の部分を除いた範囲に遺跡が広がっていると判断された。

なお、和田神社遺跡における確認調査の担当者および調査面積は以下の通りである。

第１次確認調査

期　　間　　平成７年６月１日～８月２日

調査担当　　埋蔵文化財調査事務所　調査第２班　　井守徳男　久保弘幸　井本有二　松岡千寿

調査面積　　２５５㎡

第２次確認調査

期　　間　　平成７年11月13日～12月11日

調査担当　　埋蔵文化財調査事務所　調査第２班　　森内秀造　仁尾一人　岡本一秀

調査面積　　１００㎡

２．全面調査（図版１・２）

和田神社遺跡の全面調査は２次にわたる確認調査の結果を受けて、平成８年度に実施した。

調査地は播磨ゴルフ場が存在する、通称樫山の南東側斜面に位置するが、樫山の南西に存在する愛宕山や正法寺山山塊との連接部にもあたっている。和田神社遺跡の南側は谷状地形が東西方向に入り込み、遺跡の約100m西側が峠となっており、三木市鳥町から小野市室山や樫山町へ愛宕山・正法寺山を迂回せずに直線で結ばれるラインであり、かつて道路として利用されていたようである。なお、山陽自動車道はこの谷部分に沿って走っている。

全面調査は、工事が間近に迫っていたため、工事工程等との関係から、調査区全体を３地区に分け、

北部をＡ地区、南部をＢ地区、中央部をＣ地区と呼称し、Ａ地区→Ｂ地区→Ｃ地区の順に調査を行った。Ａ地区は工事用道路用地確保のため最も早く着手し、Ｂ地区はＣ地区内にある現道路の付け替え用地確保のため、中央のＣ地区に先行して調査を行った。

いずれの地区も表土をバックホーにより掘削した後、人力により遺物包含層の掘削、遺構の検出・掘削を行った。遺構については、縮尺1/100で平板測量、縮尺1/20で平面実測、写真撮影を行い、記録に努めた。また、航空写真はＡ地区の掘削終了後とＣ地区掘削終了後の２回の撮影を行い、Ｂ地区はＡ地区と同時に撮影した。

和田神社遺跡の全面調査の結果、弥生時代後期末～古墳時代前期の土器棺群と飛鳥時代の掘立柱建物跡・柱穴群を検出した。また、時期不明であるが、土壙群を検出している。それらの遺構のうち、土器棺群と土壙群の大半がＡ地区に存在し、掘立柱建物跡群はＢ・Ｃ地区に限られている。したがって、土器棺群・土壙群をＡ地区、掘立柱建物跡群はＢ・Ｃ地区にそれぞれ代表させて説明を行う。

Ａ地区は調査区内の高所に位置し、土器棺が15基存在していた。それらの中には長方形の墳丘内に５基の土器棺が存在しているものもあり、別の土器棺には赤色顔料を塗布しているものも存在した。また、他地域の胎土で製作された土器も認められた。なお、土壙群は約70基存在したが、遺物が出土しておらず、時期・性格等は不明である。

Ｂ・Ｃ地区では飛鳥時代の掘立柱建物跡14棟、柱穴、石組み遺構、土壙、溝等を検出した。掘立柱建物跡は斜面に長い平坦面を作った上に建てられていた。平坦面は大きく上～下の３段が認められ、いずれも山側を削平して斜面下側を盛る方法で作られていた。土器は雨落ち溝や斜面下側盛土から数多く出土しているが、須恵器が大半である。石組み遺構は機能が確定できないが、掘立柱建物跡と同時期と考えられる。なお、今回検出した建物跡群は西および南方の道路用地外に続くことが確実である。

現場事務所内では、出土遺物の洗浄・ネーミング・台帳作成および作成した実測図や撮影した写真の整理・台帳作成を行った。

和田神社遺跡全面調査の体制と担当者は以下の通りである。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 期　　間 | 平成８年５月８日～10月30日 | | | |
| 調査主体 | 兵庫県教育委員会 | | | |
| 経理担当 | 埋蔵文化財調査事務所 | 総　務　課 | 主　　査 | 岩沢　重則 |
| 事務担当 | 埋蔵文化財調査事務所 | 企画調整班 | 主　　任 | 山上　雅弘 |
| 調査担当 | 埋蔵文化財調査事務所 | 調査第２班 | 調査専門員 | 吉田　昇 |
| | 同 | | 主　　査 | 岸本　一宏 |
| | 同 | | 技術職員 | 松岡　千寿 |
| | 現場補助員 | | | 福田　彰浩 |
| | 現場補助員 | | | 中村　真也 |
| | 現場事務員 | | | 五百蔵道代 |
| | 室内作業員 | | | 大田八重子 |
| 調査面積 | ５，２０２㎡ | | | |

## 第３節 整理作業の経過と概要

和田神社遺跡の調査で出土した遺物、記録した図面写真類については、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に持ち帰り、平成12年度から整理作業を行った。

出土遺物の整理作業のうち、洗浄とネーミングについては現地での作業において終了していたため、平成12年度は土器の接合・補強作業、復元作業、実測および金属器保存処理を実施した。平成13年度には写真撮影・遺構図補正・トレース・レイアウトの各作業を実施し、報告書印刷を行った。

整理作業の体制および担当者は以下の通りである。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 整理作業担当職員 | 主　　査 | 岸本　一宏 | | |
| | 技術職員 | 松岡　千寿 | | |
| 嘱託員 | 企画技術員 | 岡田　美穂 | 友久　伸子 | 吉田　優子 |
| | | 島村　順子 | 喜多山好子 | |
| | 図化技術員 | 石野　照代 | 河上　智晴 | 藤井　光代 |
| | | 蓬莱　洋子 | 蔵　　幾子 | 大仁　克子 |
| | | 早川亜紀子 | 小寺恵美子 | 岡井とし子 |
| 保存処理担当職員 | 技術職員 | 岡本　一秀 | | |
| 嘱託員 | 図化技術員 | 三好　綾子 | | |
| | 図化補助技術員 | 野上　裕子 | | |

# 第２章　遺跡周辺の環境と歴史

## 第１節　地理的環境

和田神社遺跡が立地する三木市は、加古川水系の美嚢川沿いに市域が広がる。美嚢川は、加古川中流域と下流域を分ける主要支流であり、美嚢川両岸には河川に沿うように東西方向に丘陵が延び、河川との間に河岸段丘面と低地が形成されている。

美嚢川右岸の加古川との合流点付近は和田神社遺跡が立地する正法寺山地が加古川に接し、大きく屈曲する。この地域は、加古川の沖積低地が最もその幅を減ずる場所でありこれを境界として、中流域・下流域が区分される。

## 第２節　歴史的環境

今回調査した和田神社遺跡が、弥生時代後期の土器棺墓群と古墳時代末の集落跡のため、これらの時期を中心に概観する。

### 〈弥生時代〉

美嚢川下流域では、今のところ弥生時代前期にまで溯る遺跡はなく、顕著になるのは弥生中期以降である。

**鳥町遺跡（19）**

三木市の西端、美嚢川が加古川に合流するあたりの北辺流域で樫山の南麓に位置する。

遺跡の広がりは、鳥町部落全域から後背の山裾一帯とされ、磨製大型蛤刃石斧と小型磨製石斧が出土している。

**貝谷遺跡（20～22）**

貝谷遺跡は、大きく尾根筋で、３地点に分かれている。第１地点では、木棺墓29基、土器棺墓４基を検出している。第２地点では木棺墓６基、土器棺墓１基を検出している。いずれも出土土器から中期後半の時期が考えられており、周辺ではこれほどまでに密集して弥生時代の墳墓群が見つかった例はなく、これらを墓域とする集落については、貝谷遺跡を有する尾根のすぐ下に存在とする鳥町遺跡が母集落と考えられている。

**年ノ神遺跡（23･24）**

弥生時代中期後半の集落が検出された。７基の円形竪穴住居跡を検出した。

**大二遺跡（28）**

旧河道が検出され、弥生時代中期の土器が多量出土している。土器の状態が極めて良好であることからこれらの土器を使用していた集落がすぐ近くに存在していたと推定されている。

**正法寺山頂遺跡（８）**

正法寺と和田山の鞍部から銅剣の破片が出土している。現存している銅剣は、銅剣の基部で関に孔があり、全長24.1㎝、幅8.2㎝を測る。おそらく、原型は全長75㎝ほどの中広形に近い中細銅剣であったと

思われ、弥生後期初頭のものと考えられる。

## 〈古墳時代〉

美嚢川下流域では、横穴式石室は川の北側、正法寺山から天王山にかけての丘陵に集中し、川の南側はすべて木棺直葬墳地域である。これは市域で正法寺山から天王山にかけての丘陵では容易に石材が入手できる地域である一方、美嚢川・志染川の南には、石材の求めにくい砂礫台地であることから、この地域に木棺直葬墳が多いとされている。

**愛宕山古墳（14）**

三木市の西端が加古川に接したところに、ちょうど美嚢川の流域小平野をしめくくるような形で小丘陵が加古川と平行して存在する。その標高70m山塊頂上に主墳愛宕山古墳をはじめ、円墳が５基あり、古墳群を形成している。主墳の愛宕山古墳は北向きの前方後円墳で全長95m、後円部径75m、高さ前方部７m、後円部13mの規模を持つ。

**樫山古墳群（６）**

古墳群は、ゴルフ場となっている緩やかな丘陵頂部を中心に、尾根伝いに分布する。「小野市分布地図」では151基が認められている。分布状況からいくつかのグループに分かれるようである。

ほとんどが直径10mほどの小円墳であるが、それぞれの支群の中に直径20mを越えるものが認められる。

古墳群東側の標高89mの最高地点に位置するのが「七つ塚」である。このうちもっとも大きいものが「七つ塚」の主墳52号墳であり、「大塚」と呼ばれている。「大塚」は直径34mで、埴輪をもつとする文献もある。周辺に８基の小円墳が取り巻いている。 樫山古墳群については不明な点が多いが、木棺直葬とみられる低墳丘のものが圧倒的に多く、石材の露出等により確実に横穴式石室を持つものは10基前後とされている。古墳群の形成過程は全く明らかでないが、６世紀全般にわたって築造されたものであろう。

**正法寺山群集墳（７）・正法寺東尾根古墳群（10）**

正法寺山群集墳は、美嚢川が加古川に合流する北側の山腹から山裾にかけて立地し、横穴式石室合計９基で構成されている。１号墳は、径16mの墳丘に、全長8.7m、玄室幅2.2mの横穴式石室である。副葬品に須恵器（蓋杯・高杯・提瓶・平瓶・椀・長頸壺）、土師質の台付長頸壺・坩、馬具（轡・鞍金具・雲珠・辻金具・鉸具）、鉄器（釘・直刀・鉄鏃）が出土した。玄室床面は、拳大の川原石、割石などで一面敷き詰められていた。６世紀中頃から３～４回にわたって追葬がおこなわれている。また、家形石棺の一部棺材が放置されている古墳があり、その他、正法寺山東尾根にも群集墳が形成されている。

**和田愛宕山・妙界寺群集墳（14）**

正法寺山は、比較的緩やかに東南方向に長くのび、その尾根が再び隆起して、東西に２個の丘頂を形成している。

東の方は、標高120mを越え、小和田神社を祀っているところで「天王山」と呼ばれ、西の方はそれより少し低く、もと愛宕神社があったところから愛宕山と呼ばれている。群集墳は、この愛宕山の山頂より、東南麓へかけての愛宕山古墳群(14)と、天王山山頂の天王山古墳群(12)、さらに天王山の麓が東へはりだして和田部落の背後にせまるところに妙界寺古墳群(18)があり、三木地方における重要な古墳地帯の一つとなっている。

**年ノ神古墳群（25･26）・北山古墳群（27）**

年ノ神古墳群は、山陽自動車道建設に伴い発掘調査が行なわれた。12基からなり、中期の木棺直葬墓（６～12号墳）と後期末の横穴式石室（１～５号墳）からなる。中でも年ノ神６号墳は、土器の他に三角板革綴短甲、四獣鏡、刀剣、鏃が出土している。これらの遺物から５世紀前半の時期が与えられている。

**毛無山古墳群（２）**

３基の横穴式石室があったとされる。そのうちの３号墳の調査を行った。横穴式石室の中には、組み合わせの箱式石棺があったと考えられている。時期は出土土器から７世紀中頃と考えられる。

**黍田白雲谷古墳群（３）**

近年、白雲谷古墳と積石塚古墳の２基の調査が行なわれた。白雲谷古墳は、７世紀中頃に築造され、装飾付須恵器の出土や、玄室と羨道との境に検出した木製の扉らしきピットが注目される。積石塚古墳については、出土遺物がないため時期は不明だが、多角形と推測される墳形が注目される。

**勝手野古墳群（４）**

11基の円墳のうち８基の調査を行なわれた。ほとんどは直径10m前後の規模であるが、３号墳は直径16.5mと群中で最大規模である。

埋葬施設はすべて横穴式石室であり、２・３・５号墳の石室からは、凝灰岩質砂岩製の家形石棺が見つかっている。３号墳からは、馬具が出土し、６号墳からは装飾付須恵器２個体が古墳の前庭部に一対で出土した。古墳の時期は６世紀末～７世紀後半である。

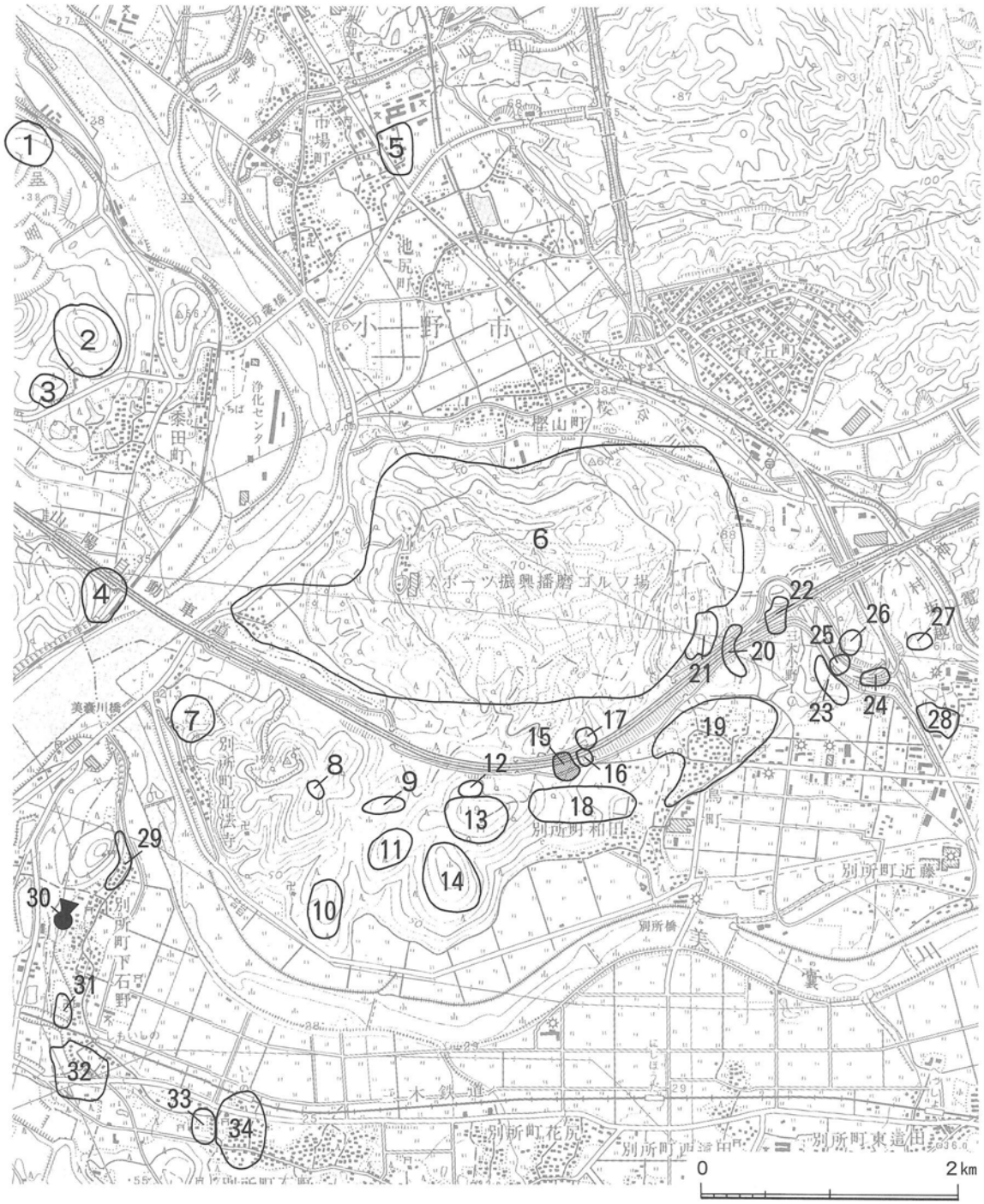
参考・引用文献

是川　長　『三木市史』　三木市役所　1970年

小野市教育委員会　『小野市遺跡分布地図』

小野市史編纂専門委員会　『小野市史』　第四巻　資料編Ⅰ　1997年

三木市教育委員会　『三木市遺跡分布地図』　三木市文化研究資料第17集　2001年




第１図　周辺の遺跡

１．下来住古墳群　２．毛無山古墳群　３．黍田白雲谷古墳群　４．勝手野古墳群　５．下司館遺跡　６．樫山古墳群　７．正法寺古墳群　８．正法寺山頂遺跡（銅剣出土推定地）９．フルムショ神社遺跡　10．正法寺東尾根古墳群　11．フルムショ南西尾根古墳群　12．天王山古墳群　13．小和田神社遺跡　14．愛宕山古墳群　**15．和田神社遺跡**　16．大年山遺跡　17．大年山古墳群　18．妙界寺古墳群　19．鳥町遺跡　20～22．貝谷遺跡　23・24 年ノ神遺跡　25・26 年ノ神古墳群　27．北山古墳群　28．大二遺跡　29．下石野高田散布地　30．愛宕山古墳　31．下石野上畑遺跡　32．下石野和田上散布地　33．下石野坂芝散布地　34．石野田中散布地

# 第３章　調査の結果

## 第１節 Ａ地区の遺構と遺物

### １．土器棺墓（巻頭図版３～９・図版３～20・写真図版２～３）

Ａ地区は調査区内で最も高所に位置し、標高は65ｍから77ｍ程度までで、一部Ｃ地区にも及ぶが、その大半がＡ地区の範囲内で弥生時代後期末～古墳時代前期の土器棺墓が15基と時期・性格不明の土壙群が70基程度検出された（図版３）。

土器棺墓はＡ地区でも北西部分の標高の高い部分を中心として、標高69m～76.5ｍの間におさまり、約35m四方の範囲で検出し、東部では全く認められなかった。さらにその中でも標高71.5m～75m、約11ｍ×約26mの範囲に11基がおさまる形で存在し、また、ＳＸ９～ＳＸ13の５基のように約４ｍ×約５ｍの長方形の墳丘内に整然と配置されている状態のものもあった。そのほかにはＳＸ３～ＳＸ６の３基が一列に近接して存在していた以外は散在している状況であった。

なお、土器棺墓群は調査区の西方に集中していたため、さらに調査区外にも存在している可能性が生じた。そこで、調査区外に西方向にトレンチを設定して土器棺墓の存在を追及したが、トレンチ調査では全く検出することはできなかった。

土器棺墓はすべて壺を棺身としており、壺・鉢・高杯・甕を蓋に転用していた。棺身となった土器のうちいくつかは大型で通常見ない形態であるため、土器棺用に製作されたものと思われる。また、ＳＸ２の蓋に転用されていた高杯杯部の内面には赤色顔料が塗布されていた。なお、ＳＸ４・７のように、土器棺内底に直径５㎝前後の円礫を多数詰めているものも認められた。

次に遺構各個別について説明する。

#### ＳＸ１

遺　構（図版４・写真図版４）

Ａ地区内土器棺集中部北東隅のうちで最も高所に位置し、ＳＸ３～６の列の延長上に存在する壺棺である。標高は75mである。

墓壙の形状は東西に長い楕円形ないし長方形に近いが、斜面下方が流出しているため正確な形状は不明である。墓壙規模は長軸で99㎝、端軸64㎝以上、深さは最深部で検出面から35㎝である。墓壙底は水平に近いが、地形の傾斜方向にやや傾いている。底での墓壙の長さは84㎝、幅は30㎝である。棺は墓壙の西寄りに存在し、棺の下半部が遺存していた。上部は棺内に破片として落ち込んでいた。棺は大型の土器をやや斜めに設置し、出土土器の中に鉢が存在していたことから、鉢を上下逆にして蓋に転用していたものと思われる。棺の主軸方向は等高線にほぼ平行している。棺身は大型の壺形を呈し、形態的に類例を見ないものである。

遺　物（図版12・写真図版20）

１は棺身になっていた壺である。長胴の体部から屈曲して直立し、短く外反する口縁部を有し、端部は丸くおさめる。底部は突出する平底であるが、外面中央部が窪んでいる。口径21㎝、器高64㎝を計り、胴部最大径は44.8㎝である。底部の直径は6.9㎝で、頸部の内径は17.2㎝である。体部外面はタタキ成形後縦方向に幅広のヘラミガキを施している。下半部の一部にヘラミガキ前の縦方向

のハケ調整が認められるが、外面全体に施してあったものかどうかは不明である。底部付近には横方向のヘラケズリが認められる。底部中央には焼成後の直径1.1㎝の穿孔が認められる。体部内面下半は縦方向、上半は横ないし斜め方向の比較的細かいハケ調整を施している。口縁部の調整は外面縦方向、内面は横方向の幅広ヘラミガキ調整である。

この型式の壺は類例を見ないものであり、土器棺用に製作された土器と思われる。

２は蓋に利用されていたと考えられる鉢である。体部～口縁部の約半分および体部の一部を欠失するが、注ぎ口を持つタイプである。口径は26.5㎝、器高は推定20.2㎝、底部は突出する平底で底径5.8㎝である。口縁部は体部から屈曲してやや内湾しながら外上方に短くのびる。体部外面はタタキ成形の後、縦方向のハケ調整を施し、粗くヘラミガキ調整を加えている。内面は縦方向のヘラミガキ調整である。口縁端部は丸みがある面をもち、上方につまみ上げたような形状である。調整はヨコナデである。

## ＳＸ２

### 遺　構（図版５・写真図版５）

Ａ地区内土器棺集中部の北西隅部、標高76.5ｍの直上に位置し、付近にほかの土器棺は認められず、最も近いＳＸ８までの距離は約8.4ｍも離れている。

墓壙平面は直径51㎝のほぼ円形を呈し、確認できた深さは17㎝である。墓壙底は直径33㎝の円形を呈し、底面は平坦で水平に近い。

土器棺は大型の壺を横にし、口縁部が若干高くなるように設置していた。ただし、棺上部はその多くが棺内に破片となって落ち込んでいた。主軸方向は等高線にほぼ平行する。口縁の下部は確認した墓壙からはみ出るため、上面では楕円形の墓壙であったものが削平・流出を受けて上部が失われたものと判断している。蓋は棺身の口縁部とほぼ同じ口径の高杯杯部を２点裏返して使用していたようであるが、２点がどのように組み合わさっていたのかは不明である。ただし、１点は棺身口縁部のほぼ中央に存在していた。重ねて使用していた可能性も考えられる。棺身は体部のほぼ中央部分を欠失するが、埋設当時の仕口かどうかは不明である。

### 遺　物（図版13・写真図版20）

３・４は蓋に転用されていた高杯杯部である。３は杯底部が内湾した後屈折して外上方に直線的に延びる口縁部となり、端部は丸くおさめている。４とは杯底部端の直径と口縁部の厚みが異なる。

口径23㎝、現高は4.7㎝である。外面は横方向の細かいハケ調整の後、縦方向の細いヘラミガキを疎らに施している。内面杯底部は横方向、口縁部内面は縦方向にヘラミガキ調整を施している。

赤色顔料は内面ほぼ全体に塗布（巻頭図版９）されており、奈良文化財研究所の高妻洋成氏に鑑定していただき、水銀朱であることが判明している。

４も高杯の杯部の破片である。３と形態的には同一であるが、口径がやや小さく、19.4㎝である。

残存高は4.5㎝を測る。杯部外面には縦方向のヘラミガキ調整が認められ、内面もヘラミガキ調整で、杯底部は横方向、口縁部は縦方向である。

５は棺身に使用されていた大型壺である。体部中央を欠失するが、推定器高は43.9㎝である。体部最大径は38.8㎝、口径は23.4㎝、突出した底部の直径は7.1㎝、頸部の内径は17.2㎝である。寸胴の大きな体部をもち、短い口縁部は外反し、端部は上方に拡張する。口縁部外面は垂直で幅１㎝の

面をもつ。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデ、体部外面はタタキ成形後タテハケ、体部内面はヨコハケ調整である。粗密２種類のハケ原体を使用している。

ＳＸ３

遺　構（図版５・写真図版６・７）

Ａ地区内土器棺集中部の北東部、標高73ｍの直下に位置し、ＳＸ５・６とともに３基の土器棺が１ｍ程度の間隔で一列に並んでいた。それらのうち最も高所に位置する。

墓壙の平面形は円形に近い楕円形で、長径83㎝、短径70㎝を測る。深さは斜面山側で約48㎝、斜面下側の浅い部分でも約25㎝遺存していた。墓壙の底面は平面円形を呈し、直径36㎝で、ほぼ水平である。

土器棺は大型の丸い壺を正立状態に納めており、この土器棺の内部には長頸壷が認められた。長頸壷は蓋として転用されたものと判断している。棺身の壺は口縁部を打ち欠き、口縁部破片を棺と墓壙との間に埋め込んでいた。検出時の棺は高さ48㎝遺存していた。棺内からは土器片以外の遺物は全く出土せず、土が充満していた。棺内埋土の上位には亜円礫が数個認められたが、流入したものと考えている。

棺蓋は長頸壷を逆さにして棺身に挿入あるいは口縁部を取り外して被せていたと考えている。

遺　物（図版14・写真図版21）

６は蓋に転用されていたと考えられる長頸壷である。口頸部と体部との接点は欠失し、口縁端部も現存していない。現存高33.5㎝で、体部最大径は23.1㎝、底部は突出した平底で、底径は6.5㎝を計る。体部最大径は上部にあり、無花果形を呈する。口頸部は外反気味に上部に延びる。頸部外面に円形のような記号文が１箇所認められる。

体部外面はタタキ成形の後、調整は加えていないようである。体部内面は縦方向のハケ調整で、底部付近はクモの巣状ハケを施している。口頸部外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整となっている。

７は棺身となっていた大型の壺で、器高56.6㎝、体部最大径52.1㎝を計り、口縁部を除いた棺身の内法高は46.6㎝である。また、頸部の内径は17.5㎝である。口頸部は棺と墓壙との間の埋土中から出土したが、接合することができた。口径は27.7㎝である。形態的には類例が多く認められる型式であるが、その大きさ、厚さ、全体のプロポーションから、土器棺用に製作、焼成されたものと考えられる。体部は上下に若干押しつぶされたような偏円球形を呈し、径８㎝の比較的小さな突出した平底を有する。口頸部は体部から曲折して上方に立ち上がった後、外反し、さらに曲折し上方に外反しながらのびる複合口縁で、体部の大きさに比べて口縁部はあまり大きくない。体部と口頸部の境には断面三角形の突帯を貼り付け、刻みを加えている。

体部はタタキ成形後タテハケで調整し、下半部にはさらにヘラミガキを加えている。体部内面はハケ調整で、下方は横から左斜め上方向、中央部は縦方向、上部は左斜め上方向である。口頸部はヨコナデで仕上げている。

ＳＸ４

遺　構（図版６・写真図版８）

ＳＸ４はＡ地区でも南西部に存在し、他の土器棺墓からは10m程度の距離をおき、単独で存在し

ているような観を呈する。標高70.5mに位置している。

墓壙の平面形は南北方向に長い楕円形を呈し、長径56cm、短径49cmである。斜面山側での深さは約24cmで、斜面下側では削平・流出などにより自然消滅している。底はほぼ水平で、長径約44cm、短径32cmである。

棺は墓壙主軸に合わせるように壺と思われる大型の土器を横位に設置しており、底部が若干低くなるようにしている。その他の土器棺と違って、土器棺の主軸方向が等高線と直交方向に近く、平行とはなっていない。

棺は下半部が遺存しており、その内部からは円～亜円礫が多く認められたが、周囲から流入したものか、棺上に置かれていたものが落ち込んだのかについては判然としない。しかし、ＳＸ７で可能性が考えられるような、棺内に詰めていた状況ではない。棺内からは上述の礫や棺本体の破片以外の遺物は出土していない。棺は口縁部を欠失しているが、棺埋設当時からのものであるのか、のちに流失したためであるのかは不明である。また、この棺の蓋についても不明である。

遺　物（図版15・写真図版21）

８は棺身に使用されていた土器で、口縁部が欠失しているため器種は確定できないが、ここでは壺と考えておきたい。長胴で無花果形の体部と突出気味の平底を持つ。底径は5.8cm、最大腹径は37.2cm、現高は47cmである。体部外面はタタキ成形の後、縦方向のヘラミガキ調整を密に施している。

内面は縦方向に近いハケ調整である。この土器も形態的に類例を見ないものであるため、土器棺用に製作・焼成されたものであろう。なお、現状での肩部開口部分の直径は16.4cmである。

## ＳＸ５

遺　構（図版６・写真図版９）

Ａ地区内土器棺集中部の北東部、標高73mの直下に位置し、ＳＸ３・６とともに３基の土器棺が１m程度の間隔で一列に並んでいた。それらのうち中央に位置するものである。標高は72mである。

墓壙は平面楕円形に近く、長径54cm、短径45cmを計り、深さは18cmと遺存状況はあまり良好ではなかった。棺は墓壙底から約４cm浮いた状況で壷形土器が横転した状態で出土した。土器の残存状況は良好でなく、細片となっているものが多かった。棺の長軸方向は墓壙のそれに合わせ、等高線と平行方向にほぼ合わせている。底部は概ね東方向を向いていた。棺は上部が内部に細片となって落ち込んでおり、かつ、斜面下方の部分は流失していた。棺内には土器片以外には土が充満しており、円礫が数個認められたが周囲から流入したものと考えられる。他に遺物は出土しなかった。

遺　物（図版15・写真図版22）

９・10は棺に使用されていた大型の壺である。遺存状況が悪く、細片となっていたため、接合・復元が充分に行えなかった。ここで図示できたのは肩部の破片と底部片の２点である。口縁部は認められなかった。棺埋設時から無かったものかどうかは不明である。

壺体部９は球形に近いと思われ、最大径39.1cmでタタキ成形となっている。体部内面は細かいタテハケ調整で、肩部には粘土紐接合痕や指頭圧痕が認められる。頸部は体部から曲折して上部に延びるようである。頸部の直径は20.2cmである。

10の底部は９と同一個体であるが、接点がない。10と同じく外面はタタキ成形である。やや突出した平底を持ち、底径は5.8cmである。

## ＳＸ６

遺　構（図版７・写真図版10）

Ａ地区内土器棺集中部の北東部、標高に位置し、ＳＸ３・６とともに３基の土器棺が１ｍ程度の間隔で一列に並んでいた。それらのうち最も低位に位置する。標高は71.5ｍの直上である。

墓壙の平面形は楕円形に近く、長径50㎝、短径45㎝で、斜面山側での深さは16㎝である。棺は墓壙の主軸にあわせて横位置に置かれており、等高線に平行方向に近い。棺は墓壙底から９㎝上に置かれ、下半は残っていたが、上半部は破片となって棺内に落ち込んでいた。底部は北東方向を向いていた。棺内には鉢の破片も存在していたため、鉢は蓋として転用していたものと考えている。土器片以外に遺物は出土しなかった。棺身は大型の壺を使用し、口縁部を欠しているが、頸部は残存している。口縁部は埋置の際に取り外された可能性が高い。棺身は横位であるが、水平ではなく、壺頸部をやや高く置いていたようである。

遺　物（図版16・写真図版22）

11は棺内から出土した鉢である。底部を欠失するが、流失したものと考えられる。やや直線的な体部で、口縁部は体部から曲折して外反気味に外上方に短く延びる。口縁端部は上方につまみあげたようになっており、外側に面をもち、注ぎ口が認められる。口径は37.4㎝、現高は11.3㎝である。体部は内外面とも縦方向に近いヘラミガキ調整であるが、内面口縁部付近と口縁部内面は横方向のヘラミガキ調整である。

12は大型の壺で、現高43.9㎝を計る。体部は無花果形を呈し、体部最大径は上位にあり、36.2㎝である。突出した平底で、径6.3㎝。頸部は体部から屈折して上方に直線的に延びる。そこからさらに曲折して外上方にのびて口縁部となるようであるが、欠失しているため不明である。頸部の内径は9.2㎝である。体部はタタキ成形の後、外面上半にはヘラミガキ、下半にはハケ調整を加えているが、いずれも疎らである。体部内面のハケ調整は下方は斜め、上方は横方向に施している。

## ＳＸ７

遺　構（図版７・写真図版11）

ＳＸ７もＳＸ４同様、他の土器棺墓とは距離を隔てた位置に存在している。土器棺墓群全体のほぼ中央、標高は72ｍの直上である。

墓壙の平面形はほぼ円形で、直径は約77㎝である。墓壙の断面形はほぼ垂直に落ちた後、やや平坦になり、中央部分を深く下げた状態となっている。深さは中央部が最も深く、53㎝を計る。土器棺は底に密着して壺を正立状態で置いていたが、側面の墓壙と棺の隙間は10㎝程度と比較的広い。棺内には６㎝前後大の円礫数十個が底から下半まで詰まった状態で検出した。この礫は棺埋設時に詰めたものと判断しているが、棺上に置いていたものが棺内に落ち込んだとする解釈も捨てきれない。ただし、他の組み合わせた土器棺部位のほとんどが礫の上部に存在していることから、前者の考えを採用している。棺身の大型壺の底部には穴があいており、穿孔と考えているが、土器の遺存状況が非常に悪いため、断定するには至っていない。

前述のように、棺内礫の上部には土器片が存在し、接合の結果、棺身のほかに３個体の土器となることが判明した。１つは壺の体部から頸部にかけての破片（14）で、もうひとつは壺の体部から底部にかけての破片（15）、残りの1点は小型の壺の小さな底部片（16）である。いずれも胎土・焼

成・調整などから別個体と判断でき、棺身とも異なっている。これらの破片は棺身と組み合わさって棺を構成していたものと考えられ、現段階では14を天地逆にして棺本体に挿入し、その上を15の底部で蓋としていたと考えており、16は混入ととらえている。15の出土状況は底部が上を向いていることと最も上部から出土していることにより最上部の蓋と考えるのが妥当であろう。14の壺は底部を欠失していることから、棺の埋設時には打ち欠かれていたことが予想され、円筒状となっていることから、棺身と蓋との間に入るものと考えた。また、14は現状では棺身の残存上端の径よりも胴部径が小さく、中にすっぽりおさまってしまうが、13の土器の遺存状態が悪いことから、上端が摩滅してしまっているためと考えておきたい。いずれにしても、３個体の土器を組み合わせた土器棺であることは間違いないであろう。その理由としては棺内に収める遺体の大きさに左右されたためと思われ、13の棺身１個体と15の蓋のみではおさまらない大きさであったためと考えておきたい。

棺内からは他に遺物は出土しなかった。

遺　物（図版17・写真図版23）

13はやや大きめの壺体部下半である。棺身として使用されていたが、赤色を呈し、脆弱で器表がほとんど残っていないなど遺存状況が非常に悪い。体部最大径は48cmで、平底であるがほとんど突出しない。調整は体部外面最大径付近でかろうじて横方向のヘラミガキが確認されたに過ぎない。

底部中央に穴があるが、穿孔かどうかは決定できない。底径は約5.7cmである。現高33.1cm。

14は壺の体部から頸部の破片である。底部は欠失しているが、16が底部になるのかもしれない。

14の器表は残存状況が良好で、外面の密なヘラミガキ調整や内面の密に施された横あるいは斜め方向のハケ調整が良く観察できる。体部の形状は球形に近く、頸部は体部からやや屈曲して外反気味に上方へすぼまりながらのびる。色調は10YR7/4にぶい黄橙色を呈する。現高は30.3cmである。

15は鉢あるいは壺と思われる体部下半で、最大径は31.6cm、現高は17.6cmである。底部は突出した平底で、直径6.1cmである。体部外面はタタキ成形のみ認められる。内面はハケ調整のようであるが、確定できない。

16は小さな底部の破片である。突出した平底で、底部直径は2.3cmである。前述のように、14の底部である可能性も捨てきれない。外面にはヘラミガキ調整が認められるが、疎らである。

## ＳＸ８

遺　構（図版８・写真図版12）

本土器棺は小型の壺を組み合わせたものと思われ、棺身となっていたのは口頸部を欠いた壺で、もう１点の長頸壷はおそらく逆転させて蓋として利用されていたものと考えられる。ＳＸ８の棺として使用されていた土器は形態、大きさから日常使用土器を転用しているものと考えられる。

ＳＸ８は土器棺群の中でも西寄りに位置し、ＳＸ９～13の墳丘墓の北東側約３ｍの位置にあり、標高は74.0～74.5ｍの間にある。土器棺群の中では比較的高い位置に存在する。

墓壙の平面形はほぼ円形を呈し、径約53cmである。断面形は「Ｖ」字形に近いが、墓壙底は直径約20cmの円形でほぼ平坦・水平である。深さは約30cmを測り、棺は墓壙内南東寄りの斜面の低い側に納められていた。棺身は壺をやや斜めに倒し、底部は斜面下側になるような位置であった。

棺上部は削平、流出により欠損していた。棺内には別個体の長頸壺（18）が落ち込んでおり、その他に円～亜円礫が数個認められたが、地山に含まれる礫の混入と思われる。

遺　物（図版18・写真図版24）

ＳＸ８で棺として利用されていた土器は17の壺と18の長頸壺である。

17は甕の可能性も残すが、肩～頸部がかなり内側まで狭まり、頸部直径が小さくなることから壺と判断したが、口縁部の形状は不明である。丸みのある体部で、無花果形を呈し、体部最大径は上位にある。底部は体部からやや突出し、ドーナツ状の上げ底となっている。底部周辺に指頭圧痕が認められる以外は、器表が荒れているため、調整痕は内外面とも残っていない。体部内面の肩部付近に粘土紐の接合痕が認められる。体部最大径は31.8cm、現高33.6cm、底径6.4cmで、欠損している頸部付近の直径は約15.7cmである。

18の長頸壺は天地逆にして棺身に挿入していたと考えられ、口縁部は欠失している。算盤玉形の体部から外反しながら上方に長く伸びる頸部を有し、口縁部は頸部から屈曲して外上方に伸びるようであるが、欠損しているため、口縁部の形状は不明である。底部は突出しており、ドーナツ状の上げ底となっている。底径5.1cm、体部最大径23.6cm、頸部の内径8.4cmで、現高は24cmである。体部および頸部の調整は縦方向の細かい縦ハケで、体部内面は横ハケである。

## ＳＸ９

遺　構（図版９・10・写真図版13・14）

土器棺墓群西端に位置し、ＳＸ10～13とともに５基の土器棺が同一墳丘墓内に存在する。

この墳丘墓は角張った長方形を呈するが、等高線方向とはやや主軸が振れているためか、南東側は等高線と同方向で流失により削られたようになっている。墳丘墓の規模は長軸4.8m、短軸3.8mで現高は20cmである。墳丘墓の検出面は遺構面であり、地山であるが、土器棺は崩落しているにもかかわらず、土器上面が見えていたことから、本来は盛土によりもう少し高かったものと思われる。その高さは、ＳＸ10の壺体部の直径から、30cm以上あったと推定される。

墳丘墓の北西側には周溝状の窪みがあり、調査時点では墳丘墓に伴う周溝と考え、調査を進めていったが、溝状にはならず、北側に大きく開く三角形状を呈することから、単純に周溝とは考えにくい。現在では墳丘盛土を採取するための掘り込みと墳丘を画するための溝両方の機能を備えたものと考えている。この窪みの埋土は10ＹＲ５/５ 黄褐色の極細粒砂～細粒砂である。窪みの長さ8.8m、最大幅3.4m、深さは最深で25cmである。墳丘墓の北東側短辺にも周溝状の窪みがあり、埋土は北西側周溝と同様であった。溝の長さ2.2m、幅0.8m、深さは約15cmである。

墳丘墓内の土器棺は整然と配置され、ＳＸ９～12の４基がほぼ四角形に並び、ＳＸ13は墳丘墓の南隅のやや拡張された部分に存在する。ただし、これらの並びは墳丘墓の辺に直交、平行方向ではなく、等高線に方向を合わせていることから、この墳丘墓が確実であるかどうかを判断する際の障害となっている。しかし、今回和田神社遺跡で検出した土器棺のうち、ＳＸ９～ＳＸ13の５基ほど近接・集中して存在しているものが認められないことと、墳丘墓状に長方形に削り出された遺構について他に適当な機能が考えにくいことから、墳丘墓として扱っている。

さて、ＳＸ９は墳丘墓内の北隅に近い位置に存在し、標高は74.1m～74.2mの間にある。

墓壙の平面形は円形で直径45cm、深さは斜面山側での最も深い箇所で29cm、底は平坦で直径28cmの円形である。壁はほぼ垂直に落ちる。この墓壙内ほぼいっぱいに、口縁部を欠失した平底の壺がやや斜めに置かれた状態で検出された。また、壺内部からは鉢が１個体分出土しており、土器棺の

蓋として鉢が使われていたことが容易に想像できた。また、鉢は逆転させて置かれていたものと推察される。棺本体の壺の体部やや下半には外側からの穿孔が認められるが、墓壙内に壺が埋置された状態では、必ずしも穿孔部分が最も低いところにあたるようにはなっていない。墓壙は深く掘り込まれ、そこに土器が埋置されていたせいか、土器の残存状況は良好である。

遺　物（図版18・写真図版24）

19は棺本体に使われていた壺である。頸部以上を欠失するが、土器棺として使用された際に打ち欠かれたものと思われる。体部は丸みを帯び、最大径は中位よりやや上にあり、36.6cmである。底部は突出しない平底で、底径は9.4cmであるが、体部との境がはっきりしない。調整は体部外面下半部が縦方向のイタナデのち底部付近を縦方向のヘラミガキ調整、頸部付近は縦方向の細かいハケ調整ののち、イタナデ。体部内面は基本的に縦方向のハケ調整であるが、中位付近は斜め方向となっている。頸部付近はユビナデが認められる。残存高は34.4cmである。体部中位やや下に外側から打ち欠いた穿孔が１箇所認められ、孔径は1.5cm×１cmの長方形に近い。壺は全体的に厚手のつくりであるが、大きさ等から、特に土器棺用として製作されたものではないようである。

20は棺蓋に使用されていた鉢である。完形品に近い状態で遺存しており、口径23.8cm、器高21.8cm、胴部最大径23.3cmを測る。底部はやや突出した平底で、直径5.7cmである。平底から内湾気味に外上方に伸びたのち、一度すぼまって外上方に直線的に短く伸びる口縁部をもつ。端部には面をもつ。

体部はタタキ成形で、体部内面の上半はヨコハケ、下半は不定方向のイタナデ調整である。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整。

## ＳＸ10

遺　構（図版９・10・写真図版15）

墳丘墓内南東側列の北東端に位置する壺棺で、やや楕円形の墓壙内には、口縁部の大半を欠損した他地域産の大型の壺が横倒し状態で安置されていた。墓壙の長軸は等高線直交方向にあり、70cmで、短軸は65cmである。墓壙の深さは比較的浅く、約31cmで、壁面はなだらかである。

棺は等高線と平行方向に大型の壺をほぼ水平に置いており、棺の上部は崩壊して棺内に落ち込んでいた。その内部には地山からの流入と思われる円礫も混入していた。棺身の破片の上部には、別個体の壺下半部の破片が多く認められたことから、小型の壺下半部を逆転させ、蓋として組み合わせていたと想定される。また、棺身の口縁部は少量のみ検出されたことから、棺埋設時には口縁部を打ち欠いて使用されたものと判断される。

遺　物（図版19・写真図版25）

23は棺身に使用されていた他地域産の大型壺であり、器高67.2cmを測る。色調は7.5YR４/４褐色を呈し、胎土には金雲母・角閃石を含み、一見して河内系あるいは讃岐系と判断される。複合口縁の広口壺で、口径32cm。内径14.9cmの筒状の頸部から外反した後、屈曲してさらに外反しながら外上方に伸びる口縁部となる。口縁端部は面をもち、口縁部外面には竹管円形浮文を貼り付けている。

また、口縁部下端の垂下部分には刻み目を全周させている。口縁部内面の調整は横方向のヘラミガキ、頸部は内外面とも縦方向のヘラミガキ調整であるが、内面下端は横方向となっている。体部は非常に張りが強く、扁平な無花果形を呈する。体部最大径は61.3cm。体部外面は細かいハケ調整の後、縦方向のヘラミガキ調整を施している。頸部付近には２～３条の櫛描波状文を施し、頸部と

の境には突帯を貼り付けていたようであるが、すべて剥離しており、形状は不明である。内面の調整も縦や横方向の細かいハケの後、下半部は縦方向、中央と最上部は横方向のヘラミガキ調整となっている。体部下半には穿孔と考えられる打ち欠きがあるが、形状が不定形であることに加え、後世の剥離が重なっており、不明確となっている。底部はやや突出した平底であるが、体部の大きさに比して非常に小さく、直径5.7㎝である。底面は丸みを帯びている。

21は蓋に転用されていた壺体部下半である。非常に丸みのある体部で、底部は突出した平底で、中央は少し上げ底となっている。体部外面は細かいヘラミガキを非常に密に施し、内面はハケを丁寧に施している。体部最大径30㎝、底部直径は６㎝、現高は21.7㎝である。底面に木葉痕が残る。

22は底部破片である。突出した平底で、底径6.9㎝。出土層位等は不明であり、蓋として使用されていた可能性や混入の可能性もある。内面調整はナデ、外面は不明である。

## ＳＸ11

遺　構（図版９・11・写真図版16）

墳丘墓西隅に存在し、ＳＸ９～ＳＸ12と共にほぼ等距離で四角形に並んでいる。標高は74.2mである。墓壙は円形に近いが、等高線平行方向がやや狭く55㎝で、長軸は66㎝である。墓壙の底は平坦で直径約40㎝、深さは最も深いところで、検出面から40㎝である。墓壙内の底付近には壺体部の大形破片が数点立った状態で検出され、その上部には壺体部の破片が覆うような状態で検出された。

このことから調査時には、この壺棺は破片を組み合わせて棺身を構築したものとも考えられた。しかし、出土土器の中に大形の底部破片が混じっていたことと、棺身片の検出状況を再検討した結果、横倒しに置かれた壺を棺身とした壺棺であるとの判断に至った。ただし、蓋などがどのようになされていたかについては不明である。

遺　物（図版20・写真図版25）

図示できたのは24の壺と思われる底部のみであり、体部との接合はできなかった。突出しない平底から外上方に直線的にのびる体部を有する。底径６㎝、現高は14.8㎝である。体部外面は縦方向のハケのちヘラミガキ調整、内面は縦方向のハケ調整である。

## ＳＸ12

遺　構（図版９・11・写真図版17）

本土器棺墓も墳丘墓内にあり、ＳＸ９～ＳＸ11と共に約80㎝の間隔を置いて四角形に並んでいるうちの南隅に存在している。標高は73.8m～73.9mであり、ＳＸ10と同一レベルである。墓壙は等高線と直交方向の北西－南東にやや長い楕円形で、長軸60㎝、短軸は55㎝である。墓壙の断面形は「Ｕ」字形に近く、底はやや丸い。斜面上側は下側に比べて、やや急傾斜で掘り込まれており、深さは38㎝である。

墓壙内にはほぼいっぱいに壺を収めており、壺底部は斜面山側の墓壙下端付近にあり、斜めに置かれた状況が看取できる。この壺は口縁部を欠失しており、埋葬時に打ち欠かれたものと思われる。

棺内には棺上部の破片と別個体の土器底部が土砂と共に落ち込んでいたのみで、他に遺物は検出されなかった。別個体の底部は底面を上にして落ち込んでいた状況から、底部を逆転させて蓋として用いられていたと推測できる。

遺　物（図版20・写真図版26）

棺身として使用されていた大型の壺(26)は、胴部最大径49.2㎝、現高50.4㎝で、頸部の内径13.5㎝である。体部は球形に近く、底部はやや突出気味の平底で、底径7.8㎝である。体部はタタキ成形後、内外面にハケ調整を施すが、外面下半は密に施すものの、上部にゆくにつれて疎らになり、肩部には施されていない。内面のハケは下半部が基本的に横に近い斜め方向であるのに対し、上部は斜め方向に施している。内面には成形時の粘土紐接合痕が残っている。頸部内面には横方向のヘラミガキと思われる調整痕が残っているが、確かではない。ＳＸ13の口縁部破片が(26)の口縁部である可能性があることを付記しておく。

25は残存する体部の大きさから、26の蓋に転用されていたと考えられる底部破片である。突出する平底から、若干内湾しながら外上方にのびる体部となる。体部の調整は内外面ともハケ調整で、現高9.3㎝、現体部径18.8㎝、底径は5.6㎝である。

## ＳＸ13

遺　構（図版９・11）

墳丘墓の南隅近くに位置し、ＳＸ10～ＳＸ12と一直線にはならないが、その並びに近い。標高は73.65mである。検出時には墓壙も見当たらず、壺口縁部がやや散乱している状況であった。発掘調査時点では壺棺の痕跡と認識していたのであるが、前述のように、ＳＸ12の口縁部が流出し集積したものの可能性も捨てきれない。

遺　物（図版20・写真図版26）

図示したのは(27)の壺口縁部破片のみである。筒状をなすと思われる頸部から、大きく外反してほぼ水平にまでのびる口縁部である。口縁端面は凹面を呈し、上下の角をやや引き伸ばしたようになっている。口径は26㎝。口縁部外面はヘラミガキ調整と思われ、内面は斜め方向のヘラミガキ調整であるが、端部付近は横方向のヘラミガキ調整となっている。胎土、色調が(26)と似ていることから、同一個体の可能性がある。

## ＳＸ15

遺　構（図版８・写真図版18）

土器棺墓群の中では最も南西部にあり、近くに他の土器棺は見当たらない。最も近いＳＸ４からでも11m以上離れている。標高は69.2m～69.3mである。墓壙はやや楕円形で、等高線と平行方向に長く44㎝で、短径は38㎝を測る。墓壙底は水平に近く、底の直径は25㎝である。墓壙は斜面上側を急角度に掘削し、斜面下側は緩やかになっている。深さは18㎝である。

墓壙内で検出した壺棺は下半部が立った状態であったが、壺底部は墓壙の中心より斜面山側によった所に置かれているため、上部は斜面下側に少し傾いている。棺内部には土砂と共に土器上部の破片と別個体の小型壺が認められたが、他に遺物は出土しなかった。小型壺は完形に復元できたが、棺身の大型壺は頸部以上を欠損している。このことから、棺身の頸部以上は打ち欠かれ、小型壺を上下逆にして壺に挿入することにより、蓋に転用していたものと考えている。

遺　物（図版16・写真図版27）

28は棺身に使用されていた壺である。頸部以上を欠失し、底面には直径1.4㎝の焼成後穿孔が認め

られる。底部はあまり突出しない平底である。体部は長胴で、現高39.2㎝、体部最大径は中位にあり、31.5㎝を測る。外面の調整は、下半は横方向、肩部付近は縦方向のハケで、下半のみ縦方向のヘラミガキを疎らに加えている。内面は斜め方向のハケ調整を施すが、内外面とも器表の遺存状況が悪いことから、調整不明な箇所が多い。類例を見ない土器であることから、壺棺用に製作された土器と考えておきたい。なお、細片であるが、端面に擬凹線を施した垂下口縁部も出土している。

蓋に使用されていた小型短頸壺(29)は、突出しない平底で、球形に近い体部をもち、口頸部は短く直立する。口縁部はヨコナデ調整で、端部は丸くおさめる。体部外面は縦方向の板ナデ調整、内面は横方向に近い斜め方向のハケ調整で、下端はクモの巣状に施している。口径８㎝、器高15.4㎝、体部最大径14.1㎝、底径3.1㎝を測る。

### ＳＸ16

遺　構（図版８・写真図版18・19）

ＳＸ16は、土器棺墓群の中でも南端で、最も標高の低い場所に位置している。標高は66mから少し下がった所である。この土器棺もＳＸ15同様、他の土器棺とは離れて存在し、最も近いＳＸ15からでも約13mの距離を隔てている。

墓壙は平面円形に近い楕円形で、長径42㎝、短径36㎝である。墓壙は上部がかなり流出あるいは削平を受けていると思われ、また、墓壙の断面は皿状を呈し、底面との境もはっきりしないため正確ではなく、深さは約14㎝しか遺存していなかった。

墓壙内の南東寄りに壺体部の破片を検出した。墓壙底から約３㎝浮いた高さであることに加え、遺構検出面と同じレベルで土器を検出しているため、墓壙内の中心からやや寄った位置であることとあわせて、土器棺と判断するにはやや躊躇を覚える。しかし、墓壙状の窪みが存在することと、この部分の地山が礫をあまり多く含まない柔らかい土であったため、窪みの底面を調査時に掘りすぎたきらいもあることから、本報告では壺棺の可能性が高い遺構としておく。

壺は大半が流出しており、体部の一部が遺存していたに過ぎなかった。棺内には同一個体と思われる破片が礫と共に落ち込んでいた。棺身は一部の破片が立った状態であったが、底部、口縁部とも遺存せず、棺内に落ち込んでいた破片も同様で、図示できなかった。

## ２．　その他の出土遺物（図版13・写真図版27）

Ａ地区の土器棺集中部においては、土器棺以外の出土遺物は非常に少なく、図示できたものはわずかに３点である。

30はＡ地区西端付近で重機掘削時に出土した高杯である。杯部・脚柱部・裾部ともに接合したわけではないが、出土位置・土器の色調・胎土から同一個体であると判断したものである。杯部は水平に近い杯底部から屈曲気味に外上方に直線的にのびて口縁部となる。端部は丸くおさめている。脚柱部は中空であるが、細い。裾部との接点はないが、大きく外反した後、直線的に伸びる裾部へとつながると思われ、裾端は面をもつと同時に下方へ若干引き伸ばしている。杯部の調整は、外面下半はハケ、上半はヨコナデで仕上げており、内面はハケの後、ナデを加えている。脚柱部外面は縦方向のハケ後、縦方向のヘラミガキを重ねている。脚柱部内面は横方向のヘラケズリである。裾部は外面ヘラミガキで、内面はハケ後ヨコナデを施している。杯部径は17.8㎝、器高13.8㎝で、脚部径は11.2㎝である。

31はＡ地区中央部のやや東寄りの包含層から出土した、壺と思われる底部片である。体部は外反気味で、蓋のような形状も示すが、径が大きいことと高さが低いことから底部と判断した。突出した平底で、底径は6.6cm、現高は7.4cmである。体部はタタキ成形の後、外面に幅広のヘラミガキ調整を縦方向に施す。内面にはハケ調整と内底面にはユビオサエが認められる。

32は甕と思われる底部片である。31と同じ場所・層位から出土している。突出気味の平底で、体部はやや歪んでいる。体部はタタキ成形、体部内面はハケ調整であるが、太筋と細筋の両方の原体で施している。現高は6.4cm、底径は6.0cmである。

## ３．小　結

Ａ地区の土器棺墓群は合計15基の存在が認められたが、墳丘墓内に５基が集中して存在していた他に近接していたのは、１列に並んだＳＸ３～ＳＸ６の３基で、それぞれ約２ｍの間隔であった。残りの土器棺墓は散在しており、最も遠い距離では、ＳＸ15～ＳＸ16間の約13ｍ離れているものがある。

棺身に使用されていた土器のうち器種が判明しているものはすべて壺であり、しかも不明分を除いて、土器棺用に製作されたと考えられるものがその多くを占めている。したがって、棺身の器種は壺と呼ばない方が良いのかもしれない。一方、蓋に使用されていた土器は、鉢・壺・高杯といった日常で使用されていた土器を棺蓋として転用している例ばかりである。また、各機種を使用しているが、壺棺身の傾きや存在位置などとの相関関係はなさそうである。

棺身には穿孔を施しているものがいくつか認められ、疑問のあるもの２例を含めて５例ある。穿孔の部位では、底面が３例あり、そのうち不確実なものは１例である。底面以外では側面が２例で、不確実な１例を含んでいる。ここで注意しておきたいのは、側面穿孔の土器は斜めや横にして置かれていたが、いずれの例も、穿孔部分が下になるように置かれていたことである。また、底面穿孔では正立が多いことを考え合わせると、穿孔部分が低い位置になるように棺を設置していることが推察される。

次に、棺が置かれた傾きであるが、大きく正立と横位そして斜位に分けてみてみる。判明しているもののうち、正立にはＳＸ３・７・８・15の４例がある。横位は最も多く６例あり、ＳＸ１・２・４・５・６・10である。斜位は最も少なく、９・12の２例にとどまる。

棺の内部に礫を入れたとしか考えようのない例が存在する。ＳＸ７では正立に置いた壺の下半に直径６cm程度の円礫が詰まっており、一見して自然に入り込んだ状況ではないことが窺える。また、ＳＸ４でも棺内に礫が数多く入った状態で検出され、礫を入れていた可能性が高い。このような例は非常に少ないが、他遺跡で若干例認められる。類似例と意味については第４章で述べることとする。

今回検出した土器棺の中には、ＳＸ９～13は長方形の墳丘部分に集中して存在しているものが認められた。それらは確実なもので４基の土器棺が墳丘内に整然と並んでおり、しかも棺の主軸が等高線とは直交方向にあるという共通性も認められ、特異なあり方を示している。墳丘内に土器棺墓のみが存在する例も礫が入った土器棺のように、他遺跡で若干存在するようであり、この点についても第４章で述べる。なお、墳丘墓内の土器棺ＳＸ10の棺身に使用されていた土器は、胎土から他地域産であることは確実で、讃岐系あるいは河内系のいずれかである。

今回出土した土器棺の時期は、平底を持ちながら球形に近い体部、成形にタタキ技法を用いていること、内面はハケ調整を多用しているという特徴から、弥生時代後期末～古墳時代初頭の庄内併行期の古相と捉えることができるであろう。ただし、若干遡るものも認められるようである。

# 第２節　Ｂ・Ｃ地区の遺構と遺物

## １．調査の概要

Ｂ・Ｃ地区では、飛鳥時代の掘立柱建物14棟を検出した。

Ｂ・Ｃ地区は斜面に立地し、上方にＣ地区、下方にＢ地区が位置する。Ｃ地区は大きく３段のテラス（上段・中段・下段）にそれぞれの遺構が立地している。斜面の上方から下方、Ｃ地区（上段・中段・下段）→Ｂ地区の順に記述する。

遺物について、10㎝前後の杯身（杯Ｇ）については、明らかに蓋と認識できる物以外、すべて杯身として報告する。

## ２．Ｃ地区の遺構と遺物

### （１）上段テラス

上段テラスでは掘立柱建物４棟、土坑３基、石組遺構１基、溝１基を検出した。

斜面山側でＳＤ14を削平し、斜面下側に盛り土を行い、平坦面を作り出している。平坦面は長さ50m、幅７ｍである。この平坦面に１列に並んだ４棟の掘立柱建物跡を検出した。

#### ＳＢ４

遺　構（図版24・写真図版30・31）

Ｃ地区の北西部、上段テラスの西側にあたり、ＳＢ10の東側、ＳＢ５の西側、ＳＤ14に沿って位置する。

Ｎ42°Ｗに棟軸方向をとる桁行５間、梁行２間の建物である。規模は桁行方向7.6m～8.3m、梁行方向3.6ｍである。柱穴間の心々の平均値は桁行方向1.8m、梁行方向1.8m、面積は28.6㎡を測る。東隅の柱の位置が少し西側にずれている。また、基本的には側柱と考えているが、中央に１本通る柱があり、この柱も建物に関係する柱と考えている。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は0.5m～1.0m、柱痕の深さは、0.2m～0.5mを測る。

遺　物（図版44・写真図版41）

Ｐ１から須恵器小壺（33）、Ｐ２から須恵器高杯の脚部（34）が出土している。

33は口径7.2㎝、器高5.4㎝。形態は、平底から体部が算盤玉状で短い口縁部がつく。内外面上半部回転ナデ、外面下半部ナナメヘラケズリ、底部ヘラキリののちヘラ状工具によるナデを施す。

34は脚部の破片である。底径8.8㎝を測る。

#### ＳＢ５

遺　構（図版25・写真図版30）

Ｃ地区の北西部、上段テラスの東側にあたり、ＳＢ４の東側、ＳＢ６の西側にＳＤ14に沿って位置する。

N40°Wに棟軸方向をとる桁行３間、梁行２間の建物である。規模は桁行方向５m、梁行方向3.6mで、柱穴間の心々の平均値は桁行方向1.6m、梁行方向1.8m、面積は18.1㎡を測る。

柱穴の掘り方は円形であり、ＳＤ14の肩部に北側の桁柱が並ぶ。その柱の直径は0.35m～1.0m、柱痕の深さは0.2m～0.6mとやや大きめである。

遺　物（図版44・写真図版41）

Ｐ１から須恵器甕（36・37）、Ｐ２から須恵器蓋（35）が出土している。

35は口径8.8㎝、内面にカエリがつく形態でツマミの有無は不明である。

36は口径22.0㎝、頸部からくの字状に開く形態で、口縁端部はつまみあげ、上部に面をもつ。内外面回転ナデを施す。37は口径37.9㎝、頸部はくの字状の形態である。口縁部は直線文３条の間に波状文を施し、口縁端部は上下に拡張し丸みを持って仕上げ、その部分に刺突文を施す。体部外面は格子タタキ、内面は同心円タタキを施す。

## ＳＢ６

遺　構（図版26・写真図版30・31）

Ｃ地区の北西部、上段テラスの東側端にあたり、ＳＢ５の東側、ＳＤ14に沿って位置する。

N27°Wに棟軸方向をとる桁行４間、梁行２間の建物である。規模は桁行方向7.9m、梁行方向4.7mで、柱穴間の心々の平均値は桁行方向2.0m～2.2m、梁行方向2.3m～2.4m、面積は37.8㎡を測る。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は0.3m～1.1m、柱痕の深さは0.4m～0.8mと柱の掘り方は大きいが、柱痕は小さく深い。

遺　物（図版44）

Ｐ１で土師器甕（38）が出土している。

38は口径19.8㎝、頸部はくの字状に広がり、口縁端部は面を持つ形態である。頸部は少し肥厚する。粘土紐接合痕が顕著で、外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメを施す。

## ＳＢ10

遺　構（図版23）

Ｃ地区の北西部、上段テラスの西側端、ＳＢ４の西側にあたり、SD14に沿って位置する。旧和田神社跡地にあたる。

N56°Wに棟軸方向をとる桁行３間、梁行２間の建物である。規模は桁行方向5.1m～5.7m、梁行方向3.5m、柱穴間の心々の平均値は桁行方向1.7m、梁行方向1.8m、南東側は両側の柱穴しか検出できなかった。面積は18.9㎡を測る。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は0.4m～0.8m、柱痕の深さは0.2m～0.62mを測る。

遺　物

出土していない。

## ＳＤ14

遺　構（図版28・写真図版30・31）

Ｃ地区の北部、斜面をきって上段テラスを築造するために作られた溝である。ＳＢ４・10・５・

６北側の雨落ち溝も兼ねている。長さ50.5m、幅1.3m～2.3m、深さ0.4～1.3m、断面形はＬ字形を呈する。

遺　物（図版44・写真図版41・45）

土師器甕（39）・竈（40）・鍋（41）、須恵器杯Ｇ（42・43）・杯Ｂ（44～47）・杯Ｂ蓋（48）が出土している。

39は口径19cm、口縁部はくの字状に広がる形態で、頸部は少し肥厚する。40の竈は、前部の鍔が残存しているが細片である。鍔の長さは5.4cmを測る。

41の鍋は口径31.1cm、口縁部朝顔形に広がる形態である。体部内面はヘラケズリ、外面はハケメ、口縁端部内外面ヨコナデを施す。

42・43は口径10.4cm～10.8cm、平底から体部が屈曲し口縁端部が外反するもの（42）と、平底から直線的に開くもの（43）がある。

44～47は口径13.2cm～16.0cm、底径9.1cm～10.6cm、底部は貼り付け高台で、44・47は体部が直線的に広がる形態である。底部ヘラキリ後ナデを施す。48は口径14.4cm、器高2.6cm、内面にカエリがある形態で、天井部に扁平なツマミがつく形態である。

## ＳＫ63

遺　構（図版29・写真図版33）

Ｃ地区の北西部、上段テラスの西側端に位置する竪穴住居跡状の土坑である。一部調査区外に伸びている。Ｎ12°Ｅに主軸方向をとり、長軸3.7m、短軸2.6mを測る。方形の落ちの中に土坑状の落ち込みと柱穴を３基、周壁溝を検出した。周溝の幅0.5m、深さ0.4mを測る。今回の報告では、土坑としたが、建物跡の可能性もある。

遺　物（図版45・写真図版41・45～47）

土師器甕（53）・甑の把手（54）、須恵器杯Ｇ（55～60）・杯Ａ（61）・台付き鉢（62）・耳皿（63）、鉄器鍬先（64）が出土した。

53は口径19.2cm、頸部がくの字状に屈曲する形態であるが、全体に摩耗が激しい。体部外面は、横方向のハケメ、内面はイタナデ、口縁部内外面は、ヨコナデを施す。54は甑の把手と考えられる。把手部分は中空で、芯に粘土を巻き付け、後で芯をはずした作りである。

55～60は口径10.1cm～11.1cm、器高2.9cm～4.1cm、底部から直線的に伸びるもの（55）、体部がやや丸みをもって内弯するもの（56・60）、体部が内弯し端部が外反するもの（57～59）がある。いずれも回転ヘラ切り未調整である。

61は口径13cm、平底から直線的に開く形態である。62の台付鉢は口径18cm、鉢部のみ残存している。体部はやや丸みをもって、内弯する形態で、体部に沈線を１条施す。胎土は非常に良好で、作りも丁寧である。63は耳皿の破片だが細片で形態は不明である。64は高杯脚部のみ残存している。底径9.5cm。

65は鍬先の破片である。残存長7.5cmを測る。

## ＳＫ65

遺　構（図版29）

Ｃ地区の北西部、上段テラスの中央側、ＳＢ４のすぐ南側に位置する。長軸2.2m、短軸1.8m、深さ0.2m、形態は楕円形を呈する。

遺　物（図版45）

杯Ｈ（66）が出土した。口径9.0cm、器高3.2cm。ここでは、杯身と報告しているが杯Ｇ蓋の可能性もある。

## ＳＫ66

遺　構（図版29）

Ｃ地区の北西部、上段テラスの中央側、ＳＢ４のすぐ南側に位置する。N41°Wを主軸に、長軸2.0m、短軸1.0m、深さ0.3m、形態は楕円形を呈する。

遺　物（図版45）

土師器甕（67）が出土した。口径11.6cm、頸部がくの字状に屈曲し、口縁端部は平坦面をもつ形態である。体部外面は斜め方向のハケメ、内面は横方向のイタナデを施す。口縁部は内外面ともヨコナデで、内面はハケメののちヨコナデを施す。

## ＳＸ18

遺　構（図版27・写真図版32）

Ｃ地区の北西部、ＳＢ５・６のすぐ南側に位置する。N45°Wに棟軸方向をとる、長軸方向2.5m、短軸方向1.4mの石組遺構である。この石組は、１段組でＬ字状を呈し、石の表面が赤色化し、黒いスス状のものが付着しているため、石組みの内側は熱を受けたと考えている。

内面および周辺部から鉄滓やフイゴの羽口片が出土しているため、これを鍛冶関係の炉跡の一部と考えると、もとは、「コ」の字形もしくは「ロ」の字形で２段以上の石組であった可能性もある。

遺　物（図版44・写真図版41・46・47）

須恵器長頸壺（49）・瑞（50）、鞴の羽口(51)、砥石（52）が出土した。

49は口径6.2cm、器高16.5cm、平底から肩の張る胴部をもち、頸部が口縁部にかけてやや開く形態である。頸部には凹線文が２条、肩部に１条入る。底部にヘラ記号がある。50の瑞は体部が丸みをもち、口縁部朝顔形に広がる。体部に凹線状の段を持つ。

51は復元径5.8cm、厚さ1.45cmのフイゴ羽口の断片である。外面全体に滓が付着している。52は砥石である。石材は砂岩、長軸15.2cm、短軸10.2cmを測る。

## 包含層出土遺物（図版45・写真図版41・47）

須恵器杯Ｇ（68）・杯Ａ（69）・壺蓋（70）・杯蓋（71）・甕（72～74）・横瓶（75）・瑞（76・77）・平瓶（78・79）、鉄鎌（80）が出土した。

68は口径10.8cm、器高3.8cm、体部は内弯し、口縁端部は外反する形態である。69は平底から直線的に開く形態である。

70は口径16cm、口縁端部が外反する形態である。71は口径18cm、器高3.3cm、天井部には、扁平なツマミが付く。

72は口径20.3cm、口縁端部直下に突帯を１条まわし、口縁端部断面形は方形を呈する。73は口径

22㎝、口縁部肥厚し、端部はつまみ上げる。74は口径41.4㎝、頸部はくの字状に広がる形態である。口縁部は波状文と直線文を交互２段に施し、口縁端部上下に拡張し丸みを持って仕上げる。体部内面は同心円タタキ、外面は平行タタキを施す。

75は口径12.5㎝、体部丸みをもち、頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部は面を持つ。

76は口径10.2㎝、器高12.8㎝、体部は一条の沈線をもち、口縁部は段をもつ。77は口径8.2㎝、器高12.1㎝、体部は肩がはり、肩部に１条の沈線を施す。頸部から朝顔形に広がる形態である。

78は体部最大径16.2㎝、体部はカキメの後ナデ消し、底部は不定方向のヘラケズリを施す。

79は体部最大径17.2㎝、底部ヘラケズリを施す。

80は残存長7.4㎝、幅3.3㎝を測る。

## （2）中段テラス

上段テラスでは、掘立柱建物４棟、集石遺構１基、溝３基を検出した。

斜面山側でＳＤ13を掘削し、斜面下側に盛り土を行い、平坦面を作り出している。平坦面は長さ28m、幅７ｍである。このテラス面では３棟の掘立柱建物跡が１列に並んだ状態で検出し、すこし下がった西側でＳＢ８を検出した。

### ＳＢ８

遺　構（図版33）

Ｃ地区の北西部、中段テラスから少し下がったライン東側に位置する。N30°Wに棟軸方向をとる桁行１間以上、梁行１間以上の建物である。規模は桁行方向4.8m以上、梁行方向3.6m以上である。

柱穴間の心々の平均値は桁行方向4.8m、梁行方向3.5m、面積は8.4㎡を測る。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は0.3m～0.4m、柱痕の深さは、0.1m～0.3mと小さい。

遺　物

出土していない。

### ＳＢ11

遺　構（図版30・写真図版34）

Ｃ地区の西部、中段テラスの西側端にあたり、ＳＢ12の西側、ＳＤ15に沿って位置する。一部調査区外に伸びている。N59°Wに棟軸方向をとる桁行３間以上、梁行１間以上の建物である。北側の柱穴は残存していたが、南側に柱穴については流失のため残存せず、明らかではない。

規模は桁行方向6.3m、梁行方向3.8mで、柱穴間の心々の平均値は桁行方向1.9m、梁行方向3.8m、面積は23.4㎡を測る。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は0.5m～1.3m、柱痕の深さは、0.3m～0.6mを測る。

遺　物

出土していない。

### ＳＢ12

遺　構（図版31・写真図版34）

Ｃ地区の西部でＳＢ13の西側、ＳＢ11の東側、SD13に沿って位置する。N55°Wに棟軸方向をとる桁行３間、梁行３間以上の建物である。北側の柱穴は残存していたが、南側に柱穴については、流失で残存していなかったため、明らかではない。

規模は桁行方向6.7m、梁行方向3.5mで、柱穴間の心々の平均値は桁行方向２m、梁行方向1.2m、面積は23.5㎡を測る。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は0.3m～0.6m、柱痕の深さは0.2m～0.6mを測る。

その他付属遺構として、ＳＤ13とＳＢ12の間に柵列を検出した。長さ1.5mを測る。

遺　物（図版47）

Ｐ１から蓋（118）が出土した。口径7.8㎝、天井部は欠損している。

## ＳＢ13

遺　構（図版32・写真図版34）

Ｃ地区の北西部、ＳＢ12の東側、SD13に沿って位置する。

N44°Wに棟軸方向をとる桁行３間、梁行２間の建物である。規模は桁行方向6.2m～6.5m、梁行方向4.8mである。柱穴間の心々の平均値は桁行方向1.9m、梁行方向2.1mで、面積は30.5㎡を測る。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は0.5m～0.7m、柱痕の深さは、0.2m～0.4mを測る。

その他付属遺構として、ＳＢ13とＳＤ13間に雨落ち溝とＳＸ17を検出した。この雨落ち溝は長さ1.9m、幅0.2mを測る。

遺　物（図版47）

Ｐ１から須恵器杯Ｇ（119）が出土している。口径12.1㎝、底部が欠損している。

## ＳＤ13

遺　構（図版34・写真図版34）

Ｃ地区の中央部、斜面をカットして中段テラスを築造するために作られた溝である。ＳＢ12・13の雨落ち溝を兼ねている。長さ28.5m、幅1.4m～2.6m、深さ0.8m～1.1m、断面形はＬ字形を呈する。

遺　物（図版46・写真図版42・45・46）

土師器底部（81・82）・竈（83）、須恵器杯Ｇ（84～94・99～101）・杯Ａ（95～98）・底部（102・103）・杯Ｇ蓋（104～106）・高杯（107）・台付鉢（108～112）・甕（113）・短頸壺（114・115）・蹠（116）・把手（117）が出土している。

須恵器杯Ｇ（84～101）は口径8.6㎝～14.0㎝、器高2.9㎝～3.9㎝を測る。形態は、平底から体部がやや内弯し口縁端部が外反しないもの（84～87・89～92・99～101）と、口縁端部が外反するもの（88・93・94）がある。95～98は口径10.5㎝～14.0㎝、器高2.9㎝～3.8㎝。102・103は貼り付け高台の底部で、底径1.6㎝～2.4㎝を測る。104は口径10.2㎝、器高2.7㎝、天井部宝珠ツマミをもち、内面にカエリをもつ形態である。105は口径15㎝、内面にカエリをもつ。106は扁平なツマミのみ残存する。107は口径11.4㎝、器高6.6㎝、底径7.3㎝、杯部に顕著な粘土紐痕が残る。108は口径10.0㎝と小型で体部は丸みをもち、口縁部は内弯する。体部は３条の沈線を施す。109～111は口径15.6㎝～16.6㎝、杯部のみ残存し、109・110は体部に沈線を施す。112は口径19.4㎝、片口をもつ形態である。113は口径

19.6㎝、くの字状に屈曲し、口縁部は朝顔型に広がる形態である。114は口径23.8㎝、くの字状に屈曲し、口縁端部は平坦面をもつ形態である。115は口径7.8㎝、器高8.4㎝、体部算盤玉形を呈する。116は口縁部のみ残存し、口径9.4㎝を測る。117は把手である。残存長9.4㎝、端部はつまみ上げている。

**ＳＤ15**

遺　構

Ｃ地区の中央部西側、斜面をカットして中段テラスを築造するために作られた溝である。ＳＤ13の西側に位置し、段違いになっている。この溝はＳＢ11の雨落ち溝を兼ねている。長さ9.3m、幅1.7m、深さ0.3m、断面形はＬ字形を呈する。

遺　物（図版47）

須恵器杯Ｇ（120）・蓋（121）・皿（122）が出土している。

120は口径9.6㎝、器高3.2㎝、121は口径17.2㎝、器高3.9㎝、天井部に扁平なツマミをもつ。

122は口径24.0㎝、器高4.3㎝、平底から開く形態で、内外面は回転ナデ、底部ヘラケズリ、底部内面は不定方向の仕上げナデを施す。

**ＳＫ64**

遺　構（図版34・写真図版34）

土坑として報告するが、C地区の中央部、斜面をカットして中段テラスを築造するために作られた溝である。ＳＤ13の東側に位置し、段違いになっている。長さ7.7m、幅2.0m、深さ0.5m、断面形はＬ字形を呈する。

遺　物（図版47・写真図版42・47）

土師器甕（123）、須恵器杯Ｇ（124）・杯Ｇ蓋（125）・甕（126）・短頸壺（127）・高杯（128）・鉄器（129）が出土した。

123は口径39.8㎝、頸部はくの字状に屈曲する形態で、口縁部は外反する。外面ハケメを施す。

124は口径11.9㎝、器高3.2㎝、底部ヘラ切り未調整である。125は口径13.0㎝、器高3.3㎝で、内面にはかろうじてカエリがのこり、天井部は宝珠つまみがつく。126は口径22.0㎝、頸部はくの字状に屈曲し、端部は丸みをもつ。体部外面は平行タタキののちカキメ、内面は同心円タタキを施す。127は口径7.3㎝、体部は算盤玉形を呈する。128は台付鉢の脚部である。底径6.2㎝、脚部に沈線を１条施す。

129は不明鉄器である。

**ＳＸ19**

遺　構（図版34・写真図版33）

Ｃ地区の西部、中段テラスの西側、ＳＢ12の西端に位置する集石遺構である。規模は長軸1.4m、短軸1.2mを測る。集石の下には掘り込みは見られなかった。

遺　物

出土していない。

**堀立柱建物跡以外の柱穴**（図版47・写真図版34・42）

住居跡以外の柱穴から少量の土器が出土している。須恵器杯H（130）・杯A（131）・杯G（132）・杯蓋（133）である。

130は口径10.4㎝、器高4.1㎝、カエリがあり、底部ヘラ切り未調整である。131は杯Aで、口径10.0㎝、器高3.1㎝、底径6.6㎝、平底から直線的に開く形態である。132の杯Gは口径9.9㎝、器高3㎝、平底からやや内弯する。133は口径14.5㎝、器高2.3㎝、内面は、カエリはなく、天井部はツマミがつく。

**包含層出土遺物**（図版47・写真図版42）

須恵器高杯（134・135）・短頸壺（136）が出土した。

134は口径9.2㎝、器高7.3㎝、底径7.5㎝を測り、脚部に沈線を１条施す。136は口径5.0㎝、器高6.4㎝、小型の短頸壺である。

## （3）下段テラス

斜面山側でＳＤ17・18・20・21、ＳＫ69を掘削し、斜面下側に盛土を行い、平坦面を作り出す。

それぞれの平坦面は、段ちがいになっているが、いずれの平坦面も範囲が広くないため、一括して、下段テラスとして報告する。下段テラスでは、掘立柱建物３棟、土坑３基、溝５基を検出した。

### ＳＢ７

遺　構（図版36・37）

Ｃ地区の南西部、下段テラスの西側に位置する。N34°Wに棟軸方向をとる桁行１間、梁行３間の建物である。規模は桁行方向6.0m、梁行方向4.1mで、南側は道路により削平されている。

柱穴間の心々の平均値は桁行方向2.1m、面積は39.6㎡を測る。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は0.4m～0.9m、柱痕の深さは0.2m～0.7mを測る。

付属施設として、北側に排水施設ＳＤ20～22を有する。ＳＤ20は全長2.7m、幅1.0m、深さ0.2mを測り、ＳＤ７に垂直でSD21に続く。

ＳＤ21は全長7.2m、幅1.0m、深さ0.2m、平面形はL字形で、ＳＤ20から続き、直角に折れ曲がり、ＳＢ７に平行に立地する。ＳＤ22は残存長1.6m、幅0.3mを測る。

遺　物（図版47・写真図版46）

砥石（137）が出土している。石材は砂岩である。

### ＳＢ９

遺　構（図版38・写真図版36）

Ｃ地区の東部、下段テラスの東側端にSD23に沿って位置する。N36°Wに棟軸方向をとる桁行２間、梁行２間の建物である。規模は、桁行方向3.7m、梁行方向3.4mである。柱穴間の心々の平均値は桁行方向1.8m、梁行方向1.8mである。面積は12.6㎡である。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は、0.3m～0.9m、柱痕の深さは、0.1m～0.4mを測る。

遺　物（図版47・写真図版43）

Ｐ１から須恵器長頸壺（138）が出土した。口径8.8㎝、器高21.7㎝。算盤玉状の体部に長い口縁が

つき、口縁端部は開く。体部下半はヘラケズリののちタタキを施す。

## ＳＢ14

遺　構（図版35・写真図版36・37）

Ｃ地区の南部、SD17に沿って位置する。Ｎ39°Ｗに棟軸方向をとる桁行２間、梁行１間以上の建物である。規模は桁行方向4.9m～5.1m、梁行方向3.5mで、柱穴間の心々の平均値は桁行方向2.1m、梁行方向1.8m、面積は17.9㎡を測る。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は0.4m～0.6m、柱痕の深さは0.3m～0.7mを測る。柱穴の配列がやや不規則であった。

付属施設として北側に雨落ち溝を有する。

遺　物（図版47）

Ｐ１から杯Ｇ（139）が出土した。口径11.9㎝、器高3.15㎝を測る。平底から体部がやや内弯するが、口縁端部は外反する。底部ヘラキリののちナデ調整を行う。

## ＳＤ16

遺　構（図版35・36・写真図版37）

Ｃ地区の中央部、SD17の南側にＳＢ14を囲む形で、南北方向に伸びる溝である。長さ6.2m、幅0.35m、深さ0.1～0.3m、断面形はＵ字形を呈する。

遺　物（図版47）

土師器甕（140）が出土している。口径23.2㎝、頸部はくの字状に屈曲する形態で、口縁端部は平坦面をもつ。内外面ハケメを施す。

## ＳＤ17

遺　構（図版35・36・写真図版37）

Ｃ地区の中央部、斜面をカットして下段テラスを築造するために作られた溝である。長さ17m、幅1.0m、深さ0.2m、断面形はＵ字形を呈する。

遺　物（図版47）

須恵器杯Ｇ（141）が出土した。口径12.6㎝、器高2.6㎝。器高が低く、杯ではない可能性もある。

## ＳＤ18

遺　構（図版39・写真図版37）

Ｃ地区の南西部、下段テラスの西側に位置する。一部調査区外である。斜面をカットする溝である。長さ5.9m、幅2.4m、深さ0.4mを測る。断面形はＵ字形を呈する。

遺　物（図版47・写真図版43）

須恵器杯Ｇ（142）が出土している。口径9.3㎝、器高3.6㎝。平底から体部がやや内弯し口縁端部は外反する形態である。底部ヘラキリ未調整である。

## ＳＤ23

遺　構（図版38）

Ｃ地区の南部、斜面をカットしてＳＢ９の北西側に立地する溝である。長さ3.7m、幅0.8m、深さ0.2m、断面形はＵ字形を呈する。

遺　物（図版47）

143は、土師器把手である。

## ＳＫ68

遺　構（図版39・写真図版37）

Ｃ地区の南西部、下段テラスの西側に位置する。一部調査区外に伸びている。長軸3.7m、短軸2.6m、深さ0.6mを測る。

遺　物（図版48・写真図版43・45）

土師器甕（144）・甑（145）・竈（146）、須恵器杯Ｈ（147）・杯Ｇ（148～154）・甕（155）・高杯（156・157）・台付鉢（158）・壺（159）・鉢（160）が出土した。

144は口径25.6㎝、頸部はくの字状に屈曲する形態で、口縁端部は平坦面をもつ。内外面ハケメを施す。145は甑の把手部分で、芯に粘土を巻き付け、後で芯をはずした中空な作りをしている。146は竈の焚き口の破片である。

147は口径11.4㎝、器高は4.0㎝。148～154は口径9.0㎝～10.8㎝、器高3.2㎝～3.8㎝、形態は、平底から体部が屈曲し真っ直ぐ立ち上がるもの（148～150）と内弯し口縁端部が外反するもの(151～154)がある。いずれも底部ヘラキリ未調整である。155の甕は口径22.0㎝、体部からくの字状に屈曲し、口縁端部は外面に肥厚する。156は口径８㎝で、高杯と考えているが、歪みが激しい。157は杯部が欠損し、底径5.3㎝を測る。158は鉢部外面下方ヘラケズリ、脚部内外面は回転ナデを施す。159は丸みを持った胴部で、肩部に２本の沈線とその間にきざみ目を施す。160は体部外面はカキメ、それ以外は回転ナデである。

## ＳＫ69

遺　構（図版39）

Ｃ地区の南西部、下段テラスの西側に位置する。斜面をカットしてテラスを築造するために作られた溝である。長さ6.4m、幅2.7m、深さ0.6m、断面形はＬ字形を呈する

遺　物（図版48）

須恵器杯Ｇ（161・162）・皿（163）が出土した。161・162は口径10.2㎝～10.6㎝、器高3.4㎝～3.5㎝。底部ヘラキリ未調整である。163は貼り付け高台をもつ皿である。

## ＳＫ70

遺　構（図版40）

Ｃ地区の南部、下段テラスの西側に位置する。竪穴住居跡状に内側に段をつくり、その中に建物が存在する。N38°Wに棟軸方向をとる桁行３間以上、梁行１間以上の建物である。規模は、桁行方向5.7m以上、梁行方向1.8m以上で、柱穴間の心々の平均値は 桁行方向1.4m、梁行方向2.6m以上、面積は10.3㎡を測る。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は、0.4～0.9m、柱痕の深さは、0.6mを測る。

遺　物（図版48・写真図版43）

須恵器杯H（164）・杯G（165～166）・高杯（167～169）・甕（170）が出土した。

164は口径9.9cm、器高3.3cm、カエリがつく形態で、底部は回転ヘラキリののちナデを施す。杯G蓋の可能性もある。165は口径9.2cm、器高3.6cm、166は口径12.2cm、器高3.6cm。167・168は口径11.4cm、器高6.8cm、底径7.6cm～8.0cm、169は底径7.9cm、脚部に２条の沈線を施す。170は口径20cm、頸部がくの字状に屈曲し、口縁端部玉縁状で内面に強いナデを施す。

ＳＫ72

遺　構（図版21）

Ｃ地区の南東部、下段テラスの東側に位置する。斜面をカットしてテラスを築造するために作られた溝である。長さ16.0m、最大幅2.6m、深さ0.25m、断面形はＬ字形を呈する。

遺　物（図版40・写真図版43）

甕（171）・瑞（172）が出土した。171は口径22cm、頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部は上方にツマミ上げる。172は体部が丸みをもつ形態で、肩部は１条の沈線、頸部は２条の沈線、体部下方はヘラケズリを施す。

**包含層出土遺物**（図版49・写真図版43・45・47）

土師器瑞（173）・蛸壺（174）、須恵器杯G（175～179）・高杯（180）・甕（181）・鉄製鉤（182）が出土した。

173は体部最大径7.0cm、ミニチュアの瑞で、内部に穿孔した土器片が残っている。体部外面下半ヘラケズリ、上半はヨコナデを施す。174の蛸壺は上の持ち手の部分のみ残存している。残存幅4.7cmを測る。

175～179は口径9.6cm～12.6cm、器高2.8cm～4.0cm、平底から体部が屈曲し真っ直ぐ立ち上がるもの(175・178)、平底から体部がやや内弯するもの（176・179）と、平底から体部がやや内弯し、口縁端部が外反するもの（177）がある。いずれもヘラキリ未調整である。180は口径10.6cm、器高6.8cm、杯部は丸みをもち、短い脚部をもつ形態である。181は口径43.4cm、須恵器大甕の口縁部である。くびれた頸部からくの字状に広がる形態で、口縁部は波状文と直線文を交互３段に施し、口縁端部は平坦面をもつ。

182は解錠部28.0cm、軸部10.0cm、柄部8.0cm、幅1.2cmを測る。柄部には木質は残存せず、また、他の例から、解錠部先端はフック状になることが多いため、欠損している可能性がある。

## ３．Ｂ地区の遺構と遺物

Ｂ地区では、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物３棟と、その雨落ち溝・柱穴等を検出した。Ａ・Ｃ地区に比べて傾斜が緩やかになっており、Ｃ地区のように斜面を削り込んでいない。

ＳＢ１

遺　構（図版41・写真図版38～40）

Ｂ地区の北西部、SD８に沿って位置する。N35°Wに棟軸方向をとる桁行２間、梁行１間以上の建物である。規模は桁行方向3.6m、梁行方向1.7mで、柱穴間の心々の平均値は 桁行方向1.9m、梁行方向2.0mである。面積は6.1㎡である。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は0.4m～0.8m、柱痕の深さは0.2m～0.5mを測る。南東隅の柱穴内には礎石が遺存し、また南中央部の柱穴には、礎石裏込め石と考えられる丸石が遺存していた。礎石は整った形のものはないが、長方形を呈し、表面は赤化しているため、熱を受たと考えられる。

遺　物（図版49・写真図版44）

杯Ｈ（183）・杯蓋（184）が出土した。

183は口径12.7㎝、底部欠損している。184は口径16.1㎝、天井部に扁平のツマミの付く形態である。

## ＳＢ２

遺　構（図版42）

Ｂ地区の南東部、SD12の東側に位置する。N48°Wに棟軸方向をとる桁行３間、梁行２間の建物である。規模は桁行方向5.3m、梁行方向3.8mで、柱穴間の心々の平均値は 桁行方向2.0m、梁行方向1.6m、面積は20.1㎡を測る。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は0.4m～0.8m、柱痕の深さは0.1m～0.4 mを測る。

遺　物

出土していない。

## ＳＢ３

遺　構（図版43）

Ｂ地区の南東部、SD11の東側に位置する。N53°Wに棟軸方向をとる桁行３間、梁行２間の建物である。規模は桁行方向4.8m、梁行方向3.8mである。柱穴間の心々の平均値は、桁行方向1.6m、梁行方向1.8mである。面積は18.4㎡である。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は0.5m～0.6m、柱痕の深さは0.3m～0.6mを測る。

遺　物

図化していないが須恵器杯、甕が出土している。

## ＳＤ８

遺　構（図版41・写真図版39・40）

Ｂ地区の北西部、ＳＤ９に平行し、ＳＢ１の内に位置する。一部調査区外に伸びる。緩やかな斜面をカットする溝である。長さ6.0m、幅2.8m、深さ0.3m、断面形はＵ字形を呈する。

遺　物（図版49・写真図版44）

須恵器杯Ｇ（185）と瑞（186）が出土した。

185は口径11.8㎝、器高3.1㎝、口縁端部外反する。186は体部のみ残存している。肩部に沈線があり、体部下半にケズリを施す。

## ＳＤ９

遺　構（図版41・写真図版40）

Ｂ地区の北西部、ＳＢ１内でＳＤ８と平行に位置する。一部調査区外に伸びる。緩やかな斜面をカットする溝である。長さ4.5m、幅0.3m、深さ0.5m、断面形はＵ字形を呈する。

遺　物

出土していない。

## ＳＤ10

遺　構（図版41・写真図版40）

Ｂ地区の北西部、ＳＢ１の東側に位置する。ＳＤ９の続きの可能性がある。緩やかな斜面をカットする溝である。長さ2.9m、幅0.6m、深さ0.5m、断面形Ｕ字形を呈する。

遺　物

出土していない。

## ＳＤ11

遺　構（図版43）

Ｂ地区の北西部、ＳＢ３の北西側に位置するＳＢ３の雨落ち溝である。長さ4.0m、幅0.4m、深さ0.2m、断面形はＵ字形を呈する。

遺　物

図化していないが須恵器蓋が出土している。

## ＳＤ12

遺　構（図版42）

Ｂ地区の北西部、ＳＢ２の北西側に位置するＳＢ２の雨落ち溝である。長さ5.9m、幅0.8m、深さ0.2m、断面形はＵ字形を呈する。

遺　物（図版49）

須恵器杯Ｇ蓋（187）は口径10.7㎝、カエリの付く形態である。ツマミの有無は不明である。

## ＳＸ14

遺　構（図版49・写真図版40）

調査区南端で、黄色粘土が集積していた。調査区を一部拡張して性格・広がり等の調査を行ったが、明確ではなかった。

遺　物（図版49・写真図版44・45）

土師器甕（188）・須恵器杯Ｈ（189）・杯Ｇ（190）が出土した。188は口径17.5㎝、直線的な体部から頸部がくの字状に屈曲し、口縁端部は平坦面をもつ形態である。体部外面ハケメ、内面イタナデ、口縁部外面ヨコナデ、内面ハケメを施す。189は口径12.2㎝、器高4.4㎝、体部は丸みを持つ。底部にヘラ記号がある。190は口径12㎝、器高4.1㎝、体部は丸みを持つ。

**包含層出土遺物**（図版49・写真図版45）

器種不明土師器（191）・杯G（192）・須恵器盌（193・194）・短頸壺（195）・皿（196）が出土した。191は竈か、甑の一部と推定できる。口径13.5㎝、体部に鍔をもつ形態である。192は口径11.5㎝、器高4.1㎝、平底から体部が屈曲し、真っ直ぐ立ち上がる。194は口径10.2㎝、器高5.7㎝を測る。195は口径13.9㎝、体部から屈曲し、頸部はほぼ真っ直ぐに立ち、口縁端部は面をもつ。口縁部に沈線が入る。196は皿である。口径23.5㎝、器高5.3㎝、平底から直線的に立つ形態である。

**中世の遺物**（図版49・写真図版44）

和田神社の前の包含層から小皿（197～204）が出土した。土師質（197～201）と須恵質（202～204）がある。口径は7.6㎝～8.0㎝、器高1.6～2.0㎝、平底からツマミ上げる形態で、底に粘土小塊をつけ、器形の歪みを安定させているものがある。内外面回転ナデ、底部糸切りである。

# 第４章　　ま　と　め

## 第１節　土器棺について

今回、和田神社遺跡で検出した墓群の特徴は、以下の５点に示すことができる。すなわち、①土器棺だけで構成された墓群であり、周辺には木棺墓や土壙墓は混在しない土器棺群単独で墓地形成をしている。また、住居跡などは全く検出されなかったため、少なくとも居住域からは離れて存在する墓群となっている。②これらの土器棺墓群は、丘陵斜面にいくつかの小さなまとまりを持ちながらやや広範囲に分布し、ひとつの墓群を形成している。③ＳＸ９～13は長方形の墳丘墓内に存在し、かつ規則的に並んでいる。④棺身に使用された土器はすべて壷形土器で、棺用に製作されたと考えられるものに限られるようである。⑤壺棺内に礫を詰めたものが１～２例認められる。

和田神社遺跡の土器棺墓群の時期については、類例が非常に少ないため個々の比較は不可能に近い。

しかし、壺底部が平底でありながら体部の大きさに比して小さいこと、タタキ成形で内面ハケ調整であることなどから、庄内併行期前後と捉えておきたい。ただし少し時間幅がありそうである。

本遺跡で土器棺に使用されていた壺については、同時期の集落から通常出土する壺よりもかなり大きく、形も異なるものが殆どである。概して、弥生時代後期以降の日常使用される土器はそれ以前に比べて縮小化する。土器棺として使用されたのは、日常ではあまり多く使用されない大型土器を転用したあるいは土器棺用として製作した土器を使用したといった二通りの考え方が可能と思われる。ここでは、後述するように、子供に対する位置付けに変化があったこの時期には、棺用として製作され、使用されていた可能性が高いと判断しておきたい。

また、ＳＸ10の棺身に使用されていた土器（23）は河内または讃岐系の胎土を有する。いずれかを決める際に、後述するように、土器棺が盛行するのは瀬戸内沿岸を中心とした地域であること、当該時期の他の土器棺例で、讃岐系のものが比較的多く認められることおよび、23の胎土に含まれる金雲母・角閃石の粒が小さいことにより、讃岐系である可能性が高いと判断できるものと思われる。

次に、本遺跡土器棺群の特徴に関連して、他遺跡例との比較によって、理解を深めてゆくことにする。

### １．礫を詰めた土器棺について

この類例は島根県奥才古墳群中に存在する。奥才34号墳[(1)]（第２図１）は丘陵尾根上に築造された、11ｍ×8.0ｍの方形段状を呈する墳丘で、その中央部に上部を欠いた土師器壺が埋納されており、別個体の壺下半部で蓋をしていた。土器内部には肩部まで直径5.0cm前後の円礫を詰めており、その上に石釧を置き、その中に勾玉を収め、捩文鏡で蓋をしている。またその対面に勾玉を置いている。報告者はこの遺構を土器棺と判断するには躊躇しているが、礫の上面に赤色顔料が認められたこと、土器の胴部下半に焼成後の穿孔があることは壺棺の可能性を示しており、奥才古墳群の木棺・石棺墓には礫床が多く認められることから、土器棺においても礫をいれた可能性が高いものと判断しておきたい。いずれにしても、和田神社遺跡のＳＸ７・４と同様に土器内に礫を詰めた類例としては、管見では唯一である。

### ２．土器棺単一墓群について

本遺跡の土器棺墓群が検出された箇所やその周辺では、それ以外の当該時期の遺構は全く検出されず、今回調査した範囲内でも土器棺と同時期の遺構は全く認められなかった。ただし、南西側斜面下方に木棺墓や住居跡などの別の遺構が存在する可能性は否定できない。しかし、上述の理由により、木棺墓・

土壙墓といった他の種類の墓と混在しないものと捉えている。このように他の種類の墓と混在しない土器棺墓群のあり方は、九州の甕棺墓地帯をのぞく西日本では、弥生時代前期から中期の墓地において通常認められない。四国地方の土器棺を集成した角南聡一郎氏[2]によれば、土器棺のみで墓群が構成されるようになるのは弥生時代後期中頃以降である。

### a．無区画の土器棺墓群

土器棺墓群のみで墓が形成されている例については、その立地から低地と丘陵に分けることができる。

低地に存在するものは、四国で多く検出され、愛媛県福音寺小学校構内遺跡[3]では壺棺５基がある。同じく愛媛県の斎院・宮前川遺跡[4]では10基の壺棺が認められ、香川県鹿伏・中所遺跡[5]には土器棺18基が存在し、香川県彼ノ宗遺跡[6]は壺棺14基である。高知県ひびのきサウジ遺跡[7]では壺棺９基が検出されている。低地の例は弥生時代後期中頃から古墳時代前期初頭の時期である。

一方、丘陵上の例は、徳島県安楽寺谷墳墓群[8]があり、土器棺が８基検出されている。香川県大井遺跡[9]では壺棺10基が存在し、兵庫県羽山遺跡[10]は詳細が不明であるが、土器棺群らしい。丘陵上の土器棺群は弥生時代後期末～古墳時代前期に属し、和田神社遺跡もその範疇におさまる。

低地が先に行われたようであり、どちらも古墳時代中期には終息している。

### b．土器棺のみの区画墓

本遺跡墳丘墓のように区画された墓域内に土器棺のみが存在している例は、管見で５例存在する。

愛媛県若草町遺跡[11]（第２図２）では、円形周溝内に壺棺11基が群集し、他の種類の墓は存在していない。鳥取県青木11号墳[12]（ＦＳＸ02）（第２図３）では円墳中央部に土器棺が１基存在する。兵庫県半坂峠南尾根支群１号墳[13]（第２図４）では墳頂部平坦面に４基の壺棺が埋置されており、そのうちの１号棺は中心主体と判断でき、棺の周囲に礫を配している。兵庫県南山２号墳[14]（第２図５）は円墳に壺棺３基のみを埋葬施設としており、４号土器棺は中心主体と考えられている。西方からの影響を受けた土器が多く認められる。兵庫県深江北町遺跡[15]（第２図６）の円丘墓群のうち４号墓が土器棺を単独中心主体とするものである。棺身に使用されていたのは讃岐系の壺である。

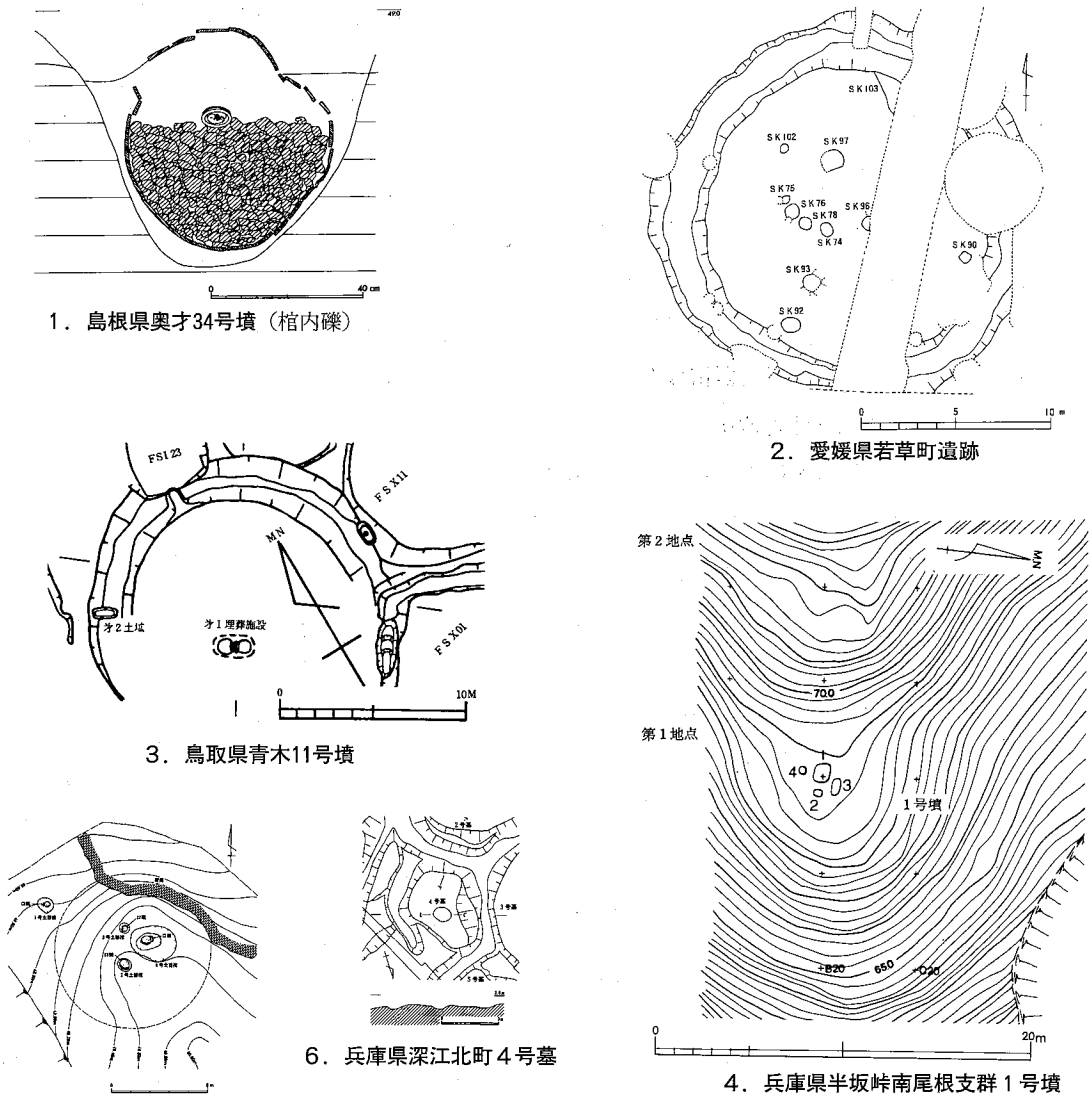
以上に述べた以外にも詳細は不明であるが、兵庫県内にいくつか例が存在する。姫路市山戸４号墓[16]では前方後円形墳墓の後円部に存在する２基の石室内に壺棺を埋置していたようである。御津町岩見北山２号墓[17]にも円形の竪穴式石室があり、壺棺と考えられている。他に揖保川町金剛山７号墓[18]、龍野市舎利田遺跡[19]、三木市吉田遺跡[20]、小野市来住遺跡[21]、太子町壇特山遺跡[22]、姫路市蓑尾山遺跡[23]でも墳丘内の中心主体が壺棺と考えられている。一方、揖保川町養久山５号墓[24]は中央の主体部が石室を組んだ壺棺で、その両側には配石墓が各１基存在する。兵庫県以外では、徳島県気延山積石塚[25]が墳丘中央部と北東裾部に石室があり、いずれも壺を埋置していたようである。島根県矢田遺跡[26]でも丘陵上の墳丘中央部から壺棺が出土したようである。島根県奥才34・67号墳[27]は方墳の中央に土器棺を単一主体としている。

これまで述べてきた例のうち、墳丘内中央に単一の土器棺を埋設しているものと複数を配置するもの、複数のうち、中心埋葬が認められるものとそうでないものに分けることができる。単一の例では、時期的には、弥生時代後期末～古墳時代前期に限られる。一方、墳丘内に複数配置するが、中心主体が認められるものは、時期的には弥生時代後期末～古墳時代中期初頭と前例に比べてやや年代の下限が下る傾向にある。最後に、中心主体が認定できないものは後期後半から古墳時代前期初頭とやや幅が狭いが、若草町遺跡例が弥生時代後期後半という最も古い年代に位置付けることができる。しかし、本遺跡例のように規則的に並んでいる例は皆無のようである。

さて、これまで述べてきた例の中に、石室および配石を構築する例があることが注意される。前述の４例のほかに、兵庫県横山７号墳裾の壺棺[28]、徳島県萩原１号墳のくびれ部に存在する１号壺棺墓[29]、同じく徳島県桧高麗谷古墳群２号土器棺墓[30]、香川県円養寺遺跡Ｂ地区の土器棺墓[31]も石室ないし配石と考えてよいと思われる。なお、半坂峠南尾根支群１号墳もその範疇に含めてよかろう。土器棺の周囲に配石を施したり、石室を組む例は香川県・徳島県・兵庫県の南西部に認められ、瀬戸内沿岸に集中[32]している。円丘墓という、特定個人墓をいち早く採用した地域[33]での特徴として注意される。なお、朝鮮半島との共通性で捉え[34]られている、兵庫県八鹿町源氏山１号墳第７主体[34]と同町小山３号墳第４主体[35]の２例は、長方形の石棺内に収められている点で他と異なるが、類似例とすべきであろう。

## ３．まとめ

これまで述べてきたように、弥生時代後期中頃以降、土器棺のあり方に大きな変化が生じている。つまり、土器棺のみで墓群を形成するものが出現し、やや降って、土器棺のみの墳丘墓が出現、墳墓の中心主体に土器棺が存在するようになり、石室や配石によって周囲を囲い厚葬するものも認められる。




第２図　墳丘をもつ土器棺

甕棺墓地域以外での土器棺墓は、子供を葬った墓であることは既に明らか[36]となっており、弥生時代において土器棺はすべて従属的位置にあった。ところが、後期末以降、土器棺に葬られる子供の扱いが以前とは大きく異なり、墳丘墓内で主体的位置を占めるものが現れる。このことは、墳丘墓や古墳に葬られる子供の位置付けの変化、それを認める社会の出現を意味するのであろう。すなわち、たとえ子供であっても厚葬が認められる社会、例えば世襲等といった血統が確立し、次世代としての位置付けの確立といった重要な役割が与えられる社会へ変化していっていることの現れと捉えることができるであろう。弥生時代中期以前においても血縁的流れは重視されたが、子供の位置付けは大人に従属するものであった。しかし、この時期以降、子供もその社会の重要な担い手として位置付けられ、また、選ばれた子供の出現の証明であると解釈することもできる。

ただし、古墳時代中期以降には土器棺を主体とした古墳が認められなくなることにより、子供に対する位置付けに変化があったものと推定できる。また、主体的な土器棺の分布域も限られることにより、この社会変化は限られた地域、限られた時間幅であり、普遍的に起こったものではないようである。

**参考文献・註**


(1) 三宅博士・広江耕史・赤沢秀則ほか『奥才古墳群』 島根県鹿島町教育委員会 1985年
(2) 角南聡一郎「四国地方の土器棺－資料集成と研究史を中心とした基礎的研究－」『香川考古』第８号 香川考古刊行会 2001年
(3) 梅木謙一ほか『福音寺小学校構内遺跡』弥生時代編 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1995年
(4) 作田一耕編『斎院・古照』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター 1998年
(5) 西村尋文ほか『高校新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター 1996年
(6) 笹川龍一『彼ノ宗遺跡』 善通寺市教育委員会 1985年
(7) 高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』 土佐山田町教育委員会 1990年
(8) 辻 佳伸「安楽寺谷墳墓群」『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書』13 （財）徳島県埋蔵文化財センター 1995年
(9) 六車恵一「讃岐における合口土器」『文化財協会報』特別号５ 香川県文化財保護協会 1961年、六車恵一「讃岐における合口土器と前期古墳」『考古学研究』第14巻第１号 考古学研究会 1967年
(10) 神戸新聞社会部編『祖先のあしあと』Ⅱ のじぎく文庫 1959年
(11) 相原浩二・栗田茂敏「若草町遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』Ⅲ 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991年
(12) 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅰ Ｆ・J地区 1976年
(13) 渡辺 昇・西口圭介ほか『半坂峠古墳群・辻遺跡』 兵庫県文化財調査報告第18冊 兵庫県教育委員会 1983年
(14) 岸本道昭ほか『南山古墳群・南山高屋遺跡』 龍野市文化財調査報告17 龍野市教育委員会 1997年
(15) 山田清朝ほか『深江北町遺跡』 兵庫県文化財調査報告第54冊 兵庫県教育委員会 1988年
(16) 安田博幸・山本三郎「山戸４号墓」『定型化する古墳以前の墓制』 第24回埋蔵文化財研究集会資料 埋蔵文化財研究会 1988年
(17) 『御津町岩見地区遺跡分布調査報告』 御津町教育委員会・岩見地区遺跡分布調査団 1975年、中溝康則「町内古墳分布調査のまとめと考察」『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』 御津町教育委員会 1997年
(18) 『金剛山６・７号墳現地説明会資料』 揖保川町教育委員会 1986年、甲斐昭光「金剛山６号墳」『定型化する古墳以前の墓制』 第24回埋蔵文化財研究集会資料 埋蔵文化財研究会 1988年
(19) 是川 長「考古学上からみた三木地方の古代」『三木市史』 三木市 1970年
(20) 是川 長「付載１吉田遺跡」『三木市史』 三木市 1970年
(21) 神戸新聞社会部編『祖先のあしあと』Ⅱ のじぎく文庫 1959年
(22) (故)松下 勝氏の御教示による。
(23) 松本正信・加藤史郎『土に埋もれた文化財－姫路の先土器時代～古墳時代－』 1974年
(24) 松本正信「養久山５号墳丘墓」『養久山墳墓群』 揖保川町教育委員会 1985年
(25) 笠井新也「阿波に於ける石塚及び方状石籬」『考古学雑誌』第14巻第２号 考古学会 1923年
(26) 倉光清六「出雲能義郡能義村大字矢田発見甕棺調査報告」『歴史と地理』第15巻第１号 1925年、東森市良「出雲地方における古墳時代前期墓制について」『山陰地域における日朝交流の歴史的展開』 島根史学会研究報告第１輯 内藤正中編 1994年
(27) 『奥才古墳群第８支群』 鹿島町教育委員会 2002年
(28) 村上紘揚「横山古墳群」『兵庫県史』考古資料編 兵庫県 1992年
(29) 菅原康夫編『萩原墳墓群』 徳島県教育委員会 1983年
(30) 原 芳伸「桧高麗谷古墳群」『阿讃山脈東南縁の古墳群－四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査概報－』 (財)徳島県埋蔵文化財センター 2001年
(31) 円養寺遺跡発掘調査団『高松市円養寺遺跡調査概報』 1971年、松本豊胤「円養寺Ａ・Ｃ・Ｄ墳丘墓」『香川の前期古墳』 日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会 1983年
(32) 岸本一宏「播磨の豪族たちの墳墓－弥生時代から古墳時代前期の西播磨を中心として－」『地中に眠る古代の播磨』 森 浩一監修 播磨学研究所編 神戸新聞総合出版センター 1999年
(33) 岸本一宏「弥生時代の低地円丘墓について」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2001年
(34) 谷本 進「釜山の石槨をもつ土器棺」『古代但馬と日本海』 よみがえる古代の但馬２ 但馬考古学研究会編・刊 1995年
(35) 川見芳也・谷本 進ほか『小山古墳群・東家の上遺跡』 八鹿町文化財調査報告書第９集 八鹿町教育委員会 1990年
(36) 角南聡一郎「西日本の土器棺墓と埋葬遺体」『奈良大学大学院研究年報』第４号 奈良大学 1999年

## 第２節　掘立柱建物について

和田神社遺跡の掘立柱建物の時期、および変遷を論じる上でまず、出土土器の検討を行いたい。個別の遺構については、遺物の有無があるため、大別して各テラス間の時期について触れることとする。

東播磨の７世紀代の土器については、永井・小川両氏の研究がある。[1] この中で、須恵器については、遺跡から普遍的に出土する杯の変遷によって、飛鳥の編年に照らし、Ⅰ～Ⅴ期の時期設定が行われている。それによれば須恵器杯の形態変化は次の通りである。

Ⅰ期（杯Ｈ・蓋の縮小化）→Ⅱ期（杯Ｈ減少、杯Ｇ・Ｇｈと蓋の一定量の確認）→Ⅲ期（杯Ｇ・Ｇｈ蓋が主流、杯Ｂ登場）→Ⅳ期（杯Ｇ・蓋が主流、杯Ｂ・蓋の一定量の確認とかえりの無い蓋がみられる）→Ⅴ期（杯Ｇは残るが、杯Ａ・杯Ｂが増え、蓋はかえりの無い物が多くみられる）とされている。この編年観は杯Ｈから杯Ａという変遷を基礎にしており、小稿でもこれをもとに集落の形成過程を考えてみたい。

| | 遺構 | 杯H | 杯H蓋 | 杯G | 杯G蓋 | 杯B | 杯蓋（かえりあり） | 杯蓋（かえりなし） | 杯A |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 上段 | SD14 | | | | ○ | ● | ● | | |
| | SK63 | | | ● | | | | | |
| | SK65 | ○ | | | | | | | |
| | 包含層 | | | ○ | | | | ○ | ○ |
| | | | | | | | | | |
| 中段 | SD13 | | | ● | ○ | ○ | ○ | | ○ |
| | SB12 | | | ○ | | | | | |
| | SD15 | | | ○ | | | | ○ | |
| | SK64 | | | ○ | ○ | | | | |
| | 柱穴 | ○ | | ○ | | | | ○ | ○ |
| | | | | | | | | | |
| 下段 | SB14 | | | ○ | | | | | |
| | SB18 | | | ○ | | | | | |
| | SK68 | ○ | | ● | | | | | |
| | SK69 | | | ○ | | | | | |
| | SK70 | ○ | | ○ | | | | | |
| | 包含層 | | | ● | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| B地区 | SH１ | ○ | | | | | | ○ | |
| | SD８ | ○ | | | | | | | |
| | SD12 | | | | | | ○ | | |
| | SX14 | ○ | | ○ | | | | | |

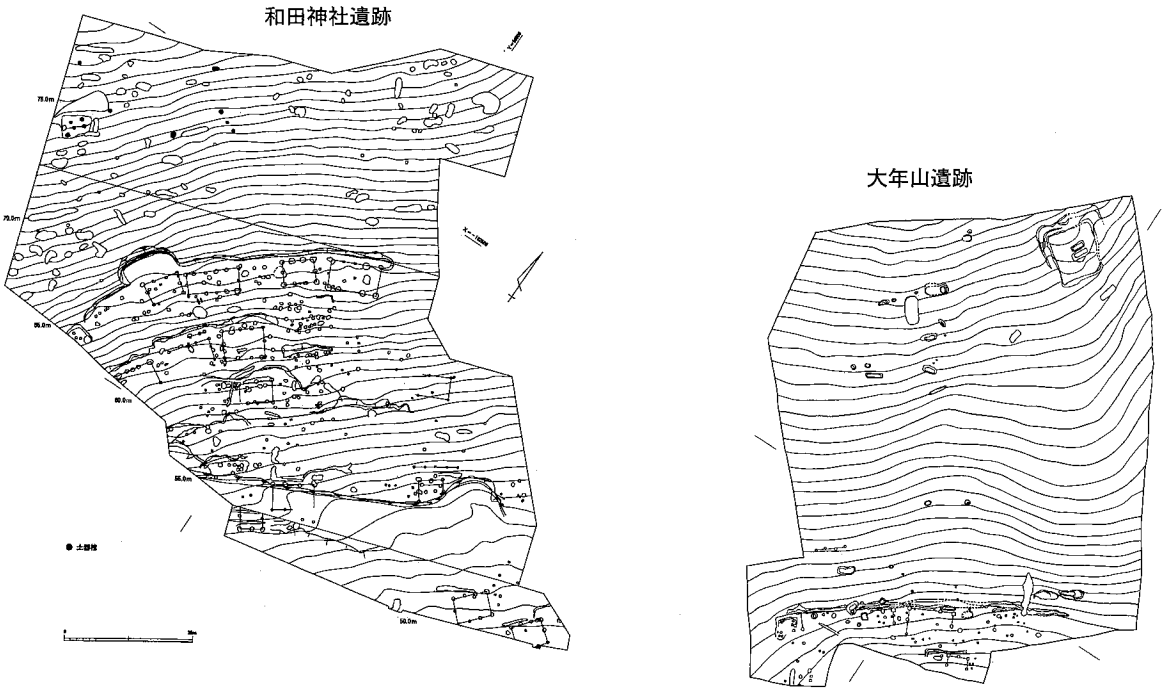
●３個体以上　　○１～２個体

第１表　遺構別杯分類一覧表

各遺構出土の杯の分類一覧表は、第１表に示した。これをみると、上段テラスからは、杯Ｈ・杯Ｇ・杯Ａ・杯Ｂが出土したが、主体は、杯Ｇと杯Ｂである。中段テラスも、杯Ｈ・Ｇ・杯Ａ・杯Ｂが出土している。下段テラス・Ｂ地区からは、杯Ｈ・杯Ｇが出土しているが、主体は、杯Ｇである。

上記の結果から、和田神社遺跡の須恵器杯については、全般には杯Ｇが主体ではあるが、杯Ａ・杯Ｂが伴うテラス（上段・中段テラス）と伴わないテラス（下段・Ｂ地区）とに分かれることが明らかになった。このことから、掘立柱建物は斜面の下の地区から上の地区に変遷した可能性がある。時期については前述の播磨の編年で、Ⅲ期（下段・Ｂ地区）～Ⅳ期（上段・中段）に相当する。ただし、杯Ｈや杯Ａは量的には少ないため、集落の継続期間は短く、７世紀後半代におさまるものと考えられる。

また、小さい谷を挟んで東側に位置する大年山遺跡については、和田神社遺跡と同様、斜面をカットして造成されたテラス面の上に、掘立柱建物を検出している。この建物跡の土器は、杯Ａを中心に、かえりのない杯蓋・杯Ｂが出土しており、和田神社遺跡の掘立柱建物よりやや新しく、Ⅴ期～奈良時代初頭に相当すると考えられている。[2]




第３図　和田神社遺跡と大年山遺跡位置図

和田神社遺跡が位置する樫山から正法寺にかけての丘陵には、和田神社遺跡以外にも７世紀代の集落が見つかっている。和田神社遺跡の東側に隣接する年ノ神遺跡では、竪穴住居跡２棟を検出し、北側に存在する年ノ神古墳群の母集団と考えられている。[3] 出土土器についても和田神社遺跡出土のものと類似しているが、近隣にありながら、竪穴住居跡と掘立柱建物との相違が認められることは、この時期が竪穴住居跡から掘立柱建物に変化していく時期であるとしても、それぞれの集落の大きな特徴といえるだろう。

和田神社遺跡では、14棟もの掘立柱建物を検出した。これらは、斜面のカットと盛土によって平坦面を形成するという計画的で大がかりな造成工事を行った上に立地している。類似した立地の遺跡として、三田市の下西山遺跡があげられる。下西山遺跡についても丘陵の斜面に造成された平坦面上に、竪穴住居跡群を形成した小鍛冶を含む工房的な集落と考えられている。この下西山遺跡を含む、北摂ニュータウンの武庫川に面した丘陵は、古代須恵器・鉄などの手工業生産の集中地帯であることが判明している。[4]

和田神社遺跡の集落の性格についての手がかりは少ないが、ＳＸ18ではフイゴ羽口などが出土していることから小鍛冶が行われていたと考えている。また、14棟の掘立柱建物が、ほぼ同時期に短期的に営まれていることから、和田神社遺跡についても、一般的な集落というより、短期的に生産活動を行った工房的性格などを想定しておきたい。

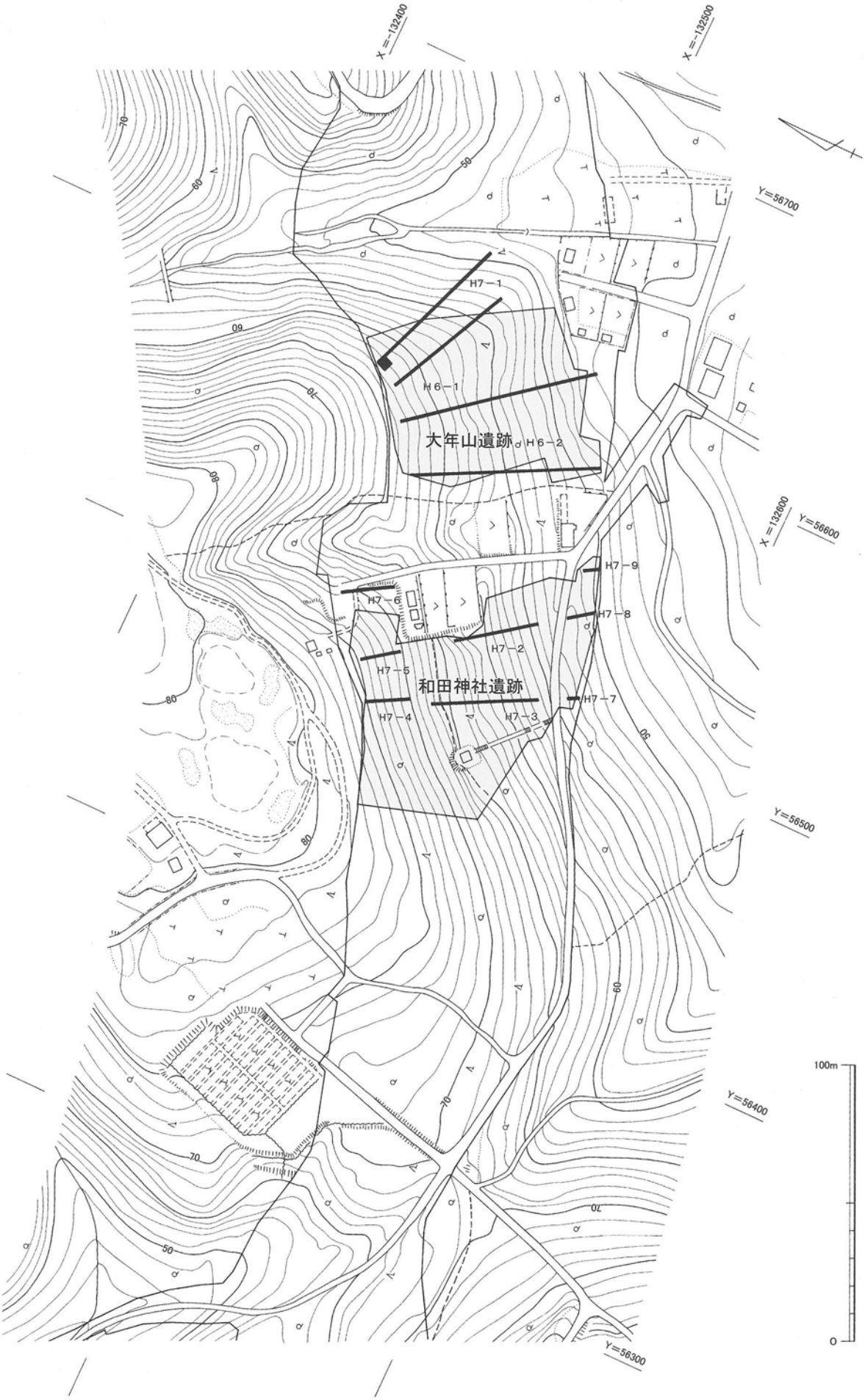
（1）永井信弘・小川真理子「Ⅸ播磨」『７世紀の土器（近畿西部編）』古代の土器5-2　古代の土器研究会編1998

（2）岡本一秀ほか　『大年山遺跡』兵庫県文化財調査報告237　兵庫県教育委員会　2002年

（3）長濱誠司ほか　『年ノ神遺跡』兵庫県文化財調査報告235　兵庫県教育委員会　2002年

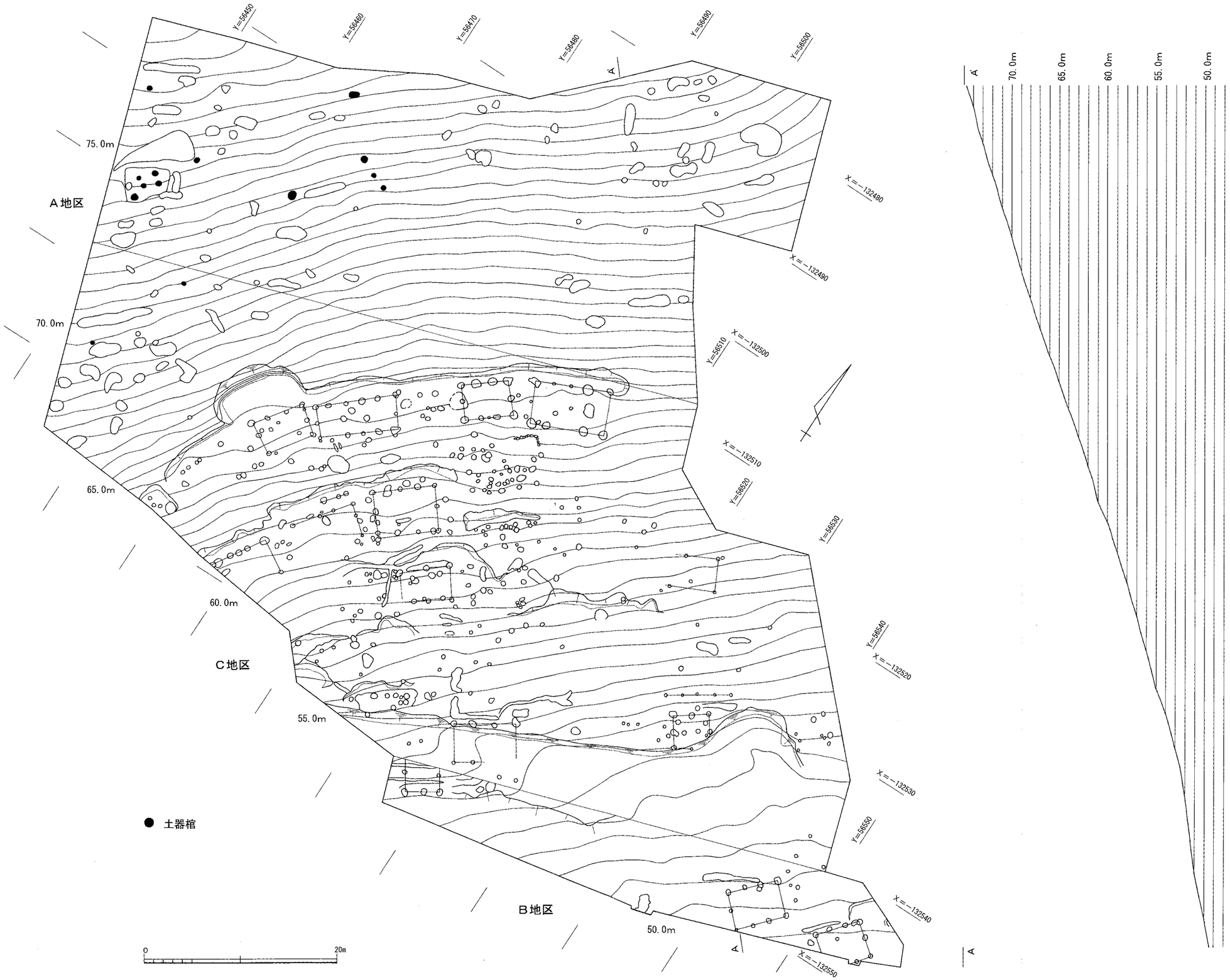
（4）篠宮　正ほか　『下西山遺跡』兵庫県文化財調査報告200　兵庫県教育委員会　2000年

# 図　　版


X=-132400
X=-132500
Y=56700
H7−1
H6−1
大年山遺跡
H6−2
X=132600
Y=56600
H7−9
H7−6
H7−8
H7−2
H7−5
和田神社遺跡
H7−4
H7−3
H7−7
Y=56500
Y=56400
Y=56300
100m
0

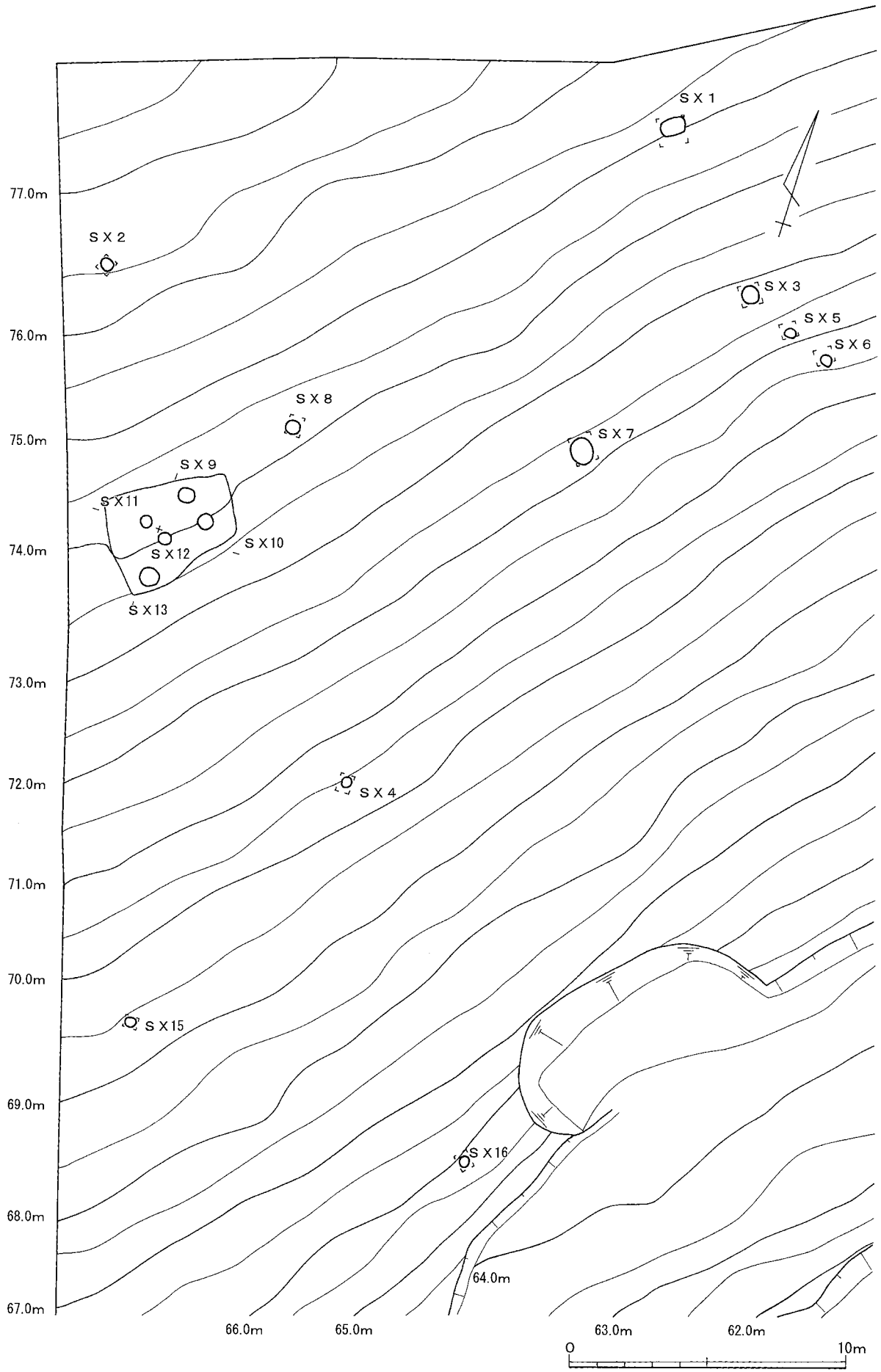
調査区位置図

B・C地区


A地区
B地区
C地区
75.0m
70.0m
65.0m
60.0m
55.0m
50.0m
Y=56450
Y=56460
Y=56470
Y=56480
Y=56490
Y=56500
Y=56510
Y=56520
Y=56530
Y=56540
Y=56550
X=−132480
X=−132490
X=−132500
X=−132510
X=−132520
X=−132530
X=−132540
X=−132550
A
A'
● 土器棺
0
20m

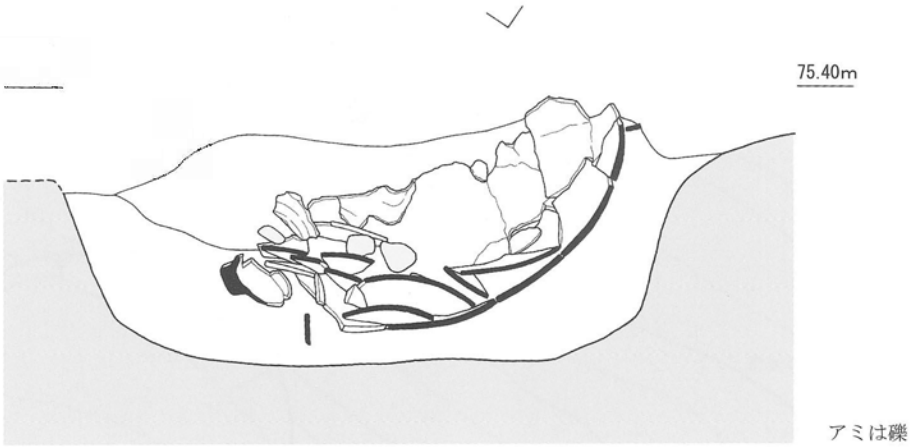
調査区全体図

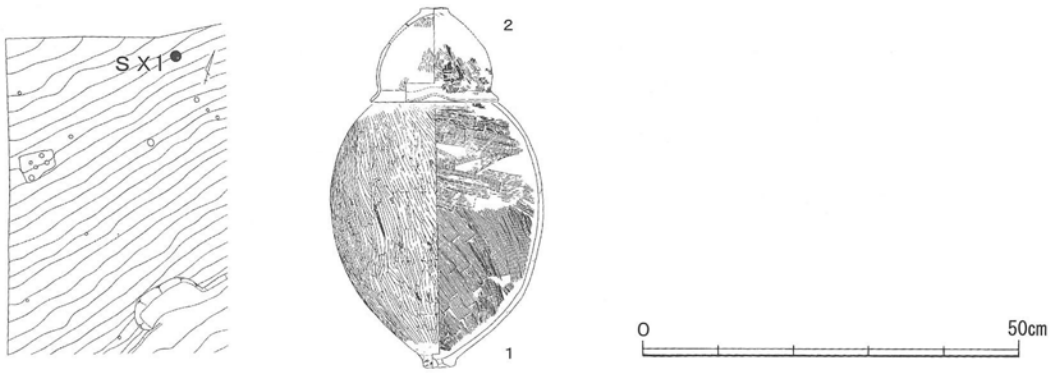
A地区



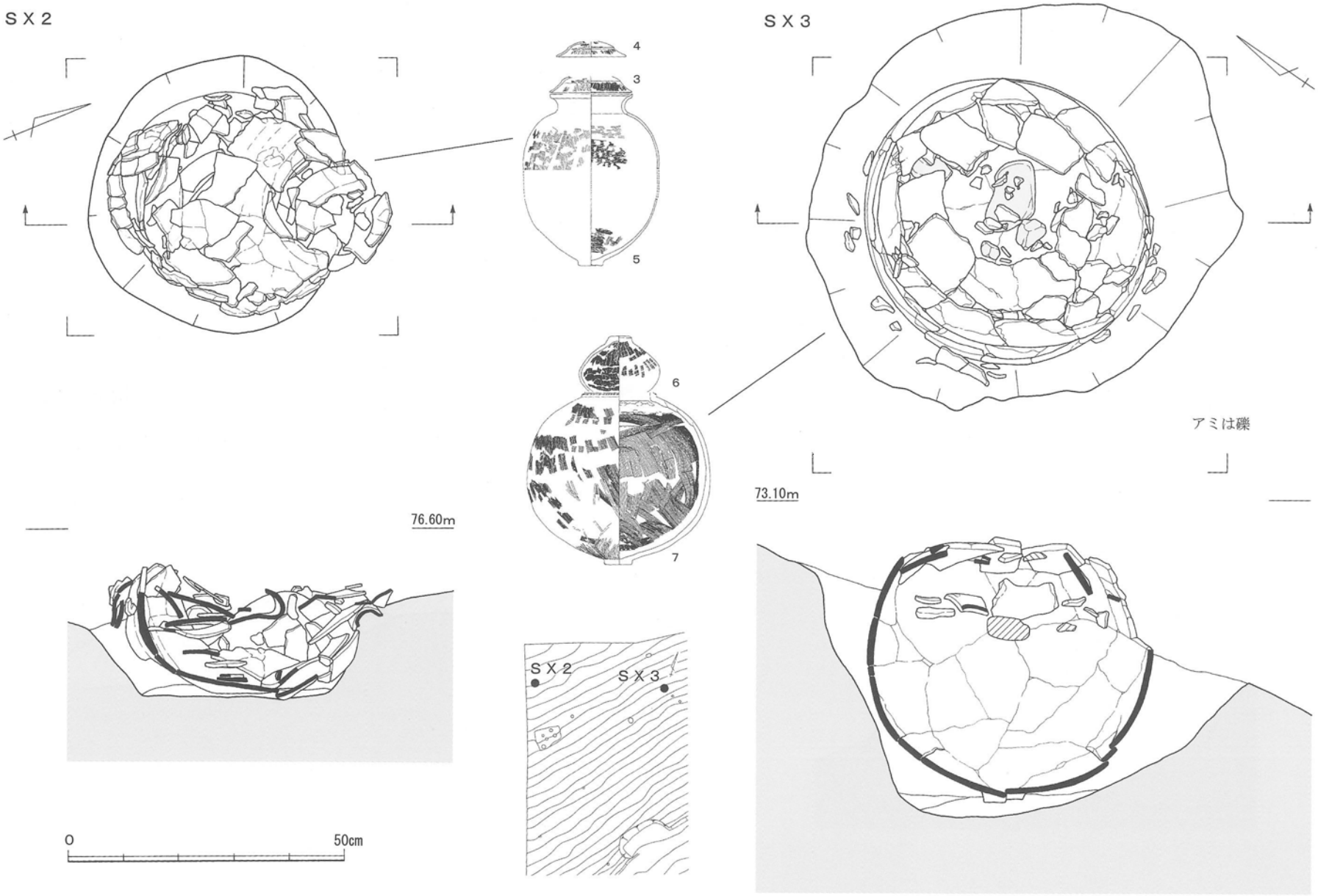

A地区土器棺（SX）分布状況

A地区

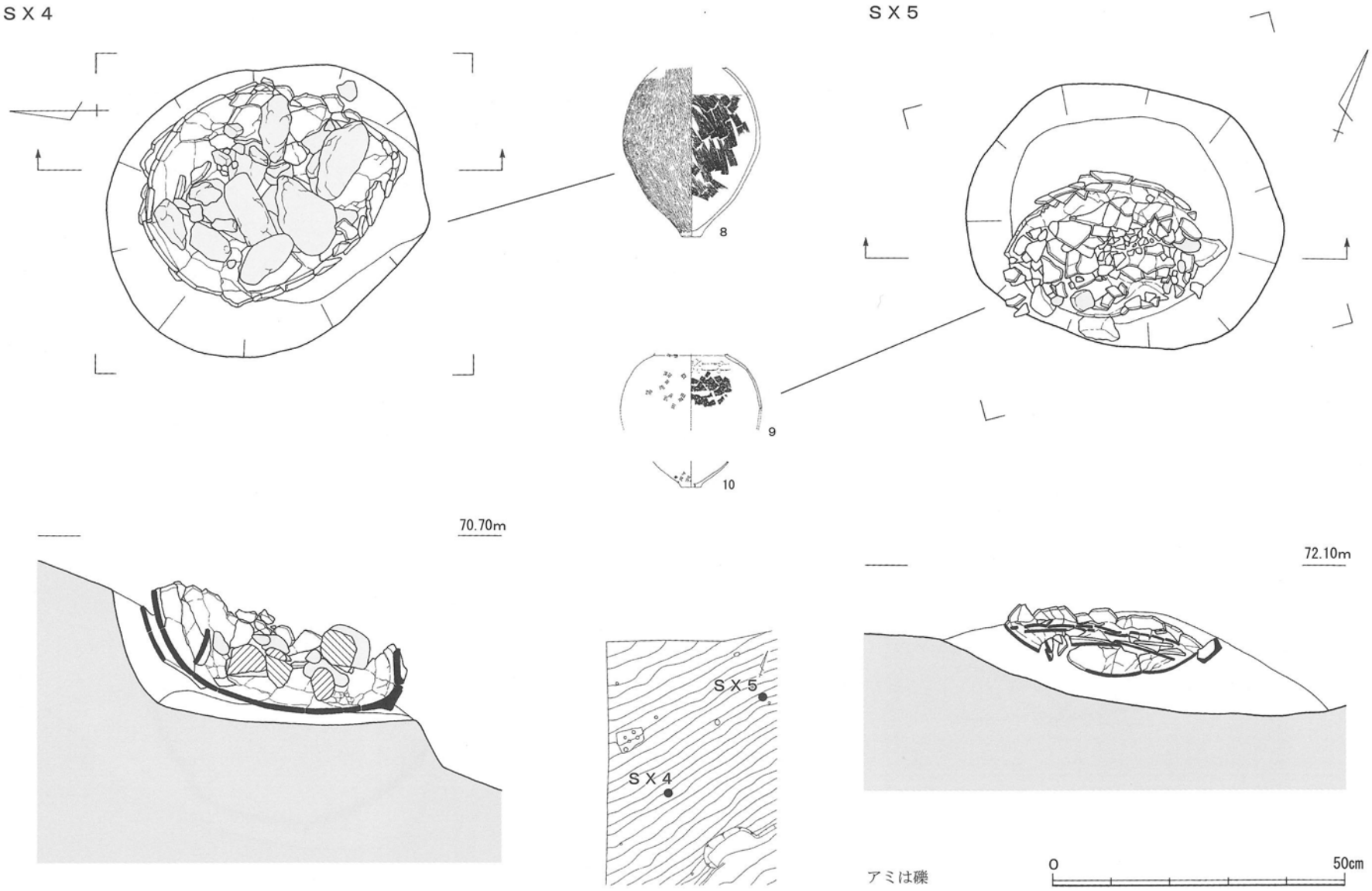



SX1　実測図

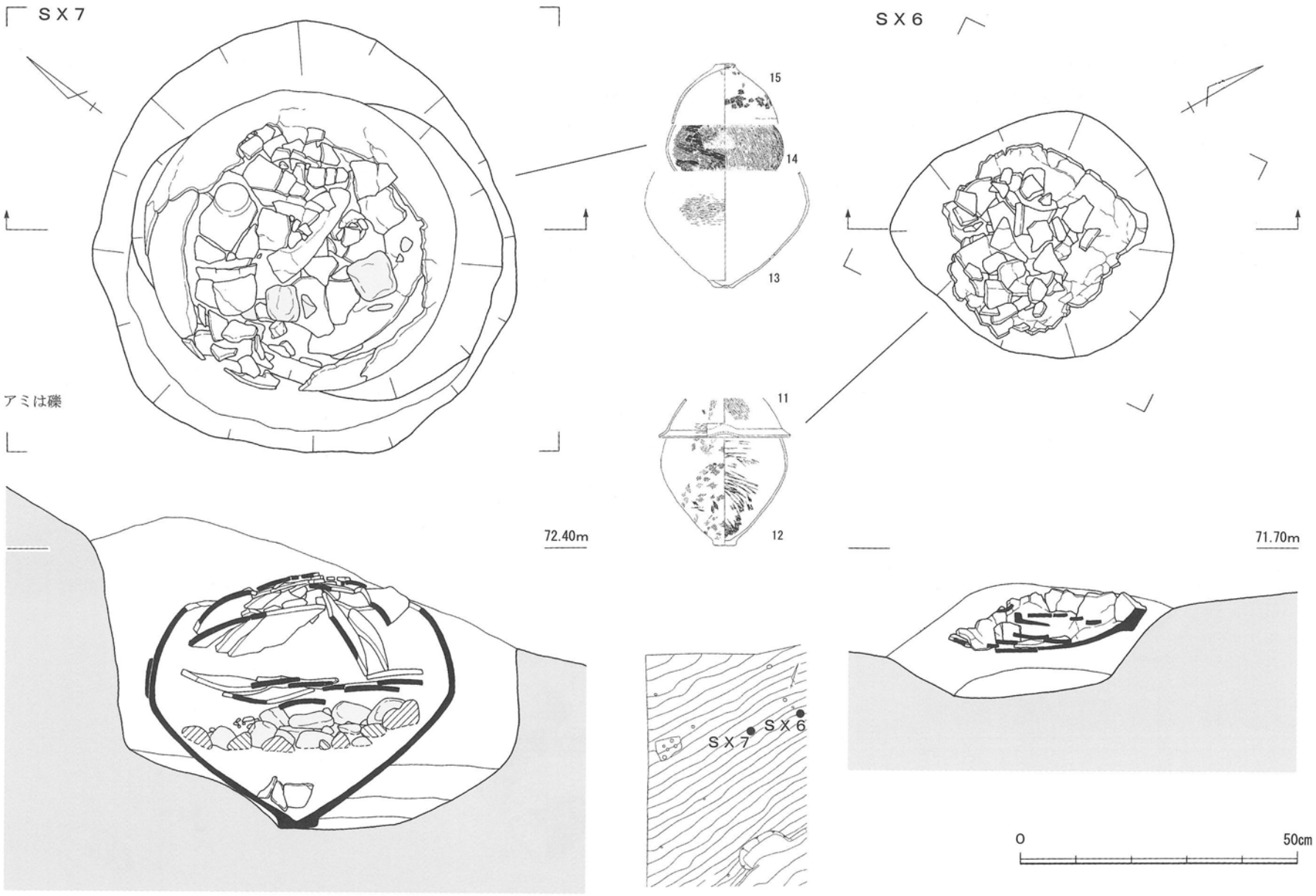



SX2・3　実測図

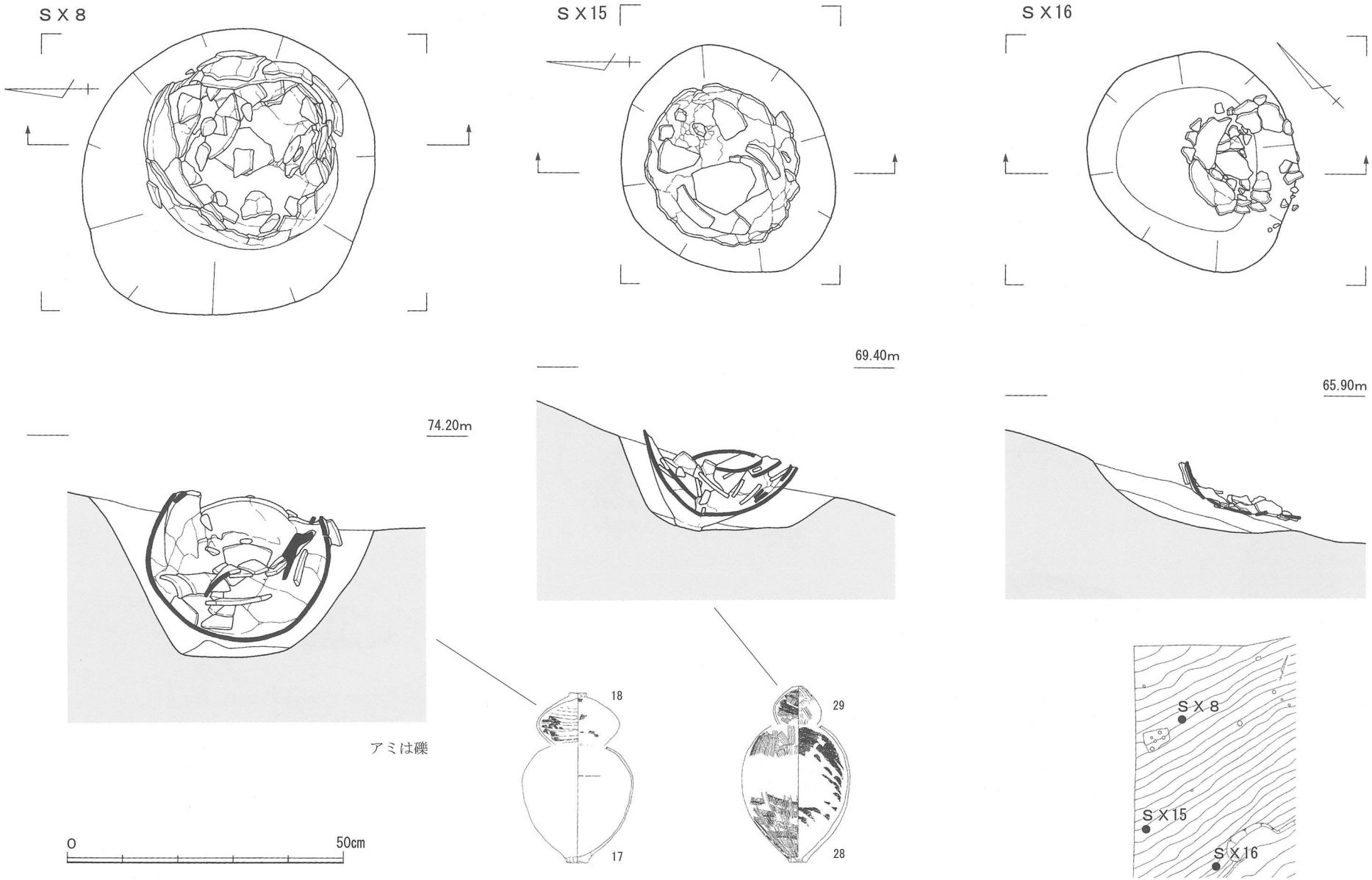



ＳＸ４・５　実測図

図版６　遺構図



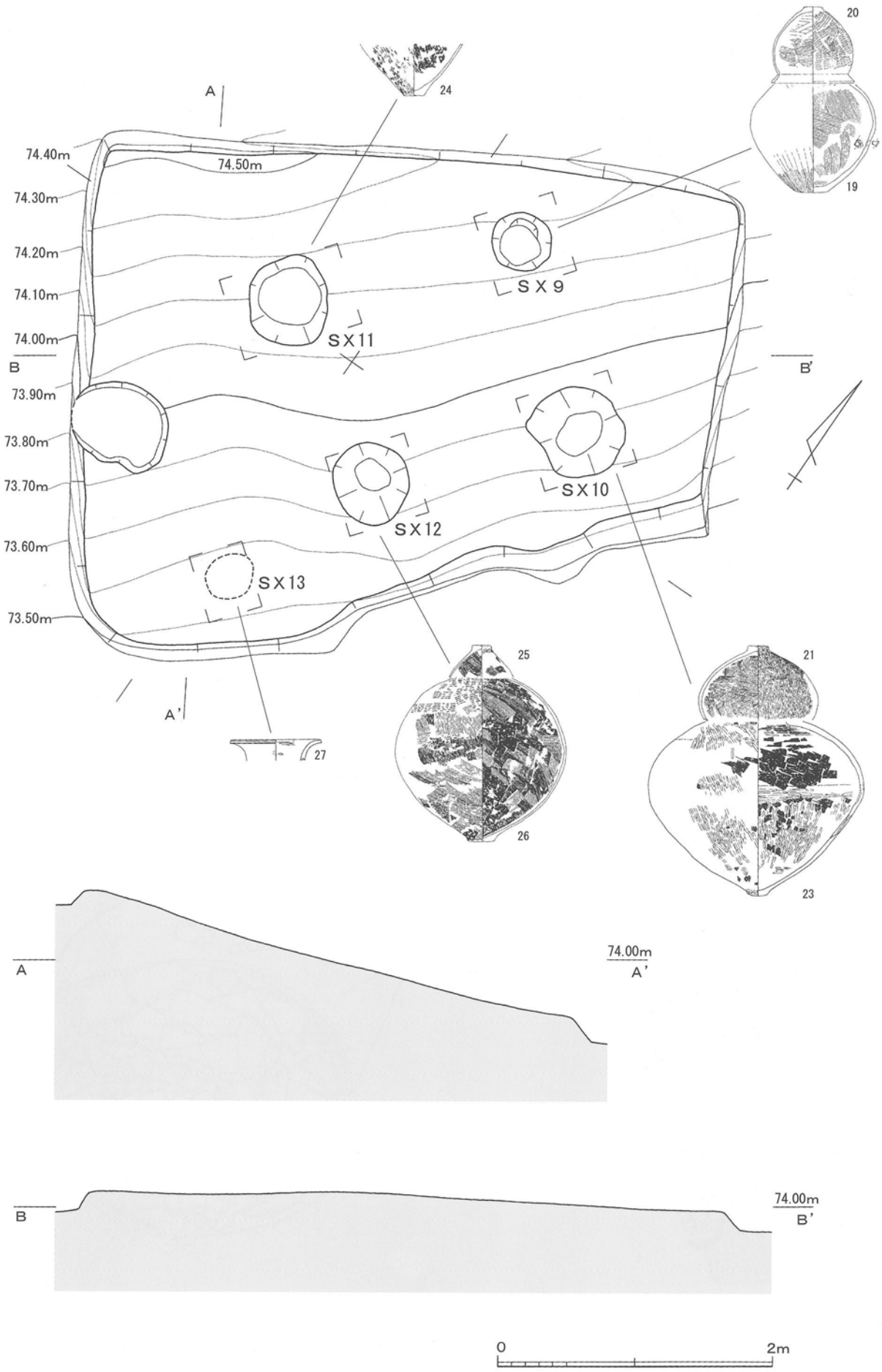

SX6・7　実測図



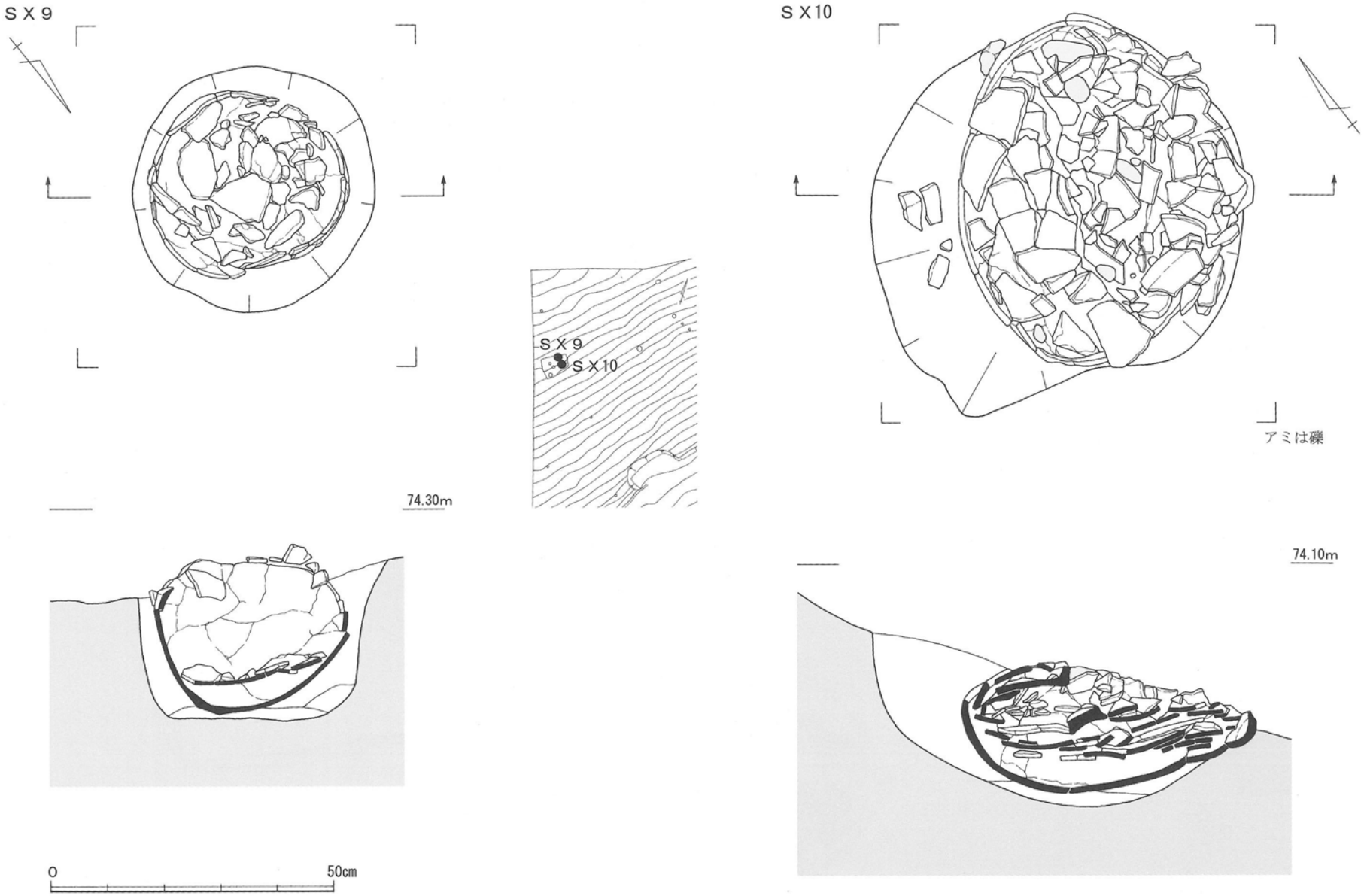

ＳＸ８・15・16　実測図

図版８　遺構図

A地区

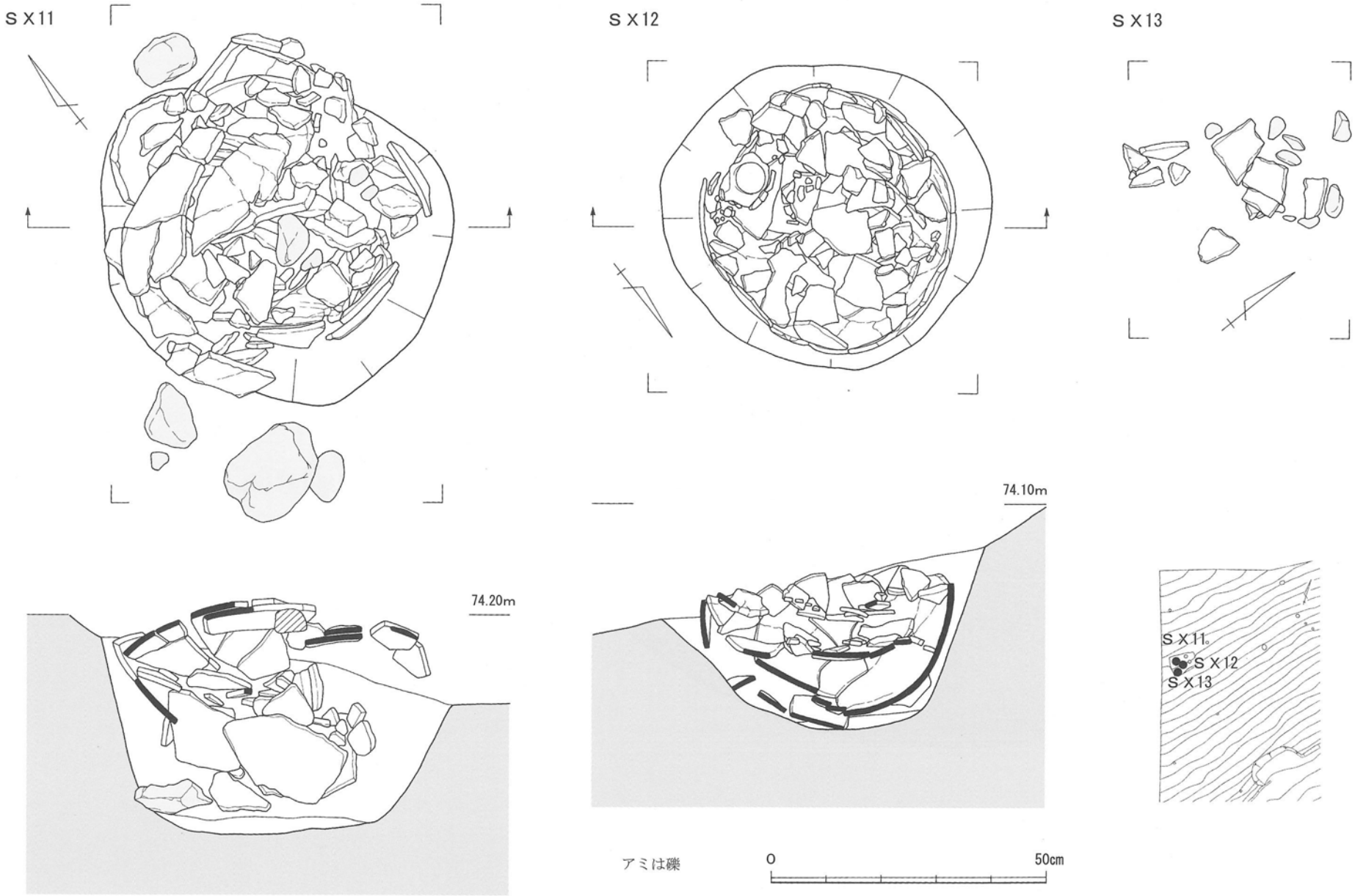



ＳＸ９～13　墳丘部



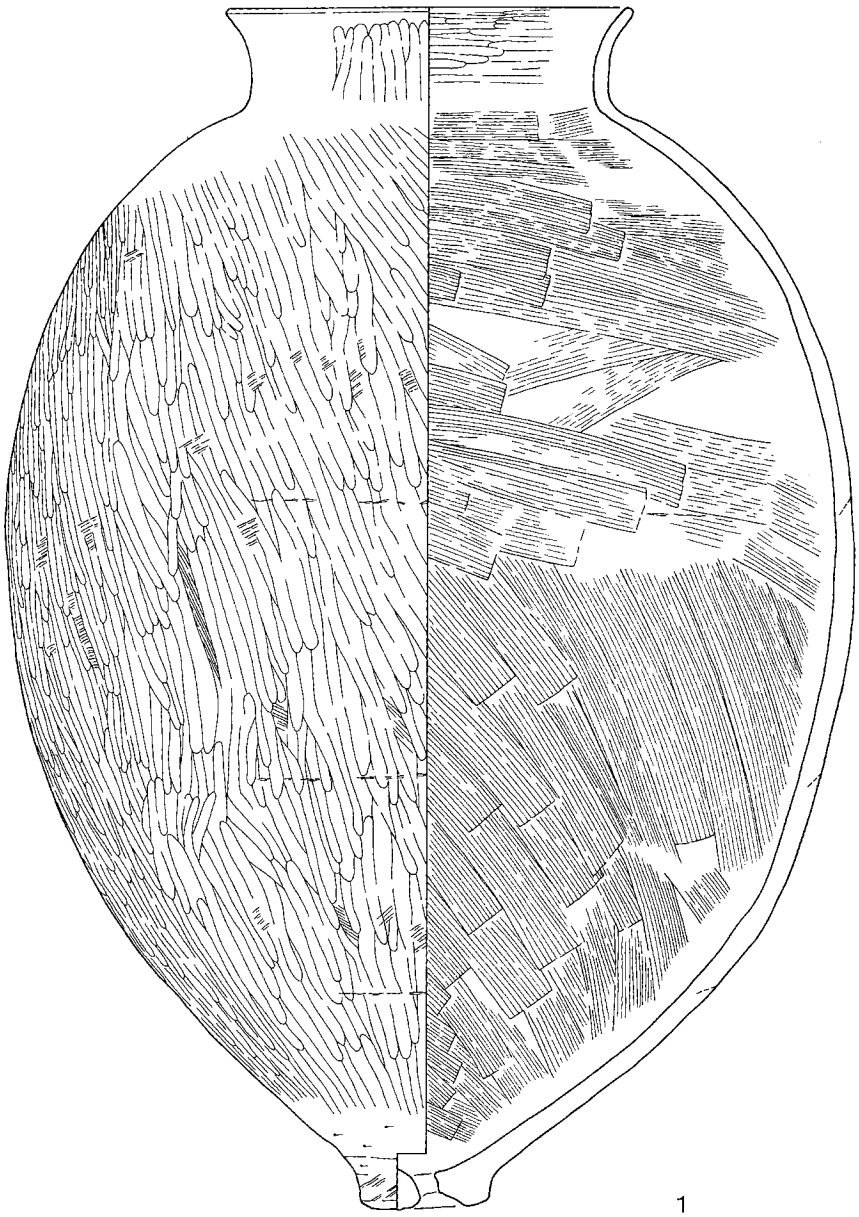

ＳＸ９・10　実測図

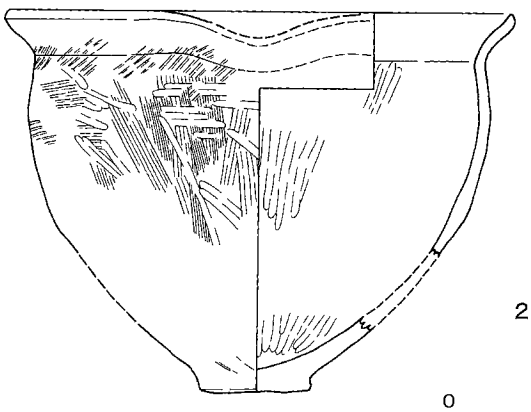
図版 10　A地区




SX 11～13　実測図

A地区　ＳＸ１



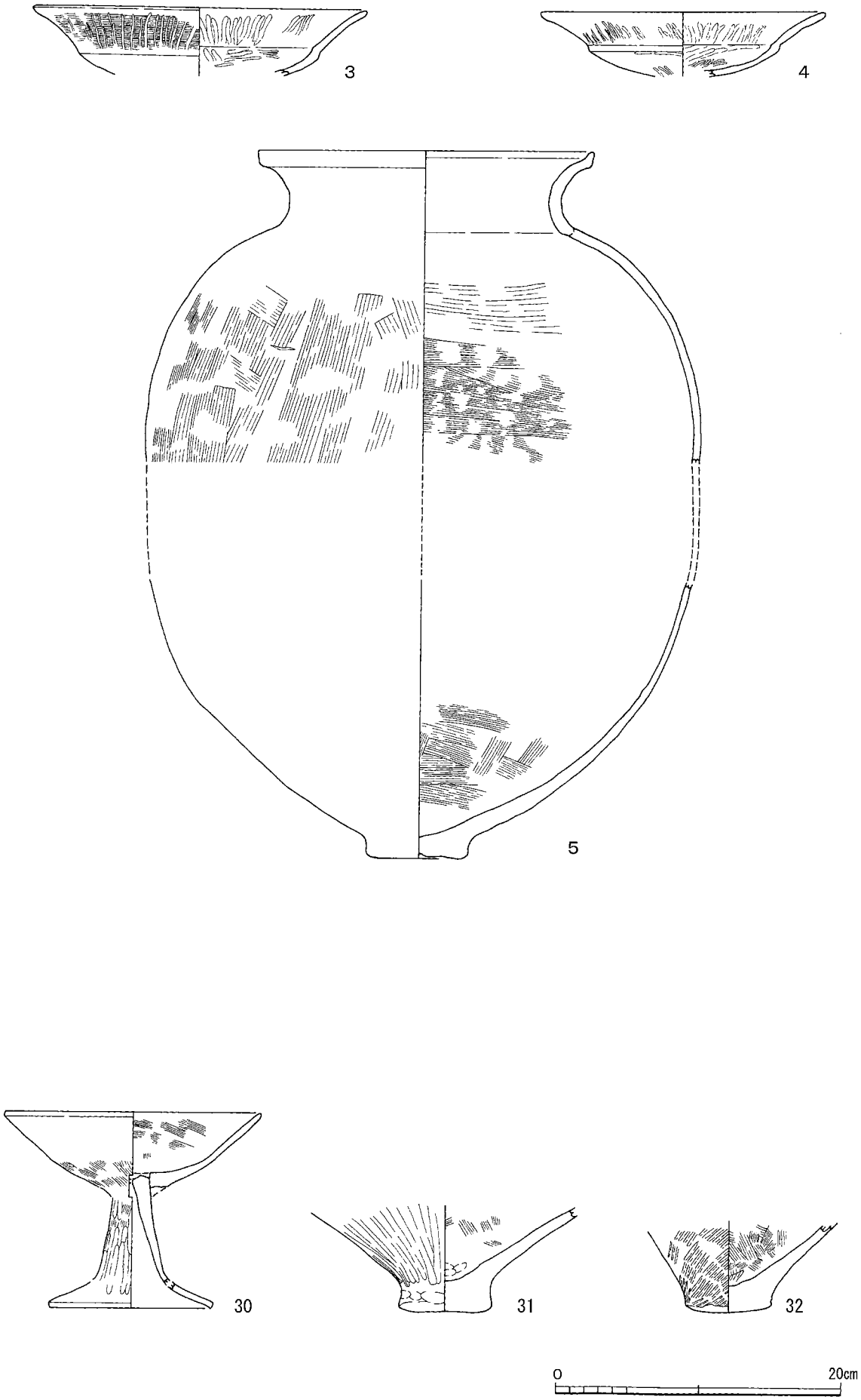




0　20cm

ＳＸ１　出土土器

ＳＸ２

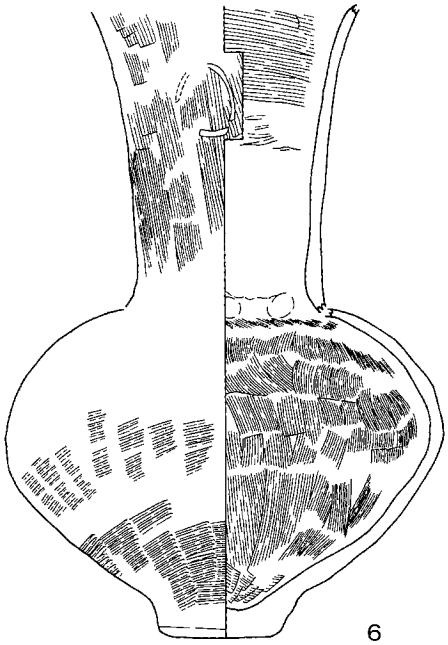
Ａ地区

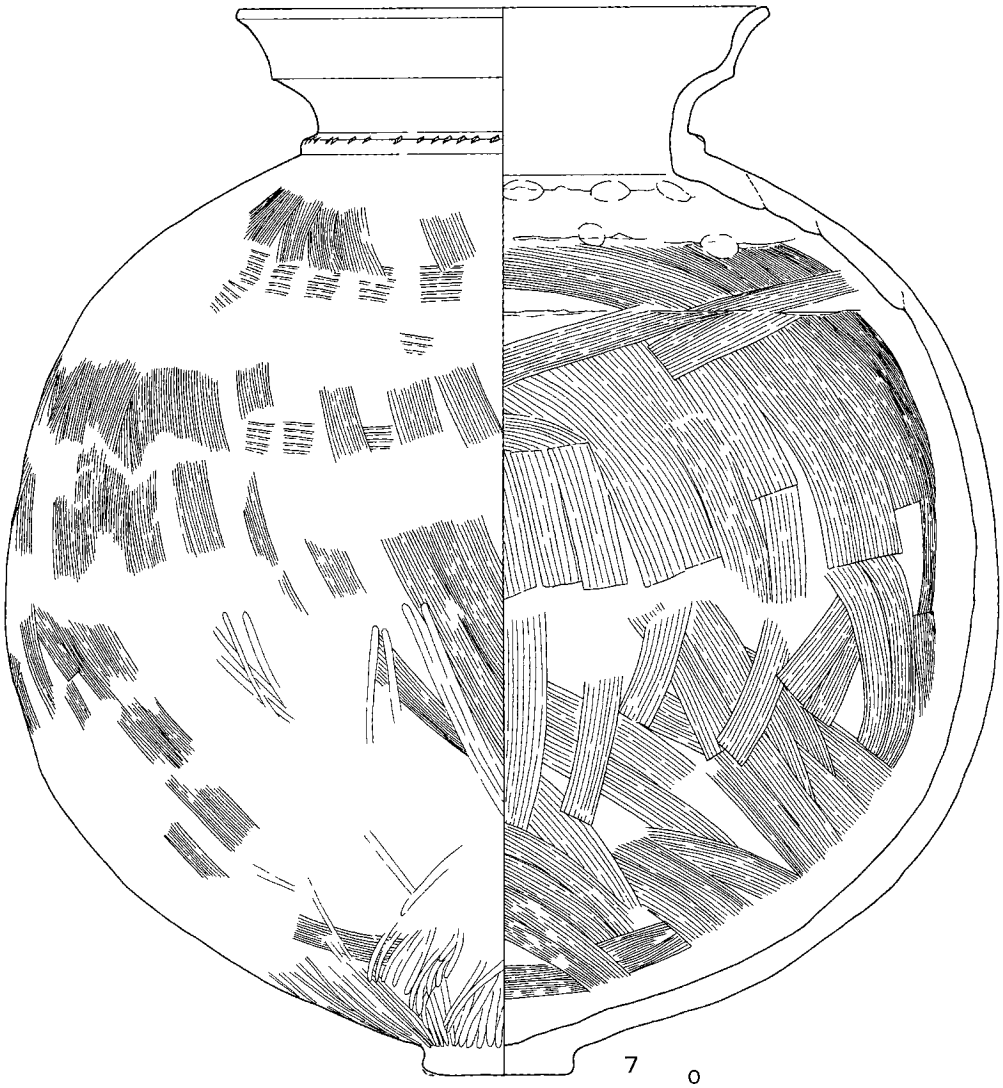



ＳＸ２・包含層　出土土器

A地区

ＳＸ３



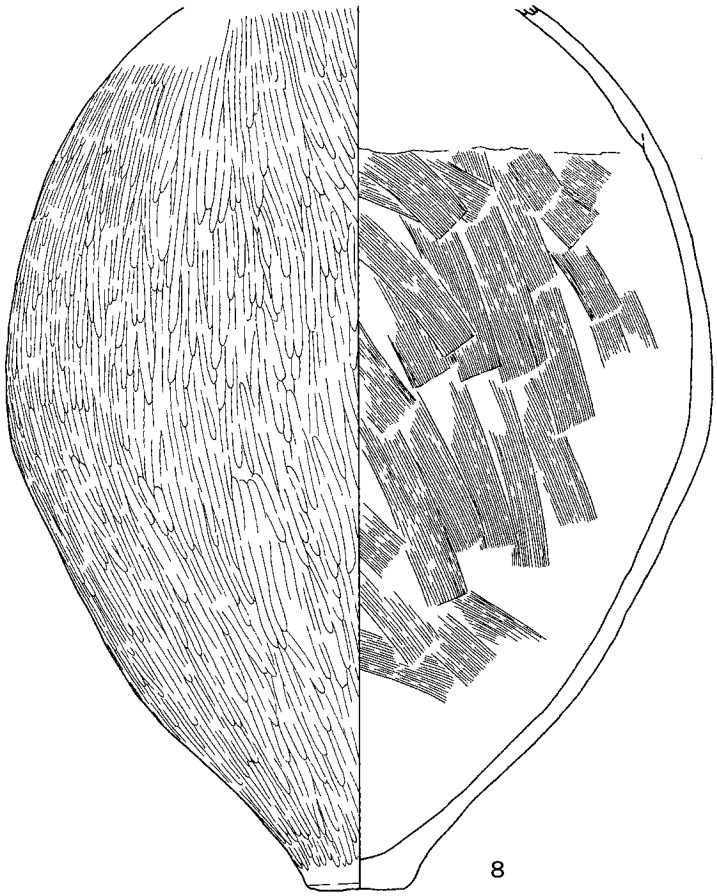




0　20cm

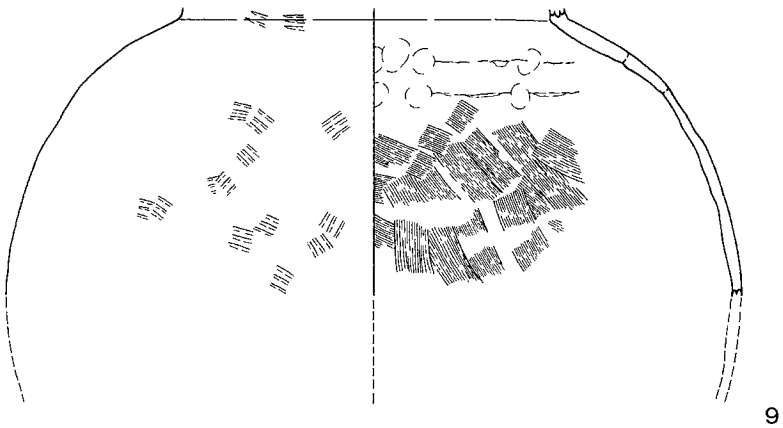
ＳＸ３　出土土器

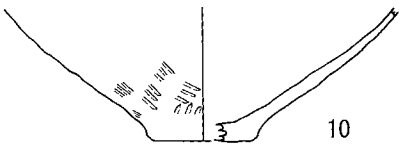
ＳＸ４

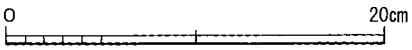
Ａ地区




ＳＸ５

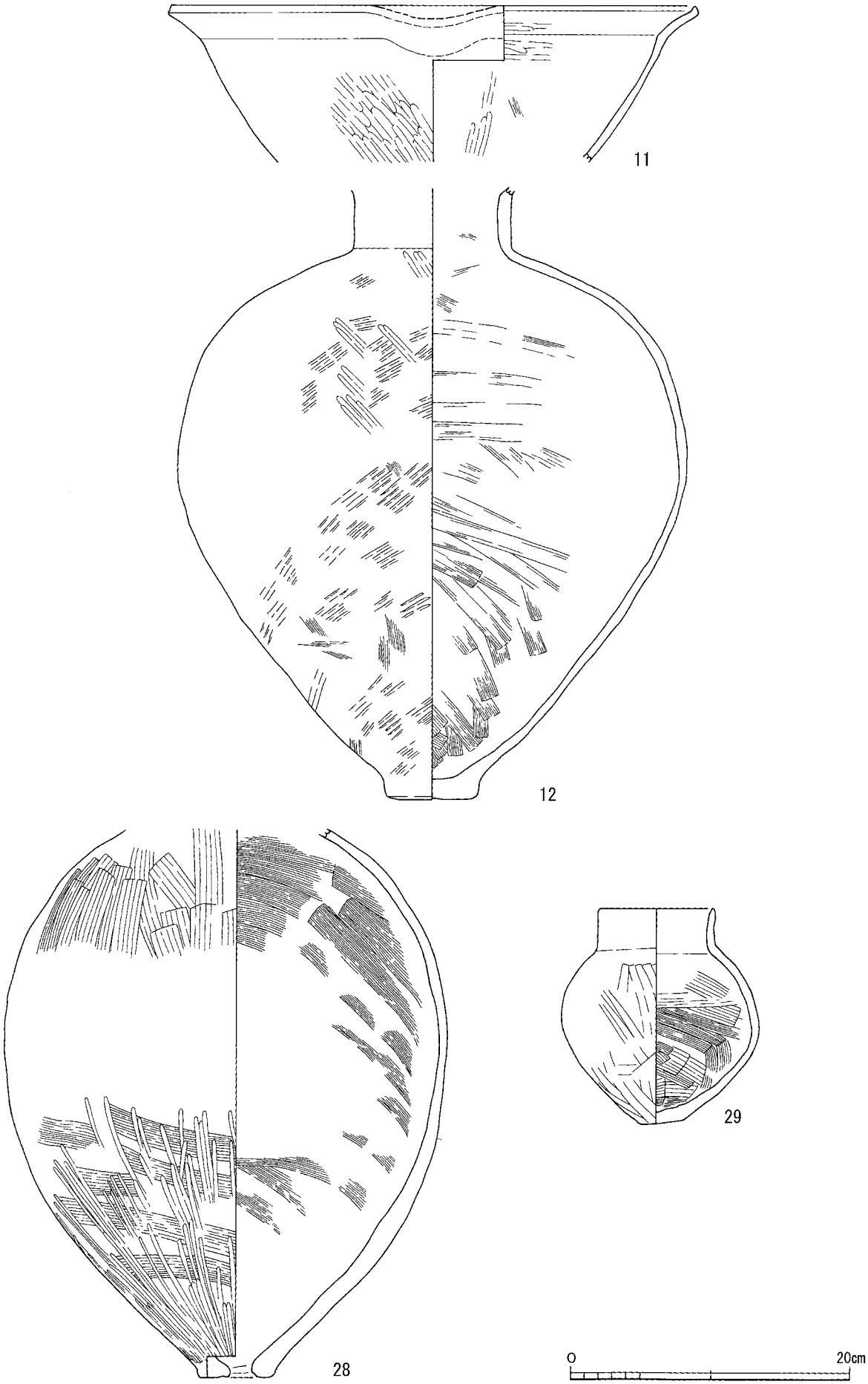



ＳＸ４・５　出土土器

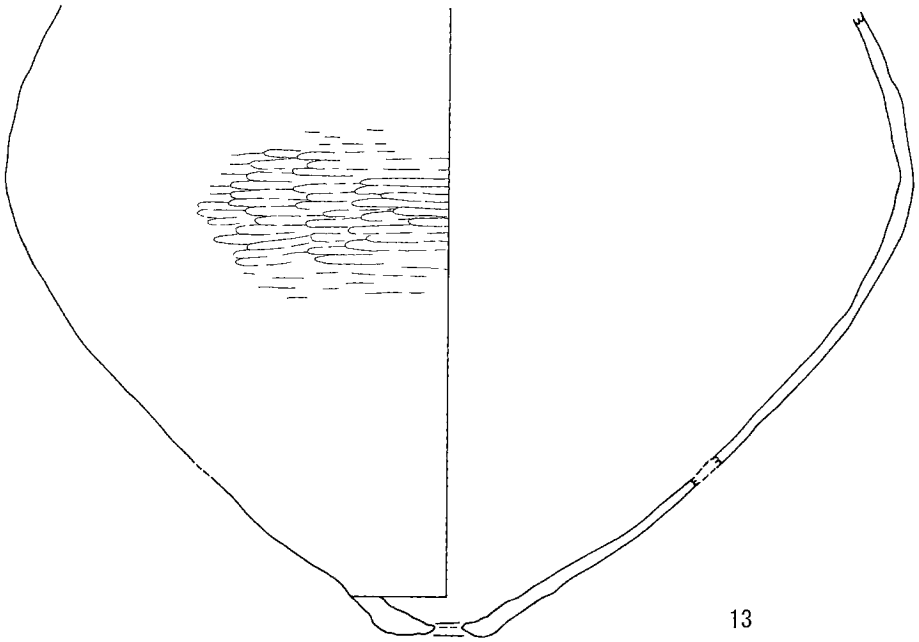
A地区　ＳＸ６

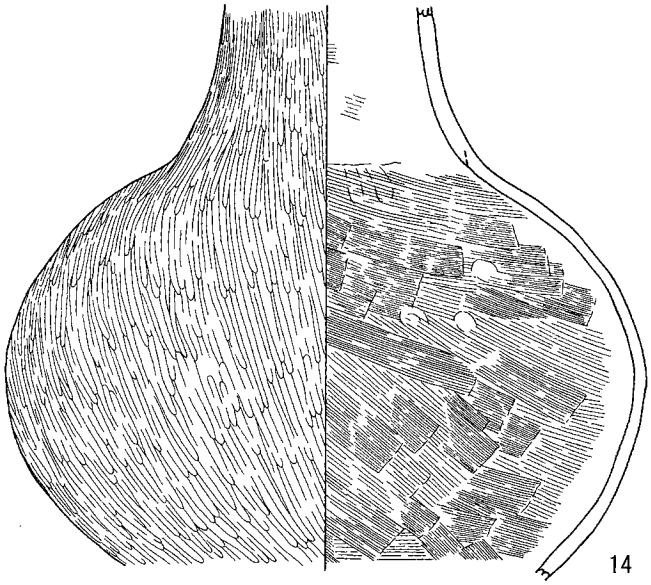


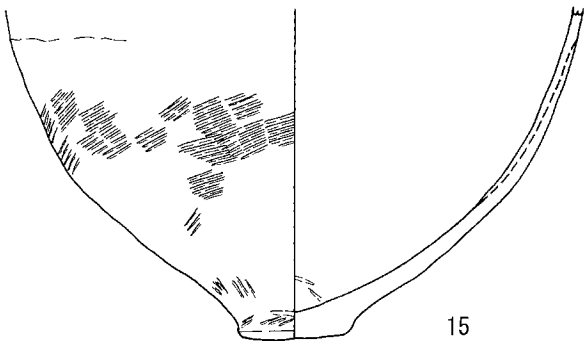

ＳＸ６・15　出土土器

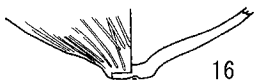
ＳＸ７

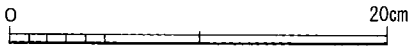
Ａ地区



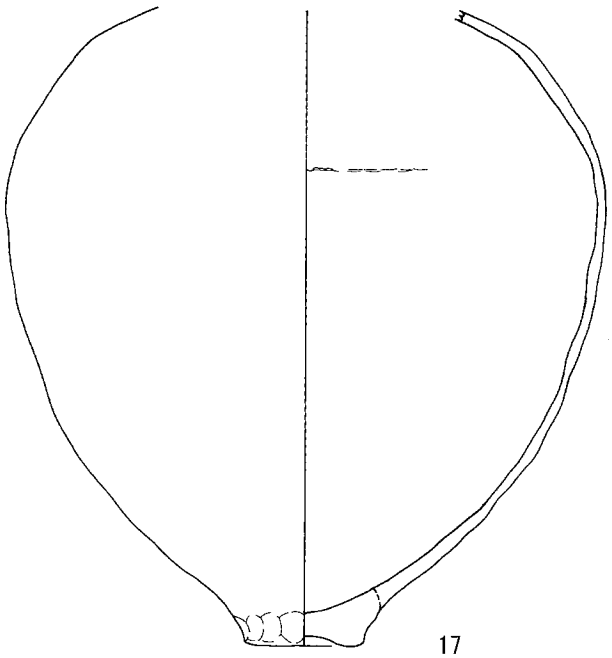



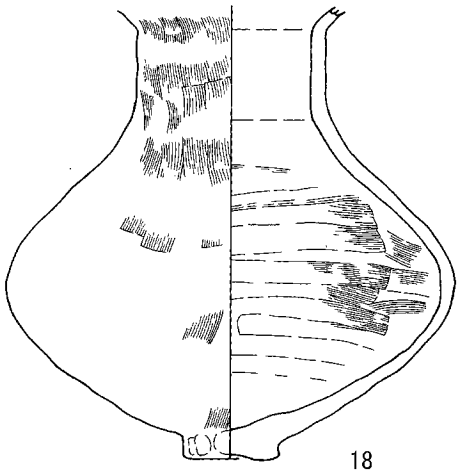




ＳＸ７　出土土器

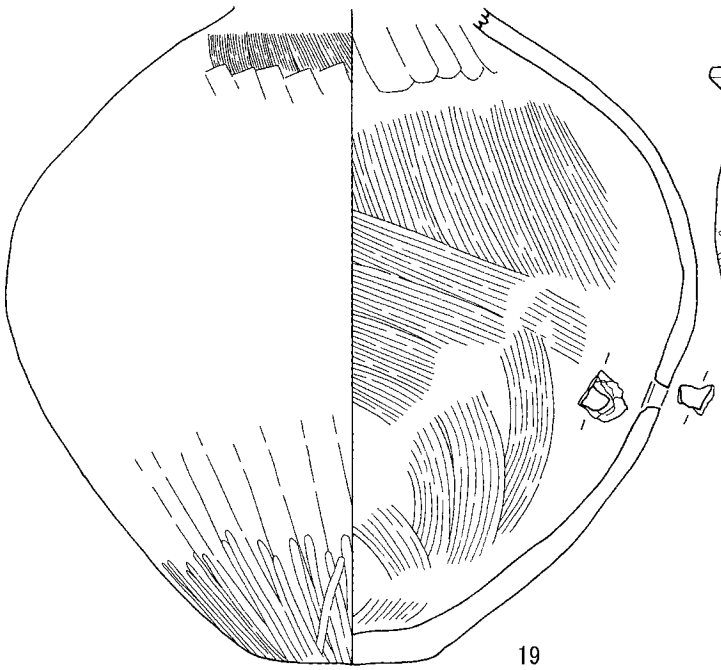
A地区

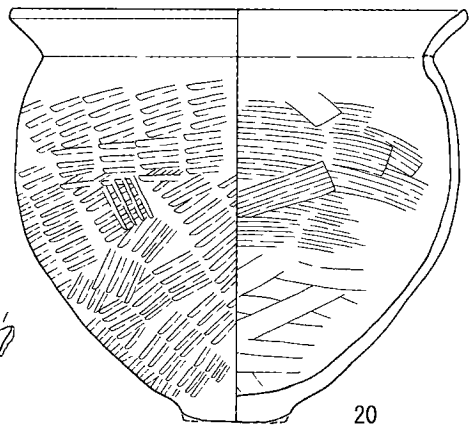
ＳＸ８

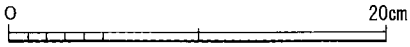



ＳＸ９



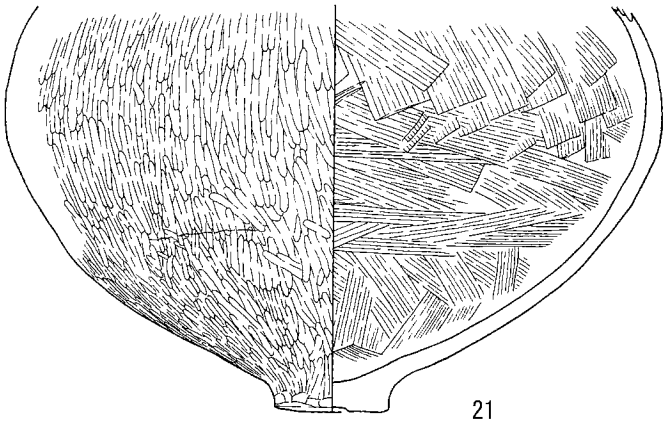



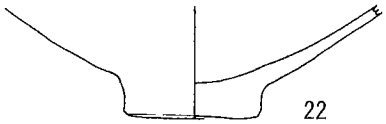

ＳＸ８・９　出土土器

SX10

A地区



21



22

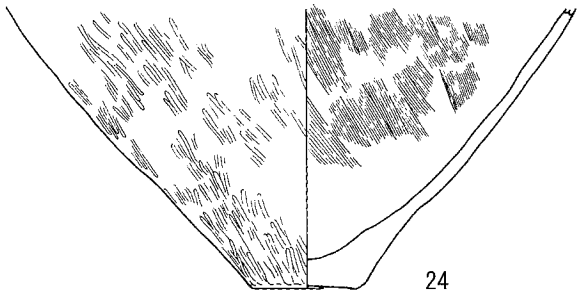
23

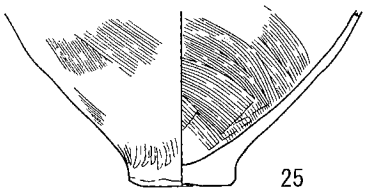
0 20cm

SX10 出土土器

A地区

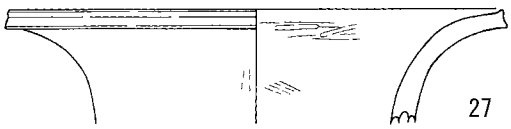
SX11

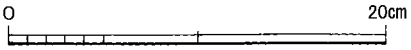



SX12

SX13

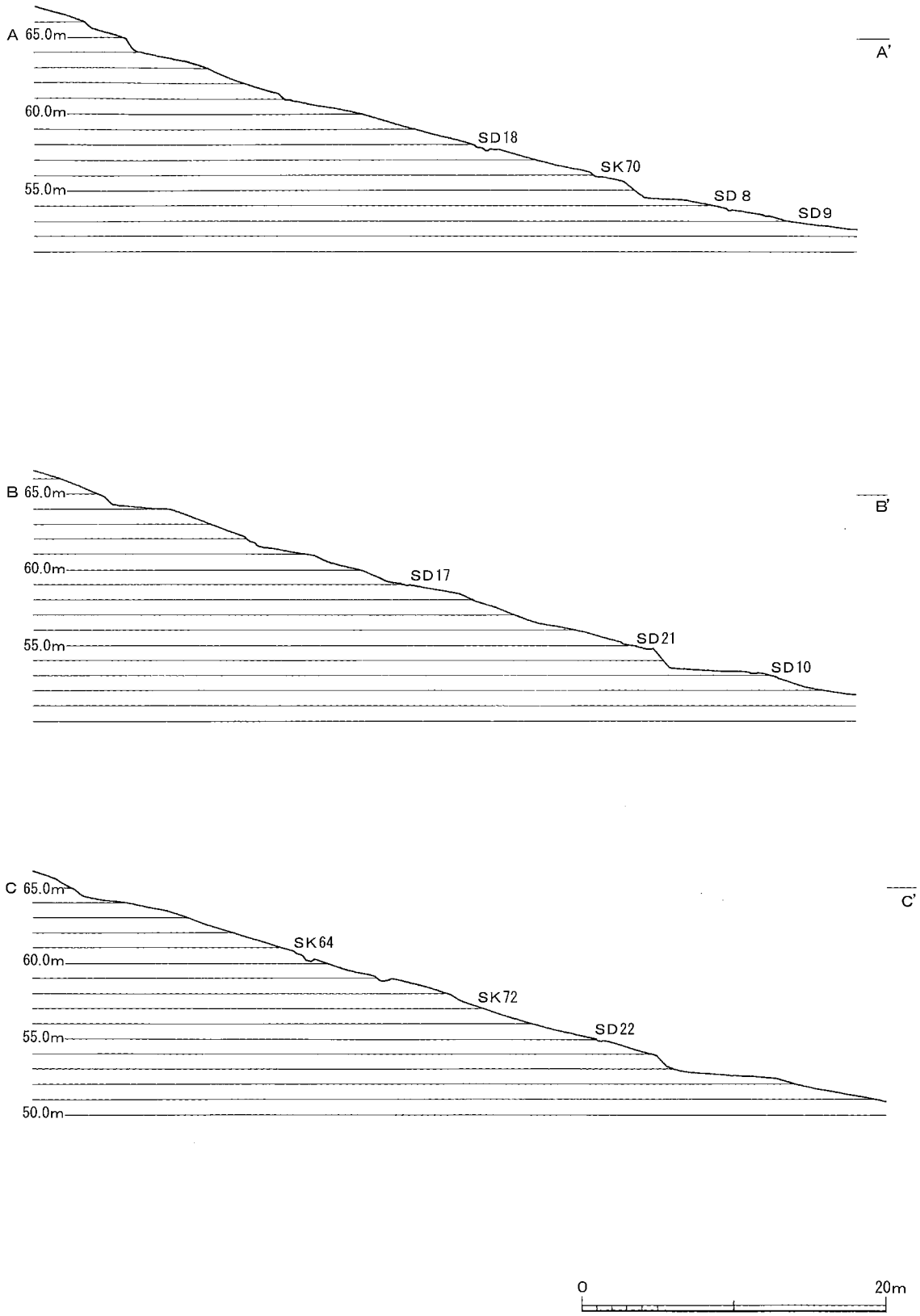


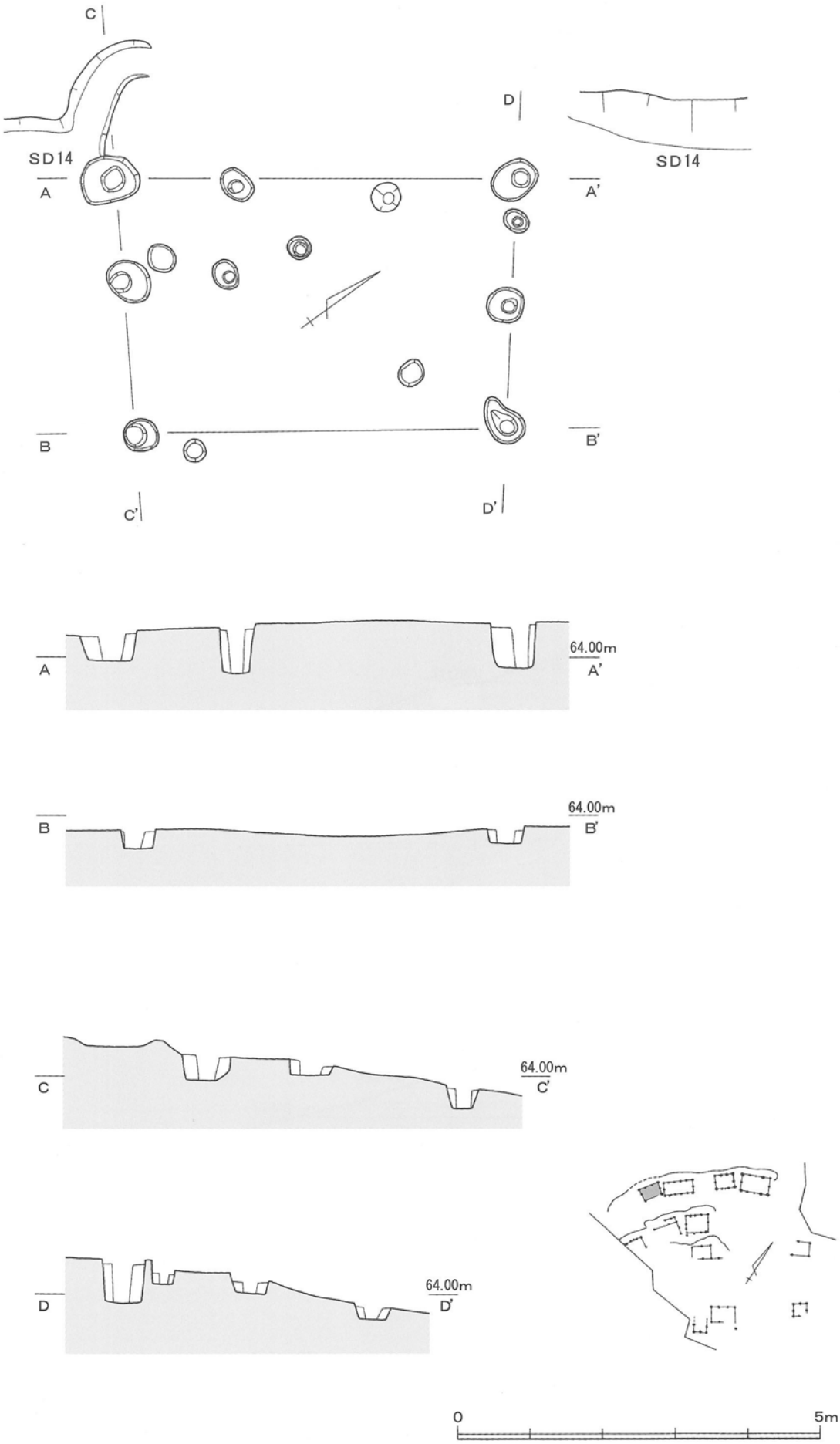

SX11・12・13　出土土器

B・C地区

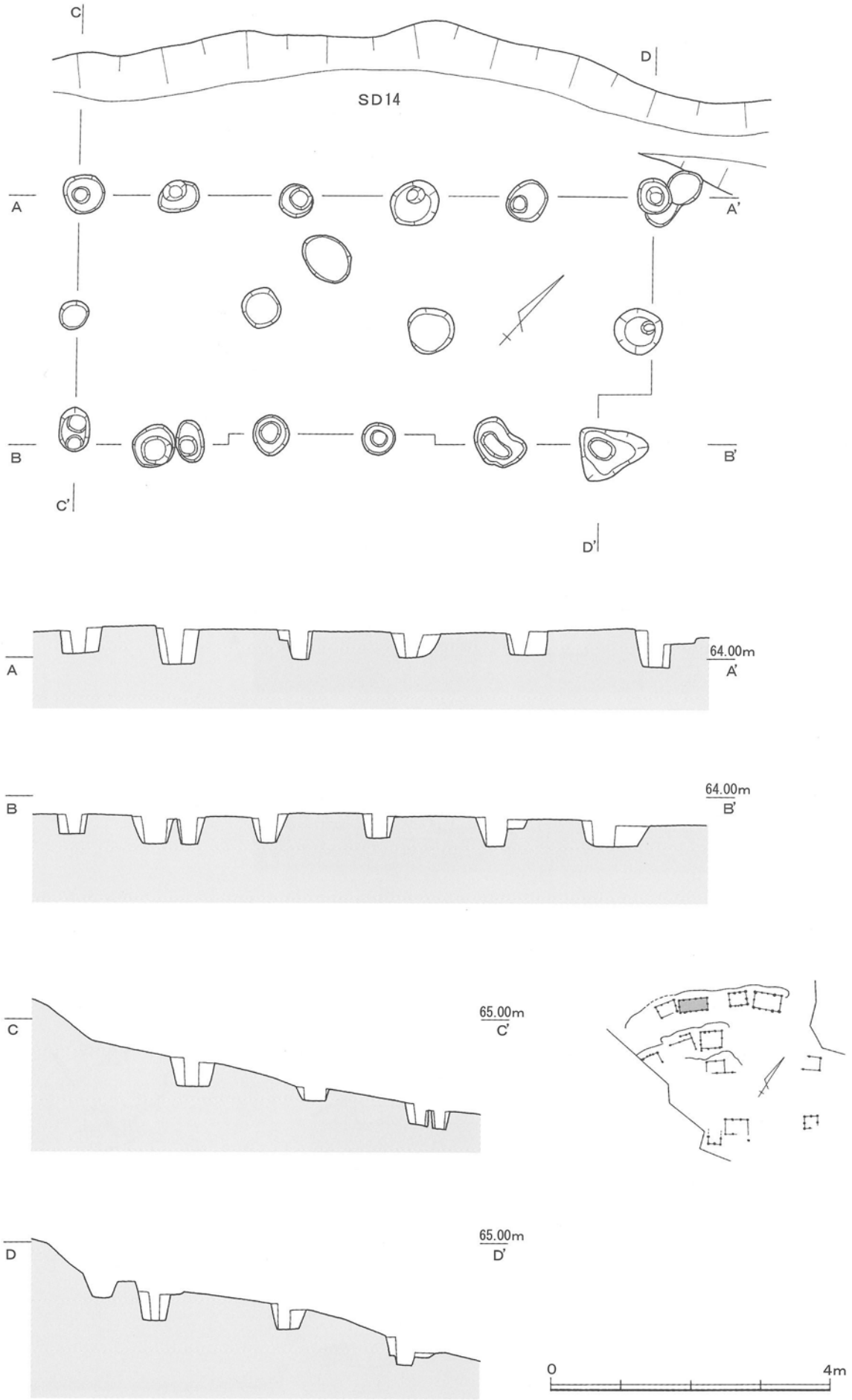

67.0m
66.0m
65.0m
64.0m
63.0m
62.0m
61.0m
60.0m
59.0m
58.0m
57.0m
56.0m
55.0m
54.0m
53.0m
52.0m
51.0m
50.0m
A
A'
B
B'
C
C'
a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
e
e'
f
f'
g
g'
h
h'
i
i'
神社跡
SB 4
SB 5
SB 6
SB 7
SB 8
SB 9
SB10
SB11
SB12
SB13
SB14
SB 1
SB 2
SB 3
SD14
SD13
SD15
SD16
SD17
SD18
SD20
SD21
SD22
SD23
SD 8
SD 9
SD10
SD12
SD11
SK63
SK65
SK66
SK64
SK72
SK69
SK68
SK70
SK71
SK61
SK60
SX18
SX17
SX19
SX14
SA 1
SH 1
0
20m


A 65.0m
A'
60.0m
SD18
SK70
55.0m
SD 8
SD9
B 65.0m
B'
60.0m
SD17
SD21
55.0m
SD10
C 65.0m
C'
SK64
60.0m
SK72
SD22
55.0m
50.0m
0
20m

B・C地区　断面図

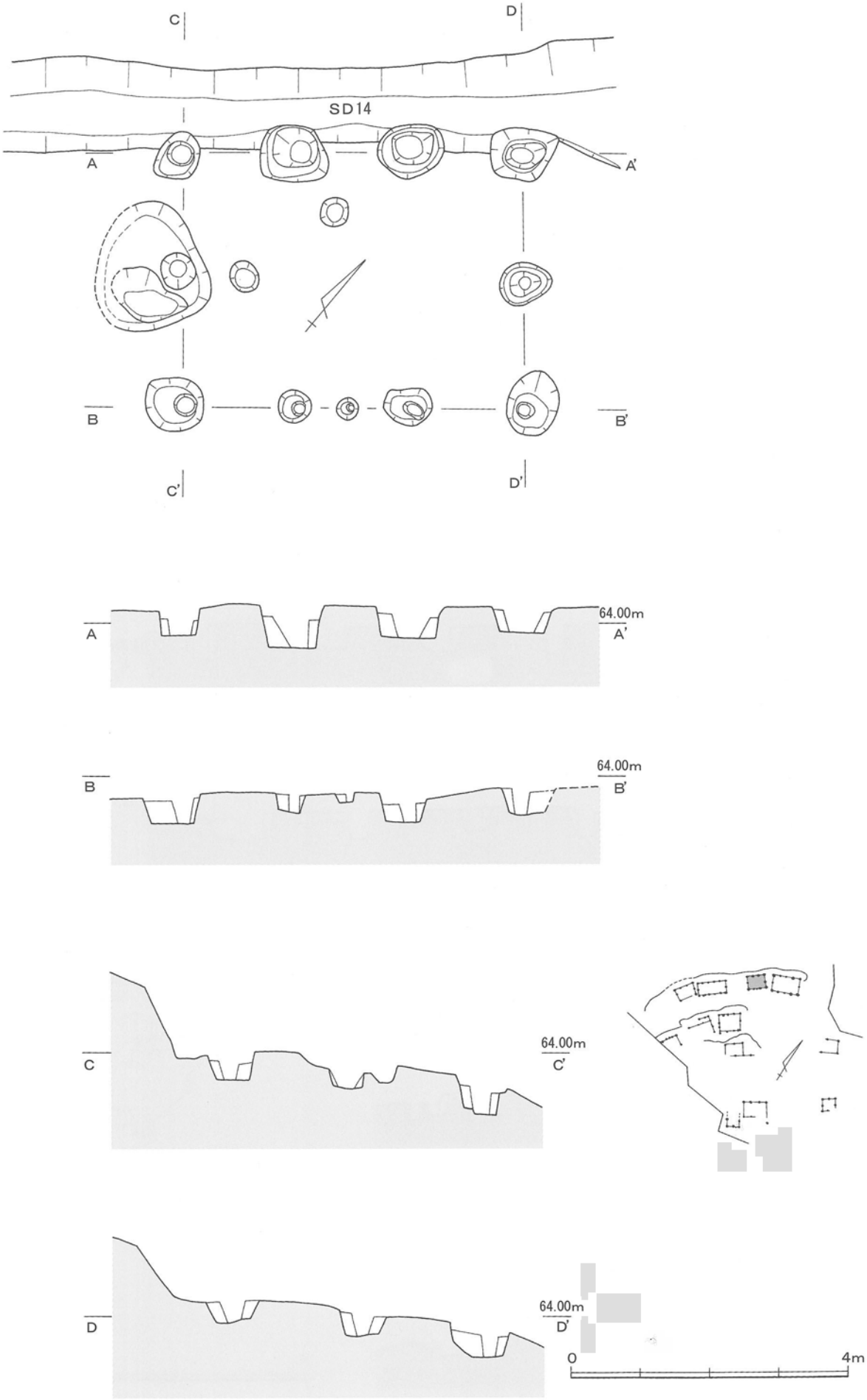



ＳＢ10　実測図

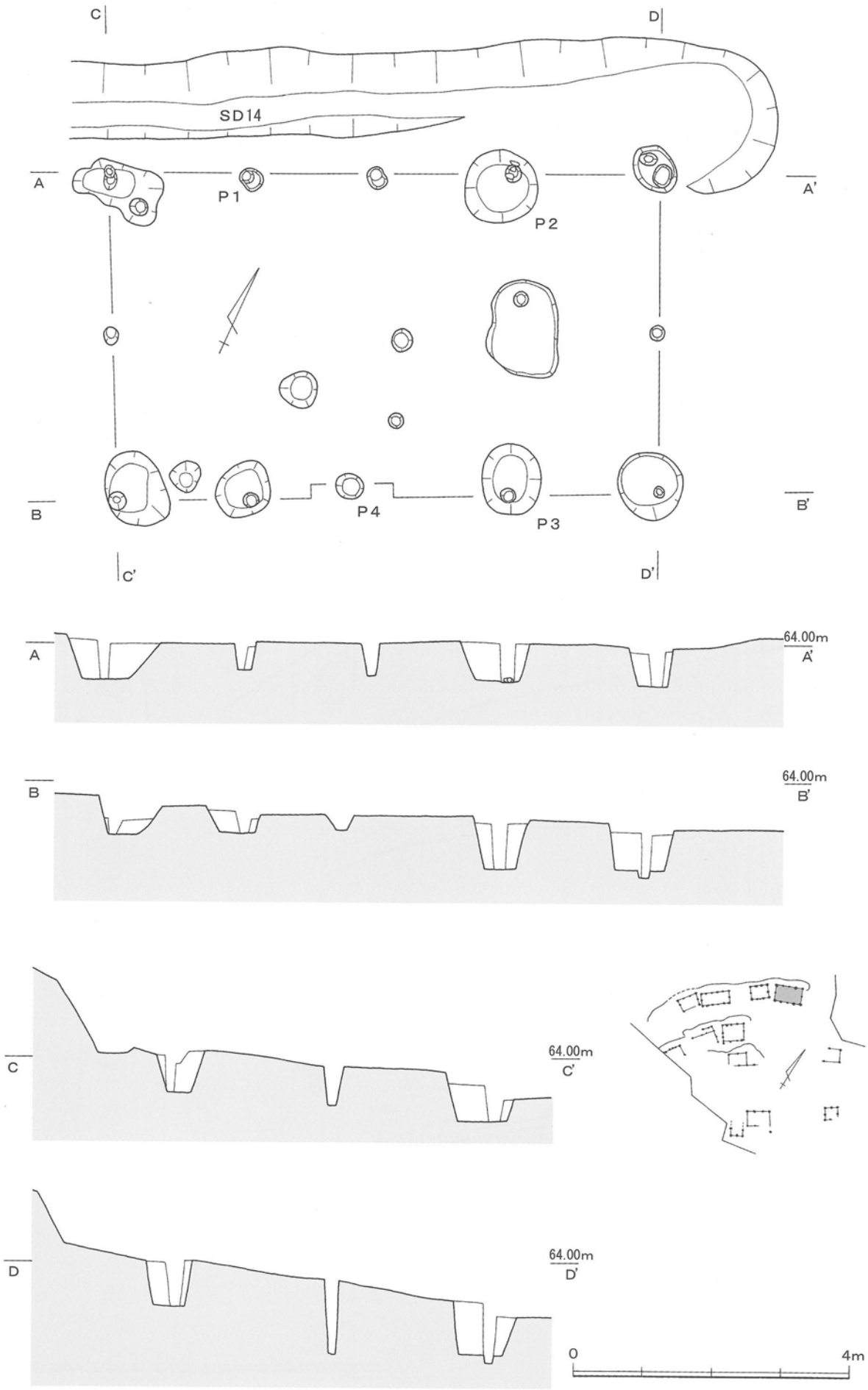



ＳＢ４　実測図

C地区

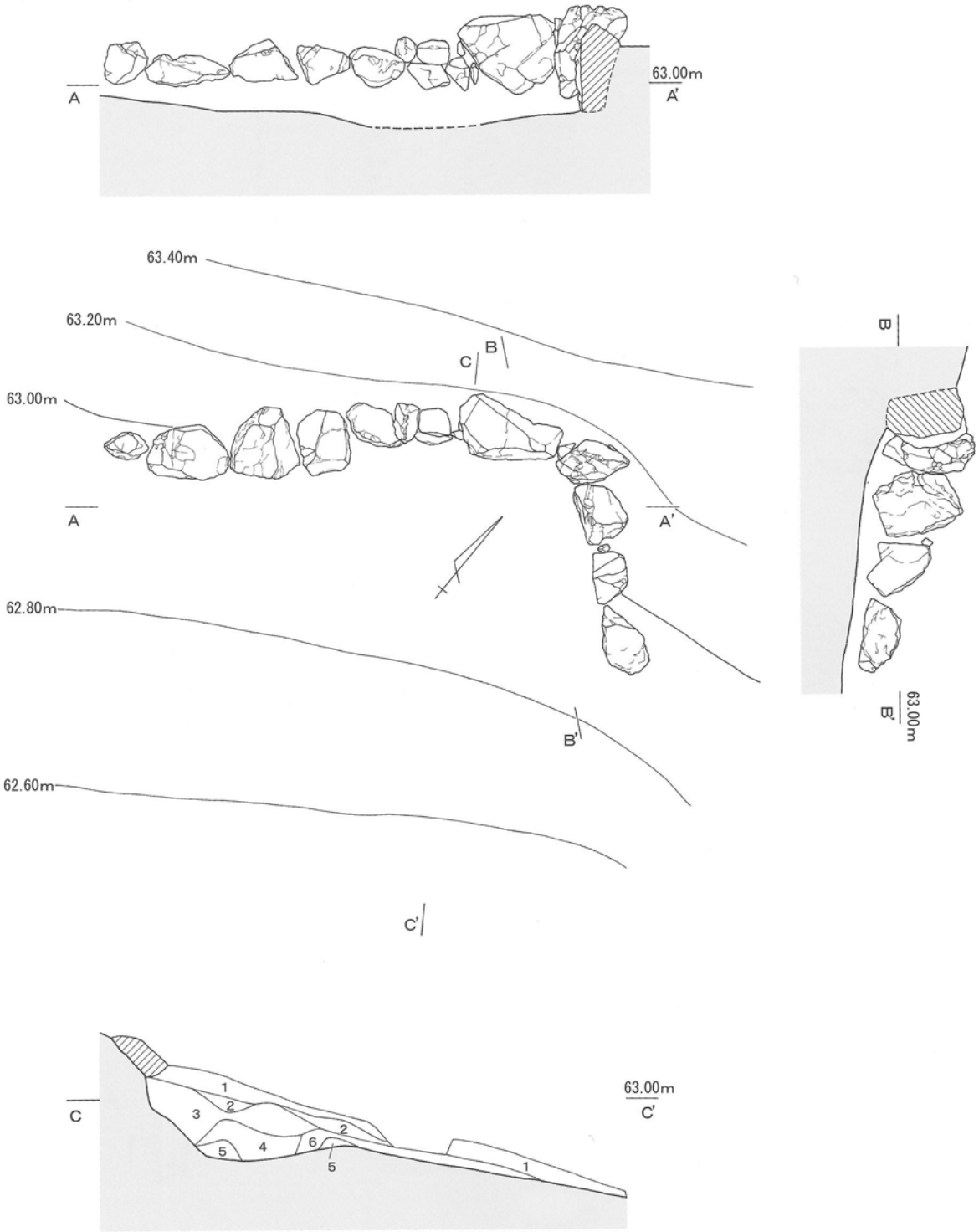



ＳＢ５　実測図


C
D
SD14
A
A'
P1
P2
B
B'
P4
P3
C'
D'
64.00m
A'
A
64.00m
B'
B
64.00m
C'
C
64.00m
D'
D
0
4m

SB6　実測図

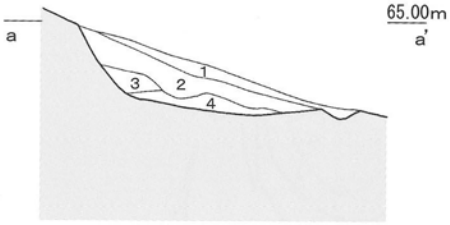
C地区



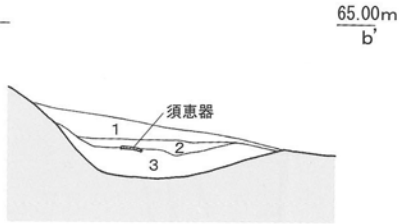

1．7.5Y R5/7 明褐色細粒砂（細礫多く含む）
2．7.5Y R5/8 明褐色細粒砂
3．5 Y R5/8 明赤褐色細粒砂～極細粒砂（細礫多く含む）炭・焼土を含む
4．5 Y R5/6 明赤褐色細粒砂～極細粒砂（中礫多く含む）
5．10Y R5/8 黄褐色細粒砂～極細粒砂（細礫含む）
6．10Y R5/6 黄褐色細粒砂～極細粒砂（中礫含む）

0　2m

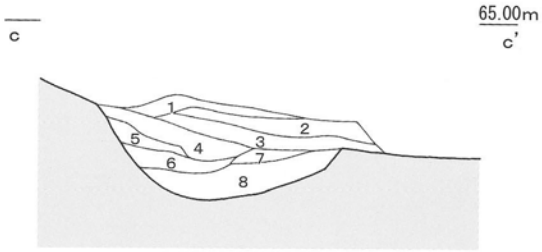
SX 18　実測図



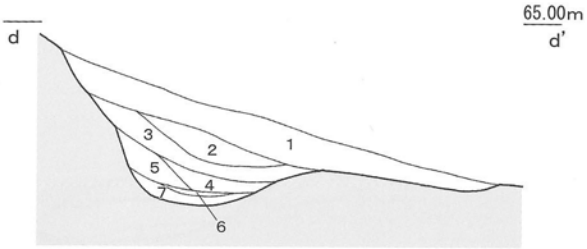

1．10YR5/6 黄褐色細粒砂～極細粒砂（中礫多く含む）
2．10YR5/6 黄褐色細粒砂～極細粒砂
3．10YR4/6 褐色極細粒砂～細粒砂
4．10YR4/6 褐色極細粒砂～細粒砂　炭・焼土を含む



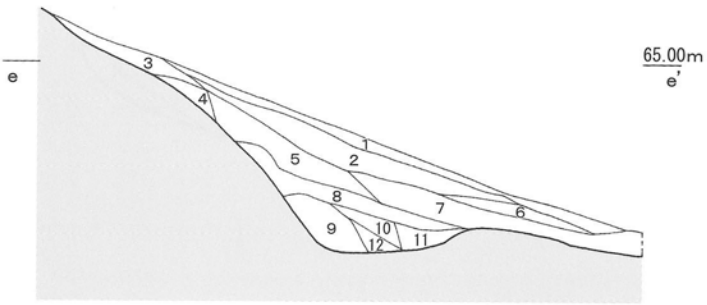

1．10YR5/6 黄褐色細粒砂（中礫多く含む）
2．10YR5/8 黄褐色細粒砂～極細粒砂　焼土を含む
3．10YR4/4 褐色細粒砂～極細粒砂　炭を含む




1．10YR5/8 明黄褐色細粒砂（細礫含む）
2．10YR6/6 明黄褐色細粒砂～極細粒砂（細礫含む）
3．10YR5/6 黄褐色細粒砂～極細粒砂（中礫含む）
4．10YR4/6 褐色細粒砂～極細粒砂（細礫含む）
5．10YR5/6 褐色細粒砂～極細粒砂（細礫含む）
6．5YR4/5 赤褐色細粒砂～極細粒砂（細礫含む）土器・炭・焼土を多く含む
7．7.5YR5/6 明褐色細粒砂～極細粒砂（細礫含む）
8．10YR4/5 褐色細粒砂（細礫多く含む）炭まばらに入る。




1．7.5YR5/6 明褐色細粒砂～極細粒砂（細礫多く含む）
2．7.5YR5/5 にぶい褐色細粒砂～極細粒砂
3．10YR5/5 にぶい黄褐色細粒砂
4．7.5YR5/6 明褐色細粒砂～極細粒砂（細礫含む）
5．7.5YR5/8 明褐色極細粒砂～細粒砂
6．10YR5/5 にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂
7．7.5YR5/6 明褐色極細粒砂～細粒砂

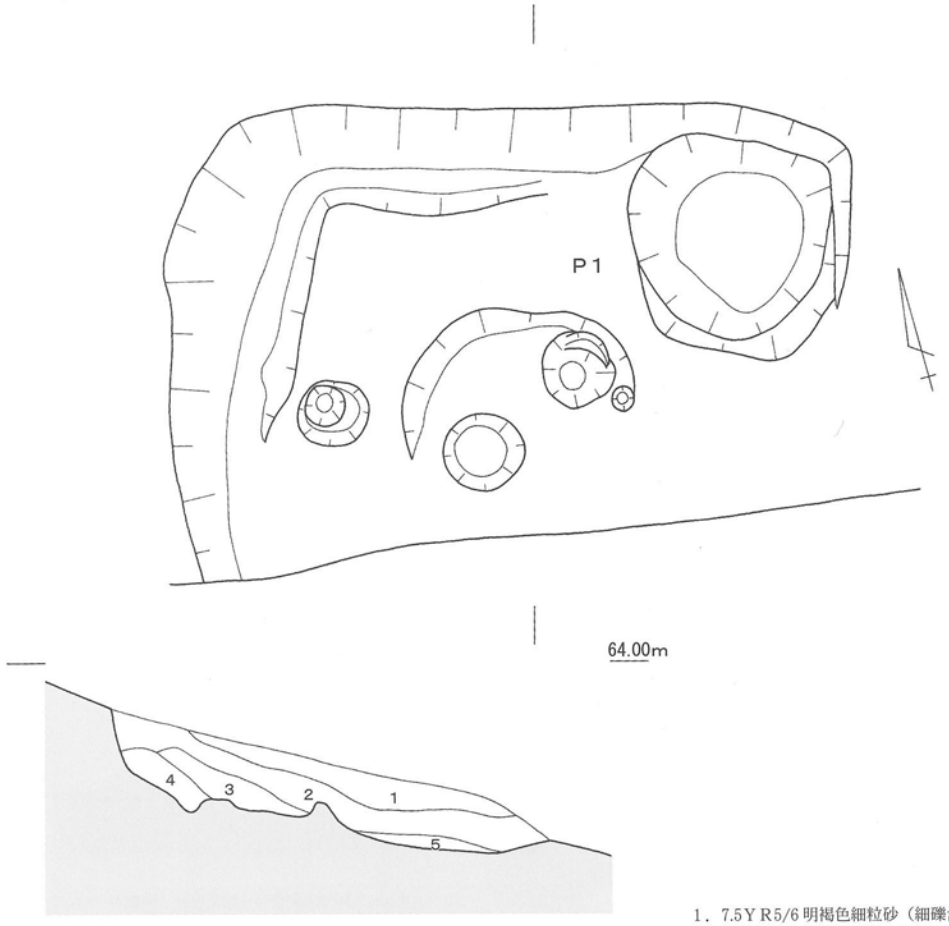



1．10YR5/6 黄褐色細粒砂（中礫多く含む）
2．10YR5/5 にぶい黄褐色細粒砂（細礫含む）
3．10YR5/5 にぶい黄褐色細粒砂（細礫多く含む）
4．10YR5/6 黄褐色細粒砂（細礫含む）
5．7.5YR5/6 明褐色細粒砂（細礫含む）
6．10YR6/4 にぶい黄橙色細粒砂（細礫多く含む）
7．10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂（細礫ひじょうに多く含む）
8．10YR5/6 にぶい黄褐色細粒砂（中礫含む）
9．5YR5/8 明赤褐色細粒砂～極細粒砂（細礫含む）
10．7.5YR5/6 明褐色細粒砂～極細粒砂（細礫含む）
11．7.5YR5/8 明褐色細粒砂～極細粒砂（細礫含む）
12．7.5YR5/6 明褐色細粒砂～極細粒砂（細礫含む）

ＳＤ14　実測図

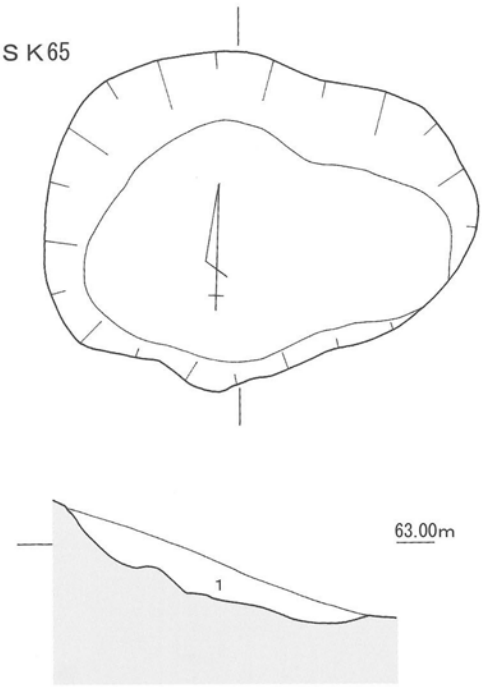
C地区

SK63



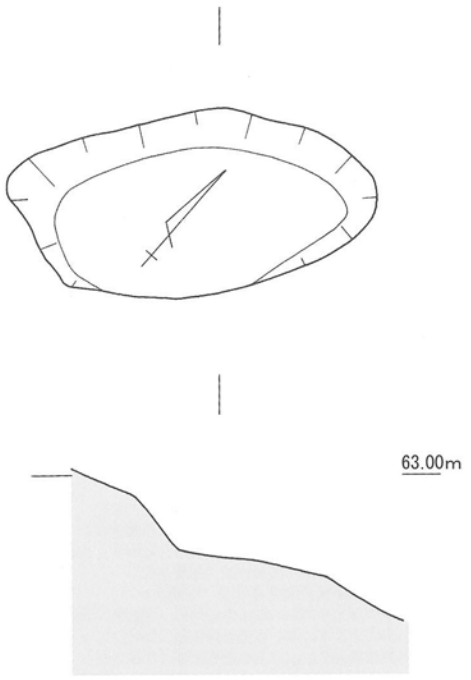

1．7.5YR5/6 明褐色細粒砂（細礫含む）
2．7.5YR4/5 褐色細粒砂～極細粒砂（細礫含む）炭と焼土を含む
3．7.5YR4/4 褐色極細粒砂～細粒砂（細礫含む）炭を含む
4．7.5YR5/8 明褐色極細粒砂～細粒砂（細礫含む）少量炭を含む
5．7.5YR5/6 明褐色細粒砂（細礫含む）

SK65



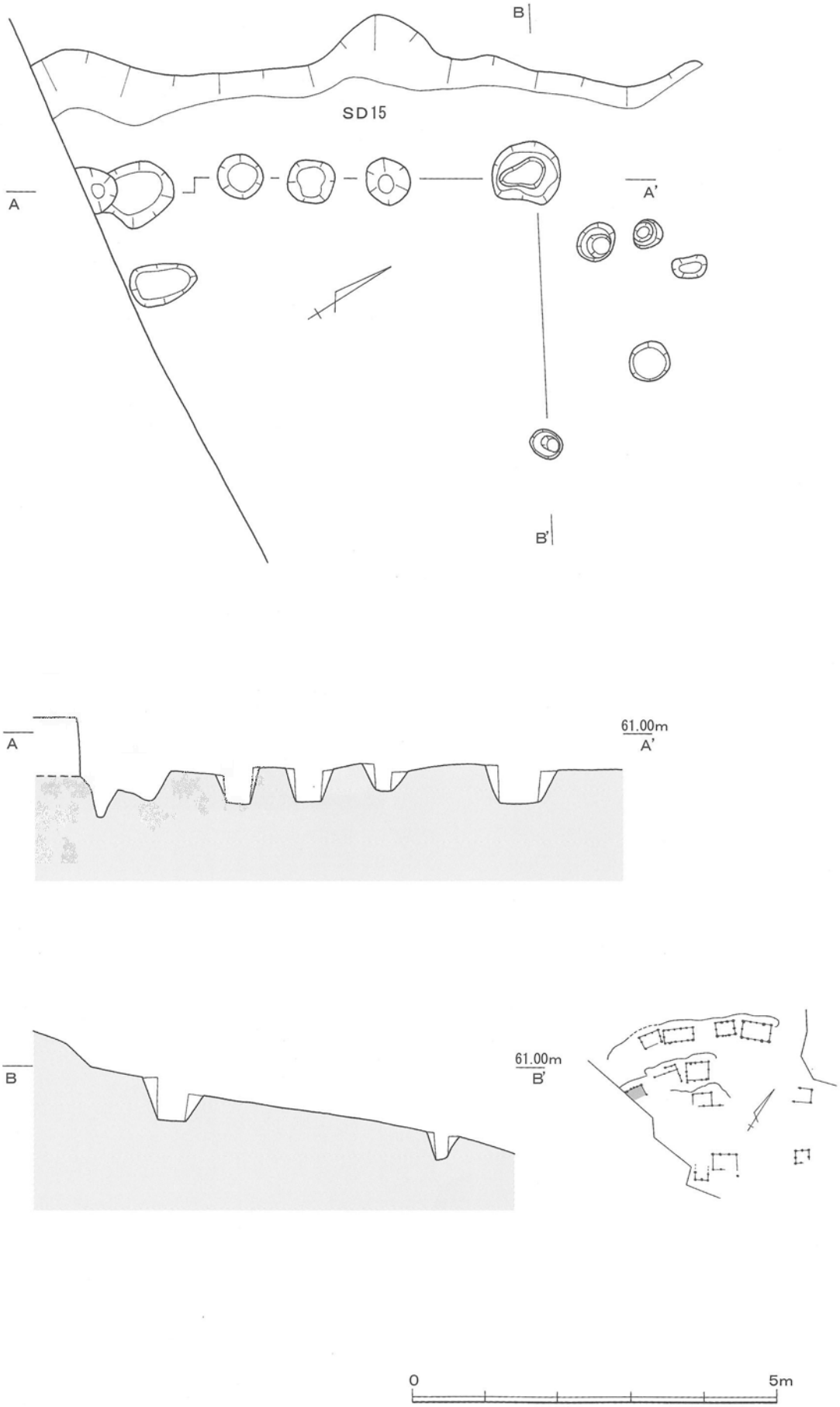

1．10YR5/4 褐色細粒砂（細礫多く含む）

SK66



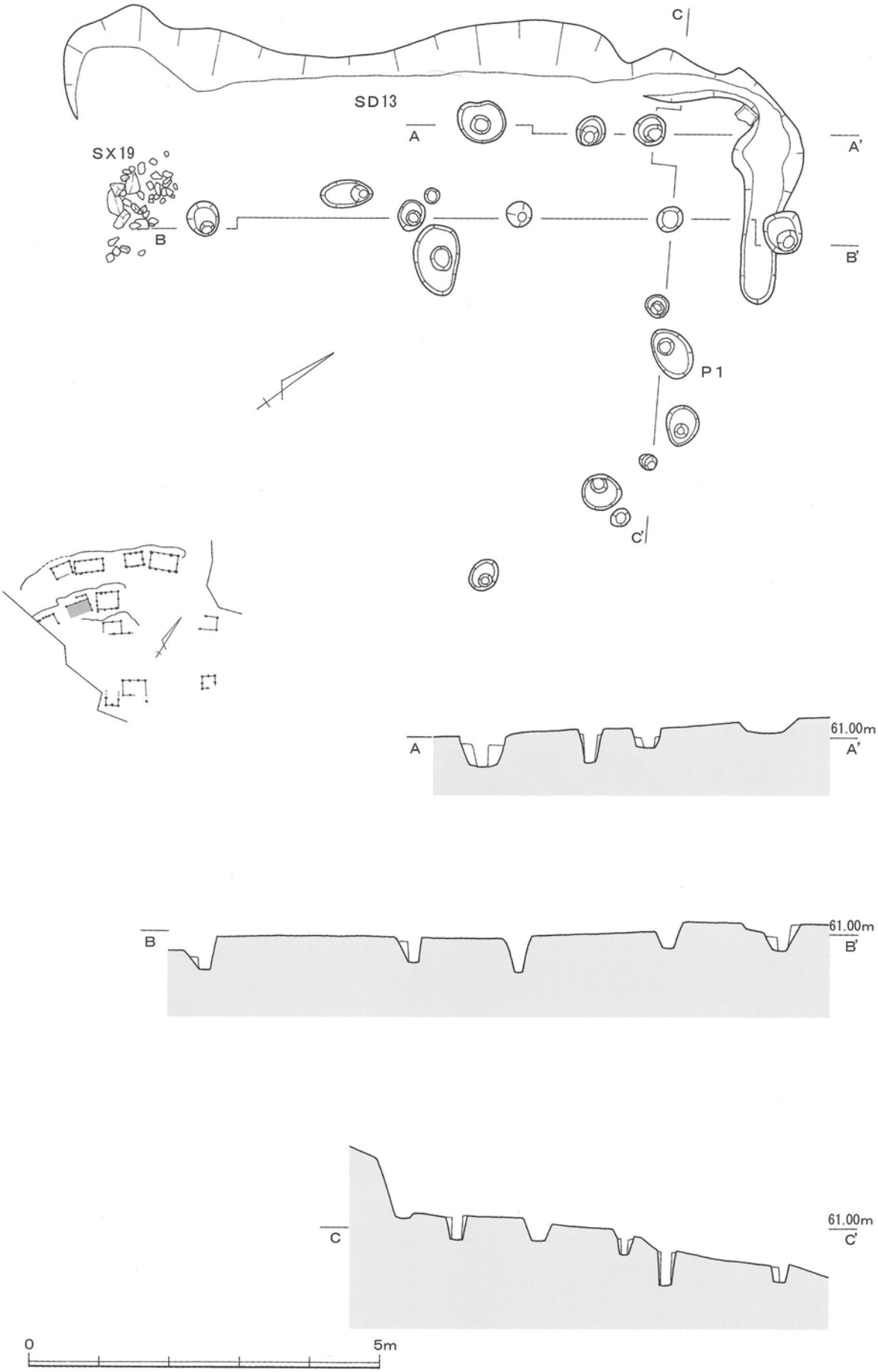

0　2m

SK63・65・66　実測図




ＳＢ11　実測図

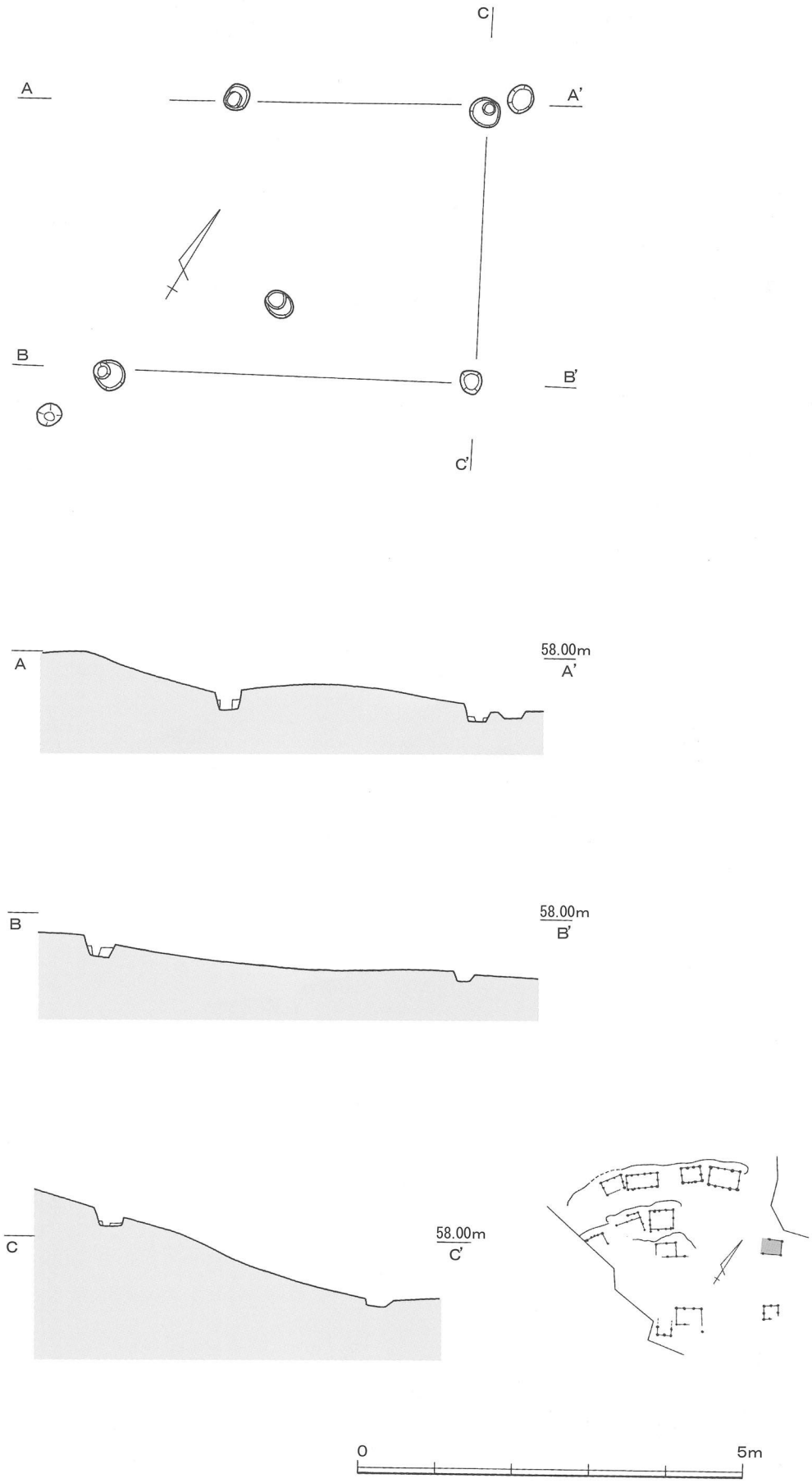
C地区




ＳＢ12　実測図

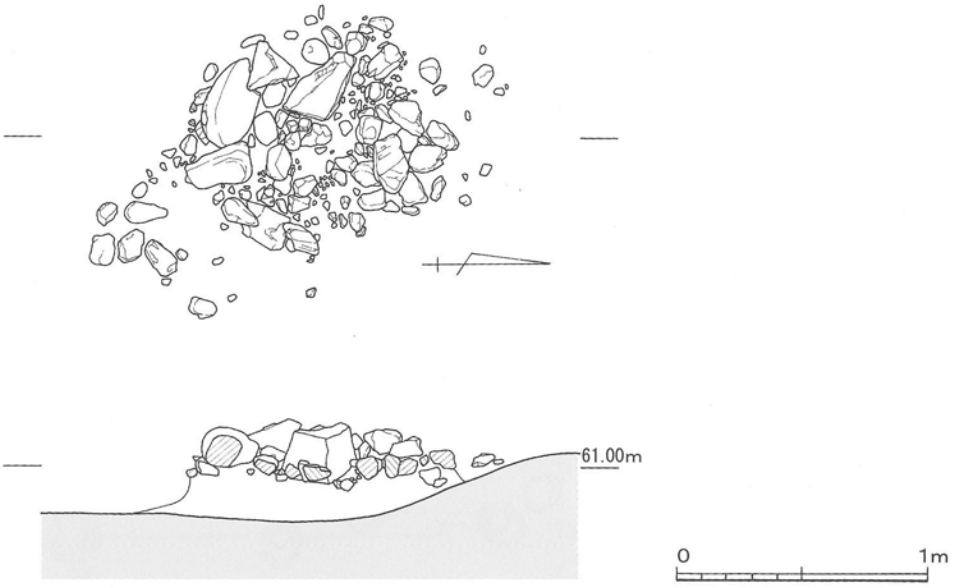
C地区

SB13　実測図

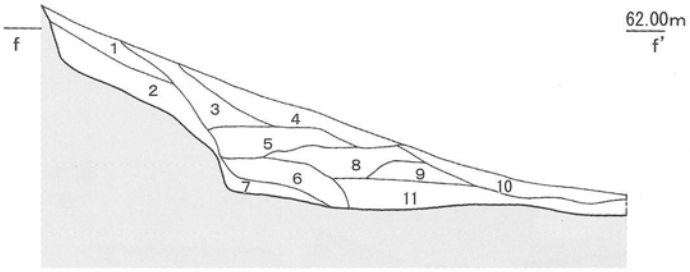



ＳＢ８　実測図

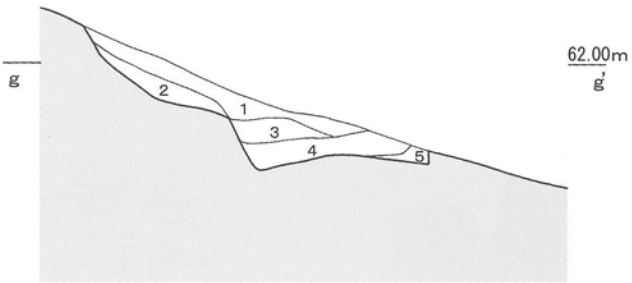
ＳＸ19




ＳＤ13

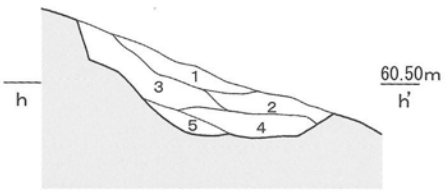



1．7.5Ｙ R5/6 明褐色細粒砂
2．7.5Ｙ R6/6 橙色細粒砂（中礫含む）
3．5 Ｙ R5/6 明褐色細粒砂（細礫含む）
4．5 Ｙ R5/6 明褐色細粒砂～極細粒砂
5．7.5Ｙ R5/6 明褐色極細粒砂～細粒砂（中礫含む）
6．7.5Ｙ R5/5 にぶい褐色極細粒砂～細粒砂
7．10Ｙ R5/6 黄褐色極細粒砂
8．7.5Ｙ R5/6 明褐色極細粒砂～細粒砂（中礫含む）
9．10Ｙ R5/8 黄褐色極細粒砂～細粒砂（細礫含む）
10．7.5Ｙ R5/5 明褐色細粒砂（中礫含む）
11．7.5Ｙ R5/6 明褐色細粒砂（中礫含む）




1．10Ｙ R4/4 褐色細粒砂～極細粒砂（細礫含む）
2．10Ｙ R5/6 褐色細粒砂～極細粒砂（細礫含む）
3．7.5Ｙ R4/5 褐色細粒砂～極細粒砂（細礫含む）
4．10Ｙ R5/6 黄褐色細粒砂（中礫含む）
5．7.5Ｙ R5/6 褐色細粒砂（中礫多く含む）

ＳＫ64

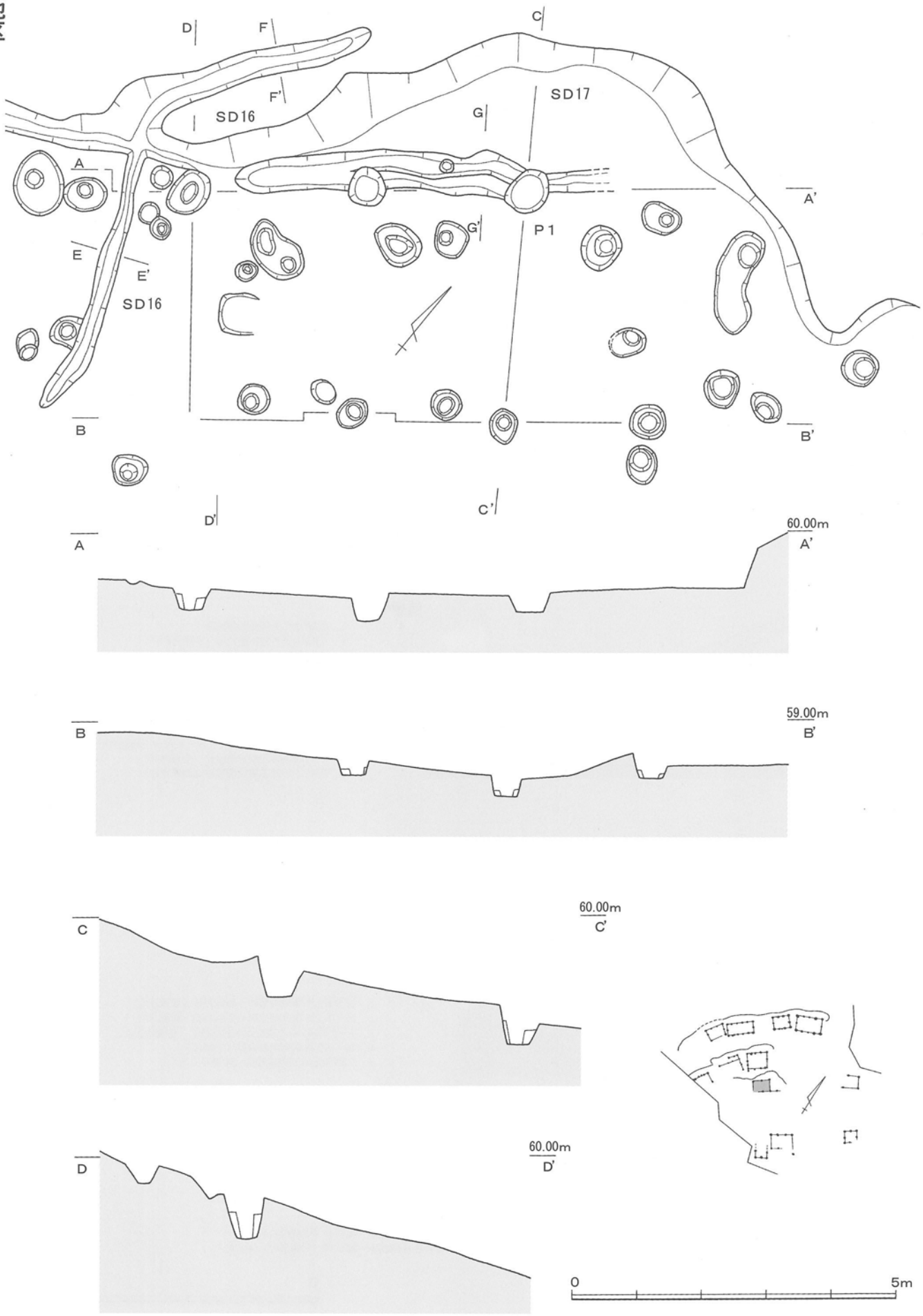



1．10Ｙ R6/8 明黄褐色極細粒砂～細粒砂（中礫含む）
2．10Ｙ R4/2 灰黄褐色極細粒砂
3．10Ｙ R5/4 にぶい黄褐色極細粒砂
4．10Ｙ R3/3 暗褐色極細粒砂～細粒砂（中礫含む）
5．10Ｙ R4/1 褐灰色極細粒砂～細粒砂（中礫含む）炭含む

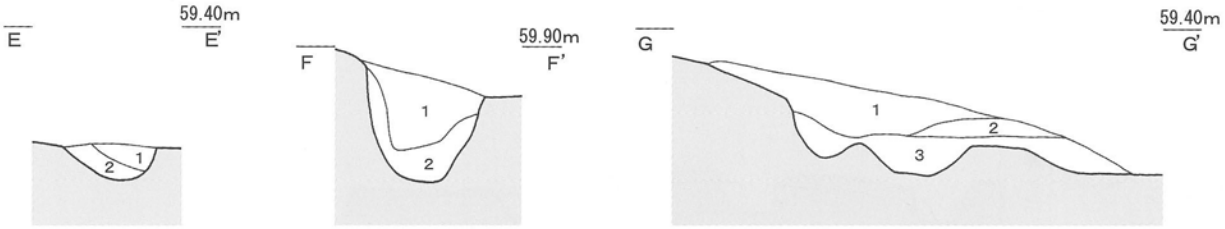
0　2m

ＳＸ 19・ＳＤ 13・ＳＫ 64　実測図

C地区

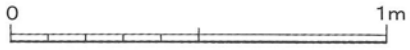

D
F
C
F'
SD16
SD17
G
A
A'
G'
P1
E
E'
SD16
B
B'
D'
C'
60.00m
A
A'
59.00m
B
B'
60.00m
C
C'
60.00m
D
D'
0
5m

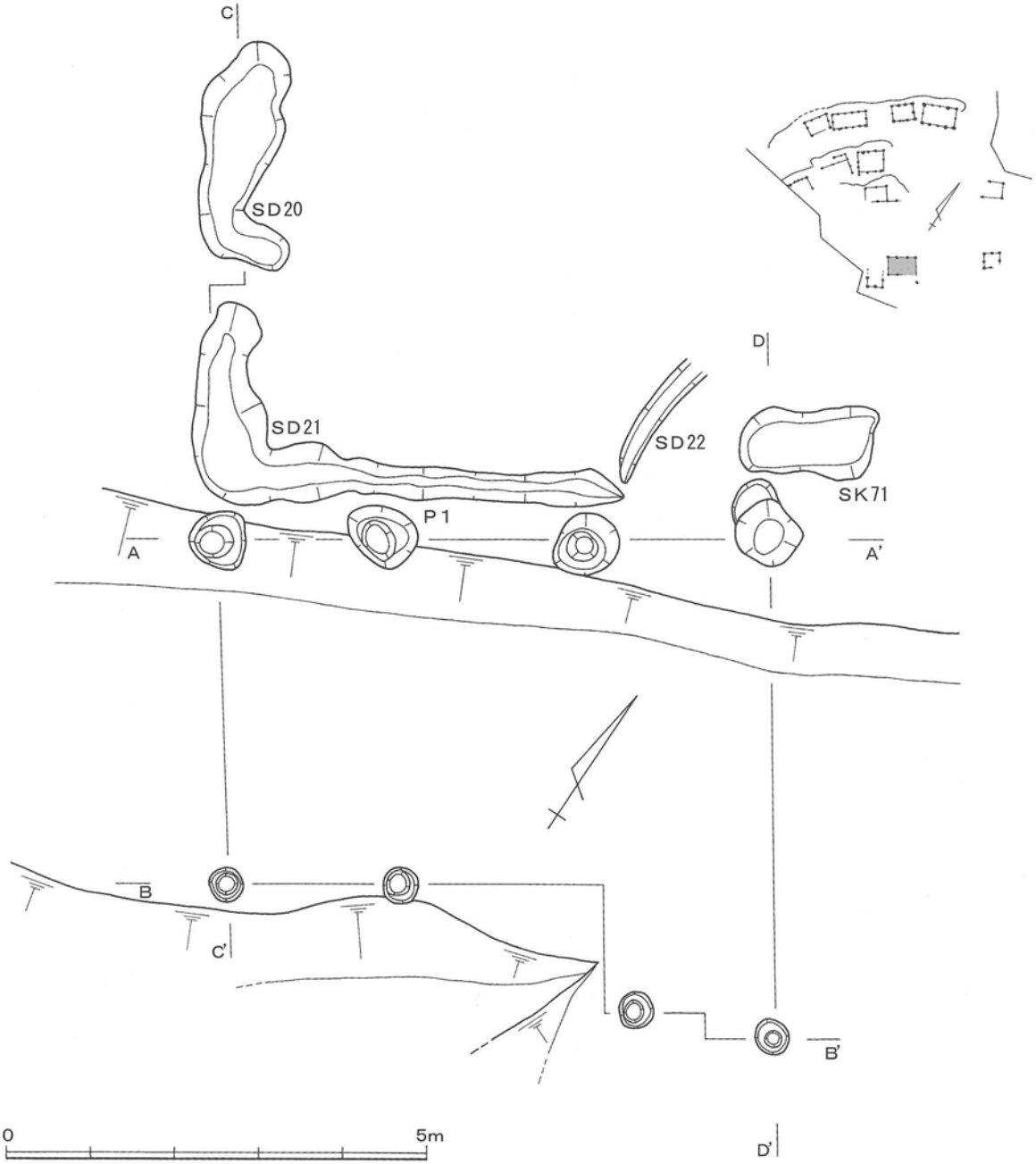
ＳＢ14　実測図




1．10YR4/2にぶい黄褐色極細粒砂
2．10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂（細礫含む）

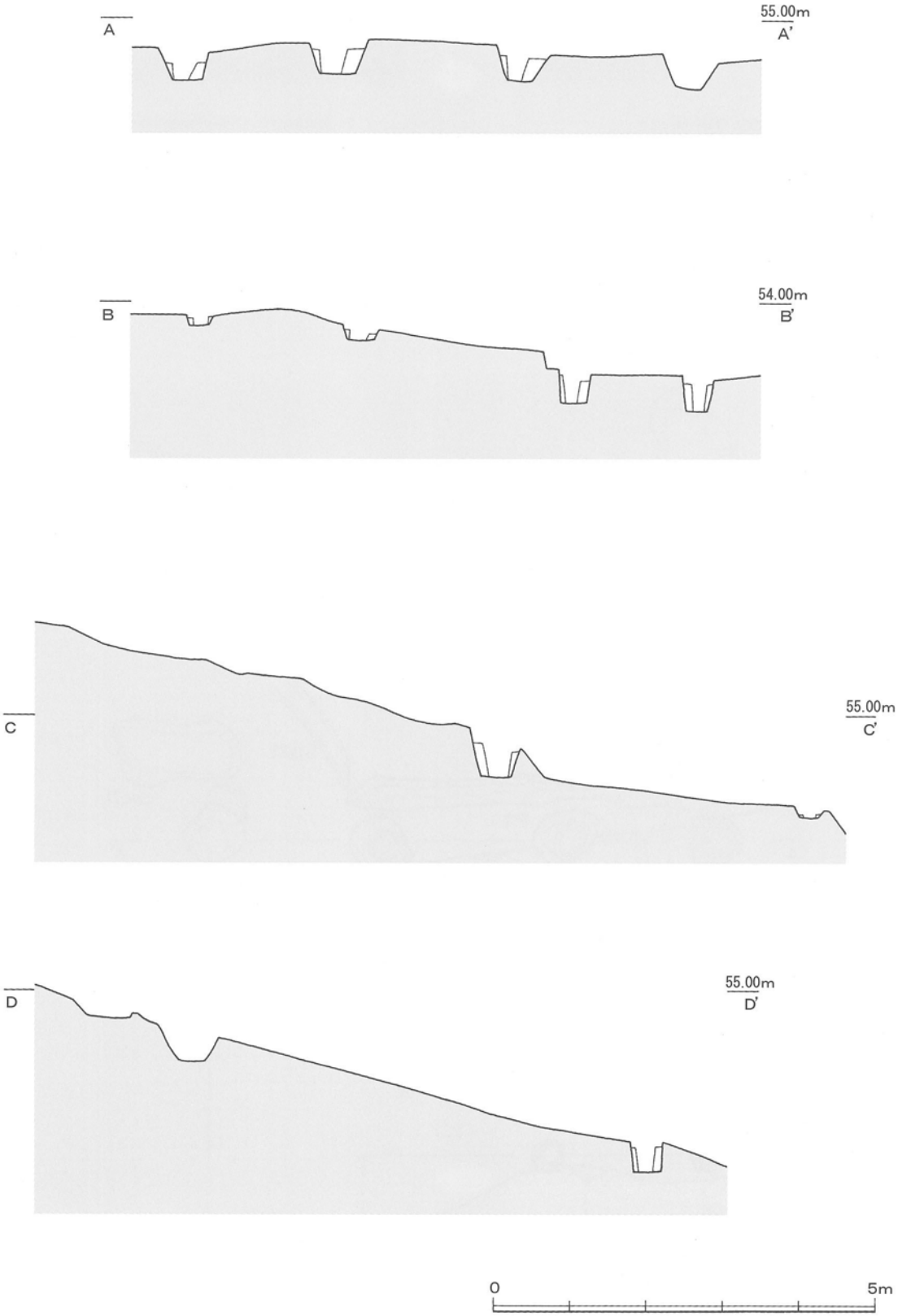
1．10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂（細礫含む）
2．10YR6/6明黄褐色細粒砂（細礫含む）
3．10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂　炭を含む



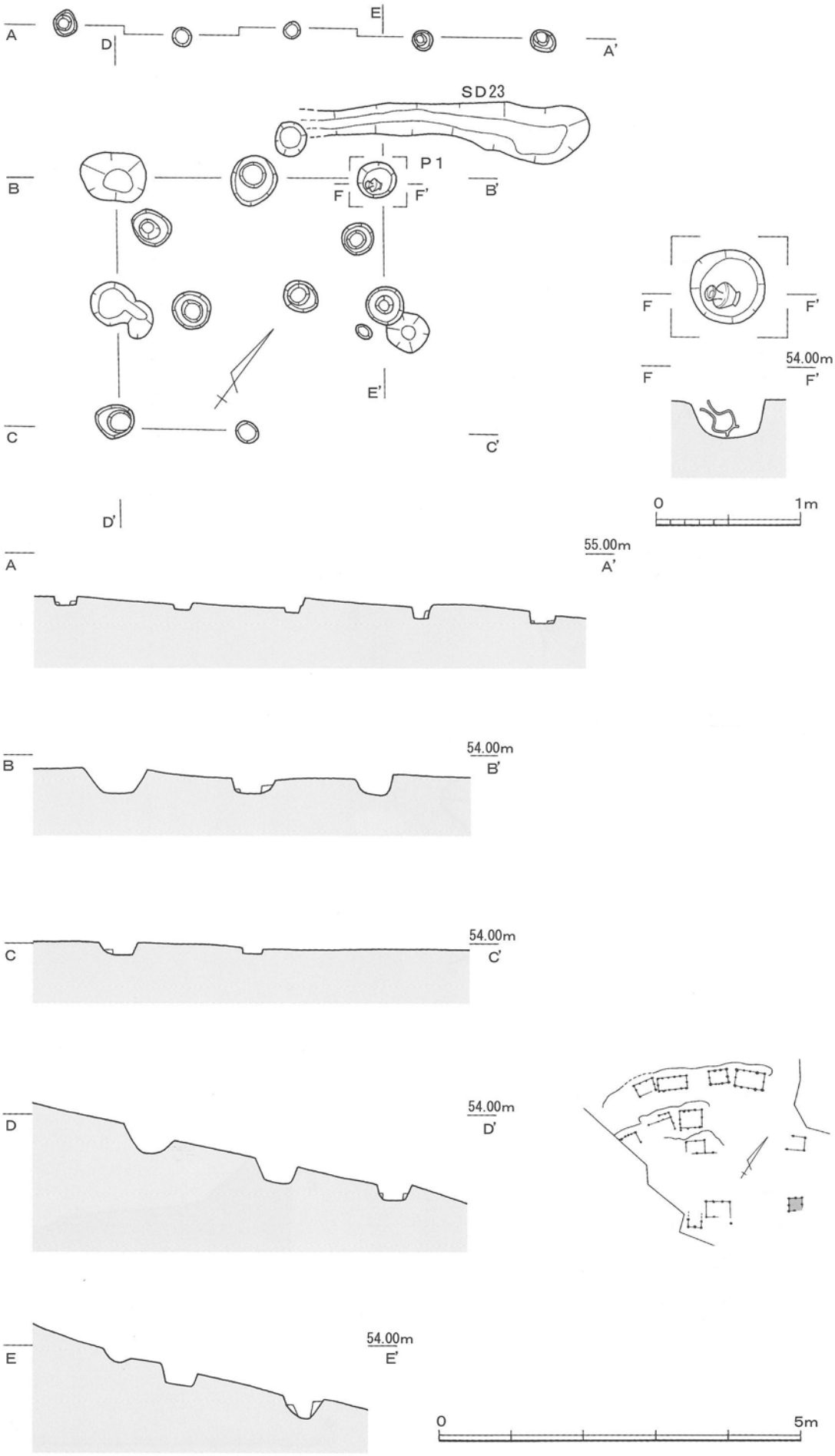




ＳＤ16・17　土層断面図、ＳＢ７平面図

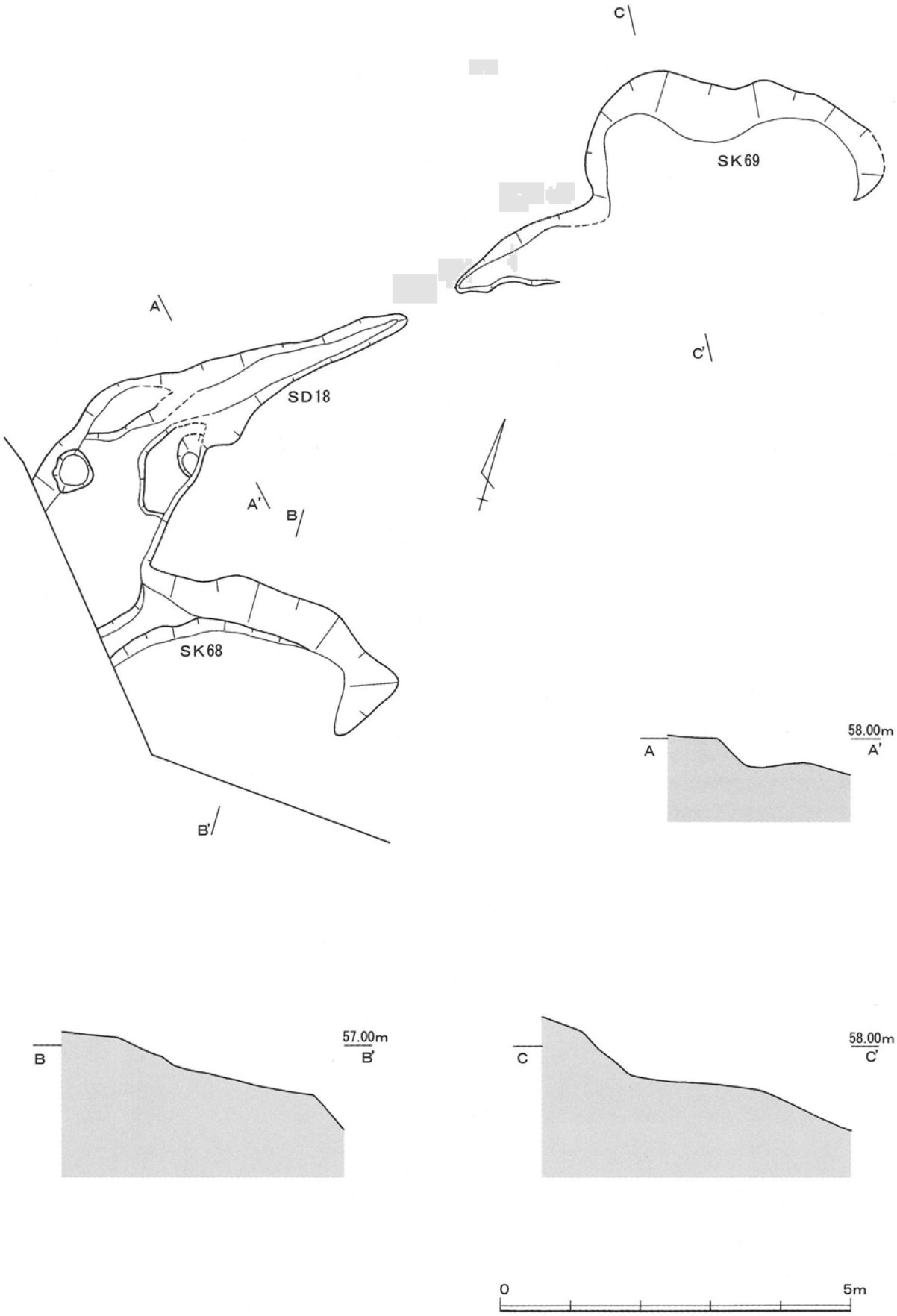
C地区




ＳＢ７　断面図

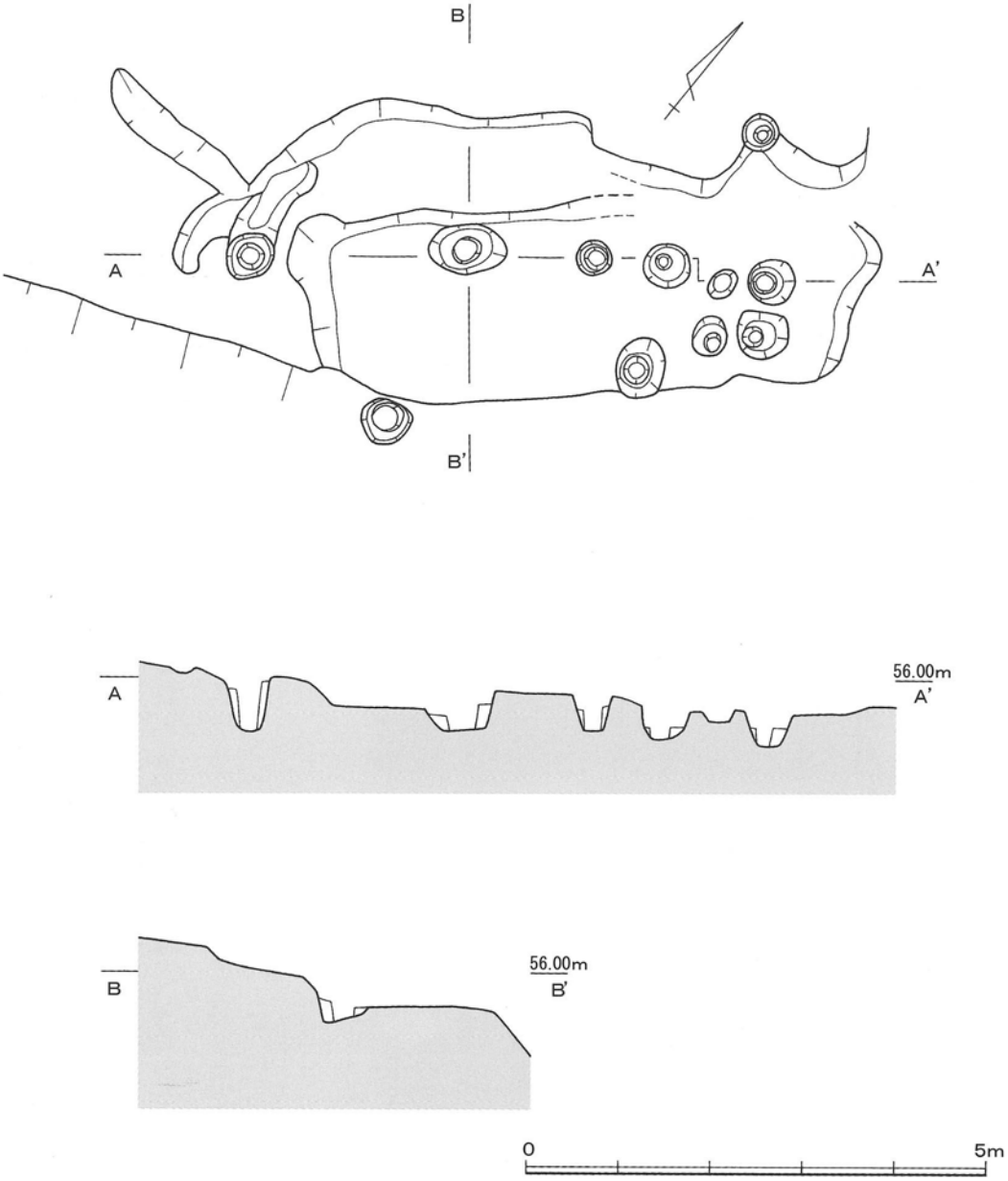



ＳＢ９　実測図

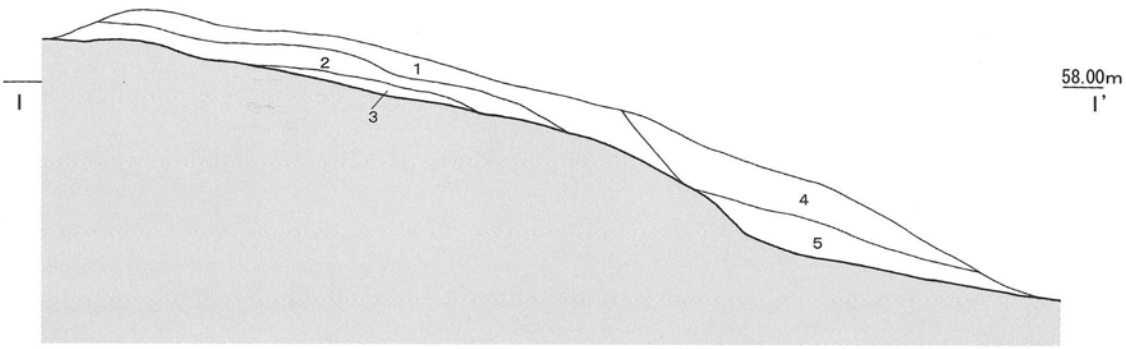



ＳＤ18・ＳＫ68・69　実測図

ＳＫ70




ＳＫ72

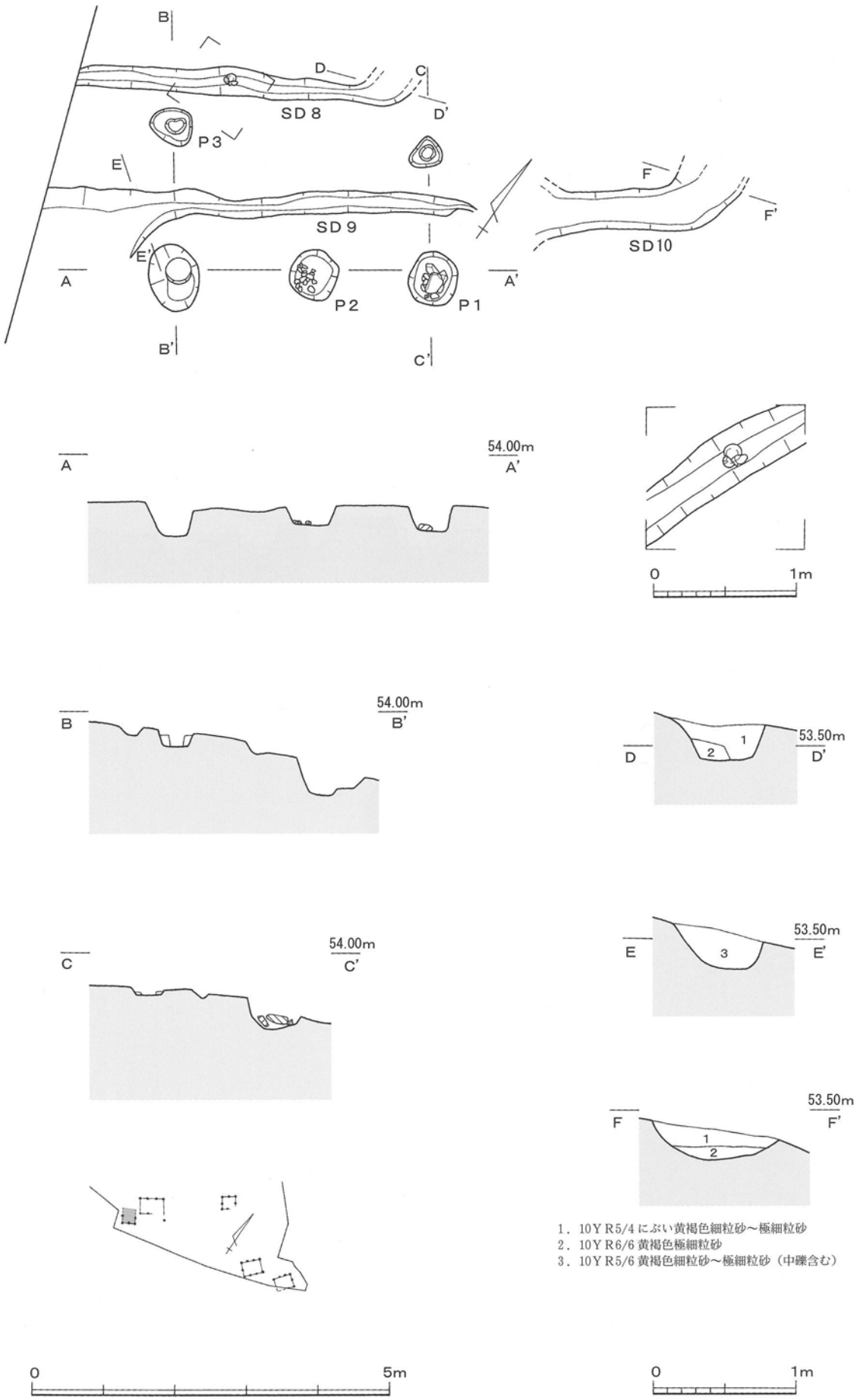



1．10ＹＲ5/6 黄褐色細粒砂（中礫含む）
2．7.5ＹＲ5/6 明褐色細粒砂（細礫含む）
3．10ＹＲ5/6 褐色極細粒砂～細粒砂
4．10ＹＲ4/4 褐色細粒砂～極細粒砂（中礫含む）　焼土・炭含む
5．10ＹＲ5/6 黄褐色細粒砂（中礫含む）

0　2m

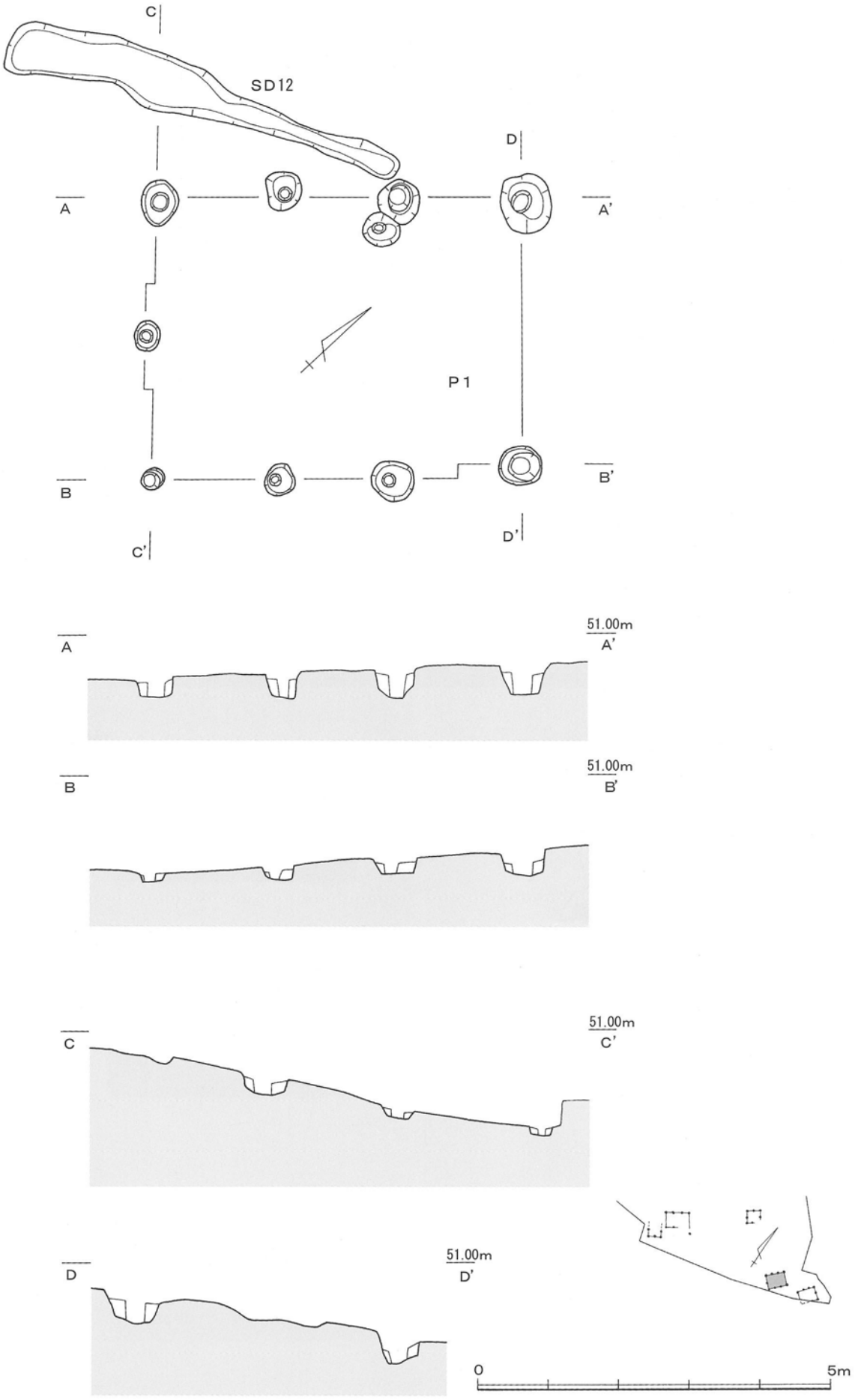
ＳＫ70　実測図、ＳＫ72　土層断面図

B地区



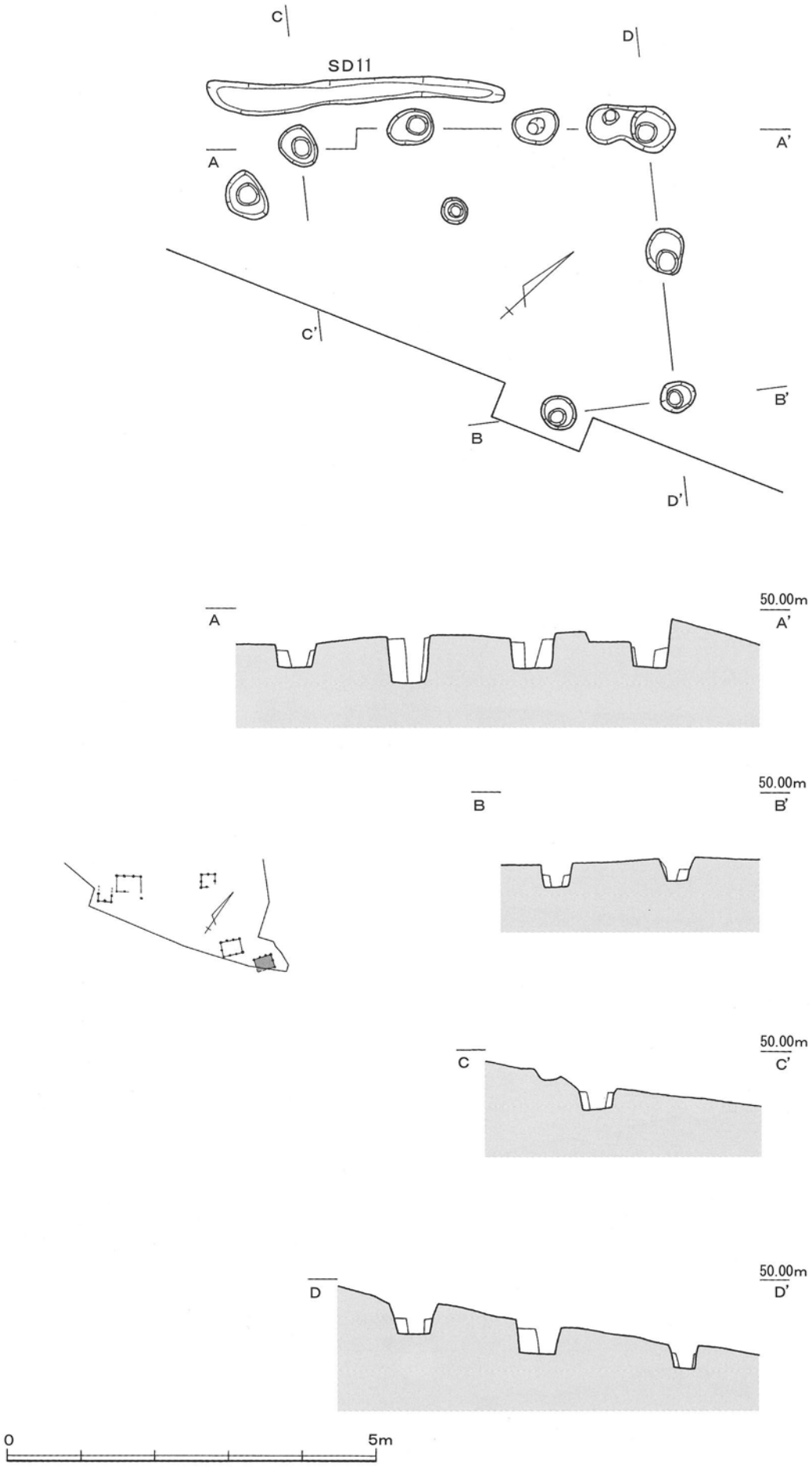

1．10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂～極細粒砂
2．10YR6/6 黄褐色極細粒砂
3．10YR5/6 黄褐色細粒砂～極細粒砂（中礫含む）

SB1・SD8・9・10　実測図

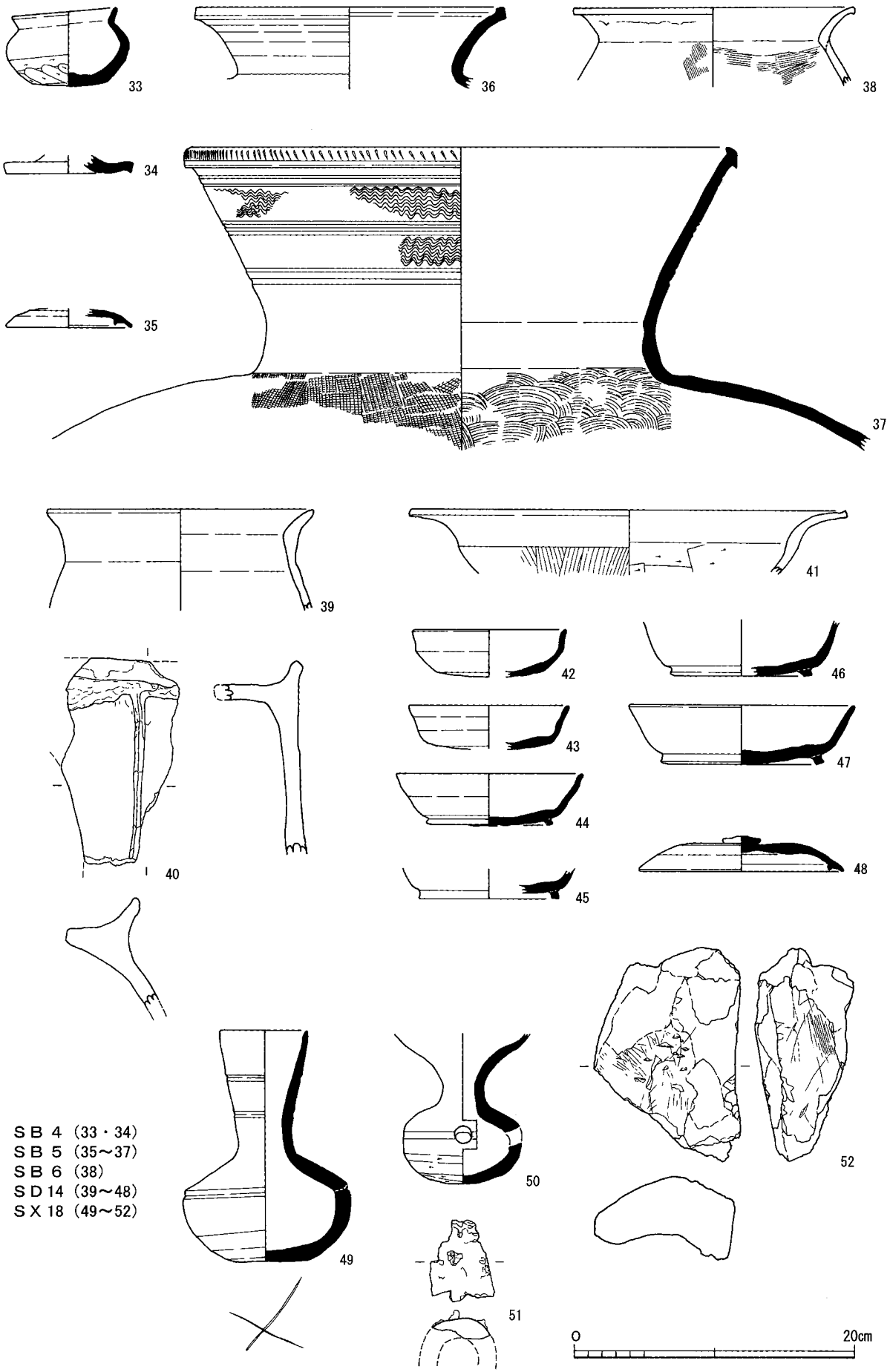



ＳＢ２・ＳＤ12　実測図

B地区



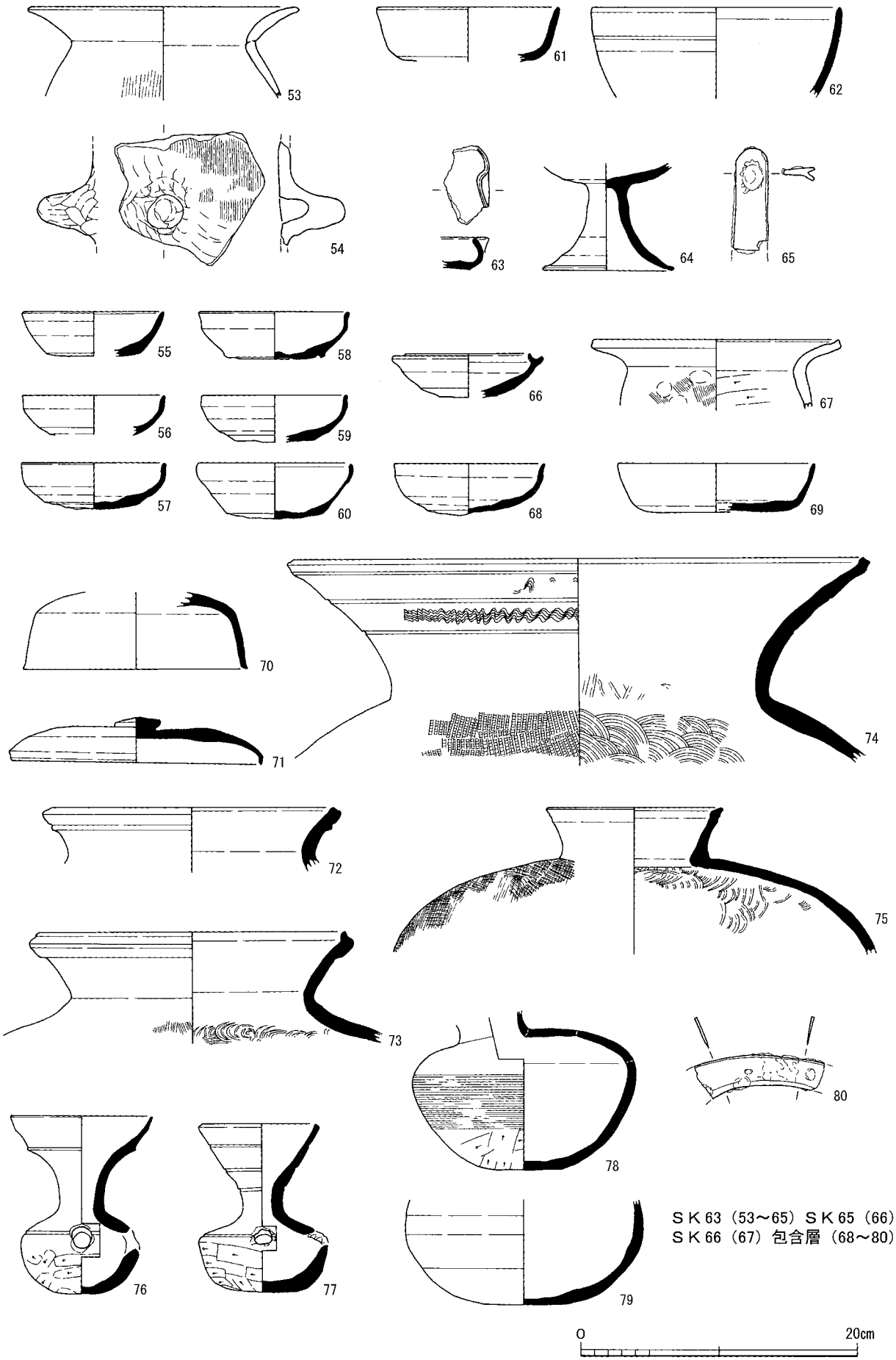

SB3・SD11　実測図




ＳＢ４（33・34）
ＳＢ５（35～37）
ＳＢ６（38）
ＳＤ14（39～48）
ＳＸ18（49～52）

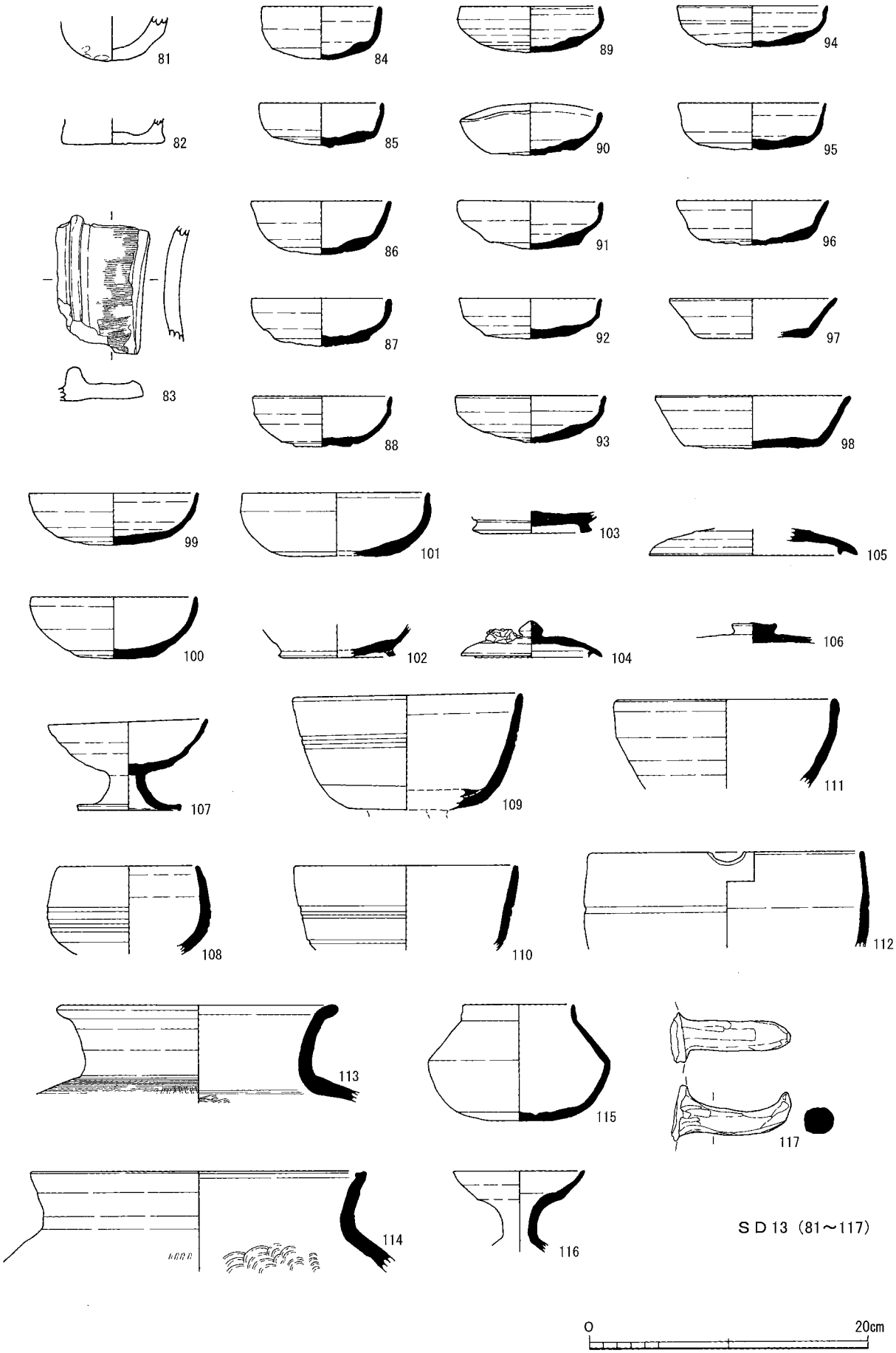
上段出土遺物（1）

C地区


53
61
62
54
63
64
65
55
58
66
67
56
59
57
60
68
69
70
71
74
72
75
73
80
78
76
77
79
SK63（53～65）SK65（66）
SK66（67）包含層（68～80）
0
20cm

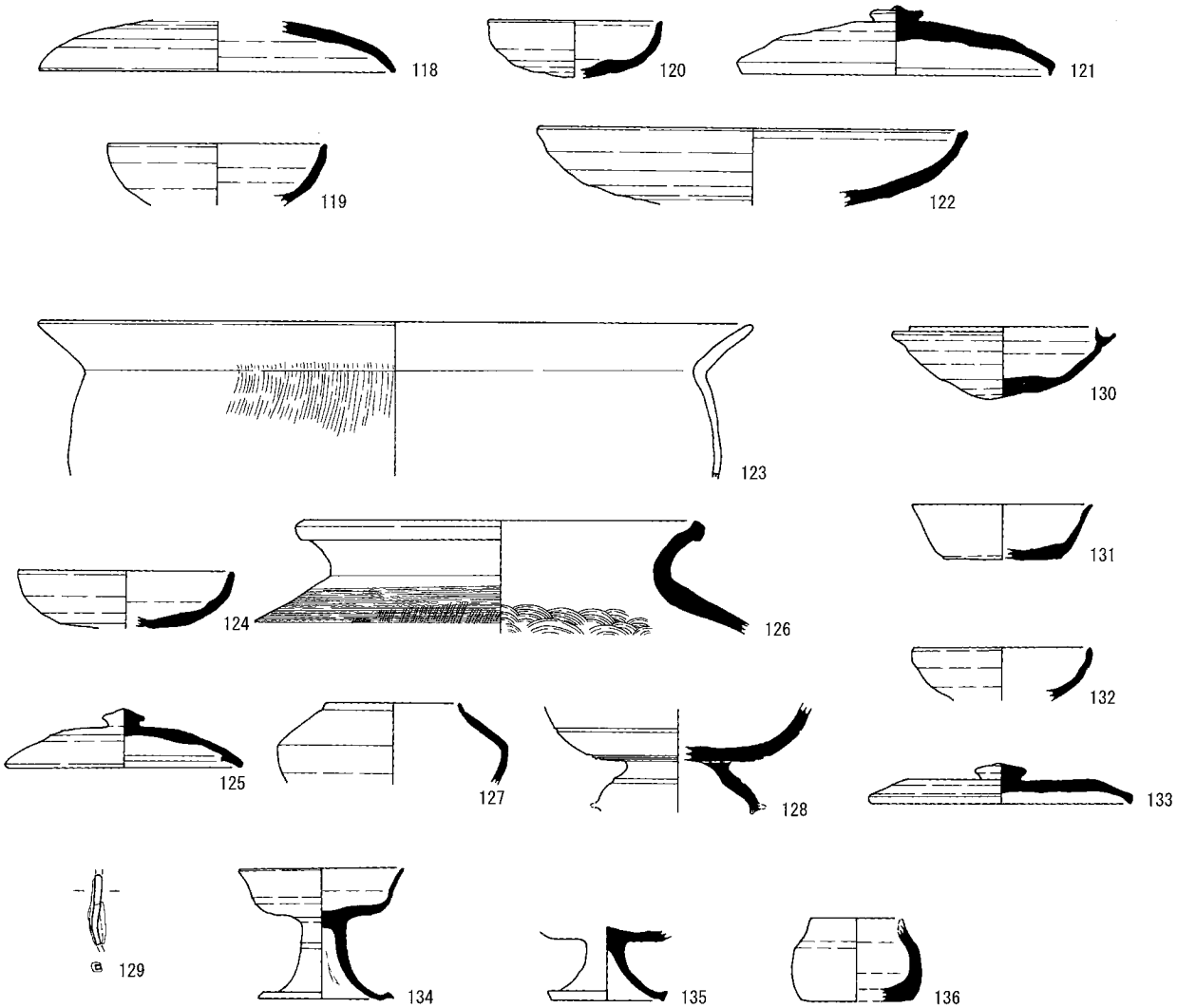
上段出土遺物（2）

C地区

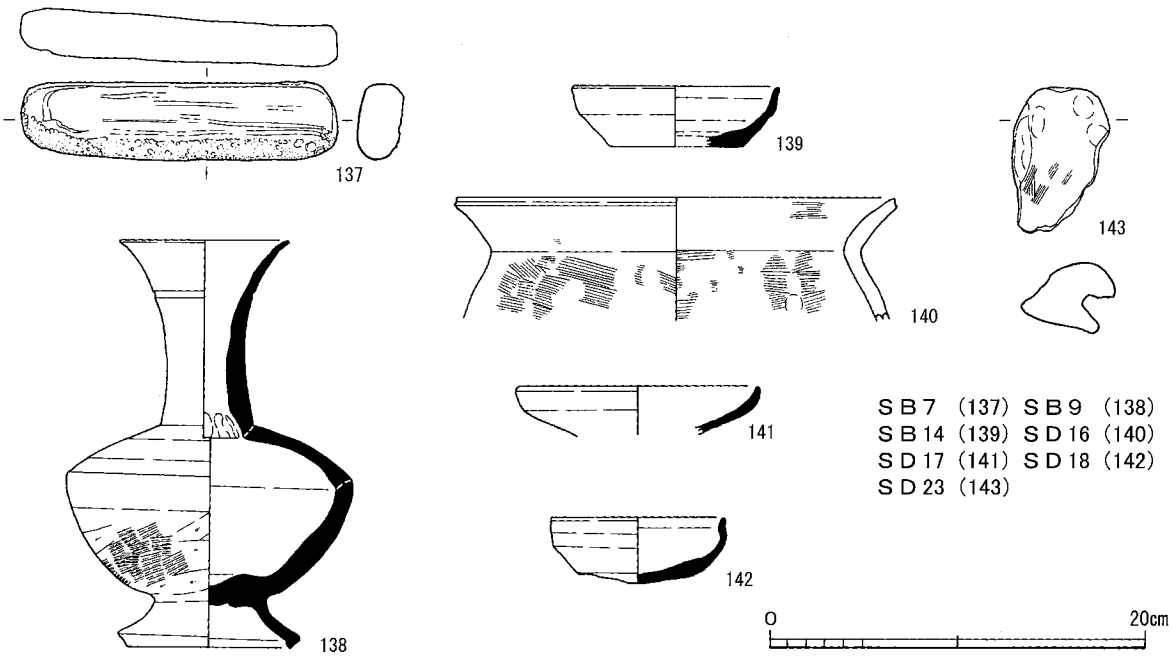

81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
SD13（81～117）
0
20cm

中段出土遺物（1）

C地区

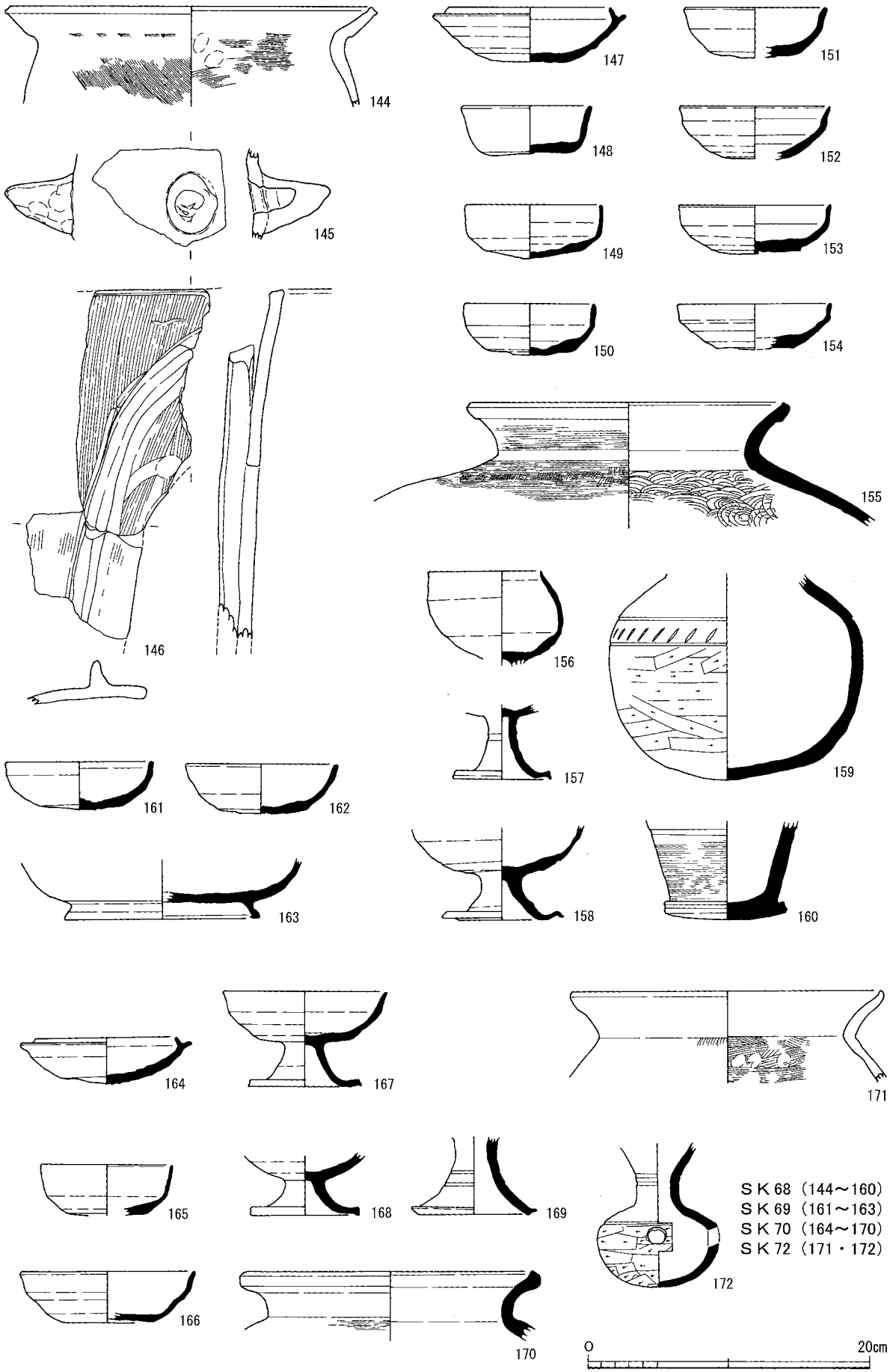



ＳＢ12（118）ＳＢ13（119）
ＳＢ15（120～122）ＳＫ64（123～129）
柱穴（130～133）包含層（134～136）



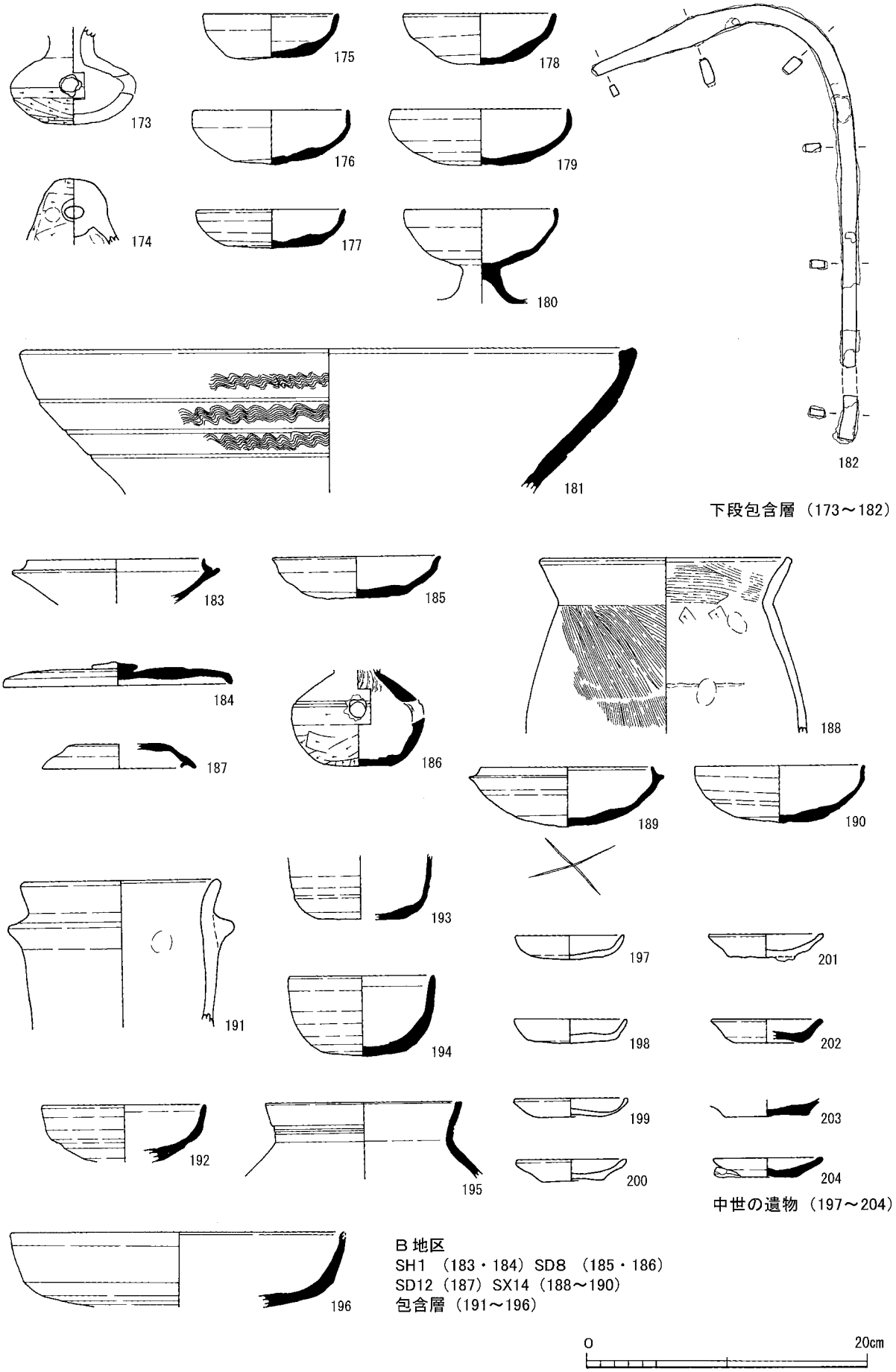

ＳＢ７（137）ＳＢ９（138）
ＳＢ14（139）ＳＤ16（140）
ＳＤ17（141）ＳＤ18（142）
ＳＤ23（143）

中段出土遺物（2）下段出土遺物（1）


144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
SK68（144～160）
SK69（161～163）
SK70（164～170）
SK72（171・172）
0
20cm

下段出土遺物（2）

B・C地区



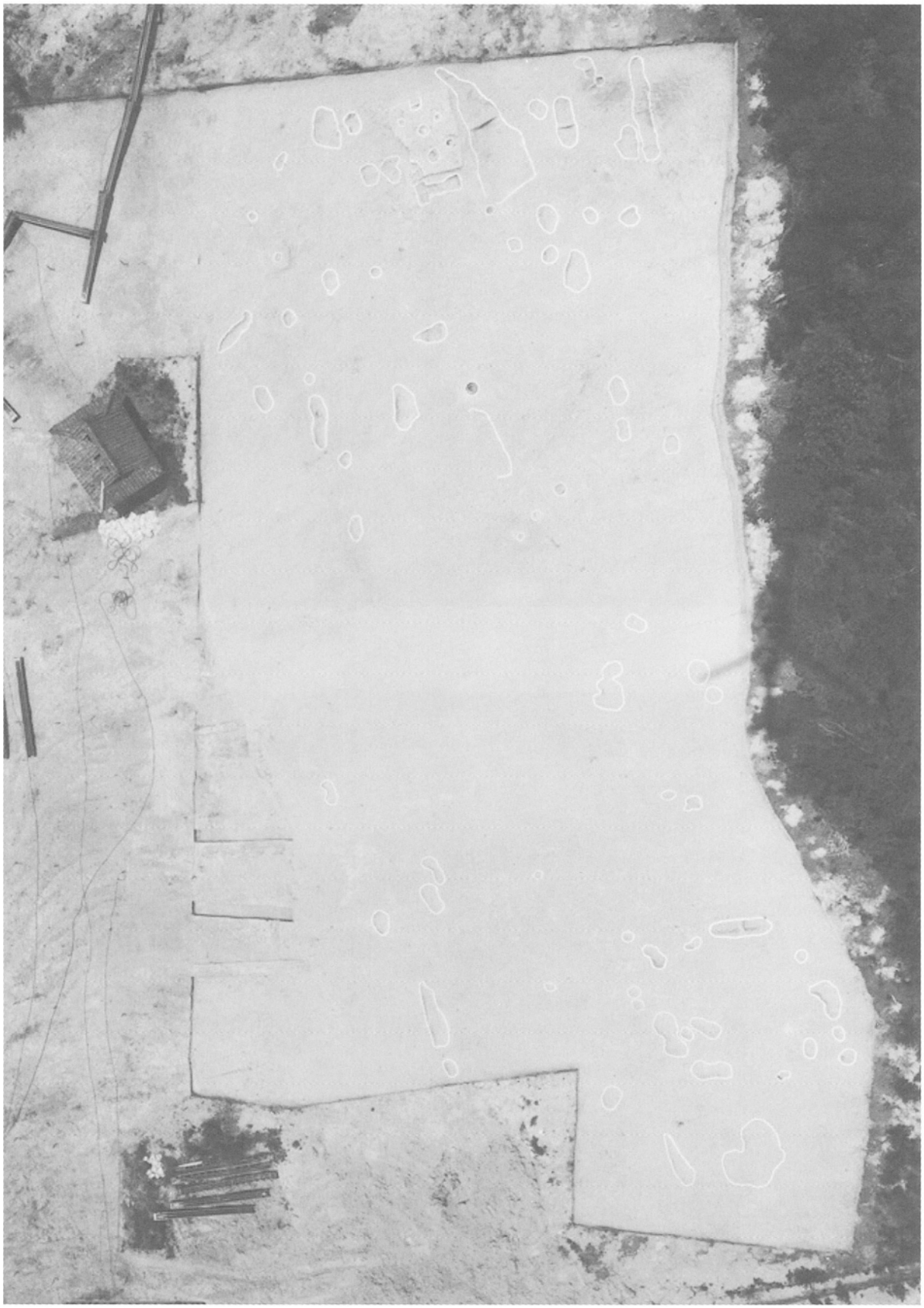

下段出土遺物（3）B地区出土遺物・中世の遺物

# 写　真　図　版

遺跡の位置（○印、昭和22年）

遺跡の位置（○印、平成11年）

※枠線内は上段写真の範囲



全景（北東上空から）

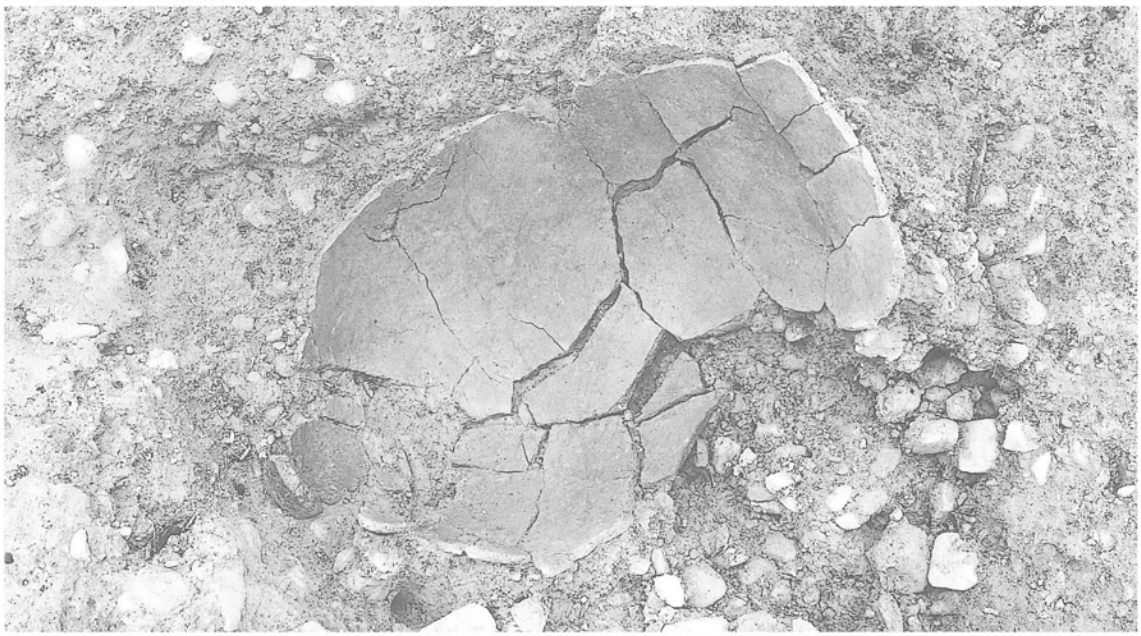
西部遺構全景（南東から）

中央部遺構全景（南から）

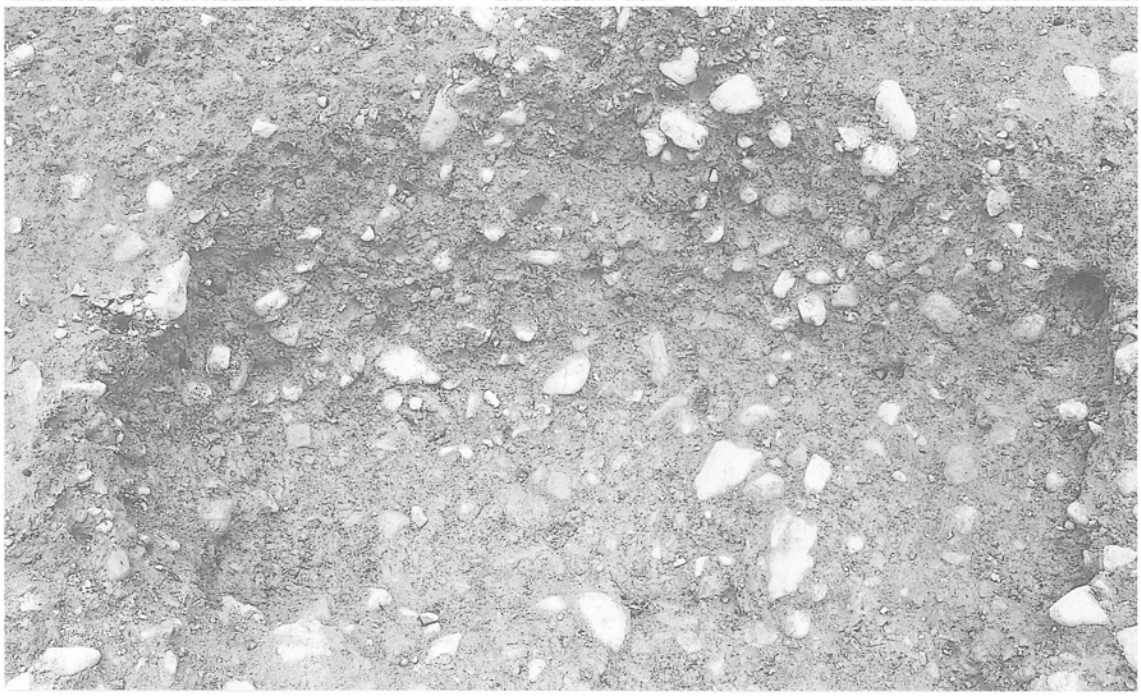
東部遺構全景（南西から）

写真図版 4
A地区

SX１検出状況（南東から）



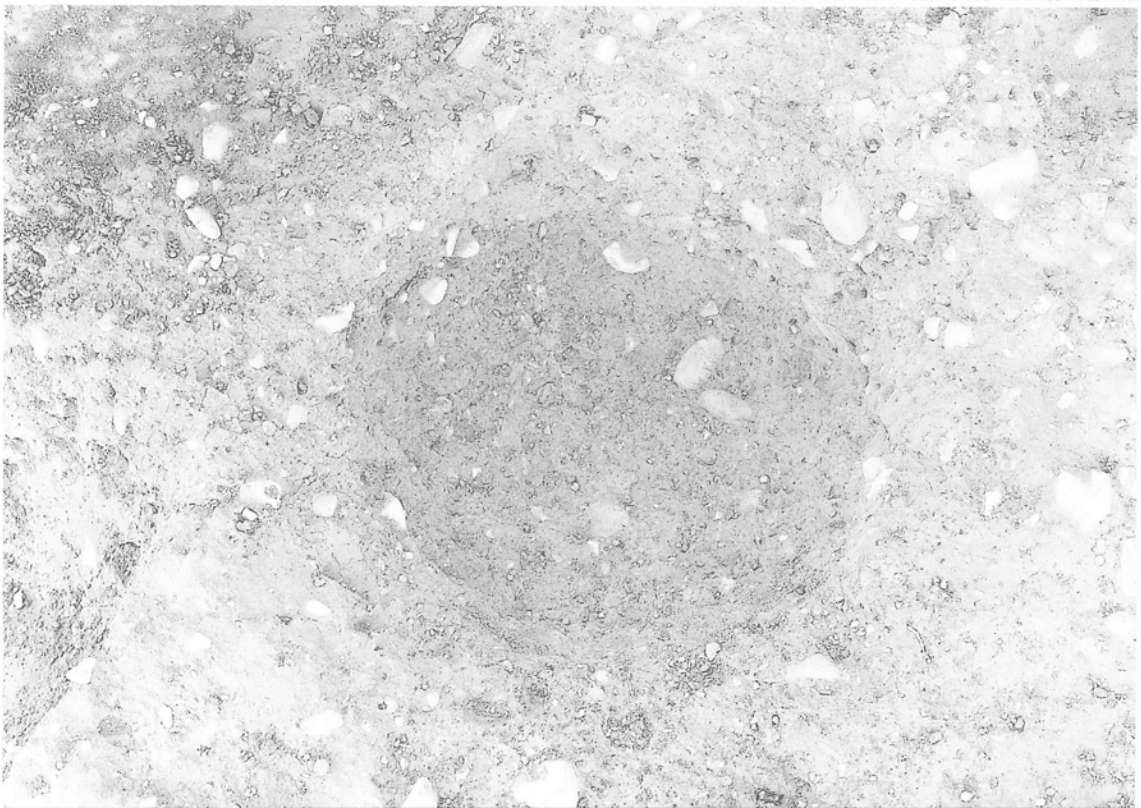
SX１棺内（南東から）



SX１墓壙（南東から）

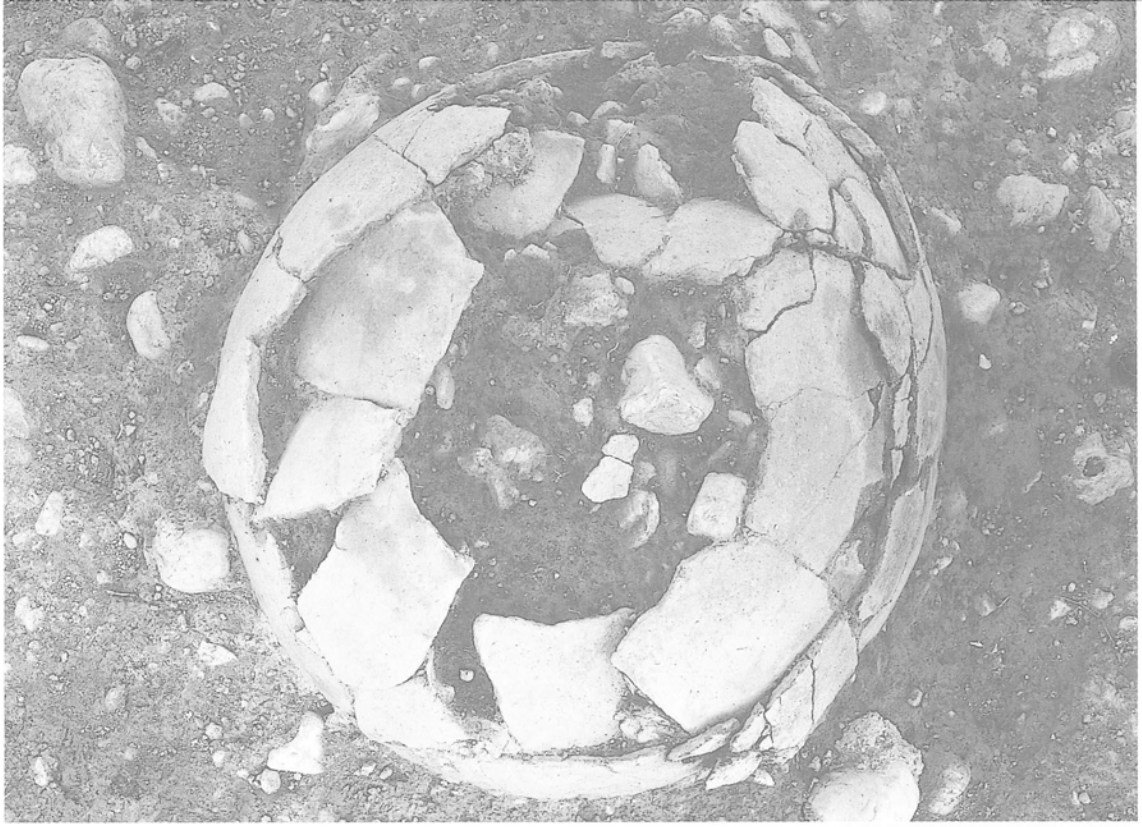
SX２検出状況（南東から）

SX２棺内（南東から）

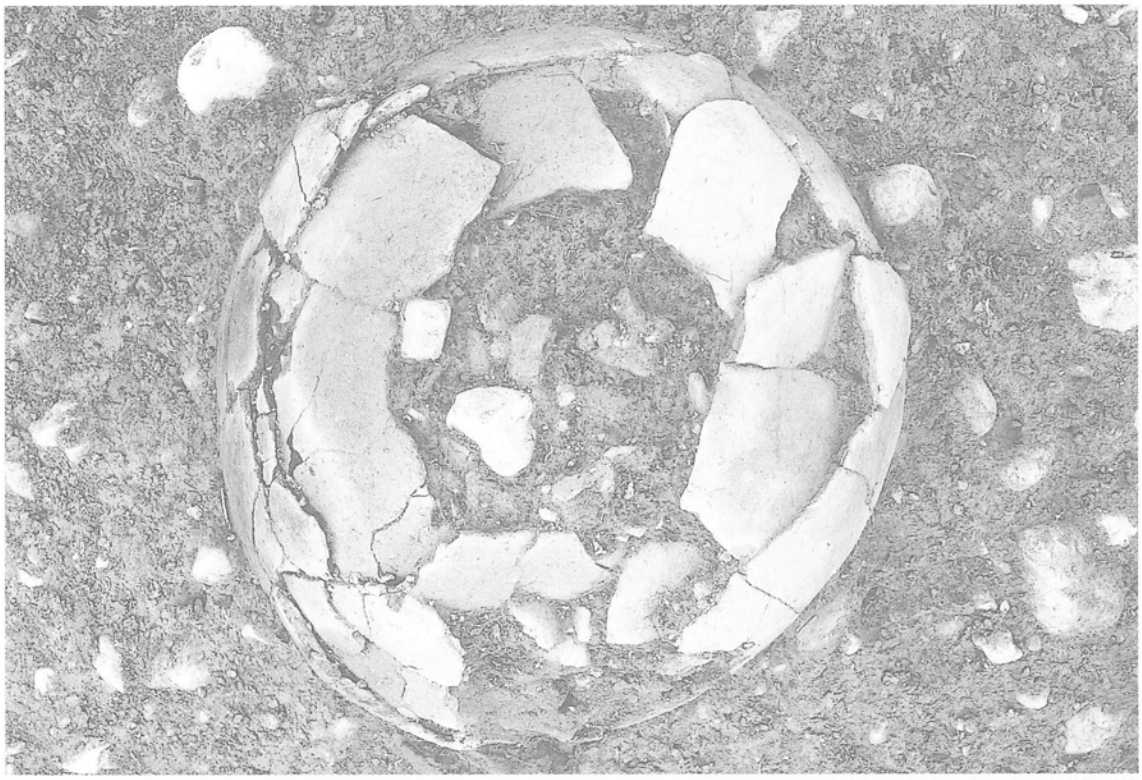


SX２墓壙（南東から）

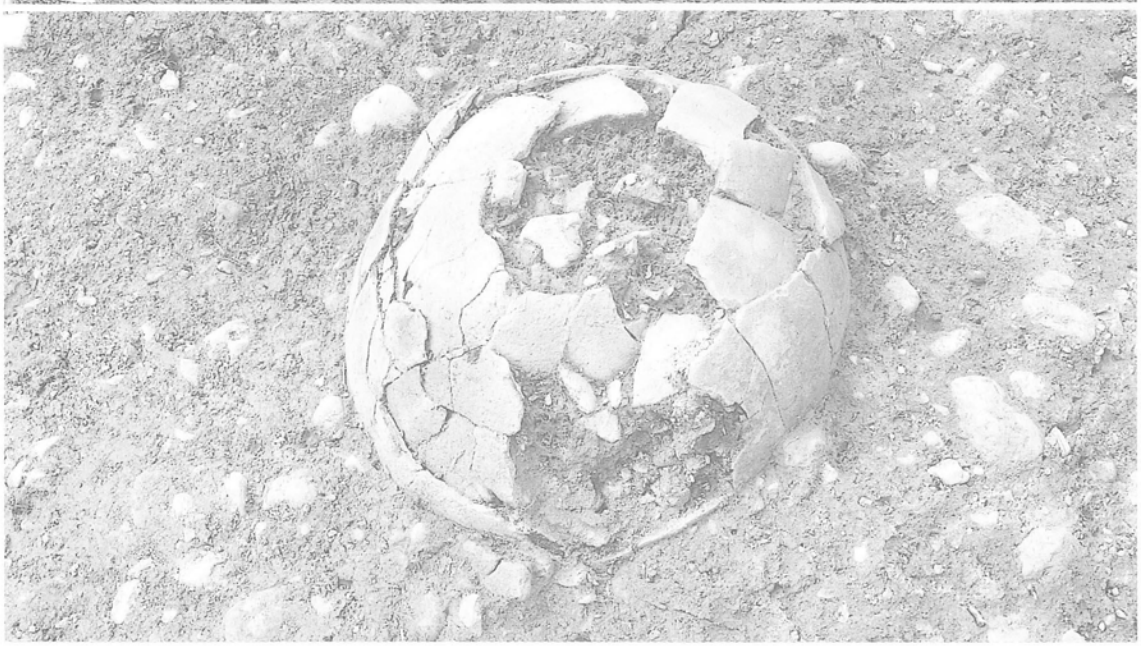
写真図版 6
A地区



SX３検出状況（北西から）



SX３検出状況（南東から）



SX３検出状況（南東横から）

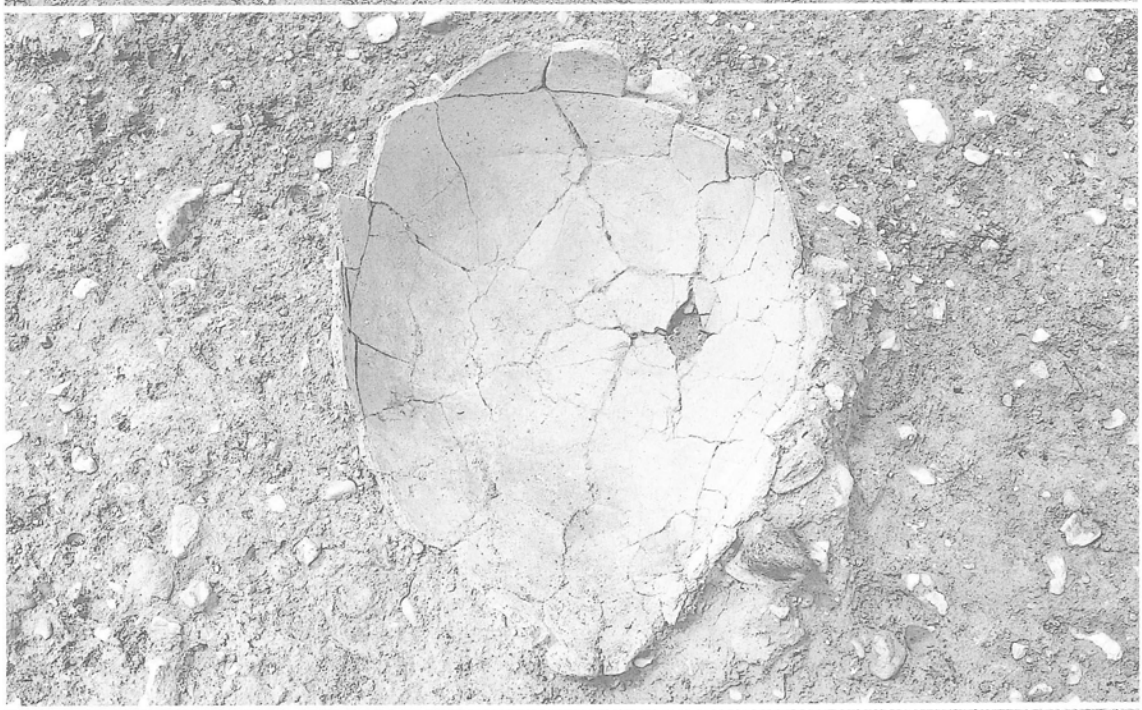
SX３棺内埋土（南東から）

SX３棺内（南西から）

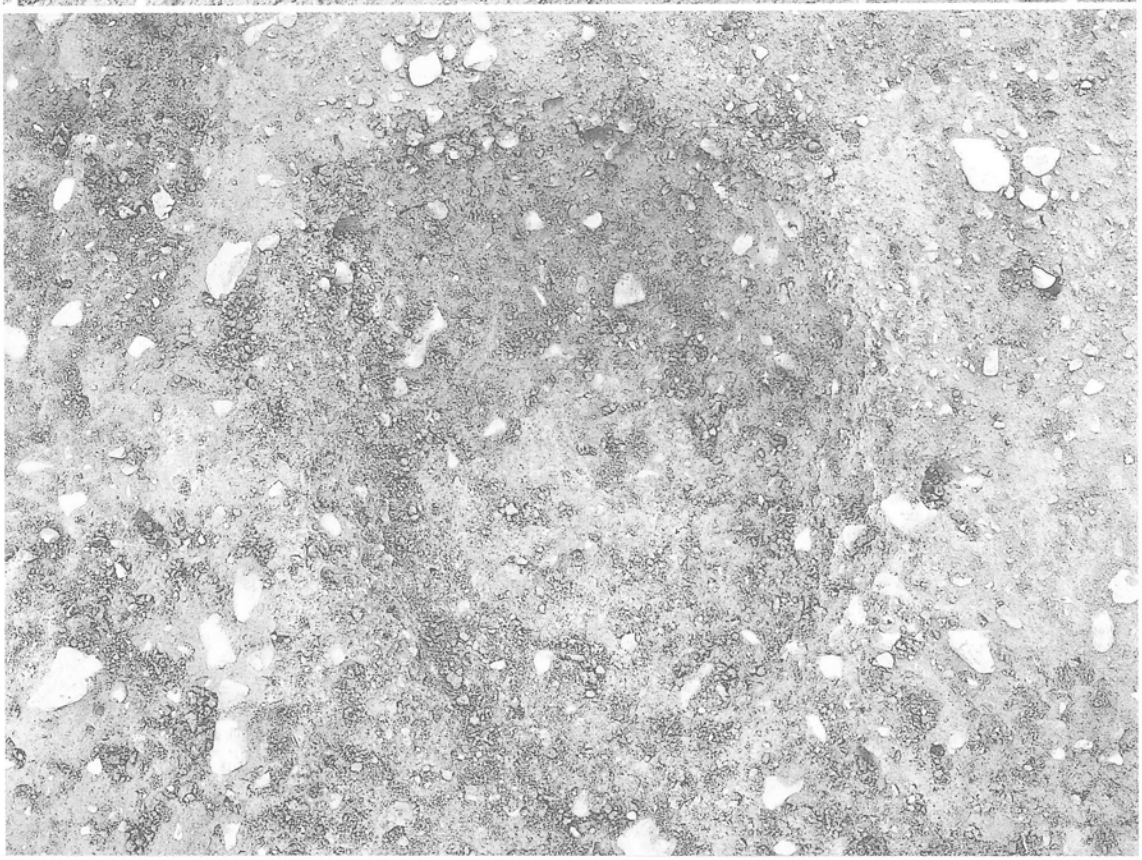
SX３墓壙（北東から）

写真図版 8
A地区

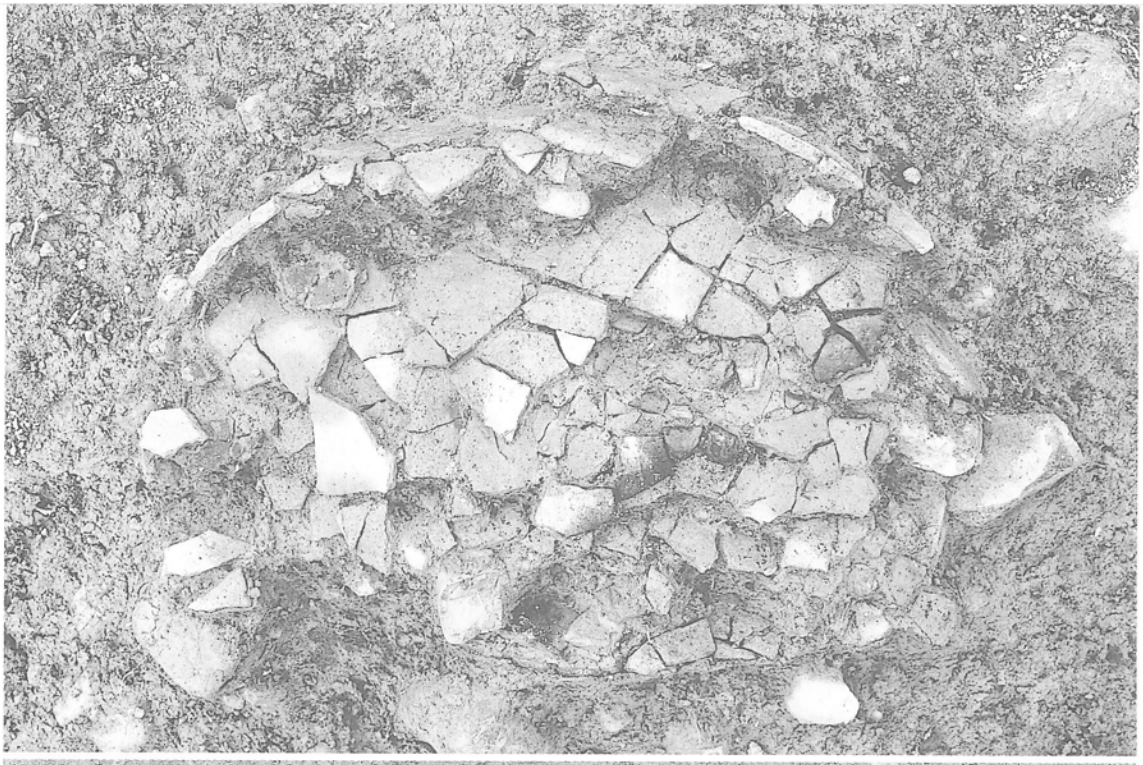
SX４棺内礫（南東から）



SX４棺内（南東から）



SX４墓壙（南東から）



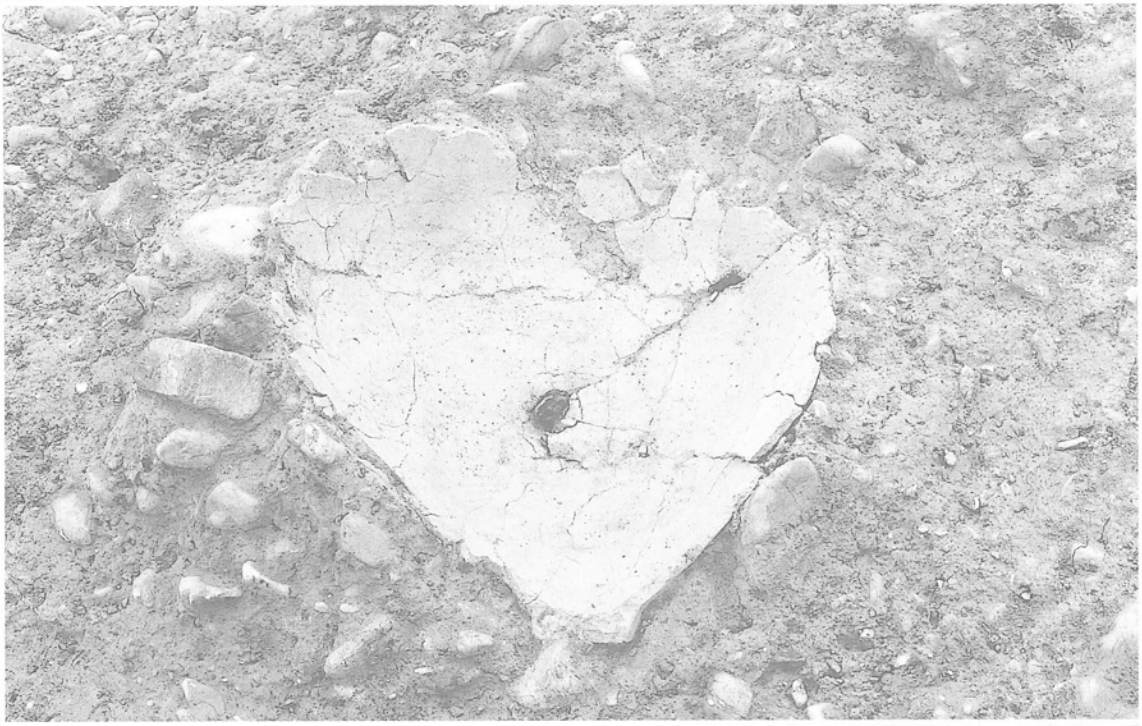
SX５検出状況（南東から）

SX５棺内（南東から）

SX13（南東から）

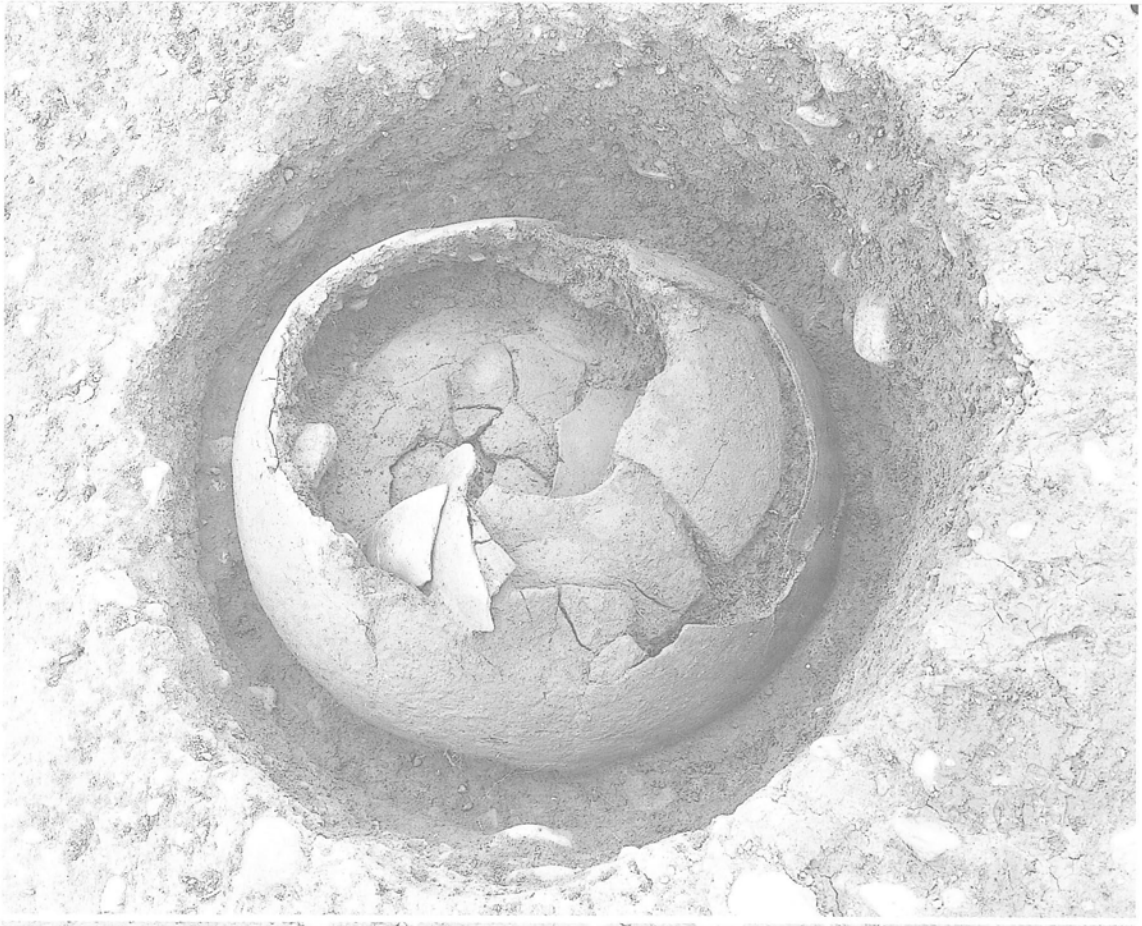
写真図版 10
Ａ地区

SX６棺内土器（南東から）



SX６棺内（北東から）

SX６墓壙（北東から）



SX７棺上面（東から）

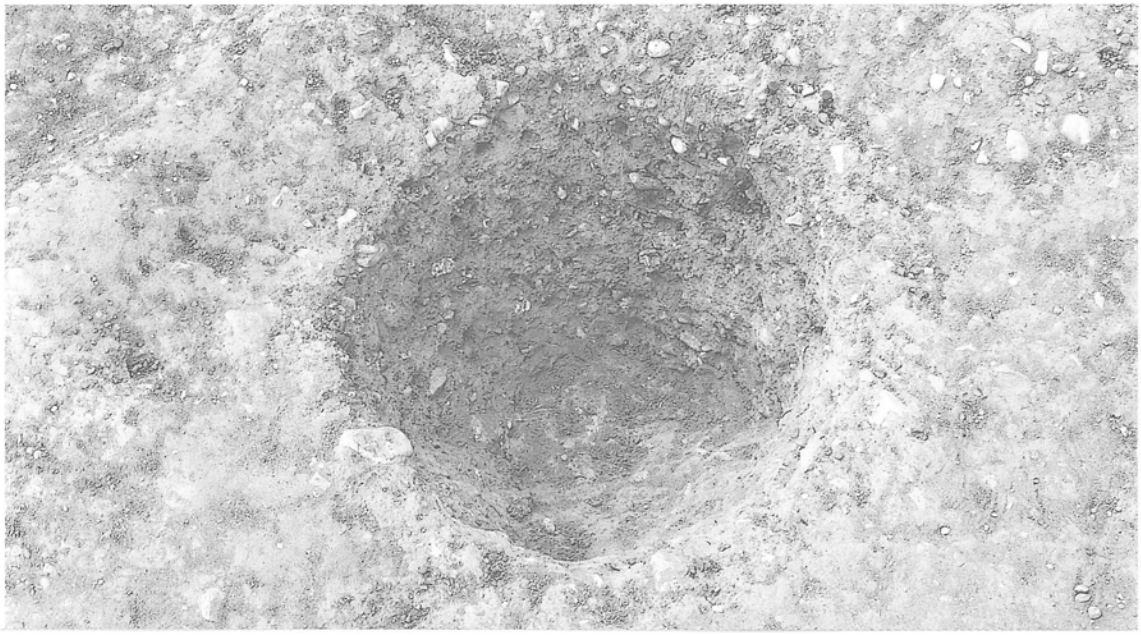
SX７棺内（南西から）

SX７墓壙（南西から）

写真図版 12
Ａ地区

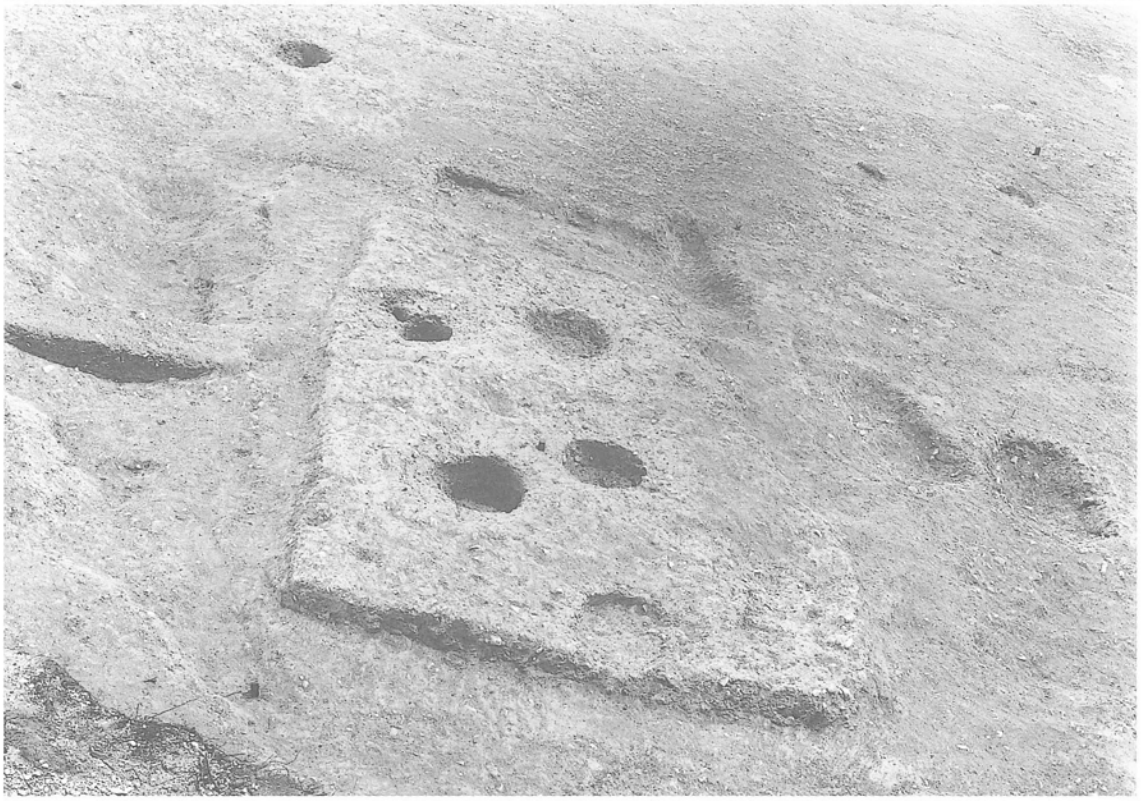
SX８上面（東から）

SX８棺内（東から）



SX８墓壙（南東から）

墳丘墓全景（南西から）

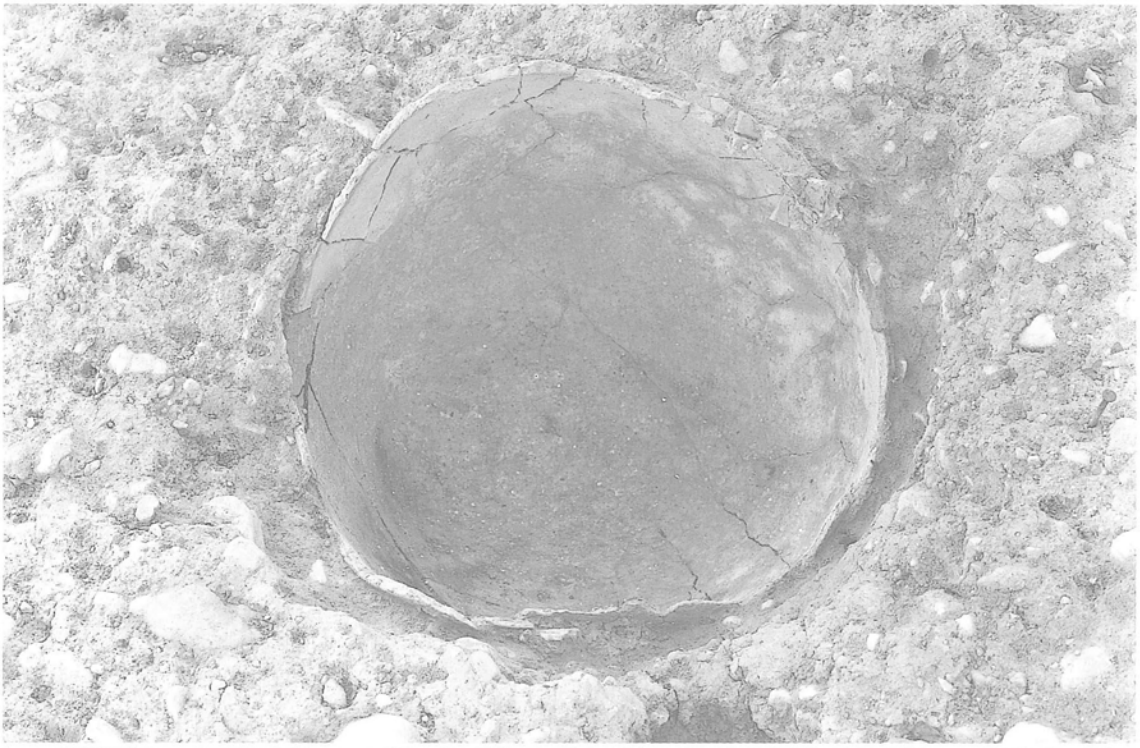


墳丘墓全景（南西から）

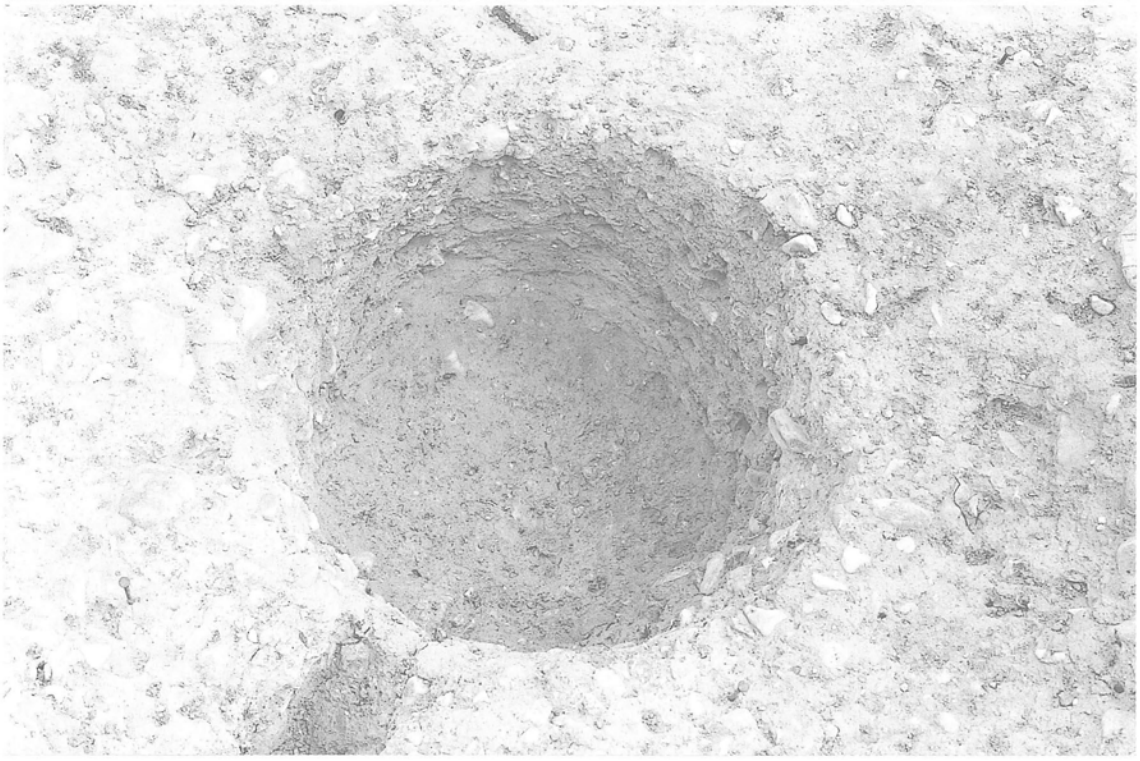
墳丘墓断面（西から）

写真図版 14
Ａ地区

SX９検出状況（北東から）



SX９棺内（北東から）



SX９墓壙（北西から）

SX10検出状況（南東から）

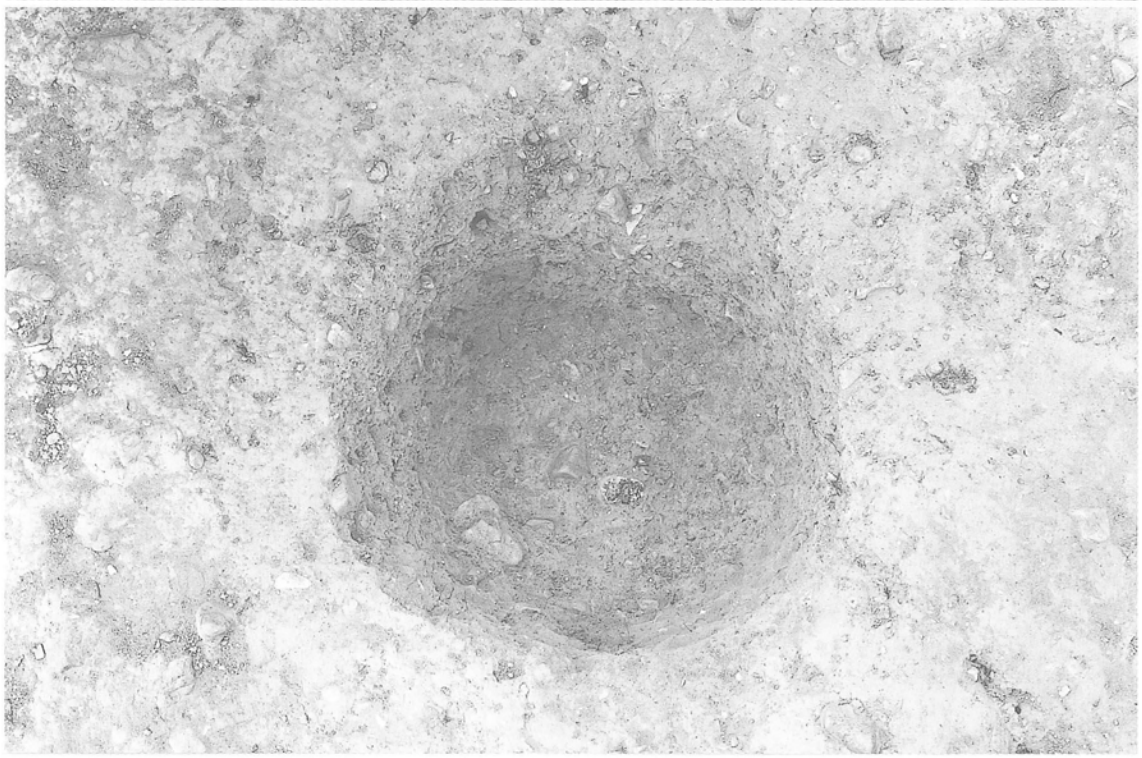
SX10棺内（南東から）

SX10墓壙（南東から）

写真図版 16
A地区

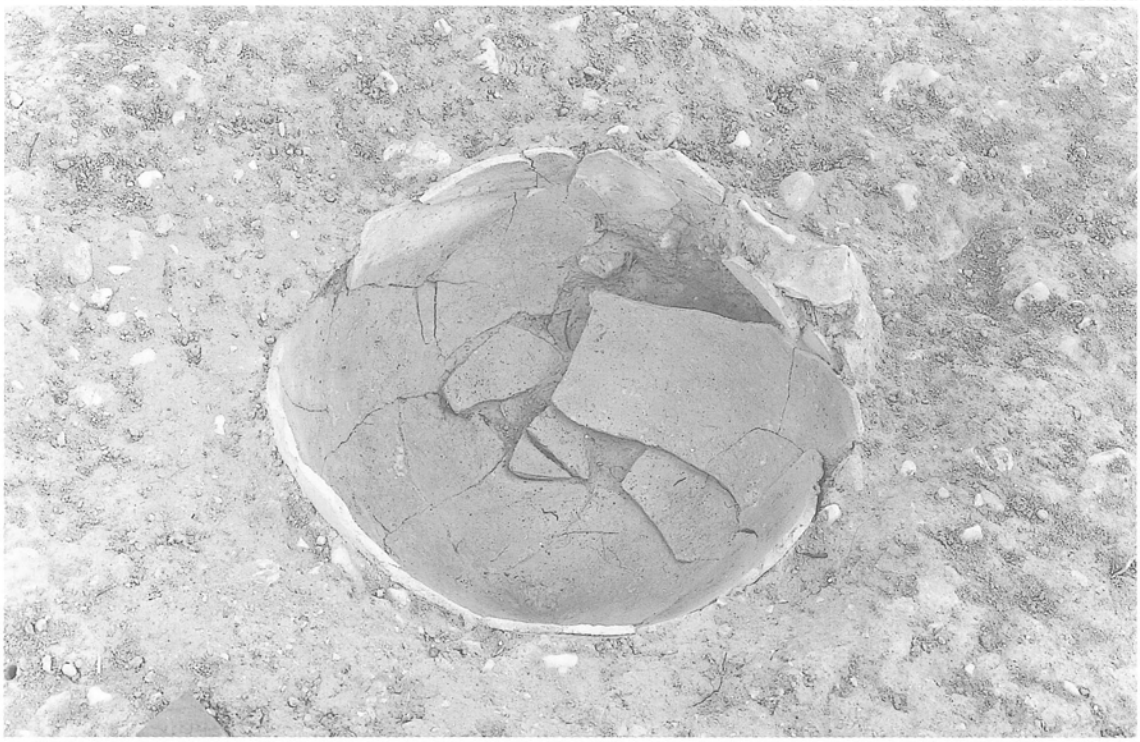
SX11検出状況（南東から）

SX11棺内（東から）



SX11墓壙（南東から）

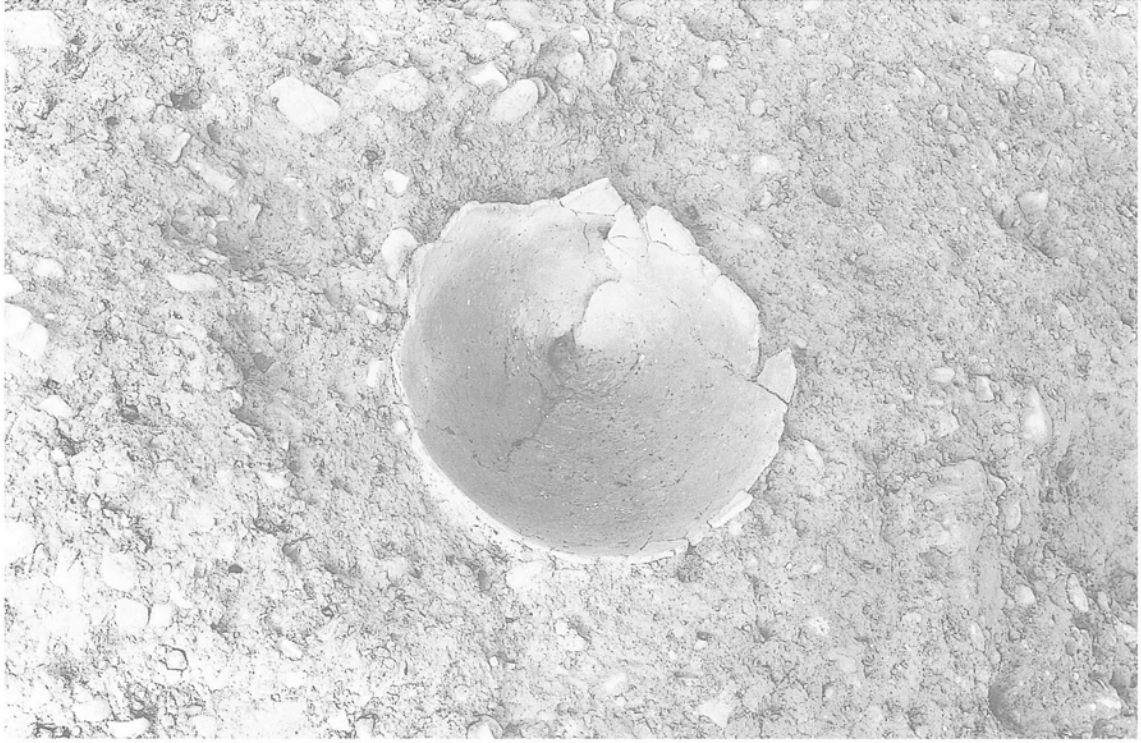
SX12検出状況（南東から）



SX12棺内（西から）

SX12墓壙（南東から）

写真図版 18
A地区



SX15棺内（南から）

SX15墓壙（南から）

SX16棺内（南東から）

①SX１土層断面（北西から）

⑤SX７土層断面（北西から）

②SX３全景（東から）

⑥SX15検出状況（南東から）

③SX３墓壙内土器（南東から）

⑦SX16棺内（南東から）

④SX５墓壙（南東から）

⑧SX16墓壙（北西から）

1

3

5

2

5

1・2

3・5

SX１・２出土土器

6

7

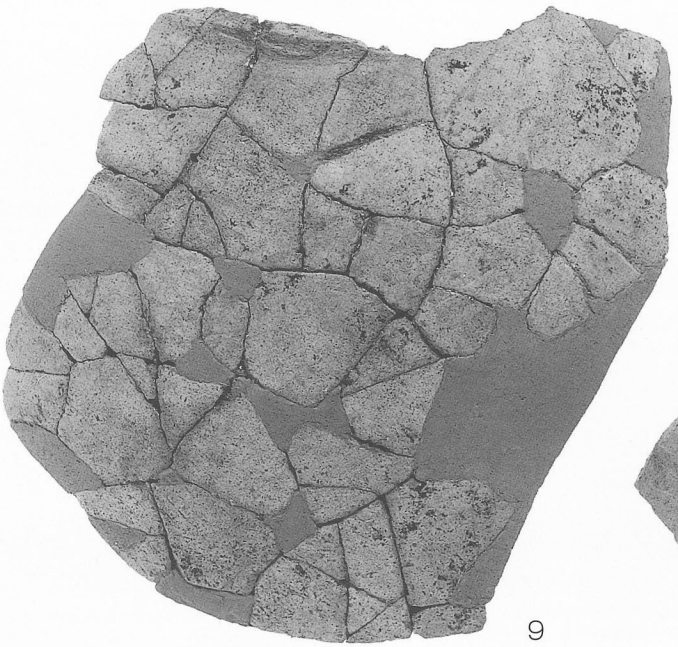
6

7

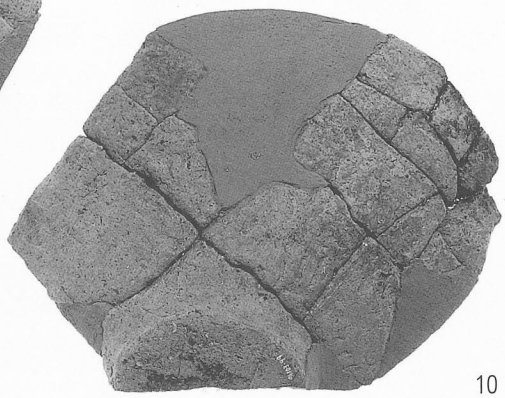
6・7

8

SX3・4出土土器

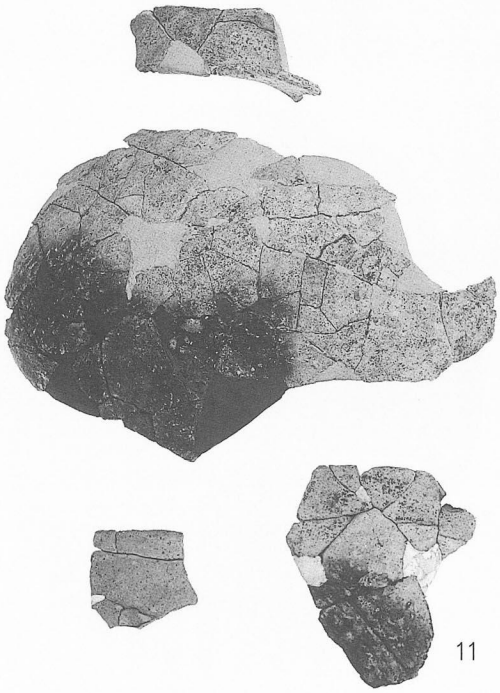


9

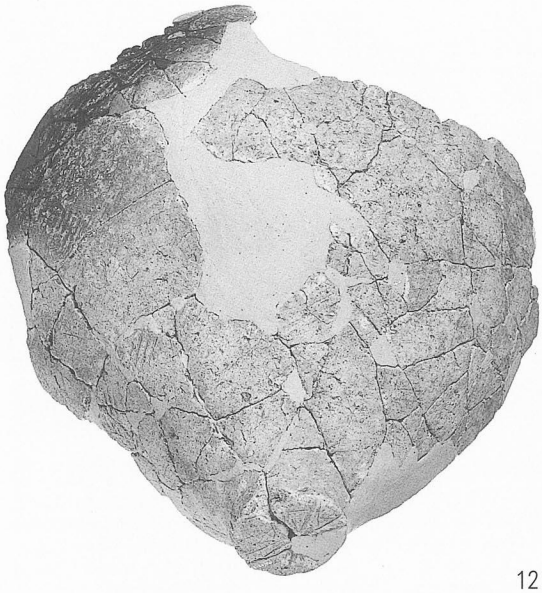


10

SX５出土土器



11

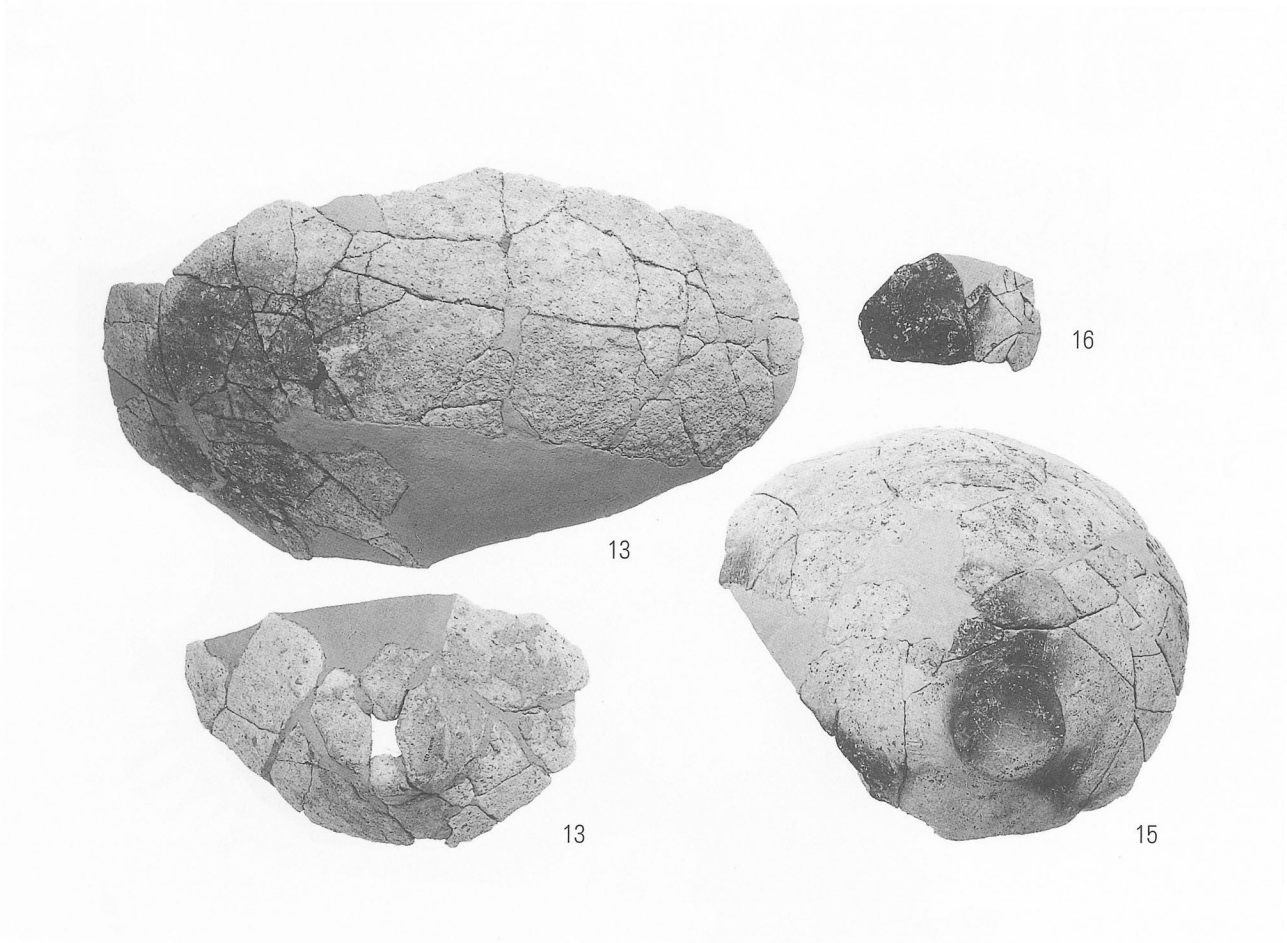


12

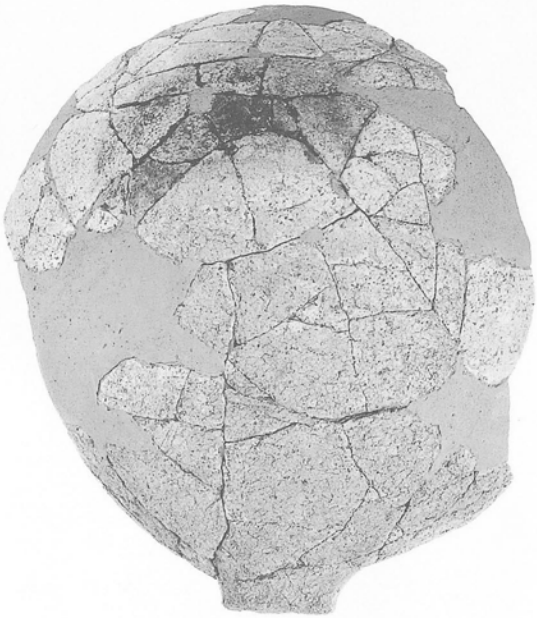
SX６出土土器

14

14・15




SX７出土土器



17

19

20

18

19・20

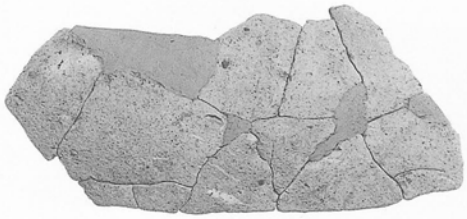
SX8・9出土土器

21

23

21・23

24



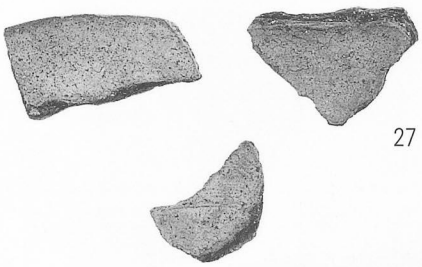
23

22

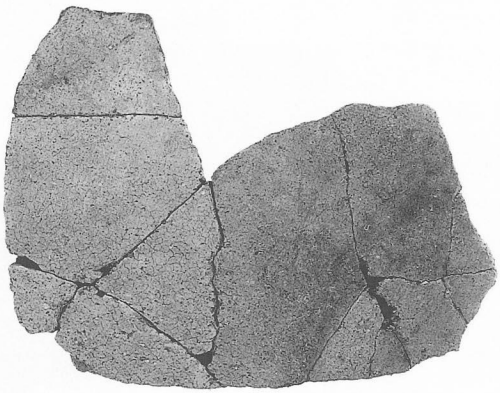
26

SX12出土土器

25



27

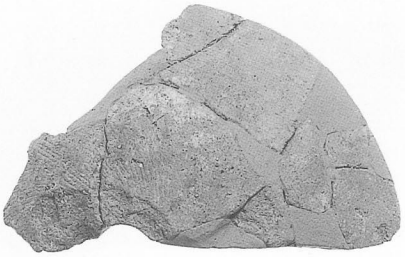


SX12・13出土土器

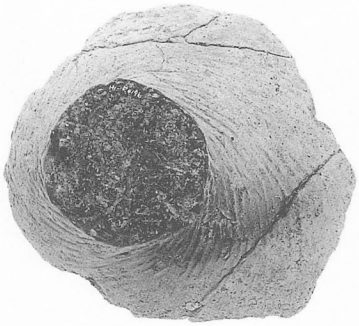
28

29

SX15出土土器


30

30


32

31

確認調査出土土器

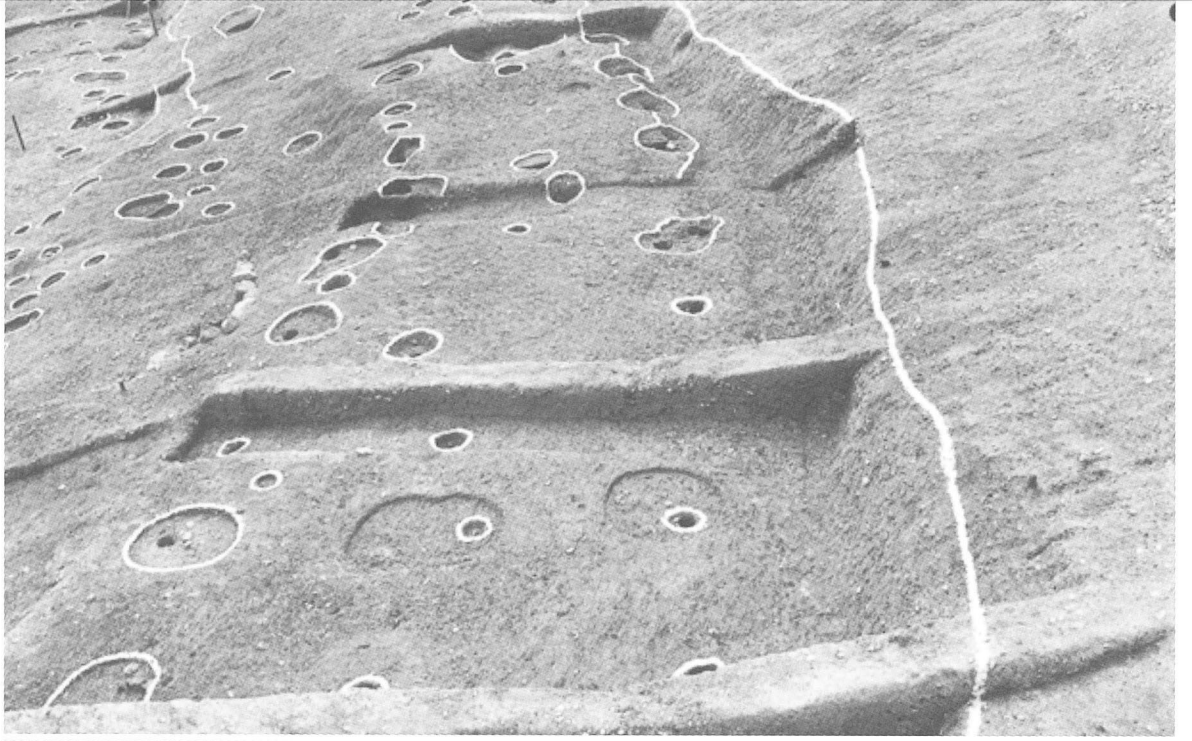
全景（上空から）

全景（南東から）

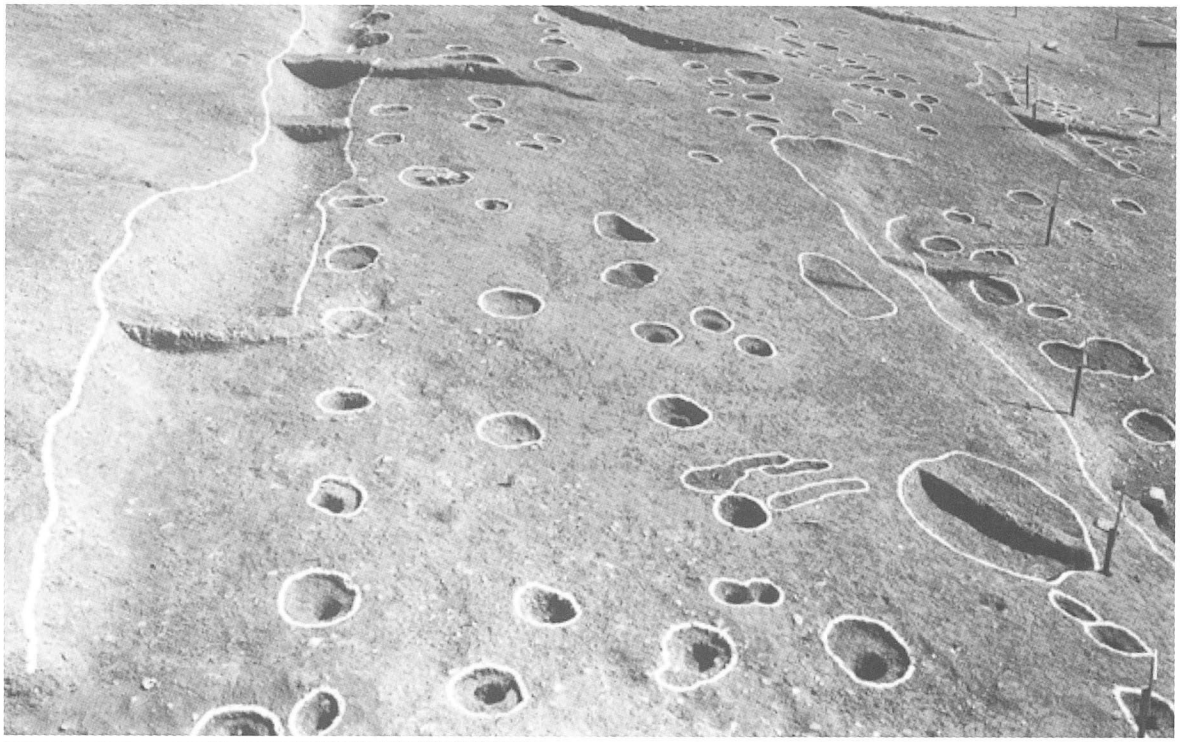
全景（東から）

全景（南から）

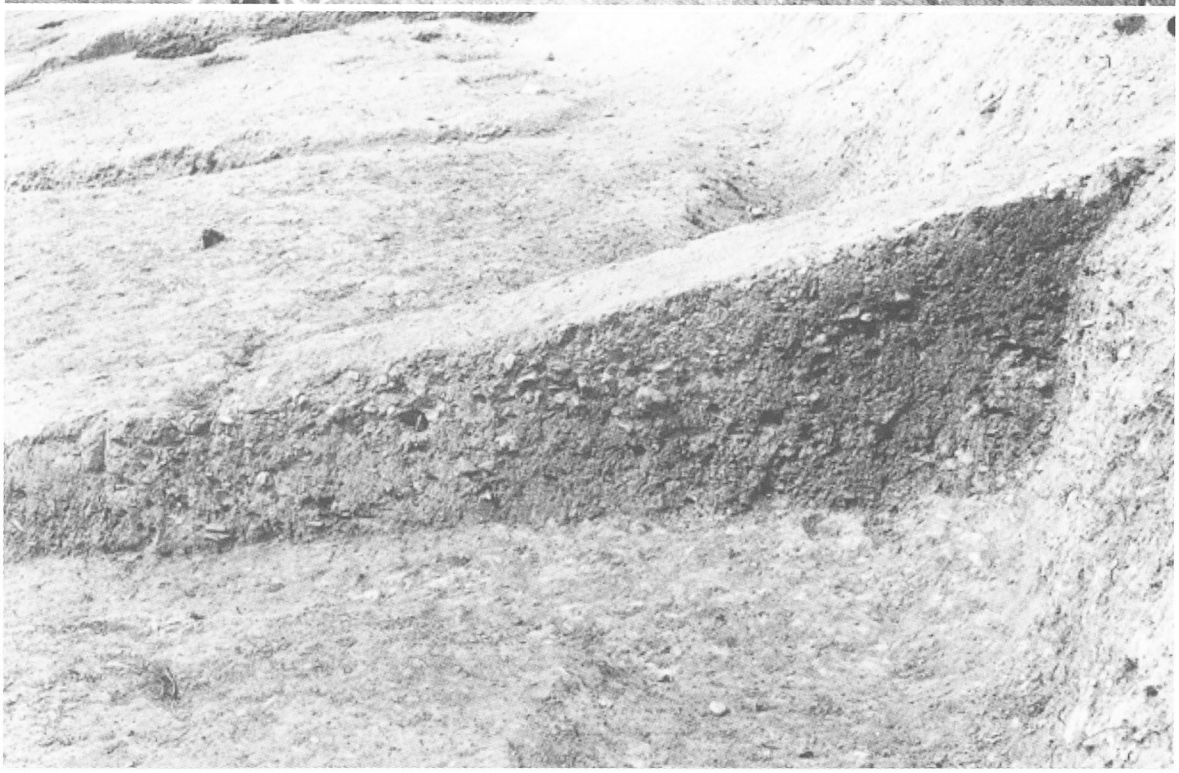
写真図版 30
C地区



上段テラス
ＳＢ５・６全景
（東から）

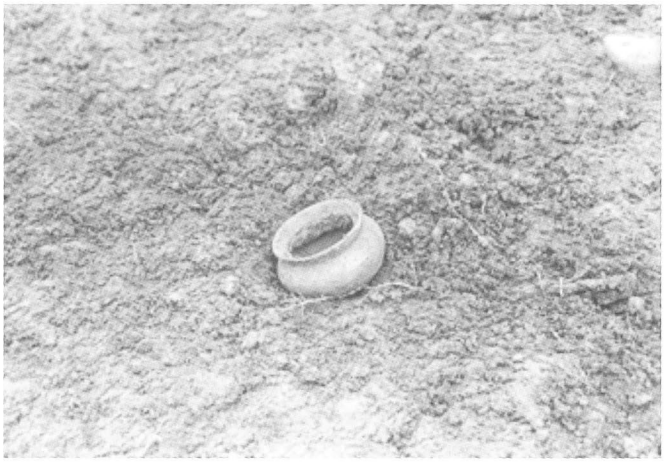


上段テラス
ＳＢ４・５・６全景
（西から）



SD14d-d’ 土層断面
（東から）

①SD14e-e’土層断面（西から）



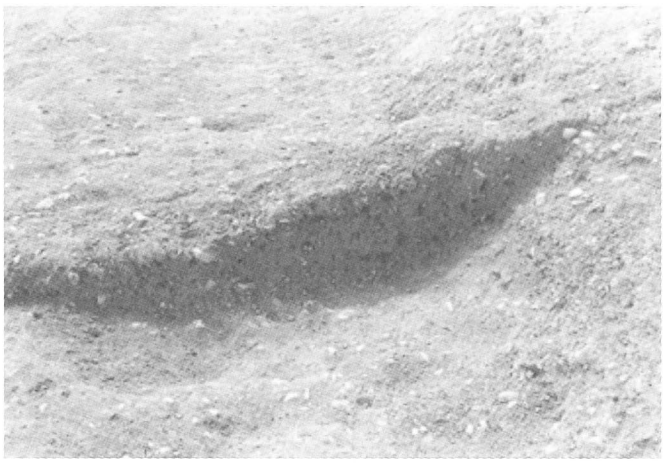
⑤SB４出土土器（東から）

②SD14c-c’土層断面（西から）

⑥SB４柱穴２（南から）

③SD14b-b’土層断面（西から）

⑦SB６柱穴３（北から）

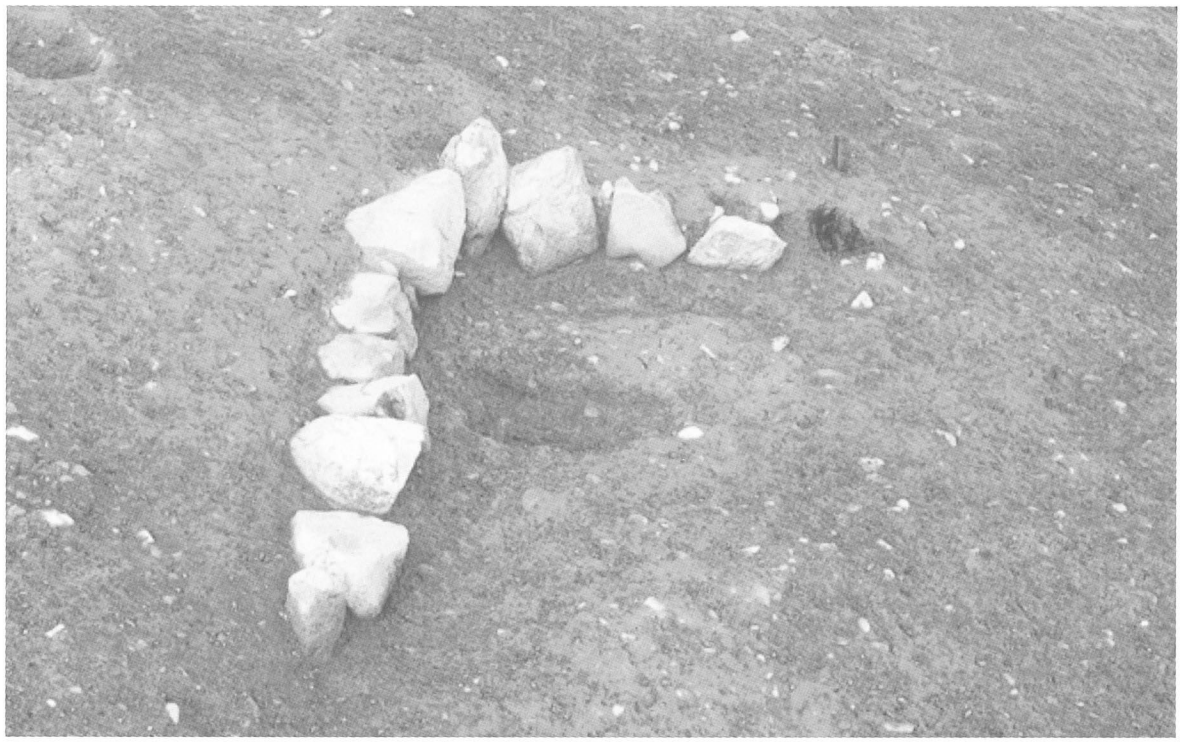


④SD14a-a土層断面（西から）

⑧SB６柱穴４（北から）

写真図版 32
C地区

SX18（南から）



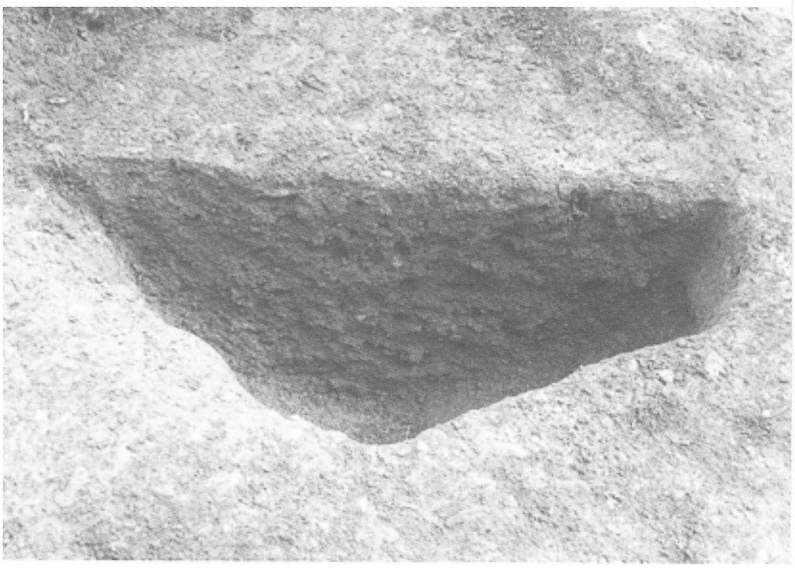
SX18（西から）

SX18土層断面（西から）

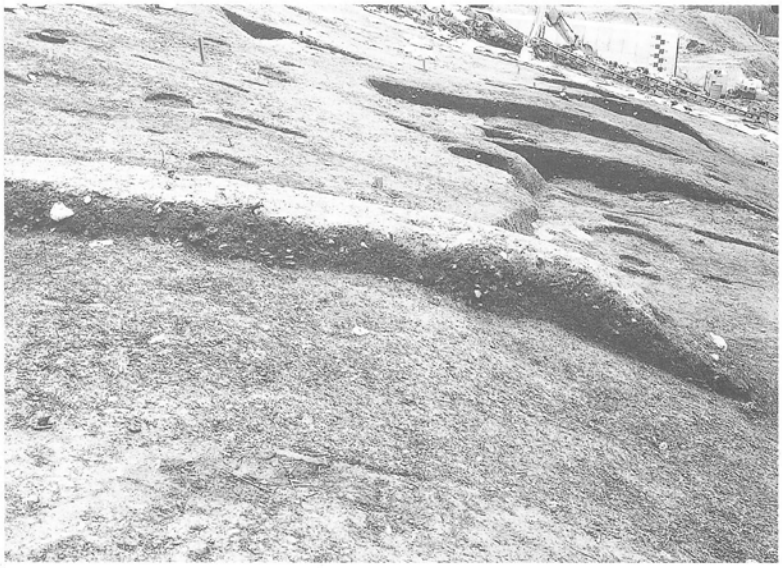
SX63（北から）

SK19（東から）

SK63 土層断面（東から）



SK63 土坑土層断面（北西から）



①中段ＳＢ11土層断面（西から）

②中段ＳＢ12・13土層断面（西から）

③SD13ｆ-ｆ’土層断面（東から）

④SK64ｈ-ｈ’土層断面（西から）

⑤柱穴68　土器出土状況（東から）

⑥包含層土器出土状況（南西から）

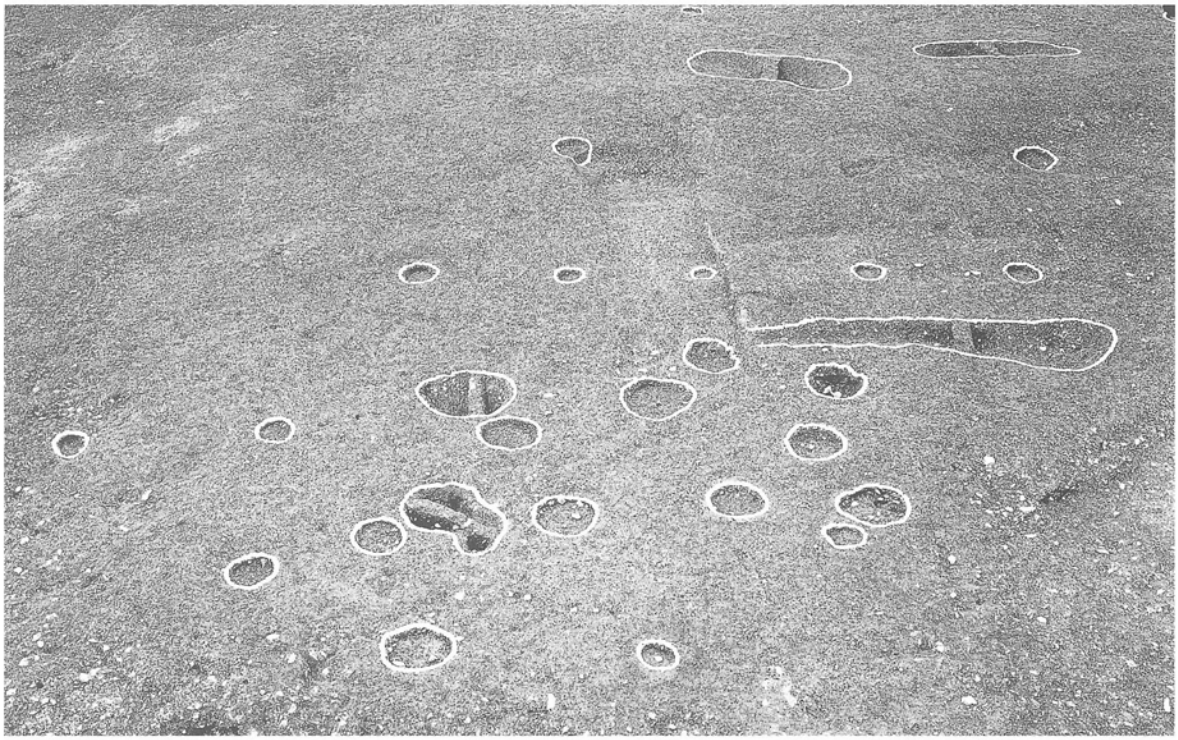
下段平坦面全景（東から）

下段平坦面全景（西から）

下段平坦面全景（南から）

写真図版 36
B・C地区

平坦面全景（東から）



SB９（南から）

SB14土層断面（東から）

SB９柱穴１土器検出状況
（南から）

①SD18土器出土状況（南東から）

②SK68土器出土状況（南から）

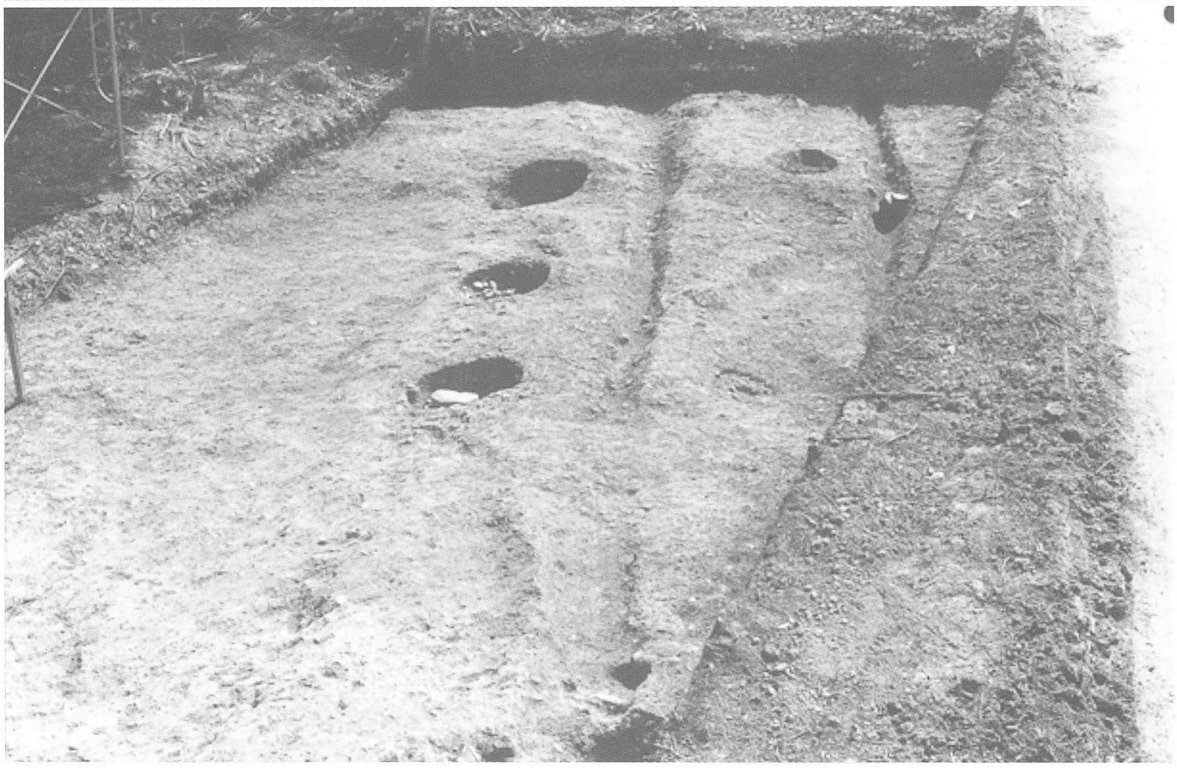
③SD16ａ土層断面（西から）

③SD17土層断面（西から）

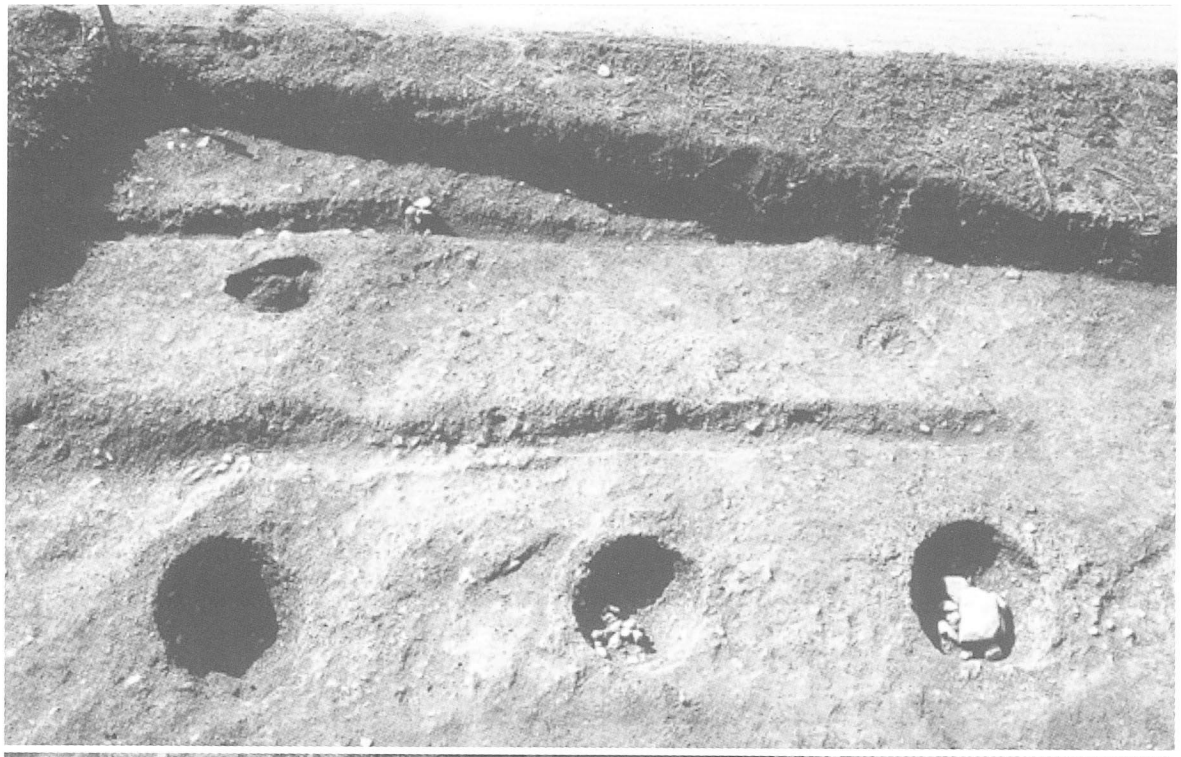
写真図版 38
B地区

西半部全景（東から）

東半部全景（東から）



SB1（東から）



SB１（南から）

SB１柱穴１（南から）

SD８土器出土状況（東から）

①SX14（北から）

⑤SB１柱穴４土層断面（西から）

②SB１柱穴１土層断面（東から）

⑥SD８土層断面（西から）

③SB１柱穴２（南から）

⑦SD９土層断面（西から）

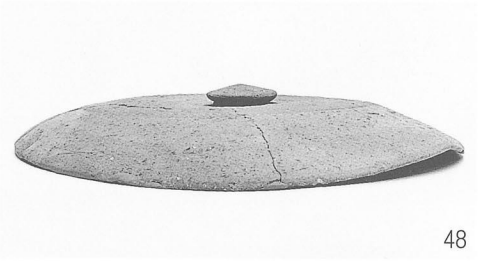
④SB１柱穴３土層断面（西から）

⑧SD10土層断面（西から）

33

37

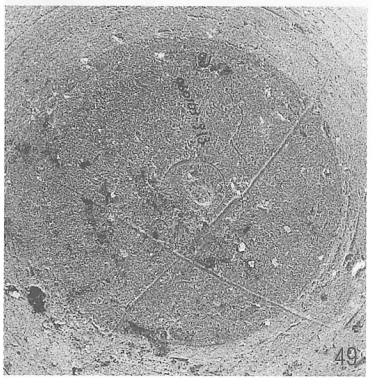
44


48

49

51

58

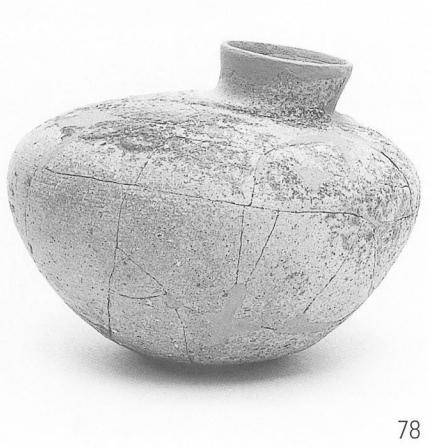

49

77

64

68

76


78

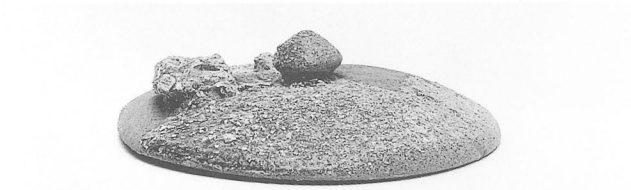
84

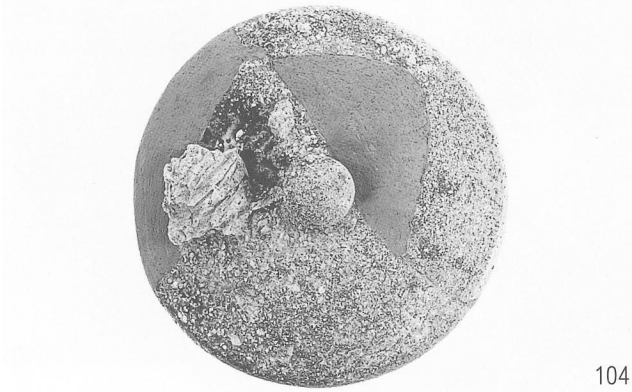
90

91

92

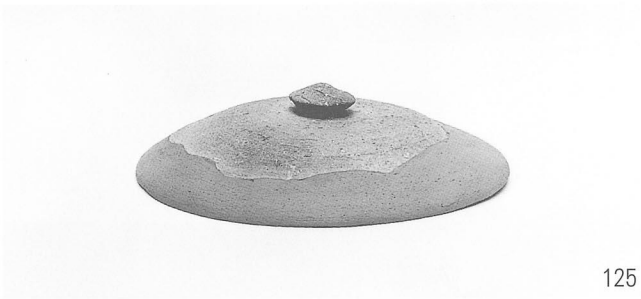
100



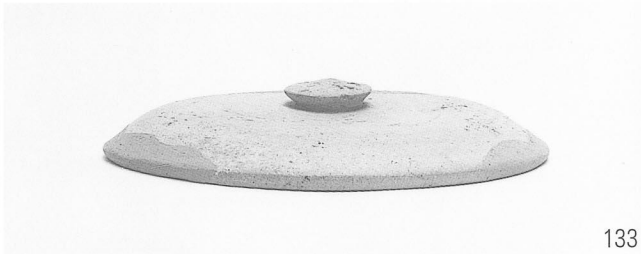

104

107

109


125

130


133

134

138

155

168

172

142

158

175

147

167

176

148

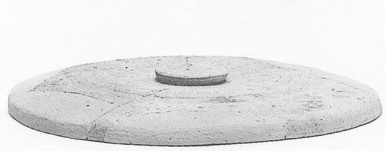
173

177

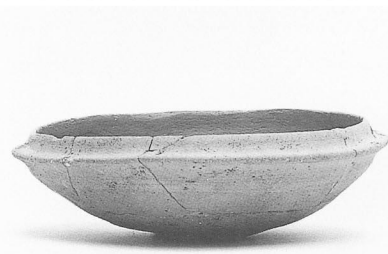
153

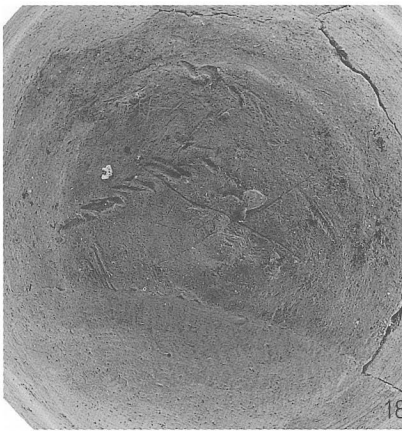
178

185


184

186


189

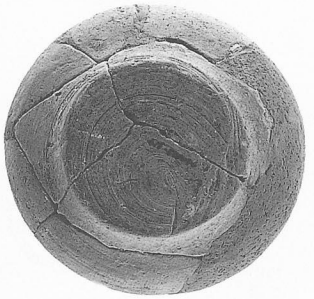

189

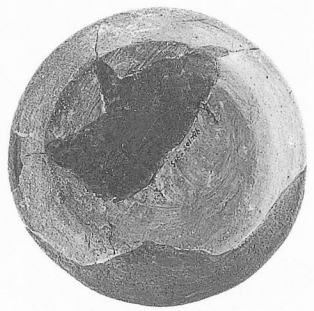
190

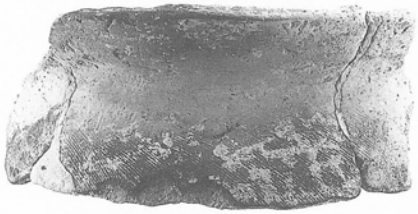
198

201

204


200


202

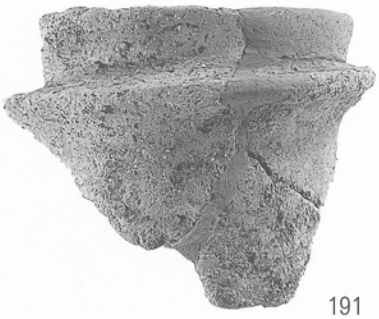

144

188

41

143

174


191

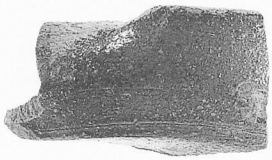
40

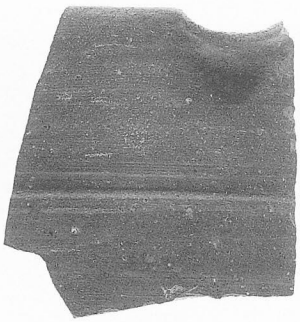
83

54

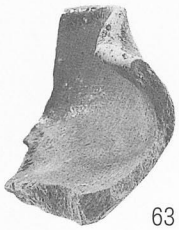
145

146

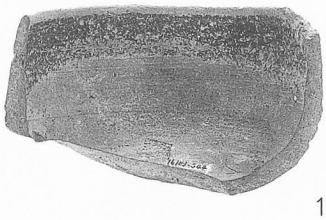




112



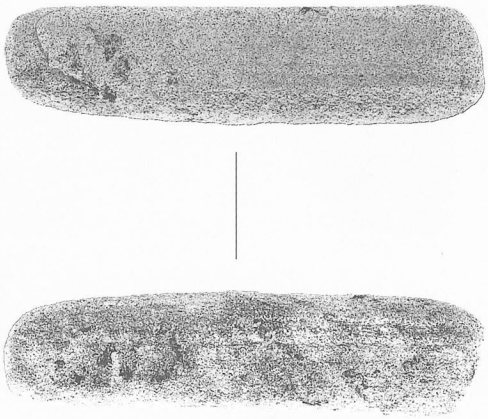
63



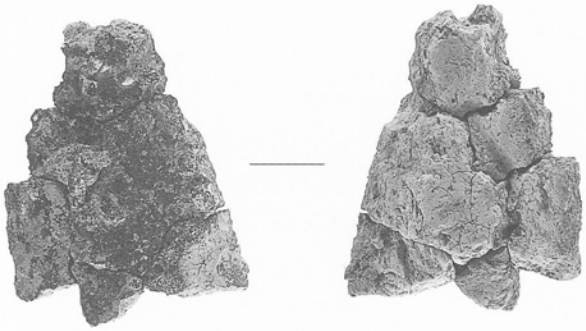
108

117

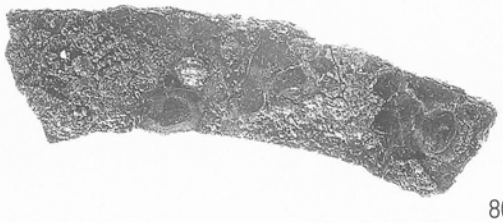
52



137



51

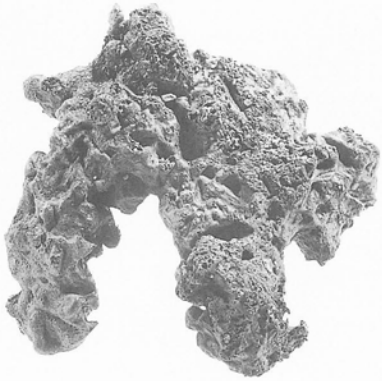


80

65

129

182



# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふ　り　が　な | わだじんじゃ　いせき |
| 書　　名 | 和田神社遺跡 |
| 副　書　名 | 山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告 |
| 巻　　次 | ＸＸＸＸ |
| シ リ ー ズ 名 | 兵庫県文化財調査報告 |
| シ リ ー ズ 番 号 | 第２３８冊 |
| 編 著 者 名 | 岸本一宏・松岡千寿 |
| 編 集 機 関 | 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 |
| 所　在　地 | 〒652－0032神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　TEL.078－531－7011 |
| 発 行 機 関 | 兵庫県教育委員会 |
| 所　在　地 | 〒650－8567神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　TEL.078－341－7711 |
| 発 行 年 月 日 | 2002年（平成14年）３月31日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北　緯 | 東　経 | 調査機関 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 調査番号 | | | | | |
| 和田神社（わだじんじゃ） | 兵庫県（ひょうごけん）三木市（みきし）別所町（べっしょちょう）和田字（わだあざ）大年山（おおとしやま）451～453 | 28201 | 960323 | 34度53分24秒 | 134度56分55秒 | 確認調査 1994 0523 ～1994 0526 全面調査 1996 1128～ 1997 0320 | 確認調査 95㎡ 全面調査 4932㎡ | 山陽自動車道建設事業 |

| 所収遺跡名 | 種　別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 和田神社 | 墳　墓 | 弥生時代後期末～古墳時代初頭 | 土器棺 | 土器・鉄器 | 土器棺15基 |
| | 集落跡 | 古墳時代後期末～飛鳥時代<br>中世 | 掘立柱建物跡<br>柱穴・土坑 | | 掘立柱建物跡14棟 |

兵庫県文化財調査報告　第238冊

# 和　田　神　社　遺　跡

－山陽自動車道建設事業に伴う発掘調査報告ＸＸＸＸ－

2002年３月31日発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652－0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号
発　行　兵庫県教育委員会
〒650－8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号
印　刷　株式会社岸本印刷所
〒676－0805　高砂市米田町米田400－1